
異世界迷子の道草記

Co

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界迷子の道草記

【Nコード】

N8127T

【作者名】

Co

【あらすじ】

学校の帰り道。気が付いたら山奥で、しかも裸だった。

親切で可愛くて天使みたいな女の子が助けてくれたけど……ここはどうやら異世界で、わたしの世界への帰り方は誰も知らないらしい。

村のみんなはいい人だし、剣と魔法の世界も悪くないんだけど……わたしは一体どうやって帰ったらいいのかなあ？

家に帰りたいと願う寄り道少女ミサギと、友達が欲しいと願

う健気な少女クイシエが描く、愉快で悲痛で壮大（？）な道草の物語。

#序：帰り道

焼けたオレンジ色の空。

黒いアスファルトの道。

遊び疲れて、それでも時間が許すのならまだまだ遊んでいそうな子供たち。

無邪気な別れの挨拶が飛び交う中、彼らとすれちがうスカート姿が1つ。

鞆を肩に引っ掛けて軽やかに歩く黒髪の少女だ。服装はこのあたりでよく見かける、中学校の指定制服である。

分かれ道にそれぞれ散って行く子供たちを眺め終えると、後ろ向きに歩いていた少女は正面に向き直った。そして道行く先に懐かしいものを見つけると、テンポ良く飛び跳ね始める。

「けん、けん、ぱっ」

深鷺^{みさぎ}はアスファルトに描かれたいくつもの白い円の中を、片足、片足、と踏んでいく。

「けん、けんけん、けんけんけん……長っ！」

片足だけで十数回飛び跳ねた。

小さな頃は自分も、似たような……いや、これ以上に意地悪で挑戦的なステージを作っていたものだ、と思い出す。

とんとん、とん。

動きに回転などを加えつつも危なげなく踊るようにステップを繰り返す。

(さすがに円3つ、とかはないか……?)

3つの場合は手も付ける。4つなら両手両足だ。

5つ 描いてはみたものの、どうしていいか誰にもわからなかったところに深鷺の兄がやってきて、頭を使った技を披露し……たんこぶを作った。

「あの姿勢はありえなかった……ハト兄は体柔らかいからなあ……。泣いてたし……」

兄の勇姿^{なきうつら}を思い出し、くすりと笑う。

「あ、いまならツイスターゲームと合体させて、新しい遊びが作れそうかも?」

突然のひらめきをこね回し始めた深鷺は、自分が踏んできた円がずいぶんとしっかり描かれている事に気が付く。線がやけにハッキリしていることから、軽石などではなくちゃんとチョークを使って描いたのだろうと考えた。円も綺麗すぎるので、もしかするとチョーク用のコンパスを使ったのかもしれない。

そういえば、なにか棒状のものを持っていた子がいたような。

(あれってどこで買えばいいんだろ。まさか学校から勝手に持ち出したり、とかじゃないよね……まあ、自作するという手もあるかな)

アスファルトに円を描くなら火ばさみと軽石でもいいだろう。火ばさみの代わりに紐でも良いかな?

と、思考があっという間に脱線した。

（カラスが泣いても帰らない……！）

軌道修正するも、やがてカラスの鳴き声が聞こえてまた脱線。

（らららららししーそら？）

電線が五線譜に見えて音楽の授業を思い出し、また脱線。

そんなことを繰り返し、あっという間に数分が過ぎたところで、先ほど浮かんだ良い考えがなんだったのかよくわからなくなってしまい、また跳ね始める深鷺。

西の彼方へ沈んでゆく太陽。

夕焼けから宵へと染まりつつある空。

とんとん、とんとん。

完全な道草である。

「えーとなんだっけ。あ、そうそう、ツイスターだ。半回転ひねりけん、けん、ぱ」

深鷺が両足を開いて着地した、そのとき。

両足の先から頭の天辺まで、なにかが駆け抜けていった。

……………。

……………。

完全な暗闇の中。

数十名の暗色のローブを身に着けた男たちが、それぞれ定められた位置に立ち並んでいた。

百人を収容してもまだ余裕があるだろう大部屋。

その中央から半径10数メートルの位置には、部屋を球状に割り貫くかのようにデザインされた外側へ弧を描く柱が無数に立てられており、男たちは柱によつて区切られた空間の内側に立っていた。彼らの足下にはそれぞれ1冊ずつ本が置かれている。本、と表現したが、見開けるようなものではなく、数十頁分の紙束を厚手の表紙と裏表紙で挟み込み、上下の端を紐で縛つて纏めただけの代物だ。

「構え！」

1人の男の合図で彼らは屈み込み、本の表紙に片手を押しつけた。表紙には記号のような模様と記号同士を繋ぐ線、少しの文字が書かれており、彼らの指はそれぞれが記号を押さえるよう配されている。更なる合図で、彼らの手の平と本の間には光が生まれた。魔力が流し込まれたのだ。

光は本の内側を通り、やがて床へと流れ出す。床に描かれた幾何学的な紋様を伝い、柱、壁、天井へと順に光が満ちていく。

そうして大部屋は眩い光に包まれた。にもかかわらず壁や床、部屋にいる者たちが姿を浮かび上がらせることはない。

なぜなら、その光が厳密には光ではなく“魔光現象”と呼ばれる、活性化した魔力が精神に見せる幻であるからだ。

「全員、結界の外へ」

光に溢れていながらも暗闇に包まれた空間の中、本に手を置いていた者たちは指示に従い、弧を描く柱の外側へ。

縦横無尽に走り回る魔光の流れはやがて規則性を持ち、より強く輝きを増してゆくにつれ、部屋を中心へと集まり始めた。

（さあ……どうだ！）

指示を与えていた男は、強く念じながら魔光の集う先を見た。

そこには1本の杖が垂直に突き立てられている。

長さは人の腕ほど。杖の頭部には竜の翼を模した装飾が施されていて、中心には蒼色の宝玉が嵌め込んでおり、その杖が歩行を補助するためではなく、権威を象徴するためのものであることを感じさせる。

柄部分には頭部の装飾から続く無数の紋様が刻まれ、そのまま石突きを通り床の幾何学紋様とも繋がっている。

魔光がその繋がりを通り、杖を駆け上がってゆく。

杖の先端に吸い込まれた魔光は、嵌め込まれた宝玉と同じ蒼色に染まり、集う魔光よりも更に強く輝き始めた。その蒼い光が生まれて、初めて周囲の空間が照らされる。

蒼光によって緊張した表情を露わにされた男たちは、皆一様に心を凝視していた。今度こそ、今度こそはと、念が込められた視線が向けられている。

男たちは大きな期待と共に成功を確信していたが、不安が皆無というわけでもなかった。

#1話：実験場の闖入者

プリスマフト王国。

国境の北半分を広大な山脈地帯に覆われた、大陸西方の国家だ。かつては“竜族”によって治められ、悪魔を駆逐せんと戦った勇敢な国であると伝えられているが、悪魔が滅んだとされる現在、伝説は信仰としてだけ残り、すでに数百年の間“竜族”との交流は途絶えて久しい。

北の山脈地帯、信仰上の聖地とされる竜翼山脈りゅうよくざんみゃくの中腹に、その研究所は建てられていた。

ある国家事業のために禁を犯し極秘で建てられたものだ。研究は魔導術に関するものであり、所員も大半が魔導師で構成されている。今日はその事業、魔導術研究の最終段階ということもあり、直接実験に関与しない所員たちも地下儀式場で成り行きを見守っていた。

魔術。魔力を扱い、様々な現象を引き起こす術すべ。その1つに魔導術というものがある。魔術には他にもいくつかの種類があるが、魔導術は急速に成長している最も新しい術系統だ。

魔導術の効果は設計次第で幅広く応用が利き、多種多様だ。まったく役に立ちそうもないモノも大量に作られているが、モノによっては莫大な富を生む金の卵であったり、戦況をひっくり返してしまうような兵装であったり。あるいは、生活を豊かにするちょっとした工夫にも用いられつつあった。

他の魔術と比べて圧倒的に「扱いやすい」魔導術は、国に、戦争

に、生活に必要な技術として広まり始めている。

南方のカルナダ商業連合国では、早くから蠟燭の代わりに魔導術を用いた照明器具を使い始め、金銭的余裕がある層ではより高価な生活用品を揃える者たちも現れた。大半の商品は好事家が娯楽で集めているようなレベルだったが、それらは他国へも広がりつつある。いずれはより安く機能的なものが流通してゆくだろう。

北の雄ラベルド帝国では、兵装系の術が急速に発展していると噂され、他国もそういった武力や技術に対抗し、それぞれのやり方で魔術の研究と普及を進めている。

そんな中、プリスマフトだけが1歩も2歩も遅れている上に追いつく目処も立っていない、というのが現状だった。

そもその問題として、プリスマフトは他国に比べ魔術を使える術者の数が圧倒的に少ない。国民が抱く「魔術」に対する忌避感がある原因なのだが、魔術の遅れは国力の圧倒的な差を生む時代へと移りゆく中、術者不足はプリスマフトにとって10数年後の死活問題となるため、どうにかして術者の数を増やそうとしていた。

国民が忌避する「魔術」と「魔導術」のある“違い”を理由に魔導術を浸透させようとし、それを学ばせるための学院も設立。他国から在野の魔導師を講師として招き、術者数の増加を試みているのだが……結果は芳しくない。

元々魔導術は他の魔術から派生したもので、魔導術の修得にはそれら他の魔術の助けが重要だ。にもかかわらず、学院ではそれら他系統の魔術がほとんど禁止されている。プリスマフトの民にとって「魔術」は“悪魔の術”とされているからだ。

だが“悪魔の術”の助けなく魔導術を修得するのは、文字を教えずに本を読ませるようなものであり、凡人はおろか、たとえ才能ある生徒であっても修得が容易ではなく、途中で挫折してしまう。

そんな状態でまともに授業ができるはずもなく、生徒が育つはずもなかった。好待遇で招かれた講師たちもやる気を無くし辞めてしまう。かといって魔術を教えようとすると、今度は学院に子を預ける親がいなくなってしまう。

他国で魔術を学んできた数少ない術師たちも、国のため、あるいは自分たちの地位を守るために様々な活動をしているが、思ったようには成果が上がらなかった。

そんな中、今回の研究は最後の希望と言っても過言ではない。これからの活動の切り札と目されているモノであると同時に、決して失敗の許されない実験である。

しかし、実験成功を目前に想定外の事が起きてしまった。

「あれは……なんだ!？」

多くの魔導師と所員が見守る先、突き立てられた杖の宝玉が蒼光を放つ、その手前。

影が現れた。

先を見通すことのできる、幽かな影。

それは塵気楼のように蒼光を歪ませ、輪郭をなぞらせる。

そして光と影が溶け合うように巡り、その場からにじみ出てくるように、それは形を得てゆく。

「人……の影……？」

【…… あああああああああああああああああああ】

突如、叫び声　　というわけでもない、ただ大きな、ただ声を出しているだけ、というような、壊れた声が響いた。

声の音程は一定。なんの感情も感じられない、無機質な声だ。声色から、女のものではないかとだけ、かろうじてわかる程度。

【ああああああああああああああああああああああ】

所員たちが息を呑む。今までの失敗ではこのような事態は起きなかった。だがどちらにせよ想定外のこと起きていたのであればそれは失敗だろうか。あるいはここからでも持ち直すことができるだろうか？　かといってすでに起動している術式に干渉する事などできはしない。

成功するにせよ失敗が確定したにせよ、彼らは見届けることしかできない。それでもできる限りのことをしようと、なにか見落としが、そして解決方法がないだろうかと魔導師たちは思考を巡らせる。

【ああああああああああああああああああああああ】

あるいは、すでに失敗かと諦めたものもいるようだ。

肺活量を無視した途切れのない音が、いつまでも響き続けて終わらない。

多大な労力、資金が注ぎ込まれてきたが20年間なんの成果も出すことができず、懷に決して余裕があるわけではない国からの予算は今年で打ち切りだ。

そして今までも全ての資金を国からの予算頼りにしてきたわけではなく、彼らの資金繰りもすでに限界に来ている。

今回が最後のチャンスだ。

このまま成功するか。それとも全ては夢と消えてしまつか。

【ああああああああああああああああああああ】

魔導師たちの視線の先で、人影は厚みを増していく。

影の出現と共に鮮烈に輝き始めた蒼光により、いよいよ誰も目を開いていられなくなった。

目を閉じていても感じられるなにも照らさない白い光と、全てを埋め尽くす蒼い光。

耳には人の物とは思えない壊れた声が、いつまでも響いて止まらずにいる。

そして数分後。

いつのまにか声は収まり、光の奔流も途切れていた。

杖に集められた魔力が許容値に達したのだと、魔力の測定を担当した研究員は願った。そうであれば実験は成功したはずである。

しかし、それにしては杖の先に取り付けられた宝玉が宿す蒼光は淡く、弱い。

予定では常に太陽の如き輝きを宿すはずであったが、これでは松明にも劣る程度でしかない。

それ以前に認めなければならぬ問題があるのだが、彼は現実を直視することができずにいた。彼だけではない。この場にいる全員が、肩を落とすのは先送りにした。

現在の儀式場において唯一の光源が、映し出す姿。

「なんで女の子が……？」

淡く、蒼く光る杖の傍らに、少女がぺたんと座り込んでいた。そ

れも裸で。

「……………」

少女はなにか喋っているようだが、柱の合間から中心まではかなり距離があり、よく聞き取れない。

所員たちはその姿を見てざわめき始めた。

「どこから入り込んだんだ？」「まさか。ここに侵入なんてできるわけがないだろう」

「なにか良くないモノかもしれん」「光と共に現れたんじゃないのか」「魔獣の類か？」

「実験はどうなんだ！ 失敗なのか！？」「計測光担当者。あれで成功なのか？」

他にも警備兵はなにをやっているんだ、といった文句や、そんなことよりも実験はどうなったのか、等を問い合うやりとりが小声で行われる中、少女は彼らに気が付いていないのか、不思議そうな顔でなにかを呟いている。

「静かにしろ！」

皆に指示を与えていた男がその場を静める。少女はその声で回りの気配に気が付いたようだった。

「……………」

きよろきよろと辺りを見回す姿はどこか不安そうである。少女の傍にある杖の宝玉のみが光源となっているため、少女から見て暗い部屋の柱の奥にいる所員たちのことは見えていないのかもしれない。

少女は所員たちを静めた声の方を向きながら、自身の体を蒼白く浮かび上がらせている杖へと手を伸ばした。

「……触るなっ！！」「……」

咄嗟に声を上げた魔導師たちだが、誰1人として結界より内側に入り少女を捕らえようとした者はいなかった。得体の知れない存在に対してどう対処して良いのか誰もわからなかったのだ。

ビクツと、身を竦めた少女が目を懲らすように柱の影を見ると、1人の魔導師と目があった。

「……………！！」

息を呑んだのは果たしてどちらだったろうか。

目が慣れてきたのか、少女が再度あたりを見渡すと、幾人もの魔導師たちが目を合わせる事になった。

少女に 深鷺^{みづう}にとって不幸なことに、彼らには幼い少女の裸身を凝視している事に対する道徳的な意識は浮かんですらおらず、むしろ得体の知れない存在から視線を逸らす事ができなくなっていた。深鷺が、素っ裸で暗がりから無数の視線を浴びるという有り得ない状況に意識が追いついた途端。

「きゃああああああああああああああっ！？」

感情に満ちた絶叫が響いた。

#2話：クアラ村の師匠と弟子

村人たちが夕食を済ませ、寢床に入るか徹夜するかを選ぶ時間帯。夕陽が沈む寸前の赤い光をキラキラと反射させながら外を駆ける人影があつた。

歳は10代前半から半ばほど。まるで水晶のような色の髪が目を引き小柄な少女だ。

今日は睡眠を選んだはずの少女は相当慌てていたらしく、薄い生地でゆつたりとしたワンピース型の寝間着のまま、上に外套を羽織っただけの姿だ

少女はその小柄な体は外見からは想像しがたい速度を生み出ししており、村はずれの家へと到達するや否や、そのままぶつかるかのようにな扉を開いた。

「お、お師匠様ー！ 大変ですー！」

「おブツ！？」

「あうっ！？」

扉が何故か途中で止まり、少女は扉に頭を本当にぶつけることになった。

「い……痛い……」

改めて扉を押すと、そこには鼻を押さえた老人が立っている。

長い白髪が、同じく長い白髭と一体化した灰色ローブ姿の老人。特筆すべき特徴はその背丈だ。ドアよりもギリギリ高い位置に頭がある。その身長は2メートルを超えているだろう。

そして彼の白髭はすこし血に染まっていた。

「お、お師匠様……！　こんなときにまで、いやらしいこと考えてないでくださいようっ！　大変なんですからっ！」

「たわけ！　おぬしの開けた扉にぶつかったんじゃ！」

少女の名はクイシエ。この白髪の老人ギュランダムの子として修行を積んでいた魔導師だ。

「まったく、慌てんでもわかっておるわ」

「じゃあやっぱり……！」

「【獣払い】用の結界が壊れたんじゃ。今から調べに行く所じゃよ」

このクアラ村は山間にある小さな村で、周囲は深い森に囲まれている。大きな街道からは外れており、旅人が訪れることも滅多にないような辺鄙な村だ。

森は獣の領域。特にこの地には魔獣と呼ばれる特殊な獣が数多く生息していることで知られている。それらの脅威から村を守るため、クアラ村では専用の結界を設置することである程度の安全を得ていた。それが先ほどの脈絡もなく破壊されてしまった。

自室で眠りに就こうとしていた際にそのことに気が付いたクイシエは、慌てて師匠の元へと知らせに来たのだった。

「儂が施した結界が破られたんじゃ。儂が気が付かないわけなからうが」

「あつ……そ、そうですね。ごめんなさい……」

「いや、謝らんでも良いが……いや、鼻の件は謝っても良いがの」

（しかし、他人の結界の破壊に気が付くとは、まったくもって才能

じやのう……)

本来結界というのは仕掛ける際に用いた血の持ち主である術者を除けば、その影響を受ける対象にしかその存在を悟られることがない。今回の場合は【獣払い】の名の通り獣や魔獣を対象としたもので、人間にはまったくと言って良いほど影響がないはずである。

仮にそこに結界があると知っていてその境界に直に触れていたとしても、並みの感覚ではわからないだろう。

そもそも「そこに結界が存在しているかどうか」すら、結界の要として設置する楔や札などを見つけるか、なんらかの魔術を用いて調べない限りはわからないはずなのだ。

(クイシエの足でここに来たタイミングからすると、結界が壊れてすぐに自宅を飛び出してきたんじやろうなあ。寝間着姿じゃし)

札や境界を調べている暇は無かっただろう。にもかかわらず、クイシエは確信を持ってそれを伝えに来た。

そんなことが可能なのは、クイシエの魔力感知能力がずば抜けて高いからだ。

並みの人間とは比較にならない、おそらく魔獣でも有り得ないほどに鋭い感覚は、魔導師としてかなり有利な才能である。

人や術に使われているものだけではなく、大気や地脈に流れる魔力を感じ取れる範囲も尋常な規模ではない。それもある程度の精度であれば、精神集中なの手順を踏まずとも常に把握しているというのだから、村の術者たちからはもはや見えている世界が違うのではないかとすら思われている。

それほどまでに感覚の鋭いクイシエならばこの破壊の原因もわかっているのではと、ギュランダムは確認しておく事にした。

「なにかわかつていることはあるかの」

「……あ、はい。えーと……よくわからないんです」

「わからない？」

「あの、気になったと言いますか、いまもずっと感じていることならあるんですけど」

クイシエはそう言っ、沈む夕陽とは反対の方を示す。

「東の森の方に、なにか違和感があるんです。なにがと聞かれるとなんとも言えないんですけど、たぶん、魔力の流れとかがなんだか少し、おかしいような」

「ふむ。結界を破るような強力な魔獣でもやってきたんかのう」

「あ、そういう感じじゃないです。魔獣だったらもっとハッキリわかりますからそれに、もっと遠くです。結界を壊してから移動したにしては遠すぎます……」

「ふむ……まあなにせよ確認しておかねばのう……」

ギュランダムは魔導術を用いて鼻血の跡を消し去ると、鼻をぶつけた際に取り落としてしまった本を拾い、外へ出る。

「あ、あの、お供しますっ」

「よい。おぬしは村で待つておれ」

「で、でも……お師匠様を支えて行かなくてもいいんですか？ 今朝は腰が痛くて動けないって仰ってわたしが……」

「腰？」

ギュランダムはなんのことだったかと一瞬考えを巡らせた。

「はい、なのでお手伝いが必要になって、走ってきた……んですけど……」

「……ああ！ あれか……あー。……うむ。あれは治った」

「そついえば普通に歩かれてますね」
「うむ。急に治ったのじゃ」

2人の間に少しの沈黙が流れる。

「……………あの、まさか、嘘だったんですか？」
「うむ、いや……………まあ、そうじゃ」
「……………また、どさくさに紛れて、わ、わたしの胸を……………触ったりするのために……………ですか……………」

見ている方が悲しくなるほど肩を落とし、深く息を吐くクイシエ。今朝、クイシエは腰が痛いと言主張する師匠の世話を焼いていた。その際、支えている側の師匠の腕が、事故にしてはわりと容赦なく胸に伸びてきたのを思い出す。

「うつ……………いったい何回目ですか、こんな嘘つくの……………」
「……………」
「……………」
「とうかのうつ……………おかしいおかしいと思いつつも結局は信じてしまつのはおぬしのいいところじゃなあ……………」

思わずポロリと呟く。

「全然褒められてる気がします！ 毎度毎度、恩人がそんな人だつて思いたくない、わたし気持ちはどうしてくれるんですか！」
「まあその話は後じゃ後。今は村の一大事じゃ」
「……………ごまかされませんよ！ わたしも行きますからっ！」
「……………まあ、魔獣じゃないというならそこまでの危険はないと思うが、どつちにせよ先に結界の張り直しじゃ。山に入るのは夜遅くなるぞ」

「かまいませんよつ。だいたい昨日お師匠様だつて、わたしがもう1人前の魔導師だと仰いましたしっ!」

クイシエは、ギュランダムの弟子としては一応卒業した身だった。

「うむ。魔導師としては1人前じゃが人間としては4半人前じゃ。というか、4人揃つても1人前にはならんと思う」

「うつつ、そんな……」

「じゃからのう」

「こんな人^{へんたい}に4分の1扱いされるなんて……」

「……」

弟子がショックを受けるポイントの微細なズレに、ちよつとだけ自粛しようかと思つたギュランダムだった。

#3話：山奥の出会い

「まったくいい年して、どうしてそんなに元気が良いんですか！」

「なんじゃその口ぶりは。年寄りが元気でなにが悪い」

「というかよく考えたら、お師匠様ともあろう方が腰の痛みくらい自分で治せないわけがないですよね……！」

「それはそうじゃろう。気が付くのが遅いのう」

「……！！」

村の一大事というわりには緊張感のない2人だった。

会話を続けながら向かう先は村の中心にある広場だ。なにかが起きたときは事態の解決に必要であろう人材がそこへ集まる事になっている。

言い争いの内容から事情を察した村の女性たちは氷点下の視線を大柄な老人へと集中させていたが、ギュランダムはまったく意に介さず反省の色はない。

2人が広場に到着すると、すでにクイシエから事情が伝わっていた結界や魔獣の問題を担当する村人たちが広場に集まっていた。

さっそく皆で協力して結界の再設置を始める。こんなときのために予備の準備はしてあるものの、設置には4時間近くかかってしまった。作業を終えた頃にはすっかり夜も更けている。

ギュランダムは村の狩人数名に「念のため寝ずに警戒しているように」と言い置き、犬の耳が生えた狩人を1人連れてクイシエと共に森へと入っていった。

月のない夜の山の中を犬耳狩人の案内で進んでゆく。

魔導術【浮灯虫】によって生み出された複数の光の球が、道無き道を照らしていた。

松明などとは違い、燃焼を用いずに安全に辺りを照らす事ができ、光が揺らぐ事もない。また、自動的に対象の周囲を漂ったため、手が塞がれないという便利な術だ。

「どうじゃクイシエ」

3人の真ん中を歩くクイシエにギュランダムが問いかけた。

「近くなつてきてます」

「この先には魔獣の餌場があるが、大物が寄りつくような場所じゃあないぜ？ まあ、クイシエの勘を疑う気はないんだが」

「あ……力、カウスおじさん。今日は違うの。たぶん」

「……あ？ なんだ、魔獣じゃないのかよ……」

「なんじゃ、やけに重装備だと思つたら勘違いしておつたのか」

狩人は過去の経験から、結界の異常時には魔獣が絡んでいると思ひこんでいたため、今回もその類だと思つていた。

すらりと高い背丈で魔獣の毛皮が使われた狩人装束を着込み、灰色でボサボサの短髪から犬の耳を生やした青年。名をカウスというこの犬系獣人の狩人は、村で最も挑戦的な男として知られている。若い頃からなにか凄いもの、優れたものへ挑むことに情熱を燃やし続けており、自分に少しでも勝てる可能性があると感じると、相手がなんであれ挑戦した。それは動物、昆虫、魔獣、そして年下の少女であろうとも一切相手を選ばずにだ。

以前彼は、狩人として磨いていた魔獣を見つけ出す技術とクイシエの超感覚を競い、惨敗したことがある。年齢にして半分以上、下手をすれば娘とも言えるような年下の少女に挑んだ挙げ句に負けて以来、彼はクイシエの実力を認めている。

良い笑いモノになったカウスだったが、村人たちの笑いも嘲笑ではなく娯楽としてのものだ。むしろ実力としては村中が一目置く男

である。

クイシエにとってそれ以来、なにかと関わることで増えた相手だった。

「強そうな魔獣を感知したら俺に知らせろよ」

というような関係である。

彼は外見上かなり人間に近いタイプの獣人で、頭の犬耳と髪の色を除けば、ほぼ人間と見分けが付かない。

尻尾すら生えていないのだが、もし生えていたとしたら力なく垂れ下がっていたであろう声色で、カウスは愚痴をこぼした。

「結界が壊れたなんて言ったら、てっきり魔獣退治かと思うじゃないか」

「そりやおぬしの願望じゃろ。人の話聞いたのか？」

「あー……………俺、先帰っても良いか？」

「カウスおじさん……………」

どつりで勢いよく立候補してきたはずだと、先にしっかりと告げておかなかったクイシエは申し訳なさそうにしている。

「阿呆。駄目に決まっておるじゃろうが。まったくおぬしはいつまでたっても子供のように……………そろそろいい年なんじゃから大人らしく落ち着いたらどうじゃ？」

「いや、アンタにだけは言われたくない……………」

「お師匠様は人のこと言えません」

ギョランダムは都合の悪いことは耳に入らないと言わんばかりに先へ進む。

クイシエは自分の感覚でわかることを2人に伝えながら、後を付

いて歩く。

「近くに來たのでだんだんわかつてきたんですけど……その、違和感はずしずつ動いているみたいです」

「ふむ？ 動きがあるということとは生き物なんじゃろうかのう」

「でも魔獣じゃないんだろ？ クイシエの感覚は俺にはよくわからんが、魔力を感知するんだよな。でも魔獣以外で違和感を感じる、動く魔力って、いったいなんなんだ？ 村の関係者以外で術者でもうろついてんのか？」

「それを調べに行くんじやろうが。しかしクイシエ、本当に魔獣ではないんじやろうな」

「魔獣じゃない……はずです……」

「クイシエが言うなら間違いはないだろうぜ」

「違和感の理由についてはなにか掴めそうかの？」

「……ぜんぜんだめです。本格的に調べればわかるかもしれないですけど……」

じわじわと近づいていく距離。

違和感を持つ存在がクイシエたちを意識している、というような動きは感じられない。フラフラとブレるような動き方だが、どうやらこちらの進路に対して垂直方向に移動しているらしかった。

移動先で遭遇できるように相手の進路に対してナナメに向かう方向を示しながら、クイシエは感覚を研ぎ澄ましてより詳しく魔力を感じ取る。

やがてかなり急勾配な坂の側面に差し掛かり、クイシエは立ち止まるとその坂を指さした。

「あ、あそこです！ あの木の左側……」

「坂の……上か？」

「いえ、坂の下の方です。ちょっと、埋まってる……？ もう動い

てません」

「ここからじゃとよく見えんのう」

魔獣ではないとは思いつつも、小声になる3人。
距離が離れている上に正面でもないため、中が見えない。

「クイシエはここで待っておれ。カウス、行くぞ」

「へーい」

あからさまにやる気を無くしているカウスを叩きつつ、ギュラン
ダムはなるべく音を立てず、回り込むように移動する。

「……………くすん……………」

(……………泣き声?)

男2人は坂の正面に立った。

そこには人ひとりが入れるくらいの窪みがあり、その穴の奥からは細くて白い足が生えている。

「……………あ?」

カウスは訝しげに顔を歪ませ、

「ぜ……………」

ギュランダムは目を見開いた。
カウスの周囲を漂う【浮灯虫】が穴蔵の中を照らす。
そこには、

「ぜつ、全裸のおなごじゃとおおおお!? ひゃっほ うぶっ!？」

「あああ、アホかこのクソジジイッ!？」

突如恥ずかしい叫び声を上げたギュランダムを思わずぶん殴って止めたカウス。このシチュエーションでこの反応はありえない。

2人が見たのは、坂に空いた小さな穴の奥で座り込んでいる、素っ裸の少女だった。

カウスが恐る恐る振り向くと、案の定少女は怯えきった表情でこちらを見ていた。

「ああー……クイシエー! 来てくれー!」

カウスは即座に反転し、殴り飛ばしたギュランダムの足首を掴んで引きずりながら、クイシエのいる方へ走る。

「お、女の子がいたんですか!？」

「ああ、素っ裸のな」

それを聞いた瞬間、クイシエは凄い勢いで後ずさった。

「か、カウスおじさんさんのえっち! 変態っ!！」

「いや俺は不可抗力だろ!? なんでジジインときより反応が過敏なんだよ! しかも変た……いやそんな場合じゃなくてだな!」

「そっやって……男の人はいつも誤魔化すんです……!」

両手で体を守るように涙目で訴える姿を見て、カウスは身近な人間による悪影響がわりと深刻なのではないかと心配になった。

「……いや、マジな話、こんなところであんな姿、絶対訳ありだか

らよ。クイシエがなんとか、ちゃんとやってくれ……」
「あ……はい」

変に取り乱しているのを自覚したのか、真面目な（それでいて一瞬で疲れたような）顔をしたカウスを見て、なんとか自分を落ち着かせるクイシエ。引きずられているギュランダムを無意識に踏み越え、坂の穴へと駆け寄る。

クイシエが中を緊張しながら覗き込んでみると、そこには怯えている少女がいた。

明かりから逃れるように穴の奥へと背中を押しつけ、少しでも隠れようとしているようだ。だがこの横穴は人が立ち上げられるほどの高さもなく、奥に体を押し込めば辛うじて人間1人が雨をしのげる程度のものだ。正面に立たればどうしたって隠れようがない。

（女の子……！ 女の子だ！ 同い年、くらい、かな……！？）

クイシエは“同年代の少女を見るのは初めてのこと”であり、裸でこんな所にいるという状況よりも、そちらの意味で緊張していた。

「あ、あの、怖がらなくてもいいですよ。もう大丈夫です」

とにかくそう言わなければならないと思ったクイシエは「大丈夫」を繰り返す。

しかし少女の表情から怯え以外のものが読み取れるとすれば、それは不可解、不理解といったものだった。

（もしかして、言葉がわからないのかな……？）

どんな事情があればこんな僻地の山奥で裸で隠れなければならないのか、まったく想像は付かなかった。見たところでは“怪我はし

ていない” ようなので、そのことにはとりあえず胸をなで下ろす。
国を越えてかなり遠いところから来た可能性もあると考えたクイシエは、試しにいくつかの言語で話しかけてみたが通じた様子はなかった。

クイシエは一瞬だけ考え込むと、少女にゆっくりと話しかけた。

「ええと……い、いまからちょっと頭に触ります……いい、かな……？」

なるべく怖がらせないように自身も冷たい地面に膝を突き、少女と視線を合わせる。自分の頭を触り、少女の頭を指さし、目を見ながら、それを根気よく繰り返し、同じ事を繰り返し伝える。意味が伝わったであろうと確認してから、ゆっくりと手を近づけ始めた。

これからなにをするかは理解していないに違いなかったが、わからないなりに少女は協力的で、頭を自分からクイシエの方へと近づけていた。

(……よし)

だいぶ緊張しているようだったが、どうにか頭に手を触れることを受け入れて貰えたことにクイシエは安心した。クイシエは何故か自分も心臓が破裂しそうなほど緊張していることを自覚しないまま、そのままゆっくりと頭を抱きしめ始める。

(“受け入れてくれてる”……よね？　これなら、たぶん、大丈夫……)

少女の冷え切った体を服越しに感じながら、意識を集中する。

体内で魔導式が組み上げられていくイメージ。一瞬で描かれた図面。その枚数は489。

それらは力の流れる先を7つの指に配分され、重なった。

【浮灯虫】とは比べものにならない、複雑な術式だ。

「……フレンズチャット【言語移植】……」

言葉と共に魔光に包まれたクイシエ。

照明を目的とした【浮灯虫】の光とは違い、魔光があたりを照らすことはない。そして魔光はたとえ目を閉じていたとしても感じられる。

（いきなり魔術を使ったりして、驚かないでいてくれるといいけど……）

その魔光がゆつくりと、少女へ伝わっていく。

一呼吸ほどの時間を掛けて、全ての魔光が少女の中へ消えた。

「うん、大丈夫、かな……」

「……え？」

「こ、言葉、わかるよね？」

「うん、わかる……なにこれ、すごい。魔法みたい……」

少女は驚きの表情だ。

「よかった……成功してて。大丈夫、安心していいよ」

そう伝えると少女は本当に安心してくれたのか、そのまま気を失うように眠ってしまった。

#4話：暗闇から暗闇へ

時間を遡り、ここは竜翼山脈研究所の地下儀式場。

「……………あ？」

（まぶしー）

目の前に蒼白い光が見える。照明としてはずいぶん淡い光で、あたりの暗さと比べると頼りない。

（……………って、え？ 真っ暗？）

夕方だと思っていたのに急に夜になってしまったことに深鷺は混乱した。みろぎ

（公園で昼寝でもしてたっけ……………？）

一瞬、頭がぼんやりしているのは寝起きだからだろうか考える。天気の良い日などは公園でウトウトすることもある深鷺だが、危ないから1人ではしないようにと兄から注意されていた。帰り道は1人でいたはずだし、そもそも公園になんて寄っていない。

深鷺は急に肌寒さを憶え、肩を抱いた。

腕が、胸に、妙にべったりと付くのに気が付く。

（……………な、なんでハダカ??）

更に混乱する深鷺。

「ここ……どこだろ？」

少なくともここが公園　野外でないことは確かだ。

目の前には変な形の小さな照明が床に1本立っているだけ。

遠くは暗くてよく見えないが、空気の流れが感じられず、頭上には天井があるようなので、かなり広そうだがここは室内であるはずだと、深鷺は推測する。

（まあ、外でハダカはありえないよね）

寝る前にどんなことをしてハダカなのかはわからないが……

とまで考えて、深鷺はようやく不安になってきた。

その不安を待っていたように人の声らしきものが聞こえた深鷺は、手足で身を隠しながら、

「誰がいるの？」

いて欲しくはないが、問いかける。

……答えが返ってこなくとも、誰もいないことの証明にはならない。

深鷺は闇を照らそうと、傍らにある凝った意匠の照明へと手を伸ばした。

「……っ！」「」「」

暗闇から複数人の怒声。深鷺は身を竦めせると声のした方、つまりあちこちを見渡した。

放射状に紋様の描かれた床が、自分を中心に広がっている。

身を預けるところも隠すところもなく、怒声に阻まれて照明を手にすることもできない。

徐々に闇に慣れていく視界が、あたりを取り囲む柱を捉えた。それが、まるで自分を閉じこめた檻のようにも見える。

そして、その柱の隙間にみっちりと列ぶ人影を見つけた。

どこを見ても人、人、人。

「……………」

そのうちの1人と目があつた。

その1人だけではない、隙間という隙間に人がいて、皆が皆、こちらを向いている……

朦朧としていた意識と、突拍子もない暗闇に混乱していた頭が、ようやく現状を把握した。

「きゃあああああああああああああつ!？」

体を丸めて悲鳴をあげた途端、深鷲はその場から“消えて”しまっていた。

目を瞑っていた深鷲は、いつまでもなにも起こらない事に疑問を感じていた。

人の気配がなくなっている。

「……？」

急に冷え込んだ空気を吸いながら恐る恐る目を開くと、景色が一変していた。

風の流を感じる。虫の泣き声が静かに響いている。

視界を埋め尽くすのは闇と柱と人ではなく、木々の幹、草と土。上を見上げれば枝葉の隙間に空が見え、流れる雲の隙間にはうつすらと星が見えた。

世界が青く薄暗い、夕焼けの終わりの時刻。

（……なんで？ なにがどうなって？？）

深鷲は山の中にいた。いつのまにか自然に囲まれ、平らな岩の上に座り込んでいる。

遠くの空がわずかに明るく、深鷲はそちらで日が沈んでいるのだろつと理解した。じわじわと、世界が暗く染まっていく。

体がブルリと震えた。くしゃみをして、音を立ててしまったことに慌て、あたりを見渡す。何を恐れたのかは自分でもよくわからない。

（誰も、いないみたいだけど……）

誰かがいればいたで困るのだが、いなくなってしまったところで状況は良くなつたかと言えば、そんなこともない。

（夢でも見てるのかなー……ぜんぜん、そんな気はしないけど。とにかく、このままこの場所にいるのは……）

自分にいったいなにが起こっているのか？

それをゆつくりと考えている余裕がないことに思い至つた深鷲は、

険しい自然に囲まれた山の中、本当に自分の身ひとつでいるという頼りない状態を少しでも改善すべく、まずは地面に落ちていた太い枝を手を取った。役に立つかはわからないが、なにもないよりはマシだろう、と。

暗闇に沈んでゆく森を見てふと、さつき目の前にあつた照明があればと、座り込んでいた岩の方を振り返ってみるが、蒼白い光は見あたらなかった。

諦めて、目の前に立ちふさがる予想以上の闇に一瞬怯みながらも、身を隠せる場所、安全な領域、明るい空間、せめて身に纏^{まと}えるもの、あるいは守ってくれる誰かを求めて、歩き出す。

「誰かーっ！ いませんかーっ？ たすけてくださいーっ！（できれば女の人だとなお良いですー！）」

生命の危機に直面しているという意識が芽生えた深鷺は、羞恥心を脇に避け、大声で助けを呼んでみた。

自分が置かれている不可思議な状況を考えるに、成果はあまり期待してはいなかったが……

（よくわからない不思議なことが起きているのなら、よくわからない不思議な助けがあつたって良いはず）

そんな根拠のない希望を胸に、定期的に声を張り上げた。たしか、存在をアピールしながら歩くことは熊避けにもなるんだと、どこかで聞いた話を思い出しながら。

すでに日は落ちきってしまった。このまま夜が深まれば、いまよりも暗く寒い中を裸でいなければならない。

いざ歩き始めみると、拾った枝は杖代わりになり、とても役立った。ほとんど見えなくなりつつある足下の安全を確認するために

は必須と言っ て良いほどだ。

そうでなくとも、こう視界が悪い中で邪魔な枝やら藪やらを素手や素足で払っていたら、傷だらけで酷いことになっ てしまっただろう。もっとも、杖があつてもすでに傷だらけなのだが。

深鷲は登山経験がないわけではなかつたが、それはあくまで整備された登山道の話だ。登山遠足では急な坂に階段が用意されていた。しかしここでは獣道すら見つからない。

山奥の道なき道を歩む中、深鷲は足下を慎重に確認しているにも関わらず、何度か転んでしまつた。体を守るものが1本の枝しかない深鷲は、痛みと冷気に集中力を削がれていく。

(寒いー……痛いよー……誰かー………)

そうして、どれほどの時間が過ぎただろうか。

正確な時間はわからないが、少なくとも夜の闇がだいぶ深まつたことだけはわかる。

どこまで歩いて道らしきものは無く、明かりも見えてこない。1度山頂らしき所にも辿り着いていたが、見晴らしが悪くてどうしようもなかつた。

いったい、ここはどれほどの田舎なのだろうか。明かりの気配もまったく感じられず、日常とのあまりの落差に現実感もない。

もう何度頬をつねつただろう？

進んでいる方角は果たして正解か、間違っているのか。どこかにはたどり着けるのか。

もしかすると同じあたりをグルグルと回っているのではないだろうか、という不安が生まれてくる。

それでも、暗闇の奥から、自分の背後から、なにかが追いかけてくるのではという妄想に急ぎ立てられ、歩みを止める事もできない。

（あっ！）

疲労と焦りからか、足下の確認を怠った深鷲は坂を転げ落ちてしまった。

……冷たい地面の上で硬直した体をゆっくりと落ち着かせつつ、体中の痛みを確認する。

なにかに背中を引っかけた擦り傷ヒリヒリと痛む。

幸いなことに深い傷はないらしかったが 足を捻ってしま
ったようだ。

この足では、とても山道を歩ける気がしない。

「うつ……」

深鷲は離さず掴んでいた枝の杖を頼りに、半分泣きながら立ち上がる。

あたりを見渡すと、滑り落ちてきた坂の下に小さな窪みがあるのを見つけた。

片足でひよこひよここと跳ねながら窪みへと向かう。

ふと、つい先ほど、似たようなことをしていたような気がして、学校の帰り道の情景を思い出す。

（夕方……そう、夕方、帰り道でちよつと遊んでたはずなのに……そこからの記憶が全然ないっていうか……どうして、）

どうして山奥にいるのか、なにもわからない。

それが“わからない”ということ自体を恐怖するところにはまでは、深鷲の頭は回転しなかった。今の深鷲には目の前にある闇への恐怖と心細さ、痛みのシヨックのほうが大きい。

跳ねながら辿り着いたそこには、屈かがんでようやく入れるような小さな横穴が空いていた。

（中途半端な穴……なにかの巣ってわけじゃないよねー……？）

奥行きがそこそこあるので、雨宿りくらいはできるだろう。実際に降ってきたら水が流れ込んで来るかもしれないが……天気が変わらないことを祈るしかない。

痛む足を庇いながら、窪みの中に体を納める。

深鷺は顔を伏せて、冷えた体を抱えて体を休め始めた。捻った方の足首に体重がかからないよう伸ばし気味に、片膝だけを抱える姿勢だ。感覚が麻痺してきているのか、全身に怠さは感じるものの、痛みはそれほど感じていない。

心の中で深鷺は、誰かへ助けを求めること以上に、余計なことを考えないようにと強く意識していた。

何も考えず、できれば眠ってしまいたい。

考えてしまえば恐ろしい想像をしてしまうに違いない。

深鷺はこれが夢であることを切に願いながら目を閉じた。

クイシエが深鷺を抱きしめることになったのは、それからわずか数分後のことだった。

#5話：帰り道の問題

クイシエは裸のまま眠る少女に自分が羽織っていたケープを被せた。

早く村に運んで暖かくしないと風邪を引いてしまうだろうと、急いで運ぶようにカウスへ伝えようと思うのだが……

「……う、これじゃ足りない」

サイズの当たり前なのだが、クイシエのケープではギリギリで腰あたりまでしか覆えていない。

これだけでは寒い以前にカウスに背負わせるのは駄目だろう。

かといって、険しい山の道無き道をどうやら自分よりも少し背が高いらしい少女1人背負って村まで歩くのはクイシエには無理な話だ。

たとえ魔導術で身体能力を強化したとしても危険である。今朝、村で魔導術を用いてギュランダムを支えたときとはわけが違う。

クイシエが記憶している強化系の魔導術は、自身の運動能力に見合ったものしか無く、眠っている女の子を背負って不安定な足場を歩いてゆくには心許ないものだ。万が一転びでもしたら、背負った女の子に大怪我をさせかねない。

それに、お尻を出したまま運ぶだなんて論外である。

（ええと……胸のあたりから巻き付けて……駄目駄目、そもそも寒いんだから……よし）

体を離すと途端に不安そうな表情になった少女に「ほんの少しだ

け、待っててね！」と言い残して洞穴から飛び出ると、少し離れたところで待っていたカウスのもとへ走るクイシエ。

「どうなった？」

「も、もうだいじょうぶです。でも気を失ったみたいに眠っちゃって、体冷えてるし、はやく村に行って、暖めてあげないと……」

そう言いながら地面に転がっているギュランダムを転がし、いきなり服を引っ張り始めたクイシエ。どうやらローブを剥ぎ取ろうとしているらしい。

「カウスおじさんも手伝ってくださいっ」

「……おう？」

とりあえずなにも言わずに手伝うカウス。

上半身を持ち上げて服をすばんと脱がすと、ギュランダムはそのまま地面に落ちた。その様子を見もせずクイシエは洞穴へ駆け戻る。

肩を抱き上げると安心したのか表情が和らぐ少女を見て、クイシエは自然と優しい気持ちになった。

眠っている人間を着替えさせるのはそれなりに大変な作業だ。クイシエは魔導術で筋力を強化すると、なんとか、手早くローブを着せることに成功した。

「これで大丈夫かな……」

老齢だがカウスよりも上背のあるギュランダムのローブは、少女の体を充分包むことができた。さらに上からケープも羽織らせる。とりあえず、保温と露出の問題はこれで充分だろう。

「カウスおじさんー！ もう大丈夫なのでこっちに来てくださいー！」

「おーう」

「この子を村までお願いします…… あっ、変なところ触ったら駄目ですよ！」

「触らねえよ……ところで、あのクソジジイどうすんだ？」

「え……どうする……？」

「いや、気絶したまま起きないんだが」

ほれ、と指さされた方にクイシェが近寄ってみると、そこにはにやけ顔で白目を剥き鼻血を流しながら微動だにしない半裸の男が横たわっていた。

「へ、変態ー！？」

「……いや、弁護したくはないが、鼻血は俺が殴ったから……か？ まあそっちはともかく、服を脱がせたのはおまえだろ」

「あ、あああー……ど、どうしましう」

いま初めて気が付いた、という顔で動揺するクイシェ。自覚無かったのかと呆れながらもカウスは意見を述べる。

「俺としてはこのまま放っておいてもいい気分」

「さ、さすがにそれは……」

「だってよ、ひゃほーうだぜ？ ひゃほーう」

どんなにエロ腐っていても、恩師であるギュランダムにそこまで無体な事はしたくないクイシェだった。すでに剥いってしまった服のことは、まあ、考えないでおくとして。

とはいえ、このまま起きるまでここで待っていては少女が弱ってしまう。かといって気絶したギュランダムとクイシェ2人だけがこ

こに残るといいうのも危険だ。

「さすがにこの娘背負いながらジジイも背負うのは無理だぞ。ジジイ無駄にデカイから」

「え、ええと……」

カウスの身長は決して低い方ではないのだが、ギュランダムとは頭1つ分ほどの差がある。ギュランダムほどの体格があれば見つけた少女を片腕に収めるように抱える事もできるかもしれないが、カウスにできるのは2人の胴体を両腕で抱えて運ぶことくらいだろうか。

「ジジイはともかく、この子をそんな運び方するのはちょっとな。体痛めるだろ」

「そうですよね……」

「というわけだから、仕方ないな。引きずっていこう」

「うっ……」

それもあまりに酷いと思つたクイシエは、せめてこれくらいはとカウスの上着を借りて魔導術で頑丈にした上で、ギュランダムに着せた。フードで頭も保護すると、自分の上着を1枚クツション代わりに詰める。

少女はカウスが片腕で背負う。クイシエは先ほど使用した【獣軀動】により自分の力を強化して準備を整えた。

腕を掴んだほうがマシだろうに、カウスは敢えて足を掴んだ。クイシエはカウスが足を掴んだので、自然ともう片方の足を掴んだ。

「さて、風邪を引く前にさっさと帰るか」

お互い上着が減っていて肌寒いのもあり、行きよりも早足で山を

下っていく。

2人がかりで引きずっている形ではあるが、配分的には実質カウス1人で引っ張っているようなものだった。クイシエは小柄な女の子で力仕事にも携わっておらず、術で強化されているとはいえ成人男性ほどの力が出せているかも怪しい。クイシエはカウスの歩みになんとか合わせて進むのがやっとだ。

一方、カウスは滑りやすい草の上だろうが斜面だろうがスピードを一切変えることなく進んでゆく。その安定した足運びは、さすが凶暴な魔獣を相手取る狩人だけはあるのだが、引きずっている相手に対して、あえてまったく配慮しない歩き方であるとも言える。

村へ向かう間ギユランダムは、草やら枝やらに引っかかり放題だ。何度かはゴン、と鈍い音をたてていたが、クイシエは考え事をしていて、無意識にそれらの音を聞かなかったことにした。

（この女の子……が、違和感の正体？）

それは、今もじんわりと感じ続けている違和感が、この少女を中心としていることから間違いないだろう。ただし、どうしてそんな違和感を感じるのかはまったく理解できていない。

裸だったのだから、なんら魔術的なものを身につけているわけでもないし、外見も普通の人間として変わったところは見当たらず、気になると言えば髪の色くらいだった。

（真っ黒……に見えるんだけど……）

黒い髪というのは見たことも聞いたこともない。染めているのかでなければ“魔従士”かである可能性が高い。しかし、それにしては“使い魔”の姿が見当たらない。

あるいは外見が人間と完全に同じという、特殊な“獣人”なのかもしれないが……

違和感の正体がわからないのは、それが未知の存在だから　と
いう結論に達し、それだと結局なにも解決していない、と思い直す。
とはいえこの違和感、奇妙な感覚ではあるのだが、決して嫌な感
じはしていないので、それほど気にする事はないのかもしれない。
それよりもクイシエにはもう1つ気になっていることがあった。

（結界が壊れるとほぼ同時、なんの予兆もなくいきなり現れた違和
感の正体がこの女の子なのだとしたら……この子はいきなり山奥に
現れた、ってことになる……のかな）

そのときは半分寝かけていたため、ハッキリとは覚えていない。

（いや……違った）

ふと、感覚的に憶えていることを、体が思い出した。

（あのとき……この違和感はものすごい勢いで村を通り過ぎていつ
たんだ。そして山奥のほうで止まった……）

自分の感覚を信じるのなら、弓から放たれた矢よりも速い、恐ろ
しいスピードだった。そんな速度で長距離を移動する物体をクイシ
エは知らなかったし、ましてや人間にそんなことができるとは思え
ない。

（だから、女の子が先にあそこにいて、違和感が後からやってきて
この子に移った……結局違和感の正体がなんなのかはわからないけ
ど、そのほうがしっくりくる、かな……？）

ではこの子に違和感が移った原因は？
それにそもそもこの子が山奥にいた理由は？

（本人に聞いてみなければわからないこと……しかないかな）

聞いたところでわからないかもしれない、とは今は考えずに、思考を中断しかけた頃。

ちょうど村が見えてきた。

（あれ、そういえば……なにかを……忘れている気が……？）

先ほど、なにかが思考にひっかかっていたのだが、結局思い出せずに進むクイシエ。

そうして村の境界をまたいだ瞬間、薄い膜が弾けるように崩れる、そんなイメージがクイシエの感覚に伝わった。

「……あ」

作り直したばかりの結界が、壊れた。

設置にはまた4時間ほどかかるだろう。

6 話：黒髪の子サギと水晶髪の子シエ

ひどく荒唐無稽な夢を見た。でもまあ夢なのだから、荒唐無稽なのは仕方ない。

何故か全裸で、どこか暗い部屋で囲まれていたと思ったら、いつものまにか山奥を彷徨うことになり、女の子に助けられる夢。

不思議な光に満たされて、まるで天使のような女の子
夢分析とかしたらどうなるんだろう？

そんなことを思いながら、まぶた瞼を開く。

「……………」

そこは見慣れた部屋ではなかった。

「……………」

つねる。

「……………」

頬から手を離した。

「夢じゃなかったか……………」

みさぎ深鷺は夢だと思ったかった昨晚の記憶を反芻しながら、外の明かりから恐らく昼頃だと見当を付け、とりあえず服が着せられていることに安心した。

体を起こすと、めくれた毛布が部屋側に引っかかった。見れば、昨日助けてくれた女の子が、椅子に座りながらベッドに突っ伏している。

（うわあ……この子、ずっと見てくれたのかなー……）

自分を助けてくれた女の子に対する深鷺の評価は、夢の印象と同じく“天使”になった。2頭身ほどにデフォルメされた女の子が、ファンシーな後光を背景にくると舞い踊るイメージが脳内で展開される。

実際、まるで天使のような寝顔だった。長い睫毛^{まつげ}、白くて玉のような肌、形の良い唇、そしてなにより目を引くのはその髪だ。

まるで水晶のような透明感で光を反射している髪。果たして、こんな髪が現実存在するのだろうか。

「外人さん……ってレベルじゃないよねえ……」

どう見ても日本人には見えないし、昨日聞いた不思議な言葉は少なくとも英語ではなかったはず。

いったいここはどこなのだろうか、という疑問に対していくつかの答えが湧いてくるのを意識はしていたが　とりあえずは保留とした。それを1人で考え始めてしまうのはまだ早いと思ったのだ。それに、多分この子に聞けばすぐにわかることでもあるはずだと。

「ん……」

「あ」

起こしてしまっただろうか。今更遅いと思いつつも息を潜める、どころか、息を止めて様子を伺^{うかが}う深鷺。

ゆっくりと顔を上げた女の子は、深鷺と視線が合うなり急に固ま
ってしまった。

「……………」

「えっ……と……おはようございます?」

なにを言われたのかわからなかった深鷺は、とりあえず朝の挨拶
をしておいた。

（あれ? 昨日は言葉通じたのに……）

自分にはわからない言葉を聞いて不安が蘇^{よみがえ}る深鷺。まさかあそこ
だけ夢だったとかいうオチだったりして、とマイナス思考が滲み出
してくる。

女の子は体を起こすと寝ぼけ眼でぼんやりと深鷺の顔を見た。目
がハッキリしてくるとびっくりしたようで一瞬固まったが、すぐに
深鷺の手を両手で包むように掴んだ。

「! ? ?」

嬉しそうに、そして心配そうになにかを言ってくれていることは
表情からなんとなく伝わってくるのだが、言葉の意味がさっぱりわ
からない深鷺は困ってしまった。

「ごめん、なにをいつているのかわからない……」
「、、、、っ!」

女の子が身を乗り出し、両手の指を深鷺の頭に当てた。深鷺は昨
日の夜と同じように頭を抱きしめられてしまう。

「【】」

光が女の子を包み、深鷺へと伝わっていく。

「え、ええと、これで、わかるよね？ 言葉……」

「……おお！ わかる、わかるよ……！ ありがとうっ！」

女の子が身を離すと、深鷺の頭の中には聞いたこともない単語や文法、発音方法が存在していた。

とても不思議な現象だったが、それを気にするよりも、あっさりと不安を解消してくれた女の子へ、嬉しさと感謝の印として抱きしめ返す深鷺。

「あ、え、うん、そんな、たいしたことじゃ……」

少しの間ぎゅっとしていた深鷺が感謝の気持ちを伝え終わると、女の子は顔を赤くしてそっぽを向いていた。

（あ、なんかかわいい）

そこで、くううつ、と深鷺のおなかから音が聞こえた。

「あー……」

（今昼時だったらー……えーと、半日以上なにも食べてないのか。そりゃ鳴るよ、うん……昨日は真っ暗闇の山の中をあんなに歩き回ったんだから、おなかくらい鳴るさ！）

自分への言い訳を瞬時に済ませた深鷺。安心したらおなか为空いた、というのもあったのだろう。

一方、空腹を察知したらしい女の子はすぐさま立ち上がった。

「あ、おなか、空いてるよね。と、とりあえず、ご飯食べようかつ作ってくるねっ?」

顔を合わせないまま部屋を出て行った女の子の背中を「あ、うん、ありがとう?」と見送る深鷺。

（ああー……聞きたいこととかあったんだけど……ていうかまだ名前も聞いてないよ……わたしの胃袋め……）

鳴ってしまったものは仕方ない。おなか为空いているとどうにも思考がマイナスに傾くことを自覚している深鷺は、お言葉に甘えて食事待つことにした。

（とりあえず……起きよっか）

ベッドから降りようと足を床に降ろす。

「……………あれ?」

足首を捻っていたことをすっかり忘れていたのだが、痛みを感じない。

恐る恐る足首を持ち上げ、手でゆっくりと曲げてみるも全然痛くない。そして自分の足を見ていて、おかしな点に気が付く。

（裸足であれだけ山を歩き回ったのに、傷1つないー……なんで?）

汚れないというのは、まだわかる。誰かが拭いてくれたのだろう（さっきの子だろうか?）。しかし怪我がないというのはどうい

うことだろうか。

昨晩は小石を踏んづけたり、体中を枝に引っ掛けたりと、かなり痛い目を見ていた。途中から面倒になって怪我の具合も確認していなかったが、両足は傷だらけになっていたはずだ。

足だけではない。よく見てみれば両手も、体中見える範囲のどこにも、傷らしい傷がない。

そこら中がひっかき傷だらけになっているだろうと思っていた深鷺は、拍子抜けした。腑に落ちず、首をかしげる。

「うーん？」

昨日のことはやっぱり夢だったのだろうか。
唸りながら考えてみても答えは出てこない。

夢を見ていた。

夢にまで見た夢が現実になる、そんな夢。

友達と手を繋いで歩いたり、なんでもない話で笑い合ったり、魔術の研究をしたり、同じベッドで眠ったり、急に飛躍して巨大な怪物と戦ったり、とにかく、一緒にいる夢。

夢だと気が付けば悲しくなってしまういつもの夢でも、今日は違う。

だって、もしかしたら、昨日逢った女の子が友達になってくれるかもしれないから

「」

声が聞こえたのでゆっくりと顔を上げると、黒髪の少女と目があった。

「おはようございます……」

条件反射で挨拶をして、どうして目の前に夢に出てきた子がいるんだろうと考える。クイシエの頭はまだ夢と現実の境目を彷徨^{さまよ}っていた。

（……あ、そっか！）

どうして自分がベッドに突っ伏しているのかを思い出し、じわじわと目が冴えていく。

「よかった！ 大丈夫？ 調子悪いところとかない？」

健康そうに見えるものの、心配するのを止められず確認するクイシエだったが、黒髪の少女は困惑した顔で答えた。

「

……」

「あ、ご、ごめんねっ！」

（言葉、通じないんだっただ！）

不安そうな顔を見て慌てて身を乗り出すクイシエ。昨夜のように頭を抱きしめると、魔導術を発動させる。

クイシエの身に魔光が灯り、黒髪の少女へと伝わってゆく。

「
フレンズチャット
【言語移植】」

少女の戸惑う声を聞きながら施術を終え、少女の頭を解放すると、クイシエは言葉が通じることを確認した。

「え、ええと、これで、わかるよね？ 言葉……」

「……おお！ わかる、わかるよ……！ ありがとう！」

嬉しそうにしてくれている黒髪の少女を見てクイシエも嬉しくなったが、逆に抱きしめられてしまったことでクイシエは固まった。

「あ、え、うん、そんな、たいしたことじゃ……」

誰かに抱きしめられる（セクハラはノーカウント）のなんて何年ぶりだろうか。

慌てるクイシエ。

抱きしめ返せばいいのだろうか、と、どうすべきかわからずに両手がホルドアップされた人のように浮いていた。

そうこうしているうちに少女が離れる。

少し名残惜しそうな顔をしたかもしれないと、クイシエは慌ててそっぽを向く。

そこで、くううつ、と音が聞こえた。

「あー……」

「あ、おなか、空いてるよね。と、とりあえず、ご飯食べようかつ。作ってくるねっ？」

部屋を飛び出てバタバタと台所へ向かい、さっそく調理を始めた。鍋に魔導書から魔力を通し、加熱する。

心臓がドキドキしていることを誤魔化すように手を動かす。
適当な野菜をザクザク切っては鍋に投下していく。

（抱きつかれちゃった……っていうか先にわたしが抱きしめちゃって……でもあれはああしないと危ないからで、仕方ないし………あ、そういえば名前も聞いてない……）

深夜に村へと帰還したクイシエは、村の女性医師に黒髪の少女のことを任せると、結界の張り直し作業に取りかかった。

本来指示を飛ばすべきギョランダムが抜けている分、作業速度は遅れてしまう。かといって見た目ボロ雑巾のようになってしまったいた師匠を叩き起こしてまで手伝わせるのも酷こかと思い、そのまま続行した。

全ての作業を終えた頃には、日が昇ってしまっていた。

クイシエは作業している間もずっと、保護した少女のことを考えていた。初めて目にしたときの怯えた姿や、離れると不安そうにしていた寝顔を思い出す。

保護欲に突き動かされたクイシエは、結界を設置し終わるなり自宅へ戻り、少女を運び込んでもらった部屋へと向かった。

少女のことを任せていた女性医師は、体が冷え切っていたこと以外は特に問題ない、と言っていた。ベッドを覗いてみると、そこには予想に反して安らかな寝顔があり、それを少しだけ残念に思いながらもクイシエは安心する。

女性医師からは自室に戻って寝るよう薦められたが、クイシエはその場を離れなかった。

なんとなく、少女の隣にいてあげた方がいいと思ったのだ。

そのときの自分と、思考が重なる。

（言葉も通じないほど遠いところで一人きりだなんて、きつと心細

い)

鍋からスープをよそう手が止まった。

村から出たことすらほとんどない自分には想像も付かないが、自分なら寂しさだけで死んでしまうのではないだろうか。

(ましてや裸で暗い山奥にいるなんて……！)

そこで思い出した(“そこ”で思い出してしまうのはとても嫌だったが、思い出してしまったものは仕方ない)。

(お師匠様……は、もう気が付いたかな)

結局、ギュランダムは結界の張り直し中に起きて来ることはなかった。

よく考えてみると、完全に自業自得で気絶した挙げ句、わたしは眠い中夜通し作業していたのだから、引きずられてたんこぶだらけになったくらい当然の報いなのではないか　　なんてことが思い浮かんでしまうが、クイシエはすぐに手を振ってその考えを散らした。

　　どんな事情であれ、お師匠様なら少女の力になれるだろう。

と、クイシエは考える。自身もできる限りのことをするつもりだった。

(わたしが守ってあげる。一緒にいてあげる。そうしたら)

それが自分の都合、願望からのものであることに、後ろめたさを感じつつ。

（そうしたら、友達になってくれるかなー……………）

#7話：食卓の元氣

クイシエ・クアラには両親がいない。そのクアラという苗字は、彼女がこの村に連れられてきたとき、村人の皆で決めた家名だ。

クアラ村の子供はクイシエだけ。あとは大人ばかりが住み、そしてほぼ全員が魔術関係の研究者である。

中には夫婦もいるが、子供を持つ家はなかった。クイシエと同世代の村人はいないし、クイシエより小さい子もない。

普通の村であれば、次の世代がない状態が続けばいずれ村から人がいなくなるということもあるだろうが、この村は特殊な実験村であるため、そのこと自体は問題ではなかった。

村人たちは皆、クイシエの家族であろうと親のような気持ちで接しており、小さい頃から同世代の遊び相手がないクイシエは、自然と村人たちの研究を手伝うようになっていった。その才能を見出されてからは、ギョランダムに魔導術を教わるようになった。

急がしくも充実した日々を送っているクイシエに不満はなかったが、『友達』と呼べるような間柄の相手はいないままに15年生きてきたクイシエは、絵物語でしか見た事がない『友達』ということものに憧れを抱いていた。

元の性格的なものもあるのか、かなり夢見がちに拡張されていったクイシエの友人像は、深鷲みさぎとの印象的な出会いにより具体性を帯びつつある。

クイシエは大変な事情を抱えていそうな深鷲に対して、不謹慎と思いながらも、緊張と期待が止められないでいた。

そんなクイシエが、昼食をテーブルに並べていると、彼女にとつての初めての『友達』が現れた。
ただし人間の、ではない。

「あ、キーちゃん！ おはよう！」

足下を見ながら挨拶をするクイシエ。

「おなか为空いてきたの？」
「チウ！」

エプロンを駆け上がり肩に乗ったネズミが、我が意を得たりといった風に返事を返した。

キラキラと輝くネズミの毛は、クイシエの髪と同じ水晶色だ。
クイシエはキーちゃんと呼ばれたネズミの分を専用の小さな皿によそつと、なんの魔導式も使用せずに、ただ自分の魔力を流し込んだ。

それを美味しそうに舐め始めたキーの姿を楽しそうに眺めていると、

「いいにおいー……」

黒髪がひよっこりと、扉から覗き込んでいた。

「あつ……ご、ごはんできたよ。食べる、よね？」
「食べる！」

湯気立つ食卓に目を奪われている深鷺。

2人は席に着き、クイシエは目を閉じ両手の指を組んだ。

「今日の巡りに感謝します」

「……今日の巡りに感謝します」

（食前のお祈り……かな？）

見よう見まねで深鷺も祈りを捧げ、そのまま手を開いて合わせると、いつもの習慣で挨拶をする。

「いただきまーす」

「？」

クイシエも深鷺の言葉を一瞬不思議に思ったものの、深鷺同様お祈りなのだろうと納得した。

ぱくぱくと昼食を味わい始める深鷺を、クイシエは何故か緊張した面持ちで見ている。

（えーと、えーと、なにか、話題……！）

「……お、おいしい？」

「とっても美味しいよ！ 五臓六腑に染み渡る感じ！ ありがとう

！……えーと……」

（あ、あ、名前だっ！）

「あ、わ、わたしはクイシエ。クイシエ・クアラってい、いいます
っ」

「クイシエちゃん、クイシエちゃんかー……」

あせってつかえている姿をみて、やっぱりかわいいなあと思いながら、深鷺は天使の名前欄にクイシエの文字を刻み込んだ。

名前を連呼されてクイシエは戸惑っている。

「わたしはミサギ。コハラ・ミサギです。……ん？ ミサギ・コハラ、のほうがいいのかな」

「ええと、コハラが家名、でいいんだよね？」

「うん、わたしの国では苗字が先で、名前が後なの」

カチャ、と。

深鷲は突然食器を置くと、両手を膝に置いて頭を下げた。

「クイシエちゃん、どうもありがとうっ！」

「……えっ、はいっ？」

唐突に頭を下げられてしまい、戸惑うクイシエ。頭を上げた深鷲は、感謝の理由を述べてゆく。

「昨日の夜助けてくれたし、言葉は通じるようにしてくれるし、さつきも寝てる姿を見てテンシじゃないかと思ったよっ。美味しいごはんもね！ 本当にありがとう！」

「あ、えっ、テンシ？ その、いや、そんなに感謝されるほどじゃ……」

「だって、あのまま凍え死ぬか、クマの餌になるんじゃないかって気が気じゃなかったんだから……」

「だ、大丈夫だよ。このあたりにクマはいないから……」

「じゃあオオカミの餌になるよ！」

餌になりたいのか？ と突っ込むものもおらず。

「あ、あの、えっと、ご飯が冷めちゃうよ？」

「あっごめんね、食べる……はうー……あつたかーいきかえるー」

勢いに負けそうになったクイシエは、とりあえず逃げを打った。話を逸らしはしたものの、幸せそうに食べる姿は調理した側としては嬉しく思う。野菜を煮ただけの至極簡単な料理なのだが。

（あしたは、ちゃんとしたものを作ろう……）

喜んでくれるだろう姿を今から想像しながら、クイシエは深鷲のことを考える。

とにかく、とても元気な女の子だ。最初に見たときの怯えていてわからなかった……というか、あんな状況から一晚経っただけこんな元氣一杯というのが信じられない。事情がさっぱりわかっていないというのもあるが、いきなり言葉も通じないところへ来て、物怖じすることもなく楽しそうに食事している姿は、まるで自分とは正反対なのではないだろうか。

クイシエは眩しいものでも見るように、深鷲を見つめる。

（……関係ない。正反対でも）

友達になりたい。

やっと訪れたチャンスなのだから。

「あの、ミ……」

名前を呼ぶだけのことに、勇気を振り絞るクイシエ。

「ミ、ミサギちゃん、ミサギちゃんって呼んでもいい？」

「ん？ もちろん！」

快諾してくれるのではと思っていたが、実際にその通りで安心

したクイシエ。空になっている手元の皿をみて、もう一言追加。

「ミサギちゃん。よかったら、おかわりあるよ……？」

「おかわり！ いただきますっ！」

たったそれだけの会話で、クイシエはだいぶ幸せになっていた。

（ミサギちゃん、ミサギちゃん、ミサギちゃんかあ……）

万が一にも忘れてたり間違えないように、頭の中で何度も呼びなます。

「あれ？ クイシエちゃんは食べないの？」

「あ、うつん、食べるよっ」

食べ終わるまでの少しの間、料理についての話題で軽く盛り上がる。2人は楽しい昼食を過ごした。

しかし朝食が終わり、食器を片付けた後。

「ごめんね……」

「ええっ？ ……あの、ええと、どうしたの？ 急に……」

何故か謝られているクイシエ。

「や、なんだかテンション高くなって、変なこと言って、いきなりテンシとか……いや、テンシだって思ってるのは本当んだけど、ちよつと落ち着くべきだったというか、恩人に遠慮もなくおかわりとか、なんか、失礼だったかなってというか、わけわかんなかったんじゃないかなって……」

どういつ理屈でか深鷺の頭に入っているこの世界の言語知識には『天使』に相当する単語がなかったため、深鷺はそこだけを日本語で喋っていた。つまり、相手には通じてないと気が付いたのだ。

「う、ううん？ 全然失礼なんかじゃなかったよ！？ 大丈夫！ 安心して！」

（たしかによくわからなかったけど、褒めてくれてたのはわかるから……）

「大丈夫！ えと、ほら、残さず食べてくれるのは嬉しいことだし、今年は豊作だったから食料にも余裕があるし、あとね、ええと……ほめてくれた、のも嬉しかったし、だから、安心して！」

急に萎れてしまった深鷺を必死に元気づけようとするクイシエ。
あんまり必死にフォローしてくれるクイシエを見て逆に申し訳なくなってしまう、更に謝ってしまう深鷺。

「あ、うん……ごめんね、ありがとう」

「大丈夫！」

「……」

「……」

「……」

沈黙してしまう2人。

（……こういつときはどうしたら良いんだろう）

クイシエはとりあえず話題を変えることにした。というか、多分そっちが本来、本題であるはずだと思い出す。

「あ、あの、ミサギちゃん。色々聞きたいことがあるんだけど……ミサギちゃんも聞きたいこととか、あるよね？ なんでも答えるから、遠慮無く聞いて？」

「あ……うん。そうだ、聞きたいことだらけなんだった！」

深鷺はとりあえずおなかになにか入れて（主に自分が）落ち着いてからの方が良いと思い今まで抑えてきた疑問の数々が、溢れ出し決壊しそうになっている事に気が付いた。

一方、クイシエは少しでも勢いが戻ったことに安心していた。付いていくのが大変だったが、多分この勢いが深鷺の性格なんだろうと思いつながら。

#8話：ここは知らない世界

（肩に乗ってる不思議なネズミを見た時点で、覚悟はしてたけど…）

話を始めた直後にクイシェへ飛び乗ってきたネズミは、どう見ても地球には存在しないだろう生き物だった。茶色でも灰色でもなく、クイシェの髪と同じ水晶色の毛が体を覆っている。そんなファンタジーな生き物が普通に実在していたとして、現代ネット社会で暮らしていた自分がその動画も静止画も見ることがないというのは、きつとありえない。

それをいえばクイシェの髪がすでにありえないものののだが、そこはもしかするとウィッグかもしれない、と思っていた。

（あ、じゃあこのネズミも品種改良で作れたのかも？ …… ってまあ、それは現実逃避だよなー）

2人の話はいまのところ、深鷲みいづからの質問にクイシェが答える形となっている。

この世界の名は“地球”ではなく“プルセアリス”というらしい。それも星の名前ではなく大陸の名前だという。

いま自分があるこの場所が、どこか地球ではないところ、異世界なのではないかという発想は、寝起きの時点でも頭をよぎっていた。

昨晚の夢かと思うような出来事のことを考えれば、そんな可能性

にだって思い至る。

アニメやゲーム、小説やマンガなどに触れているのなら、誰しも1度くらいは見かけるであろうシチュエーションだ。そういった場合、案内人がいてくれても良さそうなものなのだ。

異世界からきた勇者。まさか自分がそういったものになれると本気で考える人はいないだろうが、本気で願う人ならいるのかもしれない、空想。

小さな子供がヒーローに憧れたりお姫様になりたいと願うようなものも含めれば、殆どの人が経験者だろう。

とりあえず実際に異世界らしき所へ飛ばされてみて深鷲が思ったのは、叶えて欲しい願いは“異世界に来ること”ではなく“勇者になれること”の方なんだろう、という些細な答え合わせだった。

（それも人それぞれなんだろうけど……それとも、わたしにもなにか特別な力が芽生えてたりするのかなー？）

もうそろそろ確定で良いだろうと、深鷲は諦めの心を溜息に乘せて、認めた。現実を見よう。

（ここは異世界で、わたしはなぜか……ハダカで飛ばされてきたというわけかー……）

となると、あの真つ暗な部屋が『召喚』の儀式場だったのだろうか。そして衣類と一緒に召喚できなかったものなのだろうか。

召喚だったのだとしても、山奥に放置されるあたり自分は勇者役でもお姫様役でもなさそうだなー……

と、それらの思考も含めて現実逃避気味の深鷲。クイシ

エは深い溜息を吐いた深鷺を、心配そうに見ている。

「あの……ミサギちゃん、大丈夫？」

「あ……うん、ごめん、ちょっと考え込んだ」

クイシエは結界が壊れてしまったことと、自分の変態師匠のことはとりあえず伏せていた。結界の方は自分のせいかもしれないと感じてまた落ち込んでしまうのでは、という配慮からだが、ギュランダムの事は単純にどう説明していいのかわからないため

否、昨晚の件をどう取り繕えばいいのかわからないためだ。

深鷺のほうも憶えていないのか気にしていないのか、あるいは無意識に避けたのか、絶叫した老人のことには触れずにいてくれる。

深鷺はなぜ自分が山奥にいたのかをだめもとで聞いてみたが、むしろクイシエが知りたいことであろうというのは深鷺にもなんとなくわかっていた。予想どおりお互いにわからないと、結論が出た。

（それにしても……）

自身にはわからない質問であっても、わからないなりに必死に答えようとしてくれているクイシエ。深鷺は、この子はどうして見ず知らずの自分にこんなに親身になってくれるのだろうか、と思っていた。

クイシエは、この村が大陸東方寄りの山脈の麓にあること。自分が持つ不思議な感覚が捉えた、よくわからない違和感を探していたら深鷺を発見したことなどを説明する。

それを聞いた深鷺はまたしても若干テンションを上げて感謝の言

葉を投げかけた。恥じらいながら困り顔で深鷺の目が見れないクイシエは自分の功績を謙遜、というか否定するような勢いで受け答えしている。

（やっぱり、天使？）

深鷺がイメージとして天使を選んだのはそのときのインスピレーションから来たノリ、半分悪ふざけに近い感覚ではあるが、評価としてはまさにその通りの好感度を持っている。

異世界に飛ばされ、怪しい集団に囲まれ、山奥に放り出された深鷺を、不思議な感覚で見つけ出し、保護してくれて、しかも言葉を通じるようにしてくれたのは、自分とさほど年齢も変わらないであろう女の子だった。

クイシエは、深鷺が見つめているせいで少し困ったような笑顔になっている。

「あ、そうだ！　今、どうして言葉が通じてるのが知りたい！」

おそらくこれならハッキリと理由がわかるだろうと、深鷺は身を乗り出してクイシエに質問する。

深鷺の中のファンタジーを愛する心が、自分の置かれている状況を忘れるほどに期待を膨らませていた。眼をキラキラと輝かせているその姿に怯みながらも、クイシエはなんでもない事のように答えた。

「あ、それは、その、わたしがそういう魔導術を使っただから……」「魔導術！？　ほんとうに魔法がつかえるんだ！？　うわー、すごい！！　まほうつかいだっ！」

テーブルに身を乗り出している深鷺を見上げるように見ながら、

なんだか喜んでくれている事を純粹に嬉しいと感じるクイシエ。

「うん、わたしは魔導師だから。見たことない？ 魔導術」

「わたしの住んだところじゃ魔術って言ったら手品か、多分インチキだったし、まほうつかいなんて1人もいなかったんだよ」

わたしの住んでた世界、ではなく、わたしの住んでたところ、という深鷲。とりあえず、自分が異世界の存在であるということはまだ説明していない。

「それは……随分遠いところから来たみたいだね……」

術者がまったくいない地域、なんてものはクイシエが知る限りかなり限られている。大陸西方に術者の少ない国があるという話は聞いているが、そういった国の、たとえばこの村のような辺鄙な山奥で育ったのだとしたら、もしかするとそういうこともあるのかもしれない、などと考えながら、クイシエは術の説明を始めた。

「ミサギちゃんに使ったのは【言語移植】フレンズチャットっていうんだけど、この魔導術はわたしの言語能力を相手に貸すことができるの」

「ふんふん」

「魔導式は7冊489頁で、消費魔力が……あ、こんな事言われてもわからないよね、ごめんなさいっ」

「ぜんぜんいいよ？ なんかかつこよさげ！」

専門的なことを省いた説明が続けられる。

術を掛ける相手が術を受け入れていなければ失敗してしまうこと。頭部に指を触れる必要があるのだが、術中に離してしまうと危険なので抱きしめるなどして固定しなければならぬこと。

「だから、その、昨日もさっきも、抱きしめたのは、そういうことなの」

「そうなんだー」

もじもじとしながら下を向いているクイシエ。

（あー……なんか、凄く照れ屋さんなのかなー）

深鷺はすこしニヤニヤとしている。

「あと、術の効果時間は2時間くらいしかないの」

「（にやにや）……………え？」

深鷺はその効果時間の短さに笑顔のまま凍り付く。

（お、思ったよりすごく短い……）

フレンズチャット

昨日、最初に【言語移植】を使ってくれたときが夜中の何時頃だったかはわからないが、昼に起きたときに効果が切れていた、その時間目一杯、半日くらいは効果があるものと、深鷺は期待していたのだ。

昨日、言葉が通じなかった不安。そして言葉が通じたと共に、大丈夫だと言われた時の安心感の差は深鷺の心に擦り込まれ、トラウマのようになっていた。

今朝、再び言葉が通じなかったときの不安感が蘇^{よみがえ}ってきた。

深鷺がショックを受けている事に慌てるクイシエ。

「う、ごめんね！ 消費魔力は固定式だから、これ以上に以下にもできないの。すぐに効果が切れちゃうけど、ちゃんとかけ直すから……」

「あ、ううん！ ごめんね、すつごくありがたいの……」
「うん……まだ、改良の余地はあるんだけど……」

気を使わしてしまった。顔に出すぎかな、と反省する深鷺。
同時に、ちょっと思いついたことがあるので聞いてみる。

「あ、あのさ……それって、わたしにも使えないかな？」

これを自分で使うことができれば、とりあえず話したい相手に自分の言語能力を与えることで、その人とだけは会話が成り立つことになる。

最初に術の行使を受け入れて貰えるかどうかが問題だが、それさえ乗り越えればあとはその人に通訳を頼み、他の人ともコミュニケーションが取れると考えたのだ。

それに、そうでなくとも魔導術というものを扱ってみたい、と思う深鷺だった。

しかしその考えは突如聞こえた別の声に否定されてしまう。

「あー……それは恐らく無理じゃろうなあ」

台詞と共に扉が開く。そこには白髭の老人、ギュランダムがいた。

#9話：魔導術【言語移植（フレンズチャット）】について

「お、お師匠様、いたんですか!？」

「いたんですかとは随分じゃのう……いや、でも儂、なんでここに
いるんじゃない？」

ギュランダムは深鷲^{みさぎ}が寝かされていた部屋の隣室に運ばれていたらしい。首の調子が悪いのか、手をあててゴキゴキと音を鳴らしている。

ハツとなつて深鷲を見るクイシエ。昨日の変態老人がいきなり現れたとなれば怯えてしまふかもしれないと心配したのだが特に変わった反応は見受けられない。

（……もしかして暗くて見えてなかったのかな）

よく考えると、あの時点では【言語移植^{フレンズチャット}】は使われていなかった
ので、言葉の内容は伝わっていないのだ。

なので、もしかするとそんなに悪い印象を持っていないかもしれない。
ない。それどころか、そもそも記憶にないのではないだろうか。

クイシエは胸をなで下ろした。

「クイシエちゃんのお師匠さま? ……初めまして! お世話にな
ってます! ミサギ・コハラといいます!」

「……………ほっほ、元気がいいのう。儂はギュランダム・コー
ルという、いかにもこのクイシエの師匠じゃ。もっとも、クイシエ
は先日弟子を卒業したところなんじゃがの」

挨拶をしながら、ギョランダムもクイシエと同じ事を考えていた。ちょうど脊髄反射でしかした「ひゃっほう」発言が、さすがに不味かったかと反省し始めていたところだったのだ。

さっそくそういった話題に話が飛ばないよう、クイシエへの牽制けんせいも含めて会話を進めることにした。

「それで【言語移植】の修得じゃが……………おぬしは魔導術の存在自体を知らなかったんじやろう？ 特別な才能でもあれば別じゃが、そう簡単に使えるようにはならん。時間をかけて魔導術を憶えていくこと自体は可能じやろうが、【言語移植】を使うのは……………絶対に無理、とまでは言わんが至難の業じゃ。なにせ僕も使えんからのう……………」

「そうなんだ…………？ クイシエちゃん、お師匠さんより凄いなだね……………」

「あ、そんな、それは……………」

クイシエは両手を胸の前で振りながら否定する。

「ああクイシエ、おぬしが謙遜けんそんを始めるとキリがないわい。おぬしは大抵の人が認める天才なんじやから、もうすこし堂々とせい」

おおー、と尊敬の目を向けてくる深鷲の視線から自分の目を隠すように俯いてしまうクイシエ。深鷲は8割本音、2割はからかう意味で眼をキラキラとさせていた。

クイシエは落ち着かなそうにしている。

（かーわいー）

「さて、ここは師匠らしく僕が説明してやろう。魔術にはいくつか種類があるのじゃが、魔導術というのは……………」

ギョランダムは懐から薄い手帳のようなものを取り出すと、内容をめくって見せた。

「簡単に言えば、こんな図形を思い浮かべて魔力を流し発動させる術じゃ」

かなり簡略化された説明だが、おかげで深鷲はイメージを掴むことができた。

「呪文とかはないんですね？」

「ほう、呪文なんて言葉をよく知っておるのう？ いや、それもクイシェの言語知識か？ 魔導術に呪文はいらんよ」

そういつて、深鷲に手帳を差し出すギョランダム。

「さて、この手帳はかなり初歩的な魔導式が描かれている魔道書じゃ。これ1冊で1つの術を発動させることができる。この内容、憶えられるかの？」

手帳は右からめくるようだ。表紙の文字は左から右に読める。右頁には円が描かれていて、その円の内外には幾本かの線が引いてあり、その線に被るようにいくつかの点が打たれている。

線と点で構成されるその図を見て深鷲は電車の路線図を連想した。線が路線で、点が駅である。あるいは、コンピューターの基板のよな感じ。

左頁には点だけが打たれており、どうやら裏面の点と対応した位置に打たれているようだった。

（わたし的にはゲームとかでよく見る『魔法陣』って感じに見える

けど、これが魔導式なんだ……？)

手渡された手帳には数ページにわたり、似ているようでそれぞれ違う図形が書き込まれていた。これを丸暗記しなければならぬという。

「んー……これくらいなら憶えられると思う……けど、あれ？ もしかして……」

先ほどクイシェが言っていたことを思い出す深鷲。

「そういう事じゃ。さっきクイシェが言いかけたのを聞いたじゃろう。7冊489頁。最低限、こんな図形を489枚繋げてイメージできなければ、あの術は使えんのじゃよ。しかもこの手帳よりも遥かに複雑な図形じゃ」

実際はそれを更に7つに分け、更にそれらへと個別に魔力を流す技量も必要となる超高等技術である。

「暗記は苦手ってほどでもないけど……さすがにそれはちょっとムリかな……」

「そうじゃろうなあ。本当に必須であればムリでも憶えなければならぬと思うが……それなら僕は普通に1から言葉を覚えることを薦めるのう」

深鷲も同感だった。自分の言語能力を移植する術である【言語移植】は、深鷲が自分で使用する分には『1人の通訳を用意できる術』でしかないのだ。しかも相手に術を受け入れて貰える程度には親しかなければ使用すらできない。

どちらも苦勞するなら言葉を1から覚えた方がマシに思えた。

（英語の授業、苦手だったんだけど……大丈夫かなあ……）

先行きは暗く思える。

そこで、試しにこの魔導式を憶えてみようと思手帳の内容をばらばらとめくっていると急に、ストン、と理解が降ってきた。

「……あれ？ あのー、なんかこの図の意味？ みたいなものが、なんとなくわかったんですけど」

「どういう意味じゃ？」

「えーと、なんというか、読めるんです。内容は『長く灯る・小さき光・付き従い漂う・浮き虫』とか、そんな感じ……ですか？」

「うむ、内容はそれで合っており。それが読めるのもクイシエの【言語移植】の効果じゃろう。魔導式は一応、言語であるかのように内容を把握することはできるからのう」

深鷺が手帳の表紙を見てみると表題らしき所に【浮灯虫】、隅には著者名だろうが、『ランペスター』と書かれていた。他にも数字がいくつか書かれているが、それらの意味はわからない。

「はー……ていうか、ほんとに凄いなだね、クイシエちゃん。あんな図形が読めて、しかも489頁も丸暗記……してるんだよね？」
「……ち、違うの。あれは、もともとこの子と、お話がしたくて考えたもので……」

大人しく肩に乗っている不思議な水晶色のネズミを示しすクイシエ。

「なにが違うんじゃクイシエ。もはや謙遜というより自慢になってるぞ……」

「……え、なに、じゃあその【言語移植】ってクイシェちゃんが作ったの？」

「そうじゃ。これはクイシェのオリジナルじゃ。自分で作ったからこそ膨大な術式でも憶えておる……にしても、そう簡単に憶えられるような量ではないがの。ともかく使えないというのはそういう事じゃ。ちなみにこやつは妙に謙遜癖があるから先に言っておくが、こんな術を作れる者も使える者も、憶えていられる者もそうはおらんよ。この娘は天才じゃ」

なぜか、なかなか認めたがらんのう……と、呆れるような溜息を吐くギユランダム。

「で、でで、でもお師匠様！ ほら、あの、魔道書の方を使えば、わたし以外にも使えますよっ！」

「この村に五指魔道書を扱えるレベルの術者があと3人ほどいれば可能者じゃが」

「あう……」

魔導術を扱うには2つの方法がある。

1つは術者が体内で魔導式をイメージし、そこに魔力を流すやり方。

もう1つは、書物などに記してある魔導式に魔力を流すやり方だ。前者は既に魔力が流れている体内で術を行う為、魔力を流すことに關してはさほど難しくない。その代わり、魔導式をイメージする為の記憶力などが求められる。

後者であれば魔導式の暗記やそれをイメージする力が不要となるが、今度は指先から魔力を流し込む技術が求められる。しかも1人の人間が流し込める魔力の注ぎ口は基本的に指の本数＝10が限界となる。

それ以上の本数が必要になると1人では実行不可能。そして【言

語移植】に必要な指の数は全体で15本だった。しかも魔道書自体が7冊にわかれていたので手分けしなければならず、最低4名の魔導師が必要となる。

このあたりの事情は説明されていない深鷺にはさっぱりだったが、今説明されてもわかる気がしなかったので疑問点は心にしまっておいた。

「……まあ、つまりじゃ。ミサギとやら。もしこの村にいるつもりならクイシエの世話になると良いじゃろう」

「え？」

「いいの？ クイシエちゃん……」

「クイシエは不服かの？」

「ぜ、ぜんぜん！ 大歓迎です！」

友達になれるチャンスが増えるなら 友達になれるなら、一生いてくれても良いくらいだと、クイシエは舞い上がった気持ちで諫める気すら起こらなかった。

「わたしは正直すつごく有り難いけど、いいのかな？ 助けて貰った上に甘えてばかりになっちゃう」

「クイシエがいなければ言葉がわからんのじゃから、それ以外に方法はなかるうて。心苦しいというなら心配要らんよ、労働力はいくらあっても困らんからのう……さて、とりあえずはこれくらいで良いかね。そろそろミサギの方の事情に関して、詳しい話を聞きたいのじゃが」

#10話：異世界と異世界

最初、ギュランダムもクイシェも深鷲^{みさぎ}がなにを言っているのかよくわからなかった。

「異世界から来た……？」

プルセアリスではない世界。違う大陸ではなく、違う“世界”だ。深鷲はそれを「陸や海や空では繋がっていない、別のところにある世界」などと表現してみた。

そしてその異なる世界から、何故かこの世界へ飛ばされたのだらう、と。

深鷲は自分でも理由がわからないこの移動現象の説明に苦労した。深鷲は「魔術があるのだから悪魔や精霊を“召喚”する術もあるのだらう」と思っていたのだが、ギュランダムとクイシェが知る限り、この世界にはそういった召喚を行う術の類は知られていないらしいのだ。

それは深鷲がどうやってこの世界に呼び出されたのかを知る手がかりが少ない事をしており、深鷲の気分は落ち込んだ。

しかし、とりあえずはなんとか2人に異世界の事とそこから自分が飛ばされてきたということを、信じるかは別として納得はして貰えた。

そうして説明していることからわかるように、深鷲の方はもはやここが異世界であると確信している。【言語移植】の他にも先ほ

どの手帳サイズの魔導書に記されていた【浮灯虫】など、小さな術を色々と見せて貰った。

そんな技術が一般に広まっている地域が地球にあるわけがない、と深鷲は判断したのだ。

だがこの世界の住人の方はどうだろうか。自分1人が異世界だと言って簡単に信じて貰えるとは思わなかった深鷲はそれをどうにか証明しようと思った。しかし、簡単に照明できるものは思いつかなかった。

せめてなにか文明の違いを見せられるもの、たとえば携帯電話などの電子機器、あるいは服一着でも身に纏っていればそれだけで技術の差を見せることができたかも知れなかったのだが、なにせ深鷲は、着の身着のままどころではなく全裸でやってきたのだ。明確に文明の差を感じさせる物品はなにも提示できない。

だが、まずはそれを信じて貰えないとどうやって帰ればいいのかという話に進むこともできない。

そこで深鷲は、自分の世界を示す事柄を国名や言葉、文化、歴史、文明、と思いつく限り2人に話して聞かせた。

言葉であれば、鍋、テーブル、本、クイシエ、髪の毛、ギョランダム、髭、などを指し、それを日本語で発声する。【言語移植^{フレンズチャット}】の効果中は、意識しなければ術者の言語能力の方を無意識に選んで会話をするようになっていたが、日本語で喋るように意識することで日本語での会話も可能だった。

筆記用具を用意してもらい、文字も書いた。慣れない羽根ペンでひらがな、カタカナ、漢字、Englishなどを、思いつく限り書き出してゆく。

「確かに聞いたこともない言葉で、見たこともない文字じゃ。僕は昔、大陸中を旅したこともあるが、こんな文字はまったく記憶にないの……」

深鷲の説明を聞いたギュランダムとクイシエは戸惑いを隠せずにいた。

いったいどんな事情であんな山奥に隠れていたのかと、2人とも色々な可能性は考えていたが、いざ問いかけてみれば自分たちの理解を超えた内容だったのだ。

深鷲は、夕暮れどきに学校から自宅への帰路を歩いていて、気が付いたときには暗闇の中で座り込んでいたという。

そこが山の洞穴なのかと聞けば、どうやら違うらしい。

暗闇の中では柱に囲まれ、目の前に小さなデントウなるものらしき棒が立っていた。そのデントウとは明かりを灯す道具らしかった（つまり電灯だ）。

実際は杖だったのだが、深鷲は先端が光っていたためにそれを照明器具だと認識していた。図で説明することで、ギュランダムはそれが杖らしい事に気が付き、指摘する。

「……言われてみれば杖でした」

ファンタジーな世界だという事をもつと念頭に置くべきだ、と深鷲は反省した。

その場には、暗くてハッキリと見えただけではないが、かなりの人数が隠れてこちらを見ていたらしく、そして自分はいつのまにか裸だった。そこで怖くなり悲鳴をあげた。そして気が付いたら山奥にいたのだという。

時刻は日が落ちる直前で、それはクイシエの超感覚が違和感を捉えたとき、結界が破壊された時刻と一致した。

深鷲は山奥を人里求めてさまよい歩き、坂を滑り落ちたところで歩くのを諦め、ちょうど見つけた洞穴に身を隠す。

あとは2人が知るとおりの展開で、洞穴に隠れていたところに謎の奇声が聞こえ、どうしていいかわからずに怯えていたのを、クイシエに助けられたのだ、と。

「……」

謎の奇声のくだりではギュランダムが視線を逸らしてた。クイシエの目が冷たい。

そしてクイシエに助けられたという感謝からは、今度はクイシエの目が泳いだ。感謝の視線が気恥ずかしくて耐えられない。

「……まあ、とりあえずその話を信じないことには始まらんのうちわ、わたしは信じるよっ！」

「となると……次は元の世界に戻る方法が知りたい、というわけなんじゃろうが……わかと思うが、儂らにはまったく心当たりがない。すまんのうち」

先回りされてしまった問いへの回答に、深鷺は肩を落とした。

「そうですか……ですよー」

「……ちなみにじゃが、そちらの世界からこちらの世界へ飛ばされた、という可能性はないのかのうち？」

異世界ちがいきゅうのことを説明する際に、ギュランダムが「深鷺は広い大陸のどこかそういった“閉じた文化”の地方から来たのではないか」と思っているフシがあつたので、深鷺は『自分の世界では陸の果て海の果て、空の果てまでもがすでに調べ尽くされた高度な文明を持つ世界だった』と誇張気味に説明してあつた。

これは、それほどの文明であればこちらの世界で説明の付かない現象も有り得ることなのでは、という意図の質問だった。

「絶対にない、とは言い切れないです……わたしの世界には急に人が消えていなくなる現象を神隠しなんて言ったりしましたし……で

も迷信と思われるようなものですよ？」

もし地球側の現象だった場合、こちらから帰還する手立ては存在しない可能性が高いだろう。

下を向いてしまった深鷲に、クイシエは深鷲の手を掴んで励ます。

「……だ、大丈夫！ 来ることができたんだから、帰る方法だってあるはずだよ……！」

「クイシエちゃん……」

ギュランダムが場の雰囲気を取り替えるように立ち上がった。

「まあ、クイシエの言う通りじゃ。調べてみればもしかするとそういった事例が過去にあったかもしれないし、手がかりがないかもう一度よく思い出してみるのも良いだろう。儂が思うに、おぬしが言うデントウの杖があった部屋はなんらかの儀式場じゃと思う。大がかりな儀式が行われていたなら、ある程度の規模の魔術師団や国が関係しているはずじゃ。そのあたりを当たっていけば、この世界に來た原因はわかるかもしれんよ。儂らも力を貸そう」

深鷲はクイシエの手を掴み返し、2人にお礼を告げた。

「なあに、こちらとしても興味深い話じゃ。なにか見つかるまではこの村にいと良いじゃろう」

こうして深鷲はクアラ村にお世話になることになった。

部屋は深鷲が目醒ましたこの建物に用意される。かつては宿屋として使われていた建物で、部屋数が多い。

クイシエの自宅でもあり、村人たちの倉庫としても使われているものらしく、それらを含めて管理はクイシエが任されているそうだ。

使われていない部屋は現在もごくまれに訪れる旅人の宿泊用に使われている。

クイシエはさっそく深鷲のために自室の隣部屋を片付け始めた。当然、そこに住まわせて貰う深鷲も手伝い始めようとするのだが、

「あ、あの、ほら、魔術関係でいろいろ専門的なものとかもあるから、お手伝いはいいよ」

「そっか……壊しちゃったら大変だもんね」

実は、すでに空いている部屋があるにもかかわらず、あえて自室の隣の部屋を空けようとしているクイシエ。そんな露骨な行動を知られたくないと適当な理由を付けて断ったのだが、深鷲は引き下らない。

「じゃあなにか、他に手伝えることないかな」

「ええと、ミサギちゃんはお客様だからなにもしなくても……」

「や、居候だからむしろ働かなきゃ駄目じゃないかな。働かざる者食うべからずって言うし」

仕事がないと落ち着かない、という感じの深鷲を見てクイシエは頭を巡らす。この家で手伝って欲しいようなことはなにも思い当たらなかった。しかしこのままただ待たせるのも確かに酷こかもしれない。

そこでクイシエは外に仕事を探しに行くことにした。

「えーと、それじゃ、ちょっと待っててね？」

「うん、ありがと！」

クイシエは小走りで家を出て行った。どうやらなにかしら手伝いはさせて貰えるらしいと、深鷲は安心する。

居候云々というのも確かに本音なのだが、実のところ深鷺はお手伝いなりなんなりに集中し、嫌なことを考えないようにしたいのだった。やることがないと色々と考えてしまう。自分が知る限り、神隠しにあつた人も異世界に飛ばされてしまった物語の主人公も、必ず元の世界に帰ってめでたしというわけではない。それになにより、これはフィクションではない。

(……ってだから、考えたくないんだってばー！)

1人になってしまったせい、ついつい思考が内面に向かってしまふ。無理矢理思考を切り替える深鷺。

(……といっても、わたしに手伝える事ってなんだろう……農作業とか本格的なのは未経験だけどいけるかな？ あとは……料理？洗濯？ 掃除……は断られたんだった。でも、どれも現代技術の恩恵無しだとあんまり経験ないんだよね……)

まあ、お手伝いなのだから本格的な作業を任されることはないだろうと気楽に構えることにした深鷺。自分ができることを脳内に列挙していく。

(アクセサリが作れる。道具があればベンチくらいは作れる。料理は食材が同じだったら良いけど……そういえばこの世界、お菓子はどんなものがあるのかなー……)

色々と考えていると、ここがどんな村であるのかもまだ知らないことに気が付いた。辺境の村であることと、山に囲まれていること。そして見る限り、現代に比べれば文明レベルでは劣っているだろう、ということしかわからない。

窓から外を除いてみると、土と木と草で構成される村風景が広が

っている。木造の家の先に畑、更に遠くに森があり、山がある。村は広々としていて質素で、まるで昔遊んだことがあるテレビゲームのRPGで見た村風景を、そのまま立体化したようなというほどではないだろうが、近いものを感じる風景だった。

（剣と魔法の中世ファンタジー……そんなイメージでいいのかな）

剣はまだ見ていないが、魔法は実在する。そしてなにやら“魔獣”というモンスターの存在はいるらしい。あとは社会が封建制だったり絶対王政だったりすれば完璧だろうか。

（ついでに魔王とかいれば、勇者召喚モノだね。……あれ？ その場合わたしが魔王倒すことになるの？ いやいや、それはない……）

そうこうしているうちにクイシエが戻ってきた。気が付けば結構な時間が過ぎていたようだ。

クイシエは少し息を切らし気味に告げる。

「あ、あのね。村中の人が集まっちゃったから、広場まで来てくれる？」

#11話：ミサギのお手伝い

深鷺^{みさぎ}は村の広場で、村中から集まった住人たちと対面していた。

すでに深鷺の存在は村中に伝わっているらしい。

子供がいないこの村にクイシエ以外の年若い子がやってきたという事で、興味を抱いた者は多かったようだ。

集まったのが村人全員というわけではないようだったが、数十人が群がっていて、なかなか騒がしい。

「へえー、珍しいね。ホントに黒い髪だ。獣人？ 魔徒士？」「普通に人間らしいぞ」「あら、ほんとにまだ子供じゃない……あの変態ジジイ……」

「かわいいー」「クイシエ以外の子供なんて何年ぶりだ」「大変そうだな」

「なんでも遠い故郷から飛ばされてきたんですって」「どういう事だ？」「さあ？」

なお、ギュランダムの昨晚の蛮行（ひゃっほう！）もカウスの口から村中に知れ渡っており、村人たちは突然村にやってきたいたいけな子供を「あの変態から守ってやらなければ」という連帯感に包まれていた。

深鷺はどこか動物園の動物になったような気分を味わいながら、優しくも妙な空気に首をかしげつつ どうやら好意的に迎えられていることに安心する。

「コハラミサギといいます、しばらくお世話になります！」

元氣よく挨拶する深鷺。表面上はいたって普通に挨拶をしていたが、その胸中は驚きと感動でいっぱいだった。

（獣人？ ライカンスロープ？ 獣耳ツ？）

村人の中には、明らかに人間以外の存在が混じっていた。

ベースは人間なのだが、耳や尻尾が生えていたり、地肌が見えないほど体毛が生えていたりする、そんな存在だ。

よくよく見てみれば、むしろ人間以外の方が多いかも知れない。人間とほとんど変わらないように見えて、実は瞳だけが猫のものであったり、服の袖に隠れて獣の毛が生えているのが見える者などが結構いる。

深鷺はものすごくいろいろと質問したい欲求にかられたが、もしかすると失礼になるのかもしれないと考え、帰ったらクイシエに聞いてみよう、欲求を心の金庫にしまい込んだ。

（わたしだってなにも聞かれてないしね）

挨拶が終わると、深鷺のお披露目的な集まりは解散となった。

深鷺はさっそくお手伝いを始めることになった。

担当になったのはフリネラという名の若くてネコっぽい女性だ。

若いと言っても、深鷺から見れば大人の女性である。

フリネラは見た目どおりの猫系獣人で、耳と尻尾と目がネコのも

のである。他にも足や腕の一部が猫毛に覆われていたりする。

髪は短くキツネ色で。瞳は緑の猫目。スレンダーでネコらしいしなやかそうな体を、ゆったりとした服で包んでいた。

「人手はいくらでも欲しいけど、いきなりだから準備が追いつかなくてねー。今日の所は雑用中の雑用って感じのものなんだけどー……」

案内された倉は民家よりも大きく、中には箱や瓶がみっちりと積んである。

「じゃーとりあえず、この箱の中身を各家に必要なだけ配って貰おうかなー」

「はい！」

（ファンタジーすぎる……！）

ネコの耳を生やしたフリネラがネコの目で話しかけてくることに、深鷲は興奮を抑えながら質問を返す。

「中身を聞いても良いですか？」

「紙だよー」

「紙ですか」

「うん。そこそこ値が張るから取扱注意ねー。どれだけ必要かはそれぞれの家の人に聞いてー」

「わかりました」

よろしくー、と去っていったフリネラを扉の外に消えるまでは目で追った。

1人になった深鷲は、さっそく一抱えほどある箱を小さなリアカ

ーへ積んでゆく。

「おおつと忘れてたーっ」

「!？」

2箱積んだところでフリネラが戻ってきた。

「びつくりしたー……」

「あ、ごめんね。言い忘れてたことがー」

リアカーの積み具合を見てフリネラは続ける。

「空き瓶を回収してきて欲しいの。みんなそう言えばわかるから。その分リアカーに余裕持たせてね。紙は10箱もあれば足りると思うから。でもって、集め終わったらその瓶に、この大瓶の中身を8分目くらいまで入れて、返してあげてー」

大瓶の中身を確認してみると、そこにはドロドロした真っ黒い液体がたっぷりと入っていた。

「そうそう、ノックしても誰も出てこなさそうだったら、その家とはばしていいからねー。よろしくー」

今度こそ去っていったフリネラを見送ると、さっそくりアカーを引きながら家々を回り始める深鷺。

村の地図や規模を頭に入れるため、まずは適当な方向へ向かい一番端らしき家まで歩くことにした。

「ごめんくださいー」

ノックと共に呼びかけると、すぐに扉が開いた。

「ずいぶん早いね。改めて、はじめまして」

（おお……）

鬘たてがみを揺らしながら現れたのは、一言で言えばライオン男だ。シル
エットは人だが、顔つきや肌触りは限りなくライオンに近い。獣寄
りな容姿の獣人だ。

改めて、ということは先ほどの集まりにもいたのだろう。

身長はミサギとさほど変わらないが、恰幅がよいたため背丈のわりに大きく感じられる。立派な鬘もそう感じさせる一因だろう。

フサフサの鬘が肩や胸を覆っている。

年齢はわかりにくいだが、中年に差し掛かったあたりだと深鷺は感じた。同じネコ科の獣人だが、フリネラとはまったく印象が違う。

深鷺は改めて挨拶と自己紹介を行い、お手伝いに来た旨を伝え、村の地理について質問する。

「これよりも向こう側に、まだ誰か住んでいますか？」

「いいや、このあたりは僕の家がはじっこだよ」

「わかりました。では、紙のお届けですっ！……どれくらいいますか？」

「助かるよ。2束貰えるかな」

「はい、どうぞー！」

紙はミサギが学校で使っていたノートほどの大きさで、ある程度の枚数ごとに紐で縛られていた。それを2束渡す。

「あと、瓶も回収する事になってます」

「ああ、そうだね。ちよつとまってる」

ライオン男は家の奥へ瓶を取りに行き、すぐに戻ってきた。

「はい、よろしくね。これ、服につくと落ちないから気をつけて」

そういうライオン男の服は所々真っ黒に汚れている。作業着のようなので問題はないのだろう。

「確かに受け取りました。また後で返しに来ますのでっ」
「急がなくて良いからねー」

深鷺はこうして、受け渡しと受け取りを数十件とくりかえし続けていった。

巡った内の3割ほどは留守だったのか反応が無く、また外れの方には行かなくて良いと途中で教わったため、完全には村を回ることなく1周目を終えた。

「うわー……すっごいドロドロ」

墨色のトンカツソース。そんなイメージを抱いた深鷺。聞いた話ではこの液体はインクらしい。

倉へ戻ってきた深鷺は、回収してきた空き瓶に大瓶の中身を注いでいった。

「持ってきました!」
「はい、どうも」

間違い防止と記憶の整理のため、効率を無視して1周目と同じルートを通りながら、中身を入れた瓶を返却していく深鷺。巡っている途中、追加で配達や回収の依頼があったりしたため、

なんだかんだと全ての家に配り終えた頃には日暮が近かった。

最後の家でお茶に誘われたので遠慮無くいただいていると、クイシエが迎えに来た。

部屋と夕食の準備が整ったという。

「あら、うちで食べていってくれると思ってたのに……」

「だ、だめです……！」

「あらあら」

お茶をくれたおばさんによる夕食の誘いを、クイシエが間に入って拒否していた。

#12話：食いしん坊ミサギの食事と疑問

夕暮れどき。

お手伝いを終えてクイシエの家に戻ってきた深鷺^{みさぎ}は、クイシエに案内されて部屋の説明を受けた。といっても特別な注意事項があるわけでもない、普通の部屋だ。

棚とベッド。小さなテーブルとイスがある。

テーブルには白い花が花瓶に生けてあった。棚にはなにも入っていない。

壁には額縁がかけられている。絵には風景や人物ではなく幾何学模様が描かれていたが、この世界では普通なのだろうと、深鷺は特に気にしなかった。

ベッドの頭あたりには、深鷺が密かに期待していた“魔術的な品物”が用意されていた。それは深鷺から見て電気スタンドのようなものに見え、実際に同じ用途で用いられる魔導術の家具だった。

「わー、ついた！」

電気の代わりに魔力で灯る、というだけで特別特徴のない単なる照明なのだが、“魔力で灯る”というだけで深鷺は楽しそうだ。薄暗くなり始めている部屋の中で、深鷺はスイッチ代わりになっているらしい石をずらしては意味もなく明かりを付けたり消したりしている。

自分が使っているから、という理由で無意識に配置しただけのその“魔導具”がことのほか深鷺に喜ばれている姿を見て、クイシエ

が他にも魔導具が余っていなかったかを思い返し始めたのはいうまでもない。

部屋の紹介が終わると、さっそく夕食の時間である。

食堂では照明の魔導術が用いられた。天井近くにいくつかの光球が浮かんでいる。それは深鷲の部屋に設置された魔導具とは違い、クイシェが魔導術【浮灯虫】で生み出した光球だ。

広い食卓の上には【保温】によって作りたての温かさを保持したままの食事が並んでいる。

クイシェが用意した夕食は昼間とは違い、種類豊富で豪華だった。食卓の中央には大皿があり、緑と赤の葉菜が敷かれた上になにかの肉がどっさり盛ってある。

他には乳白色の豆や、紫色に染まった大根おろしのようなもの、柑橘系の果物に見えるが色が真っ黒なものなどが、それぞれ小皿に載せられていた。

パンらしきものはあってもお米の姿は見えず、しかし特別白米派というわけではない深鷲としてはそれほどショックを受けていない。それよりも深鷲は、見たことのない料理の数々を前に興味津々だ。

食いしん坊な深鷲は食べ応えのありそうな食卓を普通に喜んでいて、一方クイシェのほうは用意した自分の料理を改めて見て、ちよつと調子に乗りすぎたんじゃないだろうかと後悔し始めた。

それはつまり、

（２人分にしては多すぎだよね……）

と。

「今日の巡りに感謝します」

「いただきますーす」

席に着いた2人が両方の祈りを並べた挨拶をして、食事が始まった。

「……作り過ぎちゃったかな……？」

クイシエは食卓に並べた皿の数々を見ながら、恐る恐る深鷲に問う。

無理して食べなくても良いよ？ と続けるつもりだったクイシエだが、

「全然！ 美味しいからいくらでも食べられるよ！」

と深鷲が即答したので、続かなかった。

深鷲はお世辞でも気遣いでもなく本音で答えている。深鷲が普段食べていた量に比べても、確かに少し多いかもしれないが、ほんの少し、程度である。食の豊かな生活を送っていた深鷲には、多すぎると思えるほどの量ではなかったのだ。

そして、この先しばらくはこの世界で暮らさなければならぬので、違う食文化を持つこの世界の料理が美味しく感じられるというのは、とても嬉しいことだと深鷲は感じていた。

日が沈んでゆく間、深鷲は異世界料理に舌鼓を打ちながら、今日のお手伝いで疑問に感じていたことをいくつかクイシエに聞いてみる。

台車で運んだ紙と、インクについて。

「え、とね。それはグリモア紙とマジックインクの原液だね」

「……油性ペン？」

グリモア紙は名の通り、魔導書に使われる紙だ。

以前は羊皮紙を専用の塗料で仕上げて作られていたのだが、今はその用途から通称『グリモアの木』と呼ばれるようになった樹木から、専用紙が調合されている。

グリモア紙の製紙技術は現在普及の真つ最中だ。その用途が魔術用ということで普通の紙より高く売れ、また羊皮紙よりも楽に作ることができ、しかも羊皮紙を用いた魔術用紙より品質が良いので需要が高まっている。

マジックインクも名の通り、魔導術に使うインクだ。

原液を薄めて使うもので、大瓶に入っていたのがその原液だった。この村でも栽培されている同名の植物から作られる、魔導書製作に欠かせない液体である。

昔は特定の魔獣の血液や、場合によっては術者自身の血を使って書かれていたが、今ではこのマジックインクが主流となってきた。品質が安定していて、比較的安価で大量に確保できるのが強みだ。

どちらも魔導術の普及に応じ、あるいはそれを見越して生産者や加工者が増えてきているという。

「へー……すごいね、この世界。ここは辺境だと言ってたけど、辺境の村ですらちゃんと、しかもあんなに大量に紙とかインクとか……魔術の道具？ が揃ってるなんて」

倉に積んであったグリモア紙とインクの量を思い出しながら、思ったよりも進んだ文明の世界なのかも、と深鷲は考え始めていたが、クイシエはそれを否定する。

「あ、違うの。この村はちょっと特別だから」
「そうなの？」

クイシエはこの村を、この世界の標準と考えるのはよくないという。

「なんていったらいいのかな……この村、専門家しかいないっていうか……実験の為にある、ような……わたしもこの村以外のことは知らないから、あんまりよくわからないんだけど……あ、あのね。多分明日になったらわかると思うから」

「ん、わかったー……はー、いっぱい食べた！ごちそうさまでした！」

「う、うん。沢山食べてくれて嬉しいよ」

昼間の食べっぷりも気持ちのいいものだったが、クイシエは深鷺の健啖^{けんたん}ぶりを見て頑張った甲斐があったと胸をなで下ろした。用意した皿は全て綺麗に空っぽである。

おそまつさまでした、という言葉は知らないので、クイシエの口からは出てこなかった。

食器を片付けようとする深鷺を止めることができなかったクイシエは、仕方なく2人並んで食器を洗う。とはいえ1人でもそう時間がかかるほどの量ではなく、すぐに終わってしまった。

深鷺のことをあくまで“お客様”として扱いたかった心情のクイシエとしては心苦しかったが、いざ並んで作業してみるとそれはそれで仲が良い様な気がして、満更でもなかった。

（友達是对等な関係……だったら一緒にやったほうが、友達らしいのかなあ……）

「おーしまいつ」

クイシエがぼーとしている間に、あっという間に食器が片付いてしまった。

深鷺の横顔を見ていて、クイシエはふと思った。考えはそのまま口から出る。

「それにしてもミサギちゃんって、元気だね……怪我とか無かったけど、それにしても昨日の今日で……村中回るのだって、結構大変だったでしょ？」

「うーん、そこそこ。重量級新聞配達って感じかな？ 古紙回収とか？」

やったこともないアルバイトをイメージして返答する深鷺。大変だったかと聞かれれば大変ではあったが 深鷺は答えを返しながら、なにかを誤魔化しているような気になった。

一度口を閉じ、考え直す。

「……うーん。や、本当のところは、なんかやってないと嫌なこと考えそうだったからってだけなんだけどね……」

「あ……ご、ごめんね？」

「気にしないで」

愚痴を聞かせているのは自分の方なのだから、と深鷺は少し甘えていることを自認する。

自分を支えようとしてくれているように思えるクイシエは、同世代の気安さも相まって、深鷺にとってとてもありがたい存在だ。

「……って、そうだ、すっかり忘れてた。もう1つ聞きたいことがあったんだ」

後始末が終わって振り向いた深鷺は、先ほどのクイシエの言葉にひっかかりを憶えた。そして疑問を1つ、思い出す。

「な、なに？」

「……わたし、怪我とか無かったの？」

「怪我？」

「ほら、山で見つけてくれたときさ。わたし、怪我してなかった？」

言われて、クイシエはそのシーンを思い出す。

もしかして、言葉がわからないのかな

どんな事情があつてこんな僻地の山奥で裸で隠れなければならないのか、まったく想像は付かなかった

見たところでは“怪我はしていない” ようなので、そのことにはとりあえず胸をなで下ろす

「うん、わたしが見つけたときは、怪我らしい怪我は見当たらなかったよ？ ミラナさん……村のお医者さんも、体が冷えてる以外には特に問題ないって言つてたから大丈夫だと思つてたんだけど……ど、どこが悪かった？」

「ううん、全然健康体」

とたん、心配そうに眉尻を下げるクイシエに、軽くガッツポーズなどして極めて健康であることをアピールする深鷺。

しかし、疑問は残る。

（足を捻つてたのは……たとえ腫れていても、あの暗さじゃわからなかったかも？ でも、手足に傷がまったくないっていうのは変じゃ

ないかなー……？)

と、そこでお腹が一杯になったためか、眠気が深鷺を襲った。

「……ふあ」

疲れもあるのだろう。あくびがでた深鷺を見て、クイシエは睡眠を薦めた。

確かに疲労と眠気を感じていた深鷺は、素直に促されるまま寝間着に着替え、初めて眠るベッドへ潜り込んだ。

「ミサギちゃん、おやすみ」

「おやすみー……」

体に関する疑問はとりあえず解消されることのないまま、深鷺は新しい部屋で眠りに就いた。

#13話：お祈りと挨拶

早朝。

「あ、クイシエちゃん。おーはよっ」

「、」

ぎゅー。

言葉が通じないので、さっそくクイシエに頭を抱きしめられる深^み鷺^{さぎ}だった。

日の出と共に起き出した深鷺はいつもの癖で台所に向かおうとして、ここが自分の家ではないことを思い出す。

たとえ台所に行ったとしても、冷蔵庫も無いしペットボトルもないことに思い当たり、深鷺は小さなショックを受けた。

（あー……冷蔵庫もないし、レンジであたためもないんだよね。いや、残り物に愛着があるわけじゃないんだけど………ない………か………？）

一昨日までのミサギの朝は、冷蔵庫から飲み物を取り出すところから始まっていた。ついでに果物に手が伸びることも多い。そして朝食のおかずには前日の夕食で残ったおかずが使われることが多い。が多かつた。

昨日の夕食はキレイさっぱり食べきってしまったので、全部1か

ら作るしかない というか、深鷺は朝食を作らせてもらえなかった。

「ご、ごはんをつくるのは、わたしがやるからっ」

というわけでクイシェが朝食を作ってくれている間、なにもすることがない深鷺は、ぼんやりと元の生活との違いを検証し始めていた。

（水道なし、井戸で汲む。皿洗いも汲んだ水を使う。冷蔵庫はなし。電子レンジもなし、というか電化製品は全部なし……………電話とかどうなんだろう。通信魔術とかあるのかな……………？）

一方クイシェの方は深鷺が早起きしていたのをすこし残念に思っていた。先に起きて朝食を用意してから起こしに行こうと思っていたのに、自室の扉を開くとちょうど深鷺が部屋から出てくるところだったのだ。

（明日はもっと早起きしよう……………！）

そう決心しつつ、部屋から出てくるタイミングがぴったり同じだったというちょっとした偶然を、クイシェは嬉しく思っていた。なぜ嬉しいのかは自分でもよくわからない。

朝食の用意が整い、2人とも席に着く。

「今日の巡りに感謝します」

「「いただきますっ」」

2人は声をそろえてお祈りと挨拶をした。

朝食はパンと、1枚1枚がやたら分厚いキャベツのような葉菜の蒸し料理、1粒がスモモほどあるブドウのような果物だ。

（やっぱりお米はないのかなー）

深鷲はそう思いつつ

それを聞いてしまうと、なんとなくクイシエは米を多少困難でも用意しようとしてしまうのではないかと考え、この場での質問はやめておくことにする。

代わりに別の質問をした。

「とりあえず言ってみてたけど、どういう意味があるの？ “今日の巡り” って」

「あ、んーとね。簡単に言くと魔力の流れのことなんだけど……“地脈” ってわかる……？」

（……この場合、地下水路のことじゃないよね。地脈ってもともと
はなんだっけ……風水用語？）

深鷲は昨日の会話を思い出し、ファンタジーであることを念頭に
考えてみる。すると、その思いついた言葉が【言語移植】フレンズチャットによって
翻訳され、この世界の言葉として思い浮かんだ。

「えーと“地中にある魔力の流れ”……かな？」

「うん、正解。……知らないみたいだったのに、よくわかったね？」

「あー、わたしの世界って魔法は無かったけど、考え方だけならすごいたくさんあったから、その中にそんな感じのがあったってだけ」

クイシエは漫画やアニメのことを頭に浮かべつつ、そういえばこの世界の娯楽はどうなっているのかを考え始めそうになってしまった。

質問の途中なので脱線せずに、説明を始めてくれたクイシエに意識をもどす。

「あ、あのね？ この世界には」

この世界では全てのものに魔力が宿り、その魔力は絶えず巡っている。

そしてその中で最も大きな流れが大地を巡る魔力であり、その流れは“地脈”と呼ばれている。

「生き物に血が流れているように、大地には魔力が流れている。でも、大地だけじゃなくて人間にも魔力は流れ込んでいるし、獣にも植物にも、当然食べ物にも流れてる。つまり魔力の流れはこの世界の流れ。その巡りはこの世界そのもの……ってということなの」

巡りに感謝する、とはこの世界に感謝するという意味だ。

魔術に関わる者のほとんどはこの考え方を多かれ少なかれ支持している。

魔導師は正に魔力の流れを利用する者たちであり、地脈信仰を軸とした術者集団も多く存在しているらしい。

「あ、わたしは……というか、この村の魔導師は『神様だ』とまでは思っていないんだけど……『地脈こそがこの世界をこの世界たらしめている魔導式なのだ』くらいには考えてる、のかなあ」

「かなあ……って、なんかあやふやだね」

「う、うん。誰にも証明できてないし、する気もないんじゃないかな。なんか、ね。『ロマンが大事なんであって実際どうなのかは二

の次』なんて言う人もいるから……」
「あーなるほど」

ようするに、そうだったらいいな、ということなのだ。

（ロマン、なのか。いいね）

深鷺は自分が魔術に対してもつ憧れのようなものだろうか、ロマン溢れる魔導師たちに共感した。

「なんかそれ、わたしも気に入った。食前には必ず言うようにしよう」と

魔力によって支えられ成り立つ世界、というのはカッコイイじゃないか、と単純にイメージが気に入った深鷺だった。

魔法陣が大地を駆け回る平面世界を妄想しながら、お祈りを習慣づけることを決意する。

説明が終わると、今度はクイシェが同じ質問を返してきた。

「あ、み、ミサギちゃん。あの、いただきます、にはどういう意味があるの？」

「あー……えーとー………確か、いただきます、だから、ゴハンをいただくよ、っていう言葉でー」

（あれ………どういう意味だっけ………宗教用語？）

普段何気なく使っている言葉だったが、いざどどういう意味かと問われると、よくわからない。

「……あ、そうだ。んとね、料理を作ってくれた人、作物を育てて

くれた人、お肉になってくれた動物なんかは、感謝の気持ちを込めて言う言葉なの」

いまいち自信は無かったが、深鷲はとりあえず言い切った。小さい頃に、そのように教わった記憶がないでもない。

「そうなんだー。じゃあ、わたしたちのお祈りと似てる……のかな？」

「言われてみればそうかも。どっちも、いろいろなことへの感謝っていうのは似てるよね」

「あ、じゃあ、昨日言ってた、ごちそうさま、の意味は？」

「えーと……そっちもおんなじ。美味しいご飯ありがとうございまして、いろんな事に感謝するの。この場合はおもに、クイシェちゃんにだね」

「はう」

多分間違っていないはず、と深鷲は自分なりに答えてみたが、よく考えてみれば漢字で『ご馳走様』と書くこの言葉、いったいどういう意味があるのだろうか。

（馳走……馳せ参じるの「馳」に「走」？……って、どっちも走って意味じゃん……食後に走ったら横っ腹が痛くなる、ってイメージしか湧かないなあ……）

異世界人に問われて初めて気が付く日常用語の無知さ加減に、深鷲は勉強不足を感じた。

食事が終わると、今日もお手伝いだーと張り切る深鷲。村にいた間は村の手伝いをしながら生活するという話になっており、並行してこの世界の生活や、後々必要になるだろう知識などを身につけて

いく予定だ。

なお、食器の後始末は今回も2人で行った。深鷺は1人で片付けたかったのだが、クイシエは譲らないどころか「座っていて良いのに」と言う。

そこで深鷺は言った。

「これは居候の最低限の義務だから。もし駄目って言うなら、代わりにゴハン作らせてくれなきゃ駄目ー」

「え……う、うん……わかった」

深鷺に自分の食事を振る舞いたいクイシエは、仕方なくその役割分担制を受け入れることにした。

しかしクイシエは思う。

（並んで後片付けするのも楽しいから……まあいいか……な……）

#14話：ムダンラユギ

食事も終わり、さつそく今日の手伝い先を聞こうとする深鷺^{みやづ}に、クイシエは待ったをかける。

「あ、あのね。お昼まではお手伝いは中止なの」

「え、そうなの？」

「ご、ごめんね。やる気出してたのに」

「うつん、それはいいんだけど……ええと、かわりになにかするのかな」

深鷺は自分が出来る事なんて簡単なお手伝いくらいのものだと自覚しているため、それ以外のこととなると、なにも思いつかなかった。

「お師匠様に、用事があるから連れて来いって……」

「お師匠さんのところ？　そこでお手伝い……じゃないや。なにするの？」

「……えーと、こういうのなんて言えればいいのかな……」

言葉が出てこないのか、うつんと首をかしげながら考え込むクイシエ。

「……結界の検証だから……お手伝い、でもいいのかな……うーん……実験体、とか？」

「んん？」

不穏な言葉が聞こえた。

「あつ！　ち、じゃなくて！　違うのっ！　お手伝い！　お手伝いでいいの！　結界の検証なの！」

「あははは」

失言に慌てるクイシエを見て、深鷲は和んだ。

深鷲はクイシエに連れられて、村はずれまでやってきた。

ギュランダムが住んでいるのは、長方形と円筒形を並べてくつつけたような形の、石と木でできた家だ。屋根から煙の出ている円筒部は、地面から生えた大きな煙突にも見える。

「……あれ、ここ、昨日来た憶えがないかも」

深鷲は、昨日村を巡ったときにギュランダムを見ていないことに思い至った。

（昨日も来れば良かったな。すごく良い景色）

丘の上に立つこの家は立地こそ村のはずれではあるが、ある意味村の中心とも言えるような印象を深鷲に与えた。高台となっているこの場所からは、村全体を見渡することができるからだ。

森に囲まれたこの村を一望できる場所に住む、クイシエの師匠、ギュランダム。

やはりイメージ通り、偉い立場の人なのだろうか、深鷲は想像

力を働かせていた。

（ヒゲとか仙人っぽいよね）

ヒゲが長いひとは偉いのである。深鷲的には。

クイシエが入り口の扉をノックした。

「お師匠様ー？ ……中にいますよね？ 来ましたよー？」

クイシエの超感覚は家の中にギュランダムがいることを伝えてくるのだが、なぜかノックに対する反応はない。

繰り返しても応えがないので、寝ているのだろうか、そのまま扉を開くクイシエ。

「隙ありじゃ！」

途端、室内の上方から振り子のように降ってきた何者かの両腕が、クイシエの首に巻き付いた。

そしてクイシエの胸には長い白ヒゲと長い白髪に覆われた顔がある。

天井から逆さまにぶら下がったギュランダムだった。

目の前に立つクイシエの左右から白髪がふわりと舞い、そのあとは重力に従って床にバラリと広がる。深鷲はその白髪を見て、それがギュランダムだと気が付いた上で、改めて（なんだろうこの謎の生物）と思った。

「……」

クイシエは無言でモミアゲあたりの白髪を両方掴み、そのまま下に引っ張った。

「いだだだ、あつ」

ゴキリ、といい音を立てながら地面へ落下したギュランダム。その顔はヒゲと髪に埋もれてよく見えない。

「……………えーと……………」

深鷲は目の前で展開された事態についていけなかった。

「……………首から落ちたように見えたけど、大丈夫なの？」

とりあえず心配をしてみる。

「大丈夫。お師匠様、しぶといから」

「ああ、やっぱりお師匠さんなんだ、これ……………」

直前まですくすくと育っていた“山奥で白ロープをはためかせこつ木製の杖を掲げる古き良きファンタジーらしい老練な魔法使い”という、深鷲の願望補正も入ったギュランダムに対するイメージが、一瞬で白紙に戻った。

「な、に、やってるんですか！ お師匠様！ ミサギちゃんもいるのに！ 恥ずかしくないんですか！」

「だって儂寂しかったんじゃないもんー」

倒れたまま、首だけ曲げて答えるギュランダム。

「子供ですか！ なんですかその言い訳は！？」

「昨日、ミサギが来ると思って待ったんじゃないが、いつまで待つ

ても来てくれんのでう……」

「え」

急に話題を振られた深鷲は、事情をありのまま説明する。

「昨日のお手伝い、村はずれまでは行かなくて良いからねって言われてたので来ませんでした。ごめんなさい」

それは村人たちが深鷲を魔の手から守る為の策であった。

「ぬう……村の奴らめ……」

「で、それがどう今の蛮行ばんこうにつながるんですか？」

質問されたギュランダムが、ニヤリと決め顔になる。

「女の子成分が足りないんじゃないじゃ」

「そんな成分を必要とする臓器があるなら即刻切除してください」

（なんかクイシエちゃん、雰囲気違うなあ……）

初めて見る怒り顔のクイシエをまじまじと見つめる深鷲。

「……あ、ああっ!？」

その視線に気が付いたクイシエは目を見開いた。まるで取り返しの付かない失敗に気が付いたような表情だ。

「ち、違うの！ これは！ あのね、その、ええと！ お師匠様がっ!」

どうにかして取り繕おうと試みるも、どうしていいかわからないようだった。

(うん、わたしもどうしていいかわからない)

深鷲は無難な選択として、落ち着くことにした。

「よしよし、とりあえずクイシエちゃんも落ち着こっかー」

宥められながら、クイシエは恥なだずかしくなってうつむいてしまう。

(うつ……ミサギちゃんに変なところ見られた……うつうつ)

これはもう誤魔化そうにもどうしようもないと悟ったクイシエは、下を向いたまま無意識に八つ当たりを始めた。

「痛、痛い!?! 無言で蹴りつけるのはやめんか!?!」

「ク、クイシエちゃん?」

深鷲の言葉が聞こえていないのだろうか。髪で隠れていて表情も見えない。

(……ああ、なんとなく把握したかも)

深鷲はどうやらこんな事態に馴染みがありそうなギュランダムの態度を見て、2人の関係性に思い当たった。

つまるところ、セクハラキャラとその被害者(ただし反撃に暴力を伴う)という、まあ現実ではともかくマンガなんかではよくありそうな関係なのだと。

そして同時に深鷲は、なぜかギュランダムを見ていて、どここな

く親しみが湧いてきたのを感じた。

（あー……ハト兄にすこし似てる……の、かな）

理由を考えてみた深鷲は、すぐに思い当たる。

（言ってることがなんか、おかしいもんね。……まあ、ハト兄はこんなに変態じゃないけど……たぶん……）

「ク、クイシエよ。仮にも師匠である儂の側頭部を力カトで踏みつけにするというのはどうかと思いだだだだ」

（クイシエちゃんは、回りがよく見えなくなるタイプなのかなあ……あ、人見知りがあるけど、馴れ馴れしい相手には遠慮無く接することができる？ ……相手が幼馴染みの男の子とかじゃなくて、老人で師匠さんだけど、それもまあ、あるかな）

状況にすっかり置いていかれた深鷲は、クイシエの凶行を止めるでもなく考え事をしていた。現実逃避かもしれない。

そしてこれは師弟間のスキシップ、仲良しコミュニケーションの1形態なのだろうと、深鷲は思うことにした。

（……間違っ てないよね？）

いつまでも止まらないギュランダム悲鳴を聞きながら。

「あはは、さすが師弟。仲が良いねっ！」

「……………」

「ヒ、ヒゲが抜ける、千切れるー!!」

#15話：クアラ村の結界実験

（お、お手伝いじゃなかった……！ 罪滅ばしだった……！？）

ギュランダム宅に招かれた深鷲はお茶を一服薦められながら、ギュランダムの話を聞いた。

村を覆っている【獣払い】の結界が壊れたことについての話だ。

結界についての簡単な説明を受けた深鷲は、2人と共に外に出る。外には小さな結界がいくつか用意されていた。

「ごめんね、クイシエちゃん。わたしのせいで……」

カウスに抱えられていた深鷲が村の境界を越えた瞬間に結界が壊れ、クイシエと村人達が早朝までその修復作業に追われていたということを聞いて、深鷲はしゅんとなっている。

「あ、あれはわたしがすっかり忘れてたのが悪いんだよ。それにまだミサギちゃんが原因だって、決まったわけじゃないし……」

「村の人たちにもすつごい迷惑を……」

「だからそれは……」

結界を越えなければ村に入れないのだから、たとえ憶えていたところでクイシエは結界を壊しただろう。と、ギュランダムは、非難めいた目でこちらを見てくる弟子が取ったであろう行動を予想しながら、頭を下げる深鷲を止めた。

「あー……それを今から確かめるんじやが、仮にミサギが原因で結界が壊れたたんじやとしても、ミサギに非があるわけじゃなからうよ。責任を問う気もないしの」

深鷲の足下手前に、腰掛けるのにちょうど良いような大きさの赤い半球体がある。半透明で、立体映像のように実体感のないドーム状の薄い膜のようなものだ。

それは地面に円状に配置された綺麗な小石をなぞるように存在していた。

「さて、これが結界じゃ。この結界は村を覆っている【獣払い】のような効果は持たせておらん。ただ境界としてだけある結界に、わかりやすく魔導術【赤っぽい】で色を付けただけじゃな。規模も小さいからさほど金もかかつとらん、遠慮無く壊すがよい」

「う……」

先ほど説明を受けている間、深鷲は結界の設置にかかる費用が気になったので聞いていた。

この世界の金銭感覚がわからないのでわかりやすく喩えて貰うと

……

「ふむ……平均的農民の生活費、およそ3ヶ月分というところかう」

「は、働いて返します……」

2度の破壊で半年分である。

いきなりの借金で途方に暮れそうな深鷲だったが、ギョランダムとしてはもともと払わせる気もなかった。

そもそもこの村が毎日の実験やらなにやらで消費している金額に比べれば大金と言うほどでもなかったし

深鷲の隣で自分を

睨んでいるクイシエの視線をどうかしたいというのもあり「結界を改良する良い機会じゃ。実験に協力するなら弁償せずとも良い」ということになった。

もとより今日は改良実験のために呼びつけたのだが。

「……」

深鷲は両膝を着いて四つん這いになると、恐る恐る手を結界に近づけてゆく。

爪の先端が触れた瞬間、結界は音もなく砕け散り、色を失いそのまま消えてしまった。

「ふうむ。まあ確定じゃのう……」

クイシエが違和感を感じ、触れれば結界を壊してしまう存在。異世界から来たという不思議な少女は、ギュランダムにとって、より興味深い存在となっていく。

「ごめんなさい……」

「だ、だからミサギちゃんは悪くないの！」

具体的に損害額を聞いてしまった深鷲はどうしてもその大金に意識が向いてしまう。

深鷲が落ち込み気味な原因はギュランダムの喩えが“農民”の生活費だったことにもあった。

深鷲がファンタジー世界の農民に対して漠然と抱いている『領主の圧政や戦争被害に苦しみ、不作で栄養失調で体の弱い娘が病床の親を世話していて、おとっちゃん……』という負のイメージが罪悪感を割り増しさせていたのだ。

後半は中世ファンタジーというより時代劇かもしれないが。

「落ち込む必要なんぞないと言っとなるだろうに」

呆れつつ、しかし考えてみればこれが一般的な反応だろうか、ギョランダムは思い直す。

長い間この村で実験ばかりしていたせい、金銭感覚がおかしくなっていたかも知れない。そういう意味でも深鷲の存在は村にいい影響を与えてくれる可能性が……などと思いながら、深鷲に次を促す。

「さあ次じゃ次。今度はこの結界の、この色の違う青い部分だけに触れてみとくれ」

すぐ傍に、同じような結界が用意されていた。先ほど破壊された結界とは違い、赤いドームを遮るように小さな青いドームが存在していた。

真上から見ると、首が胴にめり込んだ雪だるまのような形状だ。

青いほうが頭部となる。

屈んだ深鷲が手を触れると、その青い部分だけが先ほどと同じように消えてしまったが、他の赤い部分には影響がないようだった。

「そのまま空いた穴から手を入れてみてくれるかの」

深鷲は言われるままに手を進めた。赤い結界の中で手をわきわきと動かす。結界は壊れる様子がない。

「これでなんとかなりそうじゃのう」

「わー……お師匠様、結界を結界で区切ったんですか？」

赤い結界を別の結界で区切り穴を空け、その穴を埋めるように青

い結界を配置する。深鷲が触れた結界は青だけ。赤い結界は区切られていたので青とはつながりを持たない。触れた結界だけが壊れ、他の結界はそのままとなった。

「うむ、やってみると意外とできるもんじゃのう。これを村の結界に応用すれば、深鷲用の出入り口ができるといわけじゃ。人1人分くらいの結界であれば壊れてもすぐに張り直せるし、壊さずに撤去するのも容易じゃ」

結界術とは境界を定める術である。

もともとは一部の魔獣が自分の縄張りを他の魔獣に主張するため、あるいは弱い魔獣が天敵の接近を感知するために使っていたものだ。そして本来、そのくらいにしか使い道のない術だった。

結界術の利点は、1度設置すると結界の要として配置した品が崩れない限りは半永久的に機能し続けることにある。

特殊な石や植物を用いて地脈とのつながりを持たせ、地脈から微弱ながら魔力を吸収し続けることで、術者の魔力による維持を不要とする仕組みだ。また、結界は自身の血を用いて設置した術者ともつながりを持ち、常にその状態を知ることでもできた。

そして現在、結界術の神髄は魔導術との組み合わせにある。

例えばこの村の結界【獣払い】は結界の名称ではなく、魔導術の名称である。

結界が示す境界を“効果範囲”とし、地脈から魔力を供給する。そこへ魔導術によって『獣を寄せ付けない』効果を与えれば、その効果が永続的に続くのだ。

ただしそのためには、微量な魔力しか供給できない結界術に合わせた低コスト魔導術の開発、土地ごとに供給可能な魔力の測定、それに応じた最適な位置と効果範囲の選定、という様々な準備が必要になる。

供給される魔力が少ないため派手な効果を持たせることもできず、また球体以外の形状を作ろうとすると途端に難度が上がるといった問題も抱えていた。

「そのあたり、まだまだ研究の足りない分野でう。この村ではそのテストも兼ねて、定期的に結界の張り直しも行っておるんじや。予備の要石も大量に用意してあるからさほど気にせんでもよいぞ」

今回の件は、別の結界を用いて結界の形状をコントロールするというアイデアを試す良い機会となった、とギュランダムは続けた。この村の住人はそうした様々な魔術の研究と実験を行う術者ばかりであり、そのための予算も充分に用意されていると説明され、クイシェが昨晚言っていた『実験的な村』というのはこういうことだったのか、と深鷲は納得した。

いずれは国中の村に結界を張ることで獣、魔獣による被害を阻止したり、重要な施設への防犯結界の設置、などの事業に使われていく予定の研究である。その研究が1歩進むと考えれば安い出費だった。と、クイシェの視線にさらなるフォローを催促される形で、ギュランダムは語った。

「村の結界を改造するのは1日2日ではできません、そうそうこの村から出る用事もないじやろう。ミサギが外に行く必要が出てくる頃までにはなんとかなると思うぞ」

「ありがとうございます！ よかった。わたしは正直なところ、出入り禁止になると思ってました……」

「いや、どちらにせよ村の外に出るのはお勧めさんのじゃが……」

村の外は獣や魔獣と出くわす可能性がある。深鷲が山奥を彷徨い歩いて無事だったのは運が良かったのだと、ギュランダムは外の危

険性を説いた。

深鷺は熊に襲われるのではと震えていた事を思い出し、危険性を再確認しつつ、その他にも用意されていた結界を指定されたように壊す作業を続けていった。

#16話：師匠と狩人を傍観するの巻

結果が壊れる条件の検証や形状ごとの壊れ方の違いなど、いろいろと実験に付き合い午前中を過ごした深鷲^{みさき}。

午後は昨日と同じく村の手伝いをしようと、フリネラとの待ち合わせ場所である広場にやってきていた。クイシェはギュランダムの手伝いがあるらしかったが、すぐに合流するとのことだ。

フリネラがやってくるまではとくにするべきこともなく、あたりを眺めながら村の脳内地図を再確認などしていると、犬耳を生やした背の高い男から声を掛けられた。

「お、元気そうだな。大事なくてなによりだ」

「えーと……？」

見覚えのない犬耳の青年は、カウスと名乗った。灰色の髪に紫の瞳。引き締まった体に数種類の毛皮が使われた頑丈そうな上着を着て、背中に弓を背負い、腰には短刀を差している。

「あ！ わたしを山から運んでくれた人！」

見覚えはなかったが、クイシェから聞いていた名前と特徴が一致した。

「憶えてないんですけど、昨日はお世話になりました」

深々と頭を下げる深鷲。

「あーそうそう、あんときや悪かったな」

「悪かった？」

「いやほら、洞穴で裸見ちゃっただろ」

「そういうのは言わなくていいことだと思います」

あのときは外にいたのが誰かなんて判別できる状態ではなかったのに、わざわざ自分から言い出すなんて、と恨めしく思いつつも恩人なので、この人はデリカシーがないのではなく正直者なのだ、ということにした。

大差のない評価であるようにも思いつつ。

「とにかく、ありがとうございました」

「いやいや、礼はいいよ。俺は頼まれただけなんでね。礼ならクイシエに言ってくれ」

じゃあ改めてクイシエちゃんにもお礼を言うておきます、と深鷺は慌てふためくクイシエを思い浮かべながら笑顔で答えた。

ついでに、思い出した事があったので聞いてみる。

「あ……そういえばあのとき、なんて叫んでたんですか？」

深鷺は自分が穴に隠れていた時の話題から、クイシエに助けられる直前に聞こえた奇声を思い出していた。

素っ頓狂な声だったが、いったいどんな事を叫んでいたのだろうと気になったのだ。

どんな内容だったかを憶えていれば、【言語移植】の効果があるいま、思い出して内容を理解することもできただろうが、さすがにあのときは内容を記憶できるような状況ではなかった。

カウスが答える。

「ん？ ああ、それは俺の声じゃなくてあのエロジ」

「ダラッシャー！！」

「うがぁッ！？」

突如、側面からドロップキックをぶちかましたギュランダムによつてカウスは視界外へ飛んでいった。

反射的にその姿を追った深鷲は、10メートル近く離れた位置で転がるカウスを捉えた。すぐさま跳ね起きたカウスがギュランダムに向かって怒声を上げる。

「いきなりなにしゃがんだこのクソエロジジイ！」

「貴様何を言おうとした！ 言つて良いことと悪いことの区別もつかんのか！」

（…………ん？）

深鷲はカウスの体が一瞬光つたように感じた。

カウスはギュランダムへと飛びかかり、体重をのせた右の拳を左頬へ向けて突き出す。

ギュランダムはその拳を左手で受け止め、右手でカウスの右腕を掴もうとするが、逆にカウスの左手に掴まれた。

「やって良いことと悪いことの区別を付けてからいいやがれ！」

「誰にでもミスはある！」

「テメーの場合どれがミスでどれが本気なのかもわかんねーよ！」

そのまま殴り合いを始めた2人。

なんとなく事態を把握した深鷲は、師匠に遅れてやってきたクイシエへと向き直る。

「……ええと、おまたせ。ミサギちゃん」

「あー……あれは、仲が良い……のかな……？」

「えーと………」

クイシエがなにを言うべきか迷っているようだったので、深鷲は自分から話しかけることにした。とはいえ深鷲も殴り合いが気になつて落ち着かない。

なにか良い言葉が思い付くわけでもなく、とりあえず先ほどの一件を済ませることにした。お礼を伝える場面にしては微妙な空気を醸し出していたが。

「あ、あのね、カウスさんが、わたしを運んだお礼はクイシエちゃんに」

「あ、ううん、ぜんぜんいいよ。そんな」

深鷲の後ろで行われている格闘戦が気になって、いまいち反応が悪いクイシエ。クイシエは深鷲とは違い、ケンカ自体ではなく“深鷲の目の前でケンカをされていること”を気にしていたりする。

深鷲もケンカがどうなるのか気になり、クイシエの横に並んで見物モードに入る。

お互いの拳が頬に突き刺さった。見事なクロスカウンターだ。そこからお互いにボディーブロー、アッパー、ストレート、多彩な殴り方がお互いに乱れ飛ぶ。

「お師匠さん、年のわりにすつごいね……？」

ギュランダムは白髪白髭でシワも豊富な、見た目完全に老人であるにもかかわらず、破れたロープから見える肉体は筋骨隆々としていた。マツチヨで肉厚という印象ではなく、樹木のように絞られた

強靱な筋肉だ。

クイシエは何かを躊躇するように、質問に答える。

「あの……お師匠様も一応、獣人だから」

「え、そうなの？　というか、そうだ。獣人さんたちについて聞きたかったんだけどすっかり忘れてた」

昨日の夜に聞こうと思っていたのに、と思い出した深鷲はいま聞いてしまうことにした。

「そっか、獣人はミサギちゃんの国……世界にはいなかったんだ？」
「うん、わたしのところは肌の色と髪の色が何種類かあるだけ。多
少体質とか能力とかにも差があるようなような気がするけど、そん
なに人種での大差はなかったかなー？」

少なくとも殴っただけで人が吹っ飛ぶ程の差はなかったはず、と
考える。それにお互い少なからずクリーンヒットしているのに、派
手な見た目ほどはダメージを受けているように見えない。かといっ
て手加減しているようにも見えない。

そして、ギュランダムの巨体を浮かせるほどの拳を振るうカウス
もなかなか異常だ。

カウスが深鷲の感覚ではすでに平均以上の身長（耳は身長に含め
ていない）であるにも関わらず、ギュランダムは老人でありながら
さらに頭1つ分高いのだ。2メートルを超えていて、腰も曲がって
いない。

この2人が特別に体を鍛えていて、頑丈なのだろうか。

「獣人って言うのは……うーんと、人間と魔獣が混ざった感じ」

「……ハーフってこと？」

「……ええと……合体……あ、融合だ。融合したの、2対1対1の割合で……」

（……スライム？）

融合と聞いて、ドロドロしたものがかくつついていく姿を連想した深鷲は、人がどろりとした魔獣に食べられていくようなように思い浮かべてしまった。

なおもクイシエの説明は続いていたが、微妙な顔をしていたのだろう、深鷲の表情を見て、クイシエは申し訳なさそうに謝り始めてしまった。

「ご、ごめんね、うまく説明できなく

」

「【巻き風砲】っ！」

クイシエの声をかき消すように響いた声。発動した魔導術が風の渦を撃ち出した。

渦はケンカする2人をまとめて吹き飛ばし、2人は民家横に積み上げられた箱や樽の中へ突っ込み、そのまま崩れて下敷きになった。

（またなにか光った？）

視界の外に光を感じた深鷲は、振り向く前にその声を聞いた。

「いい大人が子供の前でケンカなんかしてるんじゃないよまったく

」

見れば、ネコ耳ネコ目ネコ尻尾のお姉さん、フリネラがそこにいた。

#17話：獣人と髪の色

「あ、フリネラさん。こんにちは」

「こんにちは」

クイシエと深鷲^{みさぎ}が挨拶すると、呆れ顔が一変、笑顔で軽く手を振るフリネラ。

「こんにちはは2人ともー、なんの話してたのー？ あのバカどもがうるさくて聞こえなかったんだー。ていうか、クーちゃんも遠慮無く吹っ飛ばせばいいのにー」

「え、一応お師匠様とカウスおじさんですし……あの、ミサギちゃんが獣人について教えて欲しいって……でもわたし説明下手で」

しょんぼりとしているクイシエの頭に、ポンと手を置くフリネラ。獣人に、直にそういうことを聞いても良いのかを悩んでいた深鷲だったが、そのことも含めてフリネラに訪ねてみた。

「あー、確かにそういうことを気にするのも、いるにはいるけど、この村にはいないねー。この国、差別とかないしー」

それにしてもほんとーになんにも知らないんだねー、と深鷲を不思議そうに見るフリネラ。

「まあ、根っこから説明しようとするとか“魔族”とかの話からしないといけないし、とりあえず簡単な特徴とか、見分け方を教えてあげれば良いんじゃないかなー」

「うん、簡単にで良いから、説明してくれたら嬉しいな」
「ありがとう、ミサギちゃん」

改めてクイシエは説明を始めた。

獣人は獣の要素を持つ人間である。

基本的に人のシルエツトに耳や尻尾、体毛や爪が生えたものが大半で、4つ足で歩くような獣人はほとんどおらず、指が獣のように不自由であることもない。獣と人を、人間寄りに掛け合わせたような存在だ。

種類差、個体差はあれど、その多くは人よりも強靱な肉体を持ち、また寿命は人の約2倍ほどであることが多い。

例外的にかなり長命な種も存在しているようだが、逆に人よりも短命であることはないという。

「はい、ここであたしに注目ー。さて、あたしは何歳に見えるー？」

深鷺はフリネラをじっくりと観察してみた。

そして、この世界の年齢の計算方法を知らないことに思い当たる。

「えーと……ちなみにだけど、クイシエちゃんはいくつなの？」

自分よりも小柄でかわいらしいクイシエを見ながら、11、12くらいかなーと予想する深鷺。

「わ、わたし？ あ、15だけど……」

「え……」

思わず意外さを声に出してしまった。

「……ああ、そうだ。この世界の1年って何日？」
「360日だよ？」

1年は12の月、1月は30の日、1日は24時間で分けられているという。深鷲の知る暦（じゆみ）とほとんど変わらない。

（……………年上だ！？）

平均身長ほどである自分より目線が低く、雰囲気からもてつきり年下だと思っていたクイシエは、1つ上だった。

（いや、まあ同学年という可能性もあるか）

「ミサギちゃんはいくつなの？」

「えーと、14だよ」

「あ、そうなんだ」

途端、両手を合わせて嬉しそうな表情になるクイシエ。

「同じ年くらいかなって思ってたんだけど、当たってた」

深鷲はクイシエから見れば同じ年だったのかと、正解を喜ぶクイシエを見て思う。

しかしクイシエは、年齢が当たっていたことではなくほぼ同い年だということを喜んでいたのである。友達は同世代で作るものだという、今まで読んだ物語から得たイメージに基づくものだ。

深鷲は内心驚いてはいたものの、1つ2つの年の差なんて気にするような性格でもない。今更それで接し方を変えろというのもない話だった。

深鷲は頭を切り換えてフリネラの年齢を考える。

「えーと、ということは……」

クイシエの年齢見積もりに誤差があったとはいえ、現代の人類と見た目的にはそう変わらないと判断し、人種や世界は違えど、雰囲気なども考慮した結果、深鷲はフリネラの年齢を20代前半と予想した。

「2……2、くらいに見えます」

「正解ー！」

ばちばちーと手を軽く叩くフリネラ。このジェスチャー、この世界でも通用するんだ、と深鷲は思った。親指同士を付けたまま指先だけで叩いているという違いがあるが、それが単にフリネラの個性なのか共通の習慣なのかはわからない。

そういえばクイシエから借りてる言語知識にも拍手という単語があるな、と言葉を確認した。

「といつても、22才ってわけじゃないわよー？ 本当は44才ね。獣人の見た目と年齢の差はちょうど倍掛けなことが多いから。だから、正解ー」

深鷲にはとても信じられなかったが、本人がそうだというのだからそうなのだろう。

この若さで44才。完全に親の世代である。
肌年齢とかを気にし始めていた母が聞いたらどんな顔をするだろうか。

「まあそんな感じねー。あと、見た目あんまり人間と変わらない獣

人の見分け方だけどー」

「見た目が変わらないって……どういことですか？」

説明するのはクイシエの仕事、と目配せするフリネラに従い、深鷲はクイシエの方を向く。

「あ、あのね、耳とか目とか、目立つところにあんまり特徴がないと見分けが付きにくいことがあるの」

「ああ……尻尾とか、服で隠れちゃうって事か」

「うん、そういう場合は色を見ればわかりやすいの」

「色って……髪の毛の色？」

「人間なら金か銀か銅の3種類しかないから、それ以外の色は基本的に獣人か“魔従士”なの」

「そうなんだー……魔従士？」

また新しい言葉が出てきて興味が向き始める深鷲。しかし一気に聞いても憶えられるか自信はない。

「うーん、常識って、改めて説明するの難しいもんだねー。まあ、魔従士のことはまた今度ー」

（難しいというか、面倒くさいよね、きつと……）

説明されている立場として申し訳ない深鷲だったが、知らないモノは仕方がないのだと2人のことをありがたく思いながら、クイシエの説明にしっかりと耳を傾ける。

「獣人の色は灰色か茶系がほとんど。あとは柄があったりもする……かな。わたしもこの村でしか獣人を見たことがないから……」

「ま、村の外でもだいたいそんな感じねー。そして、説明させてお

いてなんだけど、この見分け方はあんまりあてにならない場合も多いかな」

あえて見分けられないようにしている獣人は、そもそも髪の色まで染めるなりして変えている可能性が高い。逆に、人間が髪を染めている場合もある。あと、老いてしまえば皆白髪である。

「ち、近くでしっかり見たら、ばれちゃうかもしれないけど……」

そもそも、この国では獣人や人間がその種族を隠さなければならぬような要因がないため、このあたりで暮らす分には知らなくとも困らない知識ではあるという。

「なるほど……説明ありがとう、クイシエちゃん」

「う、うん。どういたしまして」

今度はもっとうまく説明できるようになると決心するクイシエだった。

「ところで、クイシエちゃんの場合はどうなるの？ 髪の毛、まるで水晶みたいで凄く綺麗だけど……テンシ？」

「テンシじゃないよう」

「……テンシってなあに？」

クイシエには天使がどういった存在であるかは説明済みである。深鷲の独断と偏見に基づいた天使像からは『天の使いである』という根幹部分がすっぱり抜け落ちていたが。

「なるほど、確かにクーちゃんならテンシがぴったりね」

「フリネラさん……」

照れながら下を向くクイシエをつつくフリネラ。

「ええとね、わたしの髪はさっき言った魔従士の関係で、キーちゃんのおかげなの」

「あ、キーちゃん、やっぱり関係あるんだ」

名前を呼ばれたからか、クイシエの服の中から水晶色の毛玉、ネズミのキーちゃんが現れた。

「キーちゃんと契約して、この髪にしてもらったの」

「契約かあ。えーと……使い魔？　でいいのかな」

魔従士という響きから連想した深鷲のファンタジー的知識と【言語移植】によって与えられた言語知識がすぐに結びついた。

「あ、うん。合ってるよ。でも、キーちゃんは友達だよ」

「わかってるよー」

なぜか自分には懐いてくれない水晶色のネズミ。クイシエの掌でキラキラと光を反射している。

（似合ってるなー……どうしてわたしからは逃げちゃうのー？）

指を近づけるとクイシエの腕を駆け上り、髪の毛の中に隠れてしまった。同じ色なのでとても見づらい。もしかして定番の隠れ場所なのだろうか。

深鷲はもう少し詳しい話を聞いてみたかったのだが、キーに気を取られている間にフリネラが会話を締めてしまった。

「ま、説明事はこれくらいにして、ちょっとお姉さんに付き合ってくれるかなー？」

「あ、お手伝いですよね」

そういえばお仕事を貰いに来たのだつたと、本来の目的を思い出して気持ちを切り替える深鷲。

その通りー、と嬉しそうに深鷲の両肩を掴むフリネラは、期待に満ちた笑顔で確認する。

「なんでもミサギちゃん……、お風呂の国からやってきたらしいじゃない？」

#18話：フリネラの実験浴場

昨日の晩のこと。

前日は全裸で山を彷徨い歩き、今日は台車を押しながら村中を回った深鷲^{みさぎ}。

クイシエに言われるまでもなく（わたしって元気だなあ）などと、自分のスタミナに感心していたのだが。

（……お風呂に入りたいな）

お湯が溜められた桶を見て、思いを馳せる。

日本では各家庭にかなりの割合で用意されている浴室だが、中世風のファンタジーなこの世界に、果たしてそんなものがあるだろうか。

（確か……中世にもお風呂はあった……はず。でも、サウナっぽいのだったら違うしなあ）

あくまで湯船に浸かりたい。

国どころか世界レベルで生活環境が違うのだから、自分の習慣も大きく変わってしまうことは仕方がない。が、お風呂だけはなんとかあって欲しい。

布で体を拭き終わった深鷲は、お湯を用意してくれたクイシエに感謝を述べた。

そして、なるべく期待しないよう自分に言い聞かせながら、クイシエに聞いてみる。

「ねえ、クイシェちゃん……この村に、お風呂って、あるかな？」

「うん、あるよ？」

「あるの！？」

「……………あつ！ ごめんね！？ お風呂に入りたかった！？」

「あー、明日でいいよ！ 今日はもういいから！ ごめんね 変なこと聞いて！」

慌てて着替えや手ぬぐいを用意し始めたクイシェを止め、この村のお風呂事情について聞いてみる。

「あ、あのね。フリネラさんのお家が……公衆浴場になってるの。お風呂研究してるから」

「お風呂研究って……ニユウヨクザイ作ったりとか温泉掘り当てたりとかするの？」

「ニユウヨクザイ？ はなんだかわからないけど、温泉は大好きみたい」

（猫なの？）

猫は濡れるのが嫌いではなかったか。

いや、気持ちよさそうに風呂に浸かるネコもいたっけ？

「もしかして、ミサギちゃん、お風呂に詳しくかったりするのかな？」

「んー、詳しいほどではないと思うけど……」

「ミサギちゃんの知ってる話を聞かせてあげたら、フリネラさん喜ぶかも」

というような前置きがあったので、フリネラがお風呂国出身者だと言ってきた事は、すんなりと理解できた深鷺。

「さつき待ち合わせはお昼って伝えたときに、昨日のことを話したんだけど……」

と、クイシエがなぜか申し訳なさそうにしていた。
期待の笑顔を絶やさないフリネラは、勢いよく語る。

「各家庭にお風呂がある上、公衆浴場や温泉街なんてものまでもが国中に存在している……そんな夢のお風呂王国からやってきたなんて……！ ミーちゃんはあたしにとってテンシね！」
「てん……」

教えたばかりの言葉を使われた深鷺。言われる側になってみると恥ずかしかった。

自分のあだ名らしき呼称にも内心突っ込みを入れる。

（限りなくネコっぽい人にミーちゃん言われた……）

身振り手振りが愛らしさとしなやかさを備えたフリネラの動きは見ていて飽きない。これは猫系獣人である以前に本人の資質もあるのだろうか。

動きの表現が明確にテンションも表しているらしく、

「ところで、そんな国本当に実在するのー……？」

フリネラのテンションは疑念と共に急下降したようだ。

「異世界でよければ……」

王国じゃないですけどね、と深鷲はフリネラに自分の身の上を話した。

すでに信じてくれているクイシェがいる分、話はスムーズに進んだが、深鷲はフリネラや村の人たちがあんまり自分のことを理解できていないということに思い至る。

（そりゃそうだよなー……でも、ということは、なんだかよくわからない小娘だつていうのに、こんなに親切にしてくれてるのか……）

村中を巡った、昨日のお手伝いを思い出す。

あれは深鷲が早く村に馴染むための心遣いだったと思っている。みんな優しそうな人ばかりで、深鷲は滞在2日目にして“見知らぬ村にいる”ということにはほとんど不安を感じなくなっていた。

クアラ村の暖かさを感じつつ、今後はちゃんと自分の正体を説明していかねければと心に留め置く。

誠意という意味もあるが、なにかしらのとっかかりくらいは見つけなければ、なにを調べればいいのかすらわからない状態なのだ。少しでも正確に自分の状況を知ってもらうことは手がかりにつながるかも知れない。

深鷲は不幸中の幸いという言葉を出した。

不幸なことに異世界に迷い込んでしまったが、幸いなことにこの村は魔術の専門家がたくさん住んでいる。

そんな村ですら今のところ『召喚』に類する情報がまったく出てきていないというのは不安の材料ではあるが、もしかすると自分は最も頼りになる人たちのいるところに現れたのかもしれない、とも思う。

「他の世界から来た……そういえば、そんなことをギュランダムから聞いたわねー。なんか話半分で聞いちゃってたけど、そんな事情だったのー」

どうりでなにも知らないはずだ、と納得顔のフリネラ。

「信じて貰えるんですか？」

「だって、本当なんでしょー？」

「そうですけど……」

自分でも未だに信じられないような事を、簡単に信じて貰えることが、信じられない深鷲。

「不思議なものなら今までも、そこそこ見てきたからね」

こんなのかー、と言ったフリネラの指先から虹のような光が浮かび出て、少し漂うと泡のように消える。

なるほど、と深鷲はあっさり納得させられてしまった。

「さーて、とうちゃくー」

フリネラが案内した先は、またしても深鷲が昨日訪れなかった村はずれに位置する家だった。

村の中心にある広場を挟んで、ギュランダムの家とはちょうど反対に位置する建物だ。

2階建てになっている家があり、入り口を正面とした左側の庭は木の板で作った背の高い、隙間のない柵で覆われている。その範囲は家よりも広い。

家の扉の上には大きな文字で『クアラの湯』と書かれていた。

「ようこそ、あたしの実験浴場へー！」

「さてー。さつそくだけど、わたしが作ったお風呂について意見が欲しいのー。協力してくれる？」

「お風呂に入れるなら、いくらでも……！」

広いお風呂は大好物だ。外で見た柵の内側は露天風呂になっているらしい。

建物の中はまず脱衣所になっていて、フリネラの生活スペースは二階にあるそうだ。

赤青で分けられた暖簾のれんは見当たらない。

「えーと……混浴、じゃあないですよね？」

「2つに分けるのは手間だから時間で分けてるんだけど、心配しなくても今は貸し切りよー？」

まあ、どうせあんまり繁盛してないんだけどー、と付け足すフリネラ。

フリネラとしてはもっと爆発的にお風呂を普及させたいと考えているのだが、この村の住人たちはそんなことよりも自分の研究第一、といった感じで生活しているので、毎日お風呂に入りに来る人はいない。

現在この浴場は、たまにのんびりと過ごしたいときに誰かを誘っ

てくつろぎに来る、というような使われ方をしている。とはいえ、そこも専門家ぞろいの村人、交わされる会話も非常に専門的なものであるらしく、あまり風流さを楽しむような雰囲気では無さそうだ。

なお、料金は使い心地の感想や要望、改善案などの提示である。

「でもこの連中の要望を聞いてると、ゆっくりと入浴を楽しむって感じじゃなくなっちゃうのよねー」

脱衣所には『魔術使用・実験禁止』と書かれた張り紙があった。

「とりあえず浴場入ろうかー。見せたいものは全部中にあるし、お風呂に入れば良いアイデアが出るものねー」

「よろこんでー!」

お風呂の国代表として張り切る深鷺。

「わ、わたしも良いですか？ あ、途中で【言語移植】の効果が切れちゃうかもしれないし……」

「もちろんいいわよー?」

あっという間に手ぬぐい1枚になった深鷺はさっそく浴場の扉を開いた。

#19話：湯沸かし魔導線と二指魔導書

「わー……思ったより“ワフウ”ー」
「わふー？」

なんとなく外国風の風呂を想像していた深鷺^{みさぎ}だったが、親しみのある光景に喜んだ。

「建物に回せる予算があんまりないから簡単な露天風呂になっちゃったんだけど、それでもいろいろこだわってるのよー」

フラフラとネコ尻尾を揺らしながら、楽しそうに解説するフリネラ。

入り口からは足場として平らな岩が続いていて、回りには素足で踏んでも足を痛めないような、丸みのある石が敷き詰められている。平らな岩の上を進めば浴場の真ん中に石造りの大きな浴槽が掘られていて、ほかほかと湯気が立ち上っていた。広さは馬車と馬がそのまま入っても、まだ少し余裕がある程度。団体客が来るとキツそうだが、家族連れくらいならかなり広々と使えるだろう。少しくらいなら泳ぐこともできそうだ。

水音のする方を見ると、どうやら壁に取り付けられた流しそうめん台のようなものが水道になっているらしい。どこからか水を引いているようだ。

そして壁際に並ぶ、大小様々なサイズの容器が目に入る。

鍋、釜、鍋、釜、缶、壺、釜。

「この、周りにあるのは……」

「全部、今までに作ったお湯を沸かすための魔導具、あるいは風呂釜そのものねー」

ひととき大きな釜に近づいて中を覗いてみる深鷺。人1人が浸かれる大きさだ。

「これは中に水をためて、鍋を熱して直に湯を沸かす風呂釜なんだけど、温度調節がうまく行かなくてお蔵入りになってるのよ」

「ゴエモンブロ……？ えーと、下で火を焚いて沸かすんじゃないですよ？」

「まさかー、ここは魔導師の村なのよ？ もちろん魔導術で沸かすに決まってるじゃないー」

ちよつとまつてねー、とフリネラは壁に取り付けられていた水道を備え付けの板でせき止め、そこから釜までの間に筒を渡す。

せき止められた水が溢れて筒を通り、鍋に流れ込む。

やがて釜に充分な量の水が溜まった。

「でもつて、こう……あ、釜は熱くなるから気をつけてね」

釜のふちから、両手を乗せられるくらいの板がちょこんと飛び出している。フリネラは板にある長方形の窪みに、傍らの箱から取り出した魔導書をはめこんだ。

表紙の図に指を合わせて魔力を流し込むと光が生じ、その光は釜の表面を巡り始める。

（またこの光だ……それにこの模様、どこかで見たような……）

表面にはうつすらと幾何学的な紋様が刻まれていたらしく、光はその紋様に沿って流れているようだった。

深鷺の視界には何ら光ることのない鍋の表面が見えているが、同時に光も見えているように感じる。

これが“魔光現象”であるということを、まだ深鷺は知らなかった。

（……あつ！ これ、『召喚』された場所の、床の模様と、なんか似てる……？）

フリネラは魔力を流し続け、しばらくすると水面が泡立ってきた。

「……という風に、釜を直接熱してお湯を沸かすの。ちなみに、村で使ってる調理鍋とかは、これと同じ仕組みのを流用したものねー」
「え、そうなの？」

クイシエが頷く。

「うん、そうなの。そういえば、お鍋とか見せてなかったもんね」

（この村の台所ではIHヒーターが使われてるのか……）

磁力線ではなく魔導術での加熱だが。

よくよく思い出してみると、クイシエの調理中は薪の弾ける音もなければ煙も出ていなかったように思う。火をくべる炉だっけって見かけない。自宅もそうだったからと、深鷺は特に違和感を感じていなかったようだ。

「……あ、体冷えちゃうね。ごめんごめん、お風呂入ろっかー」

紹介に夢中になってた、と反省しながら、2人を真ん中の湯へ促すフリネラ。

3人はゆつくりと浴槽に浸かり、体を伸ばしていく。

深鷺は2人の真ん中に位置取り、伸びをしながら深く息を吐いた。気になること、不安なことはいろいろあるが、今は至福の時、という感じた。

クイシエの長い髪は布でまとめられ、湯に浸からないようにしてある。深鷺はあの水晶色の髪が水面に漂うとどうなるのかがちよつと気になった。

フリネラは首から背中と二の腕あたりにかけてと太腿に、獣人の証である猫っぽい体毛が生えている。

猫が水に濡れたときのへちゃつとした貧相なイメージは、猫系獣人であるフリネラにはまったく見られず、むしろ体のラインが際立っていた。

(これが40なかばのボディライン……?)

フリネラがポーシングを始めてようやく、深鷺はフリネラの体を凝視していたことに気が付いた。

「見とれちゃったー? ふふふー」

「あはは……」

「?」

慌てて眼を逸らす深鷺。クイシエは気づかずに、先ほどの話を続ける。

「あのお鍋のおかげで、料理がだいぶん楽になったの」

「あたしとしては失敗作気味なんだけどねー」

深鷺にはどのあたりが失敗作か思いつかなかった。風呂釜として

も、なんの問題もないように思う。温度調節といっても熱し続けなければ良いだけの話だ。あるいは加熱しすぎてしまうのなら水を足せばいいだけに思える。

火を使わないだけ燃料費も浮くだろうし、恐らく火を用いるよりも短時間で沸いたはずだ。

「一番の問題点が……専用に調整して作った【加熱】の魔導書が、どうしても二指魔導書になっちゃうのよねー。わたしが目指しているのは“どこでも誰でもお風呂が楽しめる道具”だからー」

「二指魔導書ってそんなに難しいんですか？」

「難度的には専業魔導師にはそれほどって感じなんだけど、1カ所に集中すればいいだけの一指と、指ごと個別に意識を分けなきゃいけない二指との間には壁があるのよね。二指ができてしまえば、それ以降はなんていうか反復訓練でどうとでもなるんじゃないかって思ってるんだけど……」

この特殊な実験村に住んでいる魔導師たちですら、一指魔導書までしか扱えない者が3割もいるそうだ。

術師として優秀かどうかは、研究者としての優秀さと比例するわけではないので問題はないらしい。

魔導術自体まったく扱えない深鷲にはよくわからない感覚だったが、どうやら魔導師全体の内の半数ほどは一指魔導書しか扱えないと考えれば良いそうだ。

「まあ、そのあたりのことはこの村で他に研究してる人がいるから、そっちの成果を期待しても良いんだけどねー」

魔導術の修得を容易にするための研究を行っている人がいるらしいと聞いて、深鷲はその人に術を習ってみようかと思いつつ、先ほど思い出した事について質問する。

「あの、ところで、あの表面の模様ってどういう意味があるんですか？」

釜の表面を指しながら言う。

「いま、これを見て思い出したんですけど……わたしが最初に飛ばされた場所の床に、たぶん同じような模様があったんです」

「えーとー……真っ暗な儀式場らしきところ、だっけー？」

フリネラはギョランダムと深鷲からそれぞれ聞いた話からイメージした儀式場を元に、床に紋様が刻まれていた場合の事を考えてみる。

気が付いたら暗い部屋にいたこと。周りには柱が立っていたこと

……

「それで、大勢いる中に囲まれるようにして真ん中にミーちゃんが出て……杖があったのよね？」

「はい。クイシェちゃんのお師匠さんが言うには、多分杖だろうって」

「それだとー……たぶんだけど、周りにいた術者達がその杖に向けて魔力か魔術を流してたか、流す予定だったんだと思うわー。この線は『魔導線』って言って、魔力を流すための道なの」

魔導線。あるいは単に導線とも言つ。

魔導書にマジックインクで書かれている線と基本的には同じもので、魔導術の前身となった技術の1つだという。

この釜に描かれた導線は魔力そのものではなく【加熱】の効果を均等に分配するために用いられている。

もし導線を用いていなければ魔導書を置いた板部分からしか熱が伝わらず、鍋全体を加熱するよりも先に、接している魔導書自体が焦げてしまうと、フリネラは説明した。

「儀式のほうは……それ以上はわからないけど、杖がミーちゃん、あるいはその両方に“魔術”でなにかをするつもり、あるいはした後、だったんでしょーねー」

「わたしを山に飛ばしたり……とかですか？」

「うーん……そんな術が存在すれば、だけどね……」

瞬間移動に類する魔術は、フリネラが知る限り存在していないらしかった。

「魔導術、じゃなくて魔術、なんですか？」

「導線自体は凄くシンプルで応用性の高い技術でねー。やろうと思えばいろんな術と組み合わせられるのよー。というか、魔導術の関連技術のほとんどが、他の術系統を元に作られてるってことなんだけどー」

説明を聞きながら、深鷺は自分の膝のあたりに視線を落とす。

（魔力が流されたか、流されるはずだった杖とわたし？ ……どういうことなんだろ……）

水面をじっと見つめて考え込んでいる深鷺。

クイシエはなにか声を掛けようとしたが、突然ハッと柵のほうに目を向け、小さく呟いた。

「……………やっぱり、来た……………！」

#20話：おふろのロマン

考え込んでも仕方ないか、と前向きでいられるのはあたたかい湯のおかげだろうか。

不安なことは忘れて、フリネラとお風呂トークを再開した深鷺^{みさぎ}は、元の世界の様々なお風呂知識を紹介していた。

サウナ。

打たせ湯。

水風呂。

入浴剤。

温水プール。

ユニットバス

「確か……お風呂を部屋ごと作っておいて、家を建てる時にはそれを組み立てるだけで作れる浴室……だったはず」

「凄いわねー。あたしもそういうのが作りたいと思ってるんだけどー……まだまだ先の話かなー」

「あと、蒸し風呂とかは多分この世界にもあるかなーって思ってるんですけど」

「うん、あるよー。あたしは温水プール？　っていうのが気になるわー」

「温水プールは……ええとこの世界って、泳いで楽しむ習慣ってあります？」

「泉とかで水浴びするついでに泳いだりはする、かなー？　遊びとしては……どーだろ、あんまり聞かないかもー」

「名前の通り、暖めた水で泳ぐ、遊び場です。厳密にはお風呂じゃないので、裸では入りません。ミズギを……下着に似た専用の服を

着て入るので、男女共用、混浴です。大きい施設になると、スベリダイとがあります」

「スベリダイ？」

「えーと……板の坂を滑り降りる、子供向けの遊具があるんですけど、その凄く大きくて細長いものがあって、そこを……その壁にある水道みたいに、水が流れてるんですよ。そこを滑り降りするんです」

指でぐるぐると滑り降りるようを描く深鷺。

「娯楽施設に随分と力の入った国なんだねー……というか技術レベル高そうー」

「たぶんですけど、魔術抜きでこの世界と比較したら、数百年以上の差があると思います」

でもさっきの鍋はこっちの世界では最新技術です、と深鷺は付け加える。

魔導術というのは元の世界における電気の発明に匹敵する技術なのではないか、とIHヒーターもどきの存在から連想していた深鷺は、約束通り研究の役に立てることはないだろうかと真剣に頭を回転させ始めていた。

（あーでも……のぼせそうー……こういうのはトキちゃんの得意なところなんだけどな……）

成績優秀な双子の妹のことを思い出しながら、また思考が逸れたとあわてて軌道修正する。同じ事をずっと考えているのは苦手な深鷺だった。

（電化製品、照明、テレビ……いやいや、フリネラさんはお風呂専

門家だ。電気からは離れよう。あと紹介してないのって、なんだっけ……)

「あ」

「んー？」

「さっきの魔導線の釜って、その、術は……ええと……」

「【加熱】？」

「あ、はい。その【加熱】しか流せないんですか？」

「ううん、あのタイプの導線は魔術の効果をそのまんま流し込めるから、【加熱】じゃなくても問題はないよ」

「じゃあ、なにか、空気を出すような魔導術ってないですか？」

「空気を出す……動かす、じゃ駄目なのかな」

「たぶん……えーとですね……」

深鷲が提案しているのはジェットバスだった。導線の先から勢いよく空気を噴射することができれば、あの釜を流用して、すぐにも実現できると考えたのだ。

「面白そうなお風呂ねー！」

「泡が当たると気持ちいいですよ。足の裏とかくすぐったいんですけど」

勢いを調整して、沸騰しているように見せかけたりするのも楽しいかも、と地獄風呂ごっこを提案したりする深鷲。

これは名案だと思ったのだが、深鷲にとっては意外なことに『空気を生み出す』という効果の魔導術はマイナーであるらしく、少なくともフリネラは術式を知らなかった。

「基本的にその場にあるものを利用する術のほうが使う魔力が少なくて済むし、いろいろと楽なのよねー」

先ほどフリネラのが男2人を吹き飛ばした魔導術【巻き風砲】も、風を生み出す術、空気の流れを生み出す術であり、空気そのものを発生させる術ではないという。【加熱】がどうしても一指魔導書にできない原因も、熱をゼロから生み出しているからであり、他から熱を持ってこれるなら簡単に一指化が可能かもしれないらしい。

「でも、面白そうだから作ってみるわ。空気関係の術式を知ってる人にも当てがあるしー。ありがとねー！」

嬉しそうなフリネラをみて、少しは役に立てたと思うことにした深鷲。

頭脳労働は苦手なところをよく頑張った、と自画自賛しつつ改めてリラククスしようと体の力を抜く。

そこで、全然話に入ってこなかったクイシエのほうに向き直り、実はさっきからずっと気になっていた事を聞いてみる。

「ところで……クイシエちゃん、どうしてそんなにくっついてるの？」

ミサギの横にぴったりと、しかしなぜか壁のほうを睨みながら構えているクイシエ。

「き、気にしないでいいよ？ ……あ、嫌だった！？ ごめんね！？」

「うつん、別に嫌じゃないけど……？」

ザバツと水音をたてて急速に離れたクイシエをおいでおいでーと手招きする深鷲。くっついていてること自体は、妹といつも一緒に風

呂に入っていたのでさほど違和感がなかった。

しかし、どことなく真剣そうにしているのは少し気になる。
クイシエは今、こんな事を考えていた。

（ミサギちゃんのハダカは、わたしが守る……！）

その視線は クイシエの超感覚は、壁の外にいる存在の魔力を明確に捉えていて

湯気と少女の覚悟が漂う浴場の外側、木造の柵1枚に隔てられた場所。

そこまで、あと100メートルほどのところで、背の高い老人が足を止めていた。

「おぬしも、こんなところで油を売っているとは暇人じゃのう。さつさと仕事に出掛ければいいものを……」

ギュランダムの足下には矢が刺さっている。壁を飛び越えようと助走を付けていたところを足止めされた形だ。

そして足止めた若者……に見えるが、クイシエからはおじさんと呼ばれていた犬系獣人のカウスが、木の陰から現れる。

先ほどカウスが広場に来ていたのは、フリネラに呼ばれてのことだった。

確実に覗きにやってくるだろうギュランダムを追い払う役として呼ばれたのだ。

どうせ暇でしょー？ という心外な一言付きだった上、呼んだ当人に吹き飛ばされてしまったが。

対峙した2人。

すぐにカウスが動き出す。遠距離攻撃が豊富な術者とやり合うためには、接近戦が望ましいとの考えだ。

「村を“ケモノ”から守るのは、狩人の仕事だ、ろ！」

言い終えると同時に矢を放つカウス。鏃^{やじり}は付いていないとはいえ、当たればただでは済まないだろう1撃を、ギュランダムは片手を振って生み出した魔術の風で逸らす。

「まだまだじゃのう？」

「これからだ！」

すでに次の矢を番^{つが}えたカウスは2発目を放つと同時に弓を捨て、ギュランダムに向かって駆けだした。

（遠距離戦では埒が明かねえ。隙を見て浴場に飛び込まれても困る。格闘戦で仕留めるしかない！）

2発目も同様に逸らしたギュランダムは接近するカウスを見て片足を上げ、魔光を灯したそれを地面に叩きつけた。

「【咲き土】！！」

ギュランダムの周囲の地面が腰の高さほどまで一気に盛り上がった。名の通り、花が咲くようにめくれ上がる土がカウスの行く手を阻む。

「ふっ！」

そのまま次の術の集中に入っているギュランダムを見て、カウスは後ろ手に構えていたロープを投げつけた。ロープは咄嗟に打ち払おうとしたギュランダムの輝く左腕に巻き付いたが、ギュランダムは構わず術を発動させる。

「【巻き風砲】――！」

ロープを思い切り引き戻しながら体を拗^{ねじ}って風の渦を回避するカウス。片足が渦に持つていかれそうになったが、バランスを崩しながらも地面にへばりつくように着地した。

腕を引かれてバランスを崩されたギュランダムと睨み合う。

「漢のロマンを邪魔するとはそれでもおぬしは男か！ 女の裸を目の前にして覗かんとどころかそれを妨げようとは！」

「目の前にはねえだろうがエロジジイ！ 痴漢のロマンなんぞ知ったことか！ テメーはなんでそんな自信満々に当然の如く変態的なことを偉そうに！」

そう言っている間にもロープによる引き合いと魔導術の発動は続いている。

【咲き土】によって掘り返された土壁は、ギュランダムの【散土弾】により飛び散った。

カウスは叩きつけられる土から片手で顔を庇いつつ、ロープを巧みに操り、ギュランダムの体制と位置関係をコントロールする。

互いに位置を変えながら、拳とロープと魔導術が入り乱れる。

威力と間合いにおいてはギュランダムが優勢だったが、左腕に巻き付けられたロープにより行動を制限されていた。

現役の狩人であるカウスに劣らぬ超人的体力を誇る老魔導師ギユランダムだが、日々魔獣を相手に鍛え上げられているカウスの『縛戦闘術』には苦戦を強いられているようだ。

縄縛戦闘術は相手の動きを阻害しつつ、自分は相手の動きを利用・制限して常に有利な状況を作り出す接近戦闘術だ。

一瞬でも隙を見せれば絡んだロープを利用され、あるいはさらなるロープにより拘束箇所を増やされるが、当然ロープを切ってしまうと解放される。

しかしロープを切るという行動自体が隙につながるため、ギユランダムには多彩な魔術というアドバンテージがありながらも縄を切る暇すら無かった。

「この先の光景は……老い先短いわしに用意された冥途の土産なんじゃ！」

「土産は後で持っていてやるから先に冥途へ渡れ！」

心底嫌そうに叫ぶカウス。心底惜しそうに嘆くギユランダム。

（騒ぎ過ぎた……急がねば風呂から上がってしまうのではないか……！）

どうしようもなくエロジジイなギユランダムは、焦りを見せると片足を上げた。魔光がその足に灯る。

「ぬう………！」

「は、もらったぜ！」

【咲き土】の発動後、土が防壁へとめくれ上がるまでには一瞬のタイムラグがある。

足に灯った魔光を見て、この隙を使ってギュランダムを完全に拘束できると踏んだカウスは、【咲き土】の発動を待たずに防壁の発生地点を越えるよう、ギュランダムへと飛びかかった。

「これで終わりだ！」

「かかったな小僧め！！」

ニヤリと笑い合う2人。

笑みを崩されたのはカウスのほうだった。

「“【巻き風砲】”！！」

「なっ！？」

飛び上がり、空中で身動きの取れないカウスに向けて正確に右手が向けられている。完全拘束のためにロープは動き出しており、今回は回避する術がない。

ギュランダムの足の魔光はただ魔力を活性化させただけのフェイクだった。踏み降ろした足は、足音を立てただけでそれ以外何も起さない。

そしてカウスに向けられたギュランダムの手は魔光を灯していなかったが、それでも術式は完成されていた。

「非活性発動……っ！！」

「ふはは、奥の手じゃ」

「こんなくだらねーことに使っんじゃねーよッ

！？」

風の渦に正面から巻き込まれたカウスは激風に揉まれる中でロープも手放してしまい、そのまま宙高く吹き飛ばされていった。

「あ」

バシャーン、と響く水音。

「「きや」

ッ！！」

#21話：とおいせかいにひとり

「え？」

気が付くと、深鷺^{みさぎ}は山奥にいた。

晴れた青空と、空を隠す深緑色の木々。

枝を揺らす風の音が、木漏れ日をきらめかせている。

太腿に感じるのは草の感触。

手を開いてみると、土ですこし汚れていた。

(……………つまりどういうこと?)

心中の問いに答える者はいない。

お風呂で温まっていたはずが、気が付けばまたもや山の中である。

体は温まっているが、肌は乾いていた。

姿勢は座ったままで、地面が濡れた様子はない。

ぽかぽかと上気している頬が冷たくなっていくのは時間の問題だろう。

緊張と不安から、心臓の鼓動が急に激しくなる。

(なんで……………?)

晴れた空、空を隠す木々、木々を揺らす風、目に刺さる光。

脚に触れる草、冷たい土。

あたりには誰もいない。

深鷺はしばらく放心状態でいたが、このままでは体が冷えていく

ただだと、ゆっくり立ち上がった。

前回同様、杖代わりになりそうな枝を頼りに、人里を目指してみようとする。

(……ないなあ)

今回は、良い感じの枝が見つからない。
仕方なく藪を手で掻き分けて進む。

(……一昨日は運が良かったのかなあ)

サワサワと、気持ちよさそうな風が流れていく。
そういえば先日は風がほとんど無かったと思い出す。

(……ここ、どこなの?)

葉擦れの音がどこからも聞こえ、山の広さを感じる深鷺。

(とりあえず、歩こうか)

前回とは違い、今回は昼間である。
見通しは良いとは言えないが、夜闇よりは良好である。

(足下が見えるから、わりと楽かも)

前回とは違い、おなかも空いていない。
昼食を済ませてからまだ1時間も過ぎていない。

(………獣に遭わないといいけど)

前回とは違い、そこまで寒くはない。

真夜中に歩き回って平気だったのだから、今回も風邪は引かずに済むだろう。

（隠れられる場所、ないかなー）

前回とは違い、枝が見つからない。

でも、よく見える分慎重に進めば、大丈夫。

（大丈夫、クイシエちゃんがきつと見つけてくれる）

クイシエの超感覚は深鷲に違和感を感じているという。その感知能力はとてつもなく広範囲だ。

どこか遠くから、恐ろしい速度で村を通り過ぎていったその違和感を、正確に捉えて深鷲を見つけ出した。

他力本願にならざるをえないことは不満だが、何の力もない自分では仕方のないことだろうと、そのことばかりを考えて歩く。

（大丈夫、クイシエちゃんがきつと）

空と木と風と光。

草と土。

山の中。

森の中。

ここは。

どこ？

世界のどのあたり？

（きつと……）

ここはどこの世界????????

「だっ、えか……！ いまっ、せん……！」

声を出して、助けを呼ぼうとして、ようやく深鷲は自分が泣いていることに気が付いた。

これは夢ではない。ここは日本ではない。それどころか地球ではない。異なる世界だと、知っている。

深鷲の心細さは、自分の状況を知ることにより深いものとなっていた。

優しい村にいたという安心が、異世界という不安と共に山中へ来たことで、あっさりと砕け散ったのだ。

（誰でもいいから！ たすけて！）

生命の危機よりも、知らない世界で1人である事実に押しつぶされそうになる。

深鷲は嗚咽を飲み込みながら、助けを求め続けた。

「ミサギちゃん!？」

目の前にいたはずの深鷲が、掴んでいたはずの手が消えてしまった。

クイシエは自分の目で見た事が信じられず、しかし彼女の超感覚はそれを事実として認めさせようとする。

（ミサギちゃんの違和感が……！）

クイシエが一昨日から感じ続けていた違和感は、一昨日と同じく信じられない速度で遠ざかっていった。

今はかなり遠くにそれを感じるが、意識していれば感知できないほどの距離ではない。

「ミーちゃんが、消えた……？」

浴槽に飛び込んできたカウスを魔導術で吹き飛ばしたフリネラも、深鷲が消える瞬間は目撃していた。

カウスは浴場の端に置いてあった風呂釜に上半身をつっ込んだまま気絶しているようだ。

「ミサギちゃんを探しに行きます！」

「クーちゃんー！？」

浴場から出ていったクイシエは濡れた体を拭く間も惜しみ、手足を衣服に突っ込んでいく。

「あ、こら、そんなことしたら風邪ひくよー！ ちょっと、落ち着きなさいって、どういことなのー！？」

フリネラは、深鷲の衣類を抱えて外へ飛び出そうとするクイシエへ手を伸ばしたが、さほど強く力を込めたわけでもなく、あっさり振りほどかれてしまった。

「ミサギちゃんが遠くにいるんです！ 探さないと！ 助けないと……！」

洞穴でうずくまっていた姿が思い出される。

表に出たクイシエは、一瞬たりとも逡巡せずに魔力を操り始めた。

クイシエの全身に魔光が灯る。

「【獣駆動】……【咆吼】！」

続けて全身の光とは別に、喉から口にかけても魔光の光が現れ、2つの魔導術が発動した。

1つ目の術により脚力が強化され、クイシエが走る速度は2倍以上となる。これはカウスやギュランダムもケンカの際に用いていた、身体能力強化の術だ。

2つ目の術の効果を発揮すべく、クイシエは勢いよく息を吸い込み、自分の耳を両手で塞ぐと、渾身の力を込めて叫んだ。

人の喉から出たとは思えない、大音声が村中に響き渡る。

「緊急事態ですっ！」

自分の声量を何倍にも増幅する、これは拡声の術だった。

「広場に、集合してくださいっ！」

村人たちは、聞き慣れたクイシエの聞き慣れない大音声から焦りの声色を感じ取った。

いったい何事かとつぎつぎに扉を開けて外に出てくる村人たち。村はずれから広場へと辿り着いたクイシエに、村人たちの視線が集まった。

クイシエは咳き込みながら説明を始める。

「けほっ……ミサギちゃんが、山のどこかに、飛ばされてしまいま

したっ……原因は、わかりません、けど……」

息も切れ切れで喋る深鷺の言葉を、村人たちは戸惑いながらも真剣に聞いている。

「いまから、ミサギちゃんを助けに行きます！ 村の結界もまた壊れていますが、わたしは搜索に向かうので、お師匠様に指揮をとって、もらってくださいっ！」

太い樹木を背に、叫び疲れ、力尽きたようにうずくまっていた。それほど時間は過ぎていないだろうと、深鷺は自分に問いかけるが、立ち上がる力は出てこない。

（このまま……）

考えがまとまらず、その続きが思いつかない。考えたくないのかもしれない。

冷たい土に根を張ったかのように動かない。

養分を吸い上げるでもなく、生い茂る木の陰で冷えた山の空気に、体温が少しずつ奪われていく。

気持ちが悪く感じていると、自分でも感じている深鷺。

「ハト兄……トキちゃん……」

たった2日で懐かしいと感じられる名前を、口にした。

(……………ダメだ)

兄妹のことを思い浮かべたことで、少しだけ冷静になった頭が現状の自分を否定する。

(よくわからない不思議なことが起きているのなら、よくわからない不思議な助けがあつたって良いはず……………そう思つて一昨日だって助かつたじゃない)

もとよりカラ元気だとは自分でもわかつていたが、どんな意味であつても、元気がない自分なんて自分ではないと、深鷲は信念のよくな想いを胸に、体を起こした。

(もつと……………自分に都合良く考えよう)

たとえそれが間違いであつても、心が折れるよりは良い。まず元気であること、それが兄妹の中でもわたしに求められていたことだったはずだ。

(この山は……………そう、植物とかを見る限りは一昨日と同じに思える。きつとそんなに遠くない。クイシェちゃんはわたしに感じる違和感なら、半径数十キロくらいまで感知できるって言つてた。わたしを助けてくれた天使だもの。きつと今度も助けてくれる。他力本願で良いんだよ。わたしにできる事なんて、元気でいることくらいなんだ)

そうと決まれば、やはり安全な場所を探すために歩くことだと、深鷲は立ち上がった。

立ち上がるうとして、涙でにじんだ視界になにか妙なものが写り込んだような気がした。

少し先の地面に生えている草が折れている。
草を押しつけているなにか。

黒い毛玉のようななにか。

小動物のような……。

涙のせいでよく見えず、手首で涙を拭う。

もう一度見てみると、そこにはなにもない

(いや……………なんだろう……………この草、どこから生えてるの?)

小動物のようなものが見えていた場所の、地面から数センチ浮いたところから草が生えている、ように見える。

深鷺はゆつくりと近づくと、その草を摘んで引っ張ってみた。すると、なにかがその草に載っていたのか、少しの抵抗を感じた。

見ると、掴んだ草は地面からちゃんと生えていて、そのかわり、隣の草が虚空から生えていた。それは、上に乗っていたものが転がったとしたらその位置にあるであろう場所である。

根本部分が見えなくなった草を引っ張ってみると、今度はまた別の草の根本が見えなくなる。

どうやら根本から先端に至る途中部分が見えなくなっているようだ。それも、見えない部分は“透明になっている”というより

(“省略されてる”、みたいな…………?)

深鷺は草を隠しているなにかに、直接手を伸ばした。

#22話：てのひらの盲点と搜索隊

掴んだモノは軽い。柔らかい毛が生えているらしく、皮と肉の感触があり、わずかな温かさも感じられる。大きさから言って、丁度ハムスターを手に乗せたような感じた。

「う、わあ……………」

深鷺^{みさぎ}が驚いているのは、感触は伝わってくるのにまったくその姿が見えないこと、ではなく、なぜかそれを掴んでいる自分の手も見えなくなっているからだった。

なにかを掴んだ右手は、手首から先が“ほぼ”無くなっているように見える。

手に掴んだなにかを、手のひらを自分に向けるようにして見ているのだが、手のひら部分は完全に見えていない。手のひらにモノをのせているのだから当たり前なのだが、透明なモノをのせているなら手の平が見えるはずだろう。

しかし、のせているモノも、手の平も、どちらも見えない。

（どういうこと……？）

どちらも見えず、その結果、掴んでいる五指の爪先から第二関節くらいまで、つまり掴んでいるモノよりも手前にある部分だけが見えている。

指と指の隙間は見えていないので、それぞれの指は密着しているように見えた。

手の平部分が存在してしないかのように見えなくなっている。

よって、まるで手首から直接爪先が生えていて、その先に第2関節があるかのような節があるかのようだ。

(……き、きもちわるい)

手をゆっくりと近づけていく過程ですでに周囲が歪んで見えていたため、光の屈折や曲げた鏡で姿が歪む、などの現象を連想し、そういった不思議現象なのだろうとある程度直感していた深鷲は、すぐに“それ”を投げ捨てるようなことはしなかったが、正直に気持ち悪がっていた。

ただ、触れた感触は妙に気持ちいい。柔らかくて上等な毛、という感じがするのだ。

掴んだまま手の甲側から見みると、まったく普通に右手の甲と指が見えている。この向きなら掴んでいるものはほとんど視界に入っていないからだろうか。

(……ステルス迷彩、的な……ぜんぜん違う?)

興味が湧いた深鷲はいろいろな角度からそれを見てみるが、どうやっても掴んでいるもの、そのものを見ることができない。どうも掴んでいるモノだけが盲点になっているような感じだった。

盲点とは人間の目にある死角。ごく僅かだが、目の前にあるのに見えないポイント。眼球の中で視神経が通る場所に網膜がないことが原因らしいと、深鷲は思い出す。

片目を閉じて目の前に近づけた指を少しずつ動かしていくと、指の一部分が見えなくなるのが不思議で面白かった、と深鷲は思い出す。

ただ、人の盲点は10数センチ手前の親指の先が見えなくなる程度の範囲で、しかも片目で見た場合の話だったように思う。

目の前にある手のひら大のモノが見えなくなる、なんて事は盲点

では有り得ない。

(……ってこんなことしてる場合じゃないんだった)

好奇心が応じるままに手のひらをいろいろな角度から見ていた深鷺だったが、風の冷たさに体が震え、今がどういう状況かを思い出す。

立ち上がり、安全そうな場所を求めて歩き出そうとした深鷺は、この手に掴んでいる謎の小動物らしきものをどうしようかと一瞬迷う。

「あれ？ 見えてる」

改めて手の内を見てみると、そこには黒い毛玉があった。さきほど涙目で一瞬見えた姿だ。

小動物らしいちんまりとした足が見えているが、顔がどこにあるかわからないくらいのもこもこ具合だ。

ぐったりとしていて、動かない。

(……………死んじゃったの？)

指先で手足を開いてよく見てみると、もこもこの尻尾らしき部位がたらん、と手のひらから落ちてぶら下がる。

尻尾の位置的にこのあたりが顔だろう、というところをつついてみる。

(あ、動いた)

毛の中から鼻を出し、スンスンと匂いを嗅ぐように動く毛玉。いかにも小動物といった動きをみて、瞬間的にかわいい、と思う深鷺。

愛らしい小動物が開いた口の中に、小さい牙が生えているのが見えた。

「げ……痛っ」

毛玉は深鷺の人差し指を噛んだ。深鷺は丁度思い出していた、前々から一度はやってみたいと思っていた昔のアニメのワンシーンに倣^{なら}い、我慢している。

抵抗せず害意が無いことを示し、安心させようと試みているのだが、地味に痛い。

（いたくないいたくない………ほんとうに効果あるのかな、あれ………って、おや？）

毛玉は噛みついたあと、さほど間を置かずに口を離してしまった。そしてすぐに指を舐め始める。

（いやいや、早すぎるでしょ……）

黒い毛玉は夢中といった感じで深鷺の指をチロチロと舐めている。もう懐いたのか、と深鷺はしばらく見ていたが、いつまでも舐めるのを止めない。

ぷくつと滲んできた血の滴が口のあたりに落ちると、前足を使って血をこすり、今度はその前足を舐め始めた。

傷口を、というより血を舐めているようにも見える。

（えー………まさかとは思っけど……）

試してみたくなった深鷺は血を小指に付けて、下の前に差し出してみる。すると毛玉はしばらくそこを舐めていたのだが、綺麗に舐

め取り終わった小指には興味が無くなったのか、人差し指のほうを向いて鼻を動かしている。

吸血動物なのだろうか？

そう考えると、もこもこしてかわいいかもと思っていた毛玉が急に邪悪なモノのようにも見えてきた深鷲だった。そもそも野生の動物に噛まれると、いろいろと病気とか危ないのではなかっただろうか、今更に怖くなる。

「うっ……」

かといって放り投げるのも可哀相と思い、地面にゆっくりと降ろすことにした。しかし毛玉は指にしがみついて離れたく無さそうにしている。

（えー……）

深鷲はしばらくの間、黒い毛玉と見つめ合っていた。

クイシエを含む10名の村人たちは山の中を強行軍で進んでいた。すでに2時間以上が過ぎていたが、深鷲のいる位置にまではまだ少し距離がある。

「クーちゃん！」

「だ、大丈夫です」

急ぐあまり、とび出していた根につまずき、転んでしまったクイシ

エ。フリネラは助け起こそうとするが、クイシエはすぐさま立ち上がり走りを再開する。

「ああもつ……ミーちゃんが心配なのはわかるけど、クーちゃんも心配よー……？」

その台詞の通りの理由で強行軍についてきたフリネラは、冷や冷やしながらクイシエの背中を追う。

今回捜索に出てきているのは術者が2名、狩人が7名、医者1名だ。

クイシエとフリネラが魔導師、1名の女性が医者で、残りのメンバーは男2名、女5名の狩人である。

狩人のメンバーは深鷲が裸でいるだろうという配慮から村の女性狩人全員が選ばれ、残りは戦力補強だ。

クイシエは男を連れて行く気はなかったのだが、安全のためということから却下されていた。

狩人たちが魔術を使えないわけでもなく、また魔導師たちが戦えないというわけでもないのだが、2つの職にはハッキリと役目に違いがある。

クアラ村における術者とは「魔術の研究者」とほぼ同義であり、狩人とは狩猟による食糧、魔術素材の調達係、そして村の守護者である。

狩人たちは日常的に山へ入り、必要な魔獣を必要なだけ狩つてくる対魔獣戦のスペシャリストだ。【獣払い】の結果が本格的に試用されるようになってから村への獣や魔獣による襲撃は激減しているが、万が一村が襲われた場合、それらを対処するのも狩人の仕事である。

その狩人たちの情報では、クイシエが示すあたりには凶暴な魔獣

が生息しているという話だった。そこそこ大型の魔獣で、六足狼猿という、名前の通り足が6本ある狼のような猿だという。

それは猿のように木を登り、狼のように食らいついてくる3次元的な動きがやっかいなバケモノだ。体も熊ほどに大きく、爪や牙以前に殴られるだけでもかなり危険だ。

複数匹に襲撃された場合、一般的な村であれば滅ばされかねないレベルの脅威ではあるが、特殊な住人が暮らし、狩人人員も豊富なクアラ村としてはそこまで恐れるほどのものではない。

ただ、積極的に狩る理由がないので、縄張りの情報だけがある状態だ。

魔術研究に必要な狩りであれば別だが、手を出してこない魔獣まであえて狩ろうとするのは、生まれつきのチャレンジャーであるカウスくらいのものだった。そのカウスも、すでに単独で1度勝利している相手であるため、すでに興味を失っている。

なお、今回同行している狩人たちの中にカウスの姿はない。興味がないからではなく、フリネラの術で気絶したまま、今もまだ浴場の風呂釜に頭から突っ込んだままだからだ。

術者組2人のうち、フリネラはもともと世界各国を旅して回っていた冒険者であるため、魔獣との戦いは慣れたものだった。

狩人たちの何名かも似たような経歴を持っている。医者的女性も戦闘経験は豊富であるらしいと、クイシエは聞いていた。

クイシエはあまり実戦経験がないのだが、クイシエがいなければ深鷲を見つけるのは難しく、かつ時間がかかってしまう。

村から離れ、山の奥へ進めば進むほど危険な区域であり、村の大人たちとしてはクイシエを残して行きたかったのだが、そんな危険区域に1秒たりとも深鷲を残しておけないと、クイシエは絶対に自分を迎えに行くと言って聞かなかった。

年齢的に一応は成人しており、魔導師としての実力もある。魔獣を確実に感知する事ができる才能も持ち、確実に深鷲の元へたどり

着けるクイシエは、確かに同行した方が良い。

だが、一定以上の力を持つ魔獣を相手にする場合、戦い慣れていない少女は足手まといにもなる。クイシエが扱える魔導術は強力だが、立ち回りは狩人達から見れば素人に毛が生えた程度なのだ。

フリネラはもし強力な魔獣との戦いになった場合、数名をクイシエのサポートに徹させるつもりでいた。これだけ狩人がいれば、クイシエが戦いに関わる必要はない。

「あ、あと……すこしです、けど……！」

深鷲までの距離はかなり近くなってきているらしい。クイシエにはその場で動かずにいる深鷲の位置がハッキリと感じ取れている。

少し前から、クイシエはほとんど全力疾走に近い速度で走り始めていた。

クイシエが術で強化した程度の速度であれば、狩人達もフリネラも、女性医師も問題なく付いていくことが出来ているが、当のクイシエはかなり疲労困憊している。

「……クーちゃん？ わかっていると思うけど、大声で呼んだりしたら駄目だからねー？」

一心不乱に足を進めるクイシエを見たフリネラは、心配になって釘を刺した。

先日深鷲を救助した場所とは、山の深さが違う。

村の近くににいる魔獣は並みの獣と変わらない程度だったり、そもそも凶暴性の低いものが多い。というより、そのような場所だから人里になりうるのだ。

奥地に進めば進むほど魔獣は獰猛なものが多くなっていく。この深度でもこれだけの人数がいれば、そうそう後れを取ることはないが、あえて魔獣を呼び込むようなことをすれば、近くにいる深鷲に

も危険が及ぶ可能性もある。

「ま、魔獣の位置ならわかってます……あ、だめ、もう、間に合わない……っ」

「え？」

「ごめんなさい、“ここに引き付けます”。耳を塞いでください……っ！」

すぐに全員が耳を塞いだ。

間を置かずに、クイシエの喉に魔光の輝きが生まれた。
魔導術が発動する。

「【咆吼】！！」

#23話：巣穴に届く天使の咆吼

「足も捻んなかったし、幸先いいかもね」

縁があるのかよほど運が良いのか。手の平に乗せた黒い毛玉に話しかけながら、深鷲みさぎがいそいそと体を納めていくのは、一昨日も見たような斜面に空いた穴である。

一瞬、まったく同じ場所にたどり着いたのかと深鷲は思った。中に入ってみると、高さも奥行きもそっくり同じで、しかし内側から見える外の景色が記憶と明らかに違うことから、一昨日とは違う場所なのだと知る。

「やっぱりあれかなー……なにかの巣？」

ここがなにかの巣なのだとして……と、深鷲はアルマジロのようになまるっこい生き物が、そのまますっぽりとこの穴に収まっている姿を連想した。確か、アルマジロも巣穴を掘って穴生活を送る生き物だったと思い出す。哺乳類だったか爬虫類だったか忘れたが、とりあえずかわいらしい動物だったはず。

自分がいままさに体を納めているスペースなので、あまり奇妙な生物はイメージしたくない深鷲は、むしろさらにかわいい獣であれと記憶にあるアルマジロをより丸っこくシンプルにデフォルメしていった。その動物は自分のためにここを用意してくれたのでは……と、無駄に好意的な解釈すらしていく。

深鷲のイメージでは、その丸まったアルマジロもどきは巣穴にぴったりとハマりすぎていて、最終的にはまるでアンモナイトの化石のような状態になっていた。

「……ぴっ」

返事らしき鳴き声を発したのは深鷲の肩に乗っている毛玉だ。

この毛玉、最初はぐったりとしていたのが嘘のように元気になっている。立ち姿を見てみると『毛太りしたリス』といった感じの生き物だったが、毛がもこもこしすぎで実際の体がどういう形なのか、いまいちハッキリしない。

結局置いていくのも忍びないので連れてきてしまったのだが、毛玉はあれ以上噛むことも血を舐めることもしなかったため、吸血動物という深鷲の中のマイナスイメージは、実際の見た目がかわいらしいことから払拭されている。

深鷲は話しかける相手がいることで、ひとりぼっちの寂しさから多少解放されていた。

「……裸になって、歩き回って、穴を見つけた。あとはクイシエちゃんに来てくれる、よね？」

「……………ぴっ？」

どこことなく疑問系で返されたような気がした深鷲は不満げに毛玉をつついた。

毛玉はそれに特に反応せず、穴の外を見ているようだった。

毛玉を撫でながら心細さを気を紛らわす深鷲は、あんまりにも反応がない毛玉を訝しみ、その視線の先を見る。

「……………なにがあるの……………？……………！？」

穴のすぐ前にも草木が生い茂っているが、遠くまで視界が通らないほどではない。

その視界の先、坂の下に見える小川を挟んで反対側の斜面に、な

にか大きな陰が動いているのを見つけた。

（……クマ！？……はいないって、クイシェちゃん言ってた。じゃあ……オオカミ？）

川の方へ、深鷲のいる方へ向かって、のしのしと歩いている獣。尖った耳と避けた口から覗く牙から狼のような顔をしているが、体はゴリラのように太くずんぐりとした印象だ。

6本の足で歩いているその背中が深鷲の頭の位置よりも高いだろうことが、遠くから見てもよくわかる。

（いや、6本足って！ 6本足ってなに！？）

哺乳類はもちろん、爬虫類にだって6本足の動物がいたんだろうかと頭を回し始め、ここが魔法すら実在する異世界であることを思い出した深鷲。

そんなことよりも、その獣が明らかに野性的で、肉を食べそうな印象であることの方が重要だ。

狼の実物を見たことがない深鷲だが、今見ている生き物が少なくとも見た目通りゴリラ並みか、あるいはそれ以上に大きいことはわかった。

そして牙が生えている以上は肉食か、少なくとも雑食だということも。

（オオカミの餌になるなんて嘘だから！ 来ないでー！）

だいぶ距離があるものの、見つかってしまえば獣の足から逃げ切れる自信はない。身近なところで、犬が本気で走れば人間が逃げ切るのは不可能だという実感を思い出す深鷲。

あのつばらな瞳でちんまい体のチワワですら、常人の全速力より

も軽く速かった気がする。熊だつてあのサイズで人間より速い。狼顔のこの獣もきつと、人間より速いに違いない。

見つからないようにと念じる一方で、獣の嗅覚ならとくに見つかっているのではないだろうか、と深鷲は思った。それでも見つからないように、見つかつていませんようにと念じることしかできない。

狼もどきと目があったような気がした。

（ひー！）

竦^{すく}んでしまつて動けない深鷲だが、どちらにせよ動くわけにはいかない。

大丈夫、ここは穴の中。影になつてゐるから中は見えてないはず。

（見えてません見えてません見えてません……見つけないでー！）

必死で願っていると、突如天使の声が轟^{とん}いた。

「ミサギちゃん、今行くから！　そこで動かないで待つてて！

！」

雷鳴の如き凄まじい大音声が発せられる。

クイシエの喉に使われた魔導術【咆吼】は、猛獣の声真似を自衛手段として持つ小さな魔獣が用いる拡声の術を人間用に改良したものだ。

とある小型の魔獣が、その体軀^{たいく}に見合わない大音量で吠えるため

の術だが、人間よりも頑丈な喉で用いられるのを前提としている術である為、人間が使うにあたり改良が必要だったのだ。現在、かろうじて扱えるレベルにはなっているが、喉への負荷を完全に無くすることができていない。

本日2度目の【咆吼】により少し喉を痛め、咳き込みながら状況を説明するクイシエ。

それを聞き、各々仕事をやりやすい位置へ移動していく狩人たち。

「魔獣は、大型1匹が東から、接近中！ けほつ……他は……まだかなり距離があるので、とりあえず大丈夫です」

「逃げてる奴もいるんじゃないか？」

「クイシエ本気モードだし」

「トラップを仕掛ける時間は……？」

「ないね。というか6足だったら要らないけど」

本気モードと言われたクイシエだが、その全身はまばゆいほどの光に包まれていた。しかしその光によって目がくらむことはない。その光は魔光だからだ。

深鷲に魔獣が近づいていることを感知したクイシエは、自分たちが間に合わないと悟ると、自分が持つ人間としては規格外な魔力を誇示しつつ大声で自分の存在を知らしめた。

縄張りに現れた魔力を持つ存在を感知した相手は、何らかの行動を起こすだろう。クイシエの魔力量を感じて強敵と思えば逃げるかも知れない。逆に好物が現れたと、嬉々として襲いかかるかも知れない。

多くの魔獣は魔力を好物とする。魔獣の種類によっても差があるのだが、種によっては魔力のみを摂取していれば生きていけるようなものも存在している。

クイシエが活性化させた魔力に釣られ、極上の獲物がいることを知った魔獣はこの場所にやってくるだろう。逆に、魔力の量に怯え

て逃げ出した魔獣もいるはずだ。

「フ、フリネラさん、ごめんなさい。言われたそばから……」

「いいよー。叫ばなかったらミーちゃんが危なかったんでしょー？」

刺した釘を即座に引っこ抜かれた形であるフリネラも、クイシエの判断に異論はなかった。

狩人たちは優秀だし、自分もそこらの大型魔獣1匹程度にどうこうされるほど弱くはないつもりだ。問題は、クイシエに危険が及ばないかどうかであるが、無防備なミサギの方に危険が迫っていたというなら、当然の判断だろう。

魔獣と戦うことになった狩人たちにも不満の影は見当たらない。もともとそれが仕事であり、あるいは趣味や生き甲斐だ。

深鷲の近くに感じていた魔獣はどうかやらこちらに向かい始めたらしく、ひとまず安心したクイシエだったが、すぐに顔色を変えることになった。

「……あれ！？　なんでっ、ミサギちゃん!？」

深鷲が、クイシエ達がいるこちらに向かって移動し始めたのだ。

#24話：六足狼猿狩獵戦

【咆吼】で動かないよう伝えた深鷲がなぜかこちらに向かっている。

少なくとも魔獣に追われているわけではないはず、というよりむしろ魔獣の後を追う形になっているのだが……。

(……………あつ、時間切れだ！)

クイシエは【言語移植】の効果時間がとくに過ぎていることに気が付いたクイシエ。呼んだ『名前』と声色からクイシエの声だというのはわかったかもしれないが、肝心の内容は伝わらなかっただろう。

深鷲はこちらへ動き始めてしまった。魔獣の方は深鷲よりもだいぶ早いスピードでこちらに向かっているが……

「……………ミサギちゃんがこっちに向かってます！ 巻き込まないように……！」

「よし、逃がさず確実に瞬殺だな」

「トラップも張れないし、大した武器も持ってきてないからトドメはフリネラ、アレよろしくね」

「まっかせてー。じゃあジェネットさんとミラナちゃん、クーちゃんをよろしくー」

「おとり役は？」

「俺がやる。クイシエの髪こっちにくれ」

「来たよー！」

「見えてる。六足で間違いないない」

皆がそれぞれ態勢を整えたところへ、六足狼猿が現れた。

6本の足で樹木を掴みながら、飛び跳ねて移動している。樹木が軋む音には、半端な枝などでは支えられそうにない重量感があった。ある程度近づいたところで、六足狼猿は動きを止める。巨木の高い位置に上下さかさまに張り付いた狼顔の大猿が、首を逸らしてこちらを見た。

頬のない裂けた口。ギザギザした肉を噛み千切るための牙は、本物の狼よりも派手に尖っている。

足は太く、指は猿のそれであり、6本の足で器用に樹木を掴んでいた。この場全員の体重を合わせたよりも重そうな巨体を飛び回らせるほどの強靱な足指だ。

「オオオオオオン！」

吠える狼猿の方へ1人の男狩人が歩み出た。狼猿は目と牙を剥いて男狩人へと跳躍する。

頭上に迫る影から飛び退く男狩人。狼猿は6本の足で着地すると同時に、避けた男狩人へ跳ね飛んだ。

狼猿は器用で強靱な6本の足を活かした動きで狩りを行う。

自分より大きな相手には頭上から飛びつくなどして背中に取りつき、六本の脚で拘束しつつ噛みつくのだが、小さな相手は単純に樹上からのダイブで押しつぶすか、着地後に体当たりを行う。

人間相手なら普通に殴るだけで致命傷を与えられる。ただ走って轢くだけでも良い。

男狩人は狼猿のタックルをスレスレでかわすと、全速力で走り始めた。

「よし、そのままついてこい！」

挑発するように声を上げ、狼猿がそのまま追ってくるのを確認する。

狼猿はクイシエが放った魔力に惹かれてこの場へ来た。そしてクイシエが魔力を隠している今、最もその魔力の気配を残しているのは、クイシエの魔光が灯ったままの水晶髪を1本懐に入れた男狩人だ。

狼猿は胸に魔光を灯した男を追う。

狼猿の足は見た目どおり、走り方が猿のものである。狼の足とは違い、直線であつてもさほど加速されないのだが、もとの身体能力とサイズが大きいため、人の足で逃げ切るのは常人には不可能だろう。

狩人達は全員が【獣駆動】を用いてその速度に対応しているが、狼猿は跳躍する際かなりの瞬発力があるため、気を抜けば押しつぶされてしまうかもしれない。

男狩人は油断せず、乱立する樹木が狼猿に対して壁となるように立ち回る。

狼猿が樹上へ駆け上り、木から木へと飛び移りながら追跡してくるなら、男狩人もかぎ爪の付いたロープを樹木に引っ掛け、振り子の要領で一氣に距離を稼ぐ。

男狩人は地形を巧みに利用しながら蛇行を繰り返^{だじつ}し、誘導すべき地点まで無事辿り着く。そこは少し開けた場所だった。

再度ロープを使い、振り子の動きで一氣にその空間の中央へ飛び出した男狩人。その背後から、狼猿も勢いを付けて跳躍していた。男狩人が着地するよりも一足早く地に6本足を食い込ませた狼猿は、いままさに着地せんとする男狩人へ向かい飛びかかる。

その瞬間、狼猿の胸が引き裂かれる。

先に到着していた残りの狩人たちが、狼猿に向けて一斉に、先端にかぎ爪をつけたロープを投げつけたのだ。

後方から肩を越えて胸に2本。

右方からは腰を回り込み脇に。

左方からは背中を越えて脇腹。

前方から背骨に沿うように尻へ。

合計5本のかぎ爪が突き刺さる。

「ヴァアアッ!!」

狼猿の巨体は、肉の裂ける音と共に止まった。後方から投げられた2本のロープが突っ張っている。突進の勢いでかぎ爪が狼猿の両胸を引き裂き、そのまま引っ張られ上体を反らせている。

「ヴオオウッ!!」

狩人たちが使っているロープは狩猟縄と呼ばれている特別なものだ。とぐる蜘蛛、という魔虫が吐き出す糸を元に作られた特別頑丈な素材でできており、対魔獣戦においてこの国の狩人がよく用いる道具の1つである。

切れず、ほつれず、扱いやすい太さでありながらよほどの怪力でも千切られない、とにかく頑丈な縄だった。

狩人は通常、罾や弓矢を駆使して獣を狩るが、魔獣を相手取る狩人たちは他にもいくつかの得物を使いこなさなければならない。

その得物の1つが狩猟縄だ。

もともとは対人戦に用いられていた縄縛戦闘術が対魔獣戦での有用性が示されるにつれ、広まったものである。

並みの人間の攻撃を、その攻撃方法ごと押し潰してしまうような巨体の魔獣や、猛毒の矢をもつかもしれないような強靱な魔獣を相手にしたとき、人間がその魔獣を仕留めるためにはより高い攻撃力が必要とされる。

高威力の魔術を用いるか、大規模で凶悪な罠を仕掛けるか、重量のある武具を振るうか、いろいろと選択肢はあるが、直接戦闘を行うのであればとにかく“隙を作る方法”が必要とされた。

高度な魔術は使い手が限られる上、狩人と術者を兼ねる者自体が多くはないためにあまり現実的ではない。

戦闘の素人は戦いの邪魔にもなりかねないし、そもそもインドアな魔術職の人間は現地に同行すること自体困難である場合すらある。

凶悪な罠は有効だが、魔獣の正体と数が判明していることが条件となる。相手によっては見破られてしまったり、そもそも通用しなかったりするためだ。

調査から実行までに時間もかかり、こちらが攻めるのではなく襲撃を受けた場合などは実行不可能であることも多い。

重量のある武具は単純に振りが遅くてまともに当てられない、という脅力的な問題のほか、命中させた上でそのまま使い手が魔獣に轢き殺されたり、突き飛ばされてしまうのであれば、小型の武具と大差がないという本末転倒な問題点がある。

魔獣の突進を避けつつその表皮を貫くけるほどの超人はごく僅かで、ほとんどの人間や獣人は巨大で強靱な魔獣に、攻撃を加えつつ回避、などといった動きはできない。

近接戦闘をこなす術者や、一部の超人。そういった特別な存在だけが大型魔獣の襲撃に対処できる

では困るので、そのどち

らでもない者たちは重い武具や魔導術と、それらを当てられる隙を生むための技術を組み合わせるなどの工夫で魔獣を討伐していたのだった。

身を縛るロープと突き刺さるかぎ爪をなんとか剥がそうと暴れる狼猿だが、その動きはほとんど封じられている。

ロープの先は狩人たちが直に掴んで狼猿と綱引きをしているわけではない。ロープは太い木の幹に1周され、フック付きの金具で固定されている。狼猿側からは引つ張っても微動だにしないが、狩人側からは簡単に長さが調整できるものだ。

狼猿側が一方方向に力を入れているあいだに、たわんでいる別方向のロープの長さが調整する。その作業が短時間の間に小刻みに繰り返され、狼猿はどの方向に動いてもどこかの肉がかぎ爪にえぐり取られるという悲惨な状態に追い込まれていた。

「ヴォッ……ヴァオ!!」

小刻みに吠えながら、絡まり食い込む狩猟縄に行動を制限されて思うように力を振るえない狼猿。それでも身をよじる度にロープを通して巨木が揺れているのは流石の怪力だ。

このまま捕獲することも出来なくはないが、今回は時間がない。かといってこのまま放置すれば自分の肉ごとかぎ爪を外してしまうだろう。

狼猿を仕留めるため、魔導師が行動する。

「【時限爆書】！」

狼猿へ向けてフリネラが魔導書を投げた。投擲直前に魔力を流してあり、本の内側から魔光が漏れている。

フリネラが起動後の秒読みを終え、魔導書が狼猿の横つ腹に接触した瞬間、

バァン！

と弾ける音と共に、血肉と紙片が舞い散った。

#25話：消えるおなかと歩く服

腹に大穴をあけた狼猿はピクリとも動かなくなつたが、クイシエはすでに、そのグロテスクな光景が見える場所にはいない。

「ミサギちゃん！」

六足狼猿との戦闘が始まってすぐ、クイシエは人間の女狩人ジェネットと村の女医である猫系獣人のミラナを連れ、超感覚の違和感を頼りに深鷲^{みこぎ}がいる方へと山の中を進んでいった。

幸いなことに、狼猿以外にも感じていたいくつかの魔獣の気配は、こちらに興味がなかったか、あるいは怖じ気づいたのか、近寄るそぶりを見せていない。

やがて遠くから爆音が響いて聞こえ、恐らく後方では決着が付いただろう事を知れたころ、ちょうど深鷲の違和感と合流できる位置までやってきたのだが……

「クイシエちゃん！」

「ミサギちゃんっ？ ……どこにいるの？」

すでに深鷲が見えていてもおかしくないのだが、声はすれども姿は見えず。

「クイシエちゃんー……？」

ちなみに【言語移植^{フレンズチャット}】の効果が切れている現在、深鷲とそれ以外の面々はお互いになにを言っているのかわからない状態だが、名前

だけはかるうじて伝わっていた。

クイシエたち3人は辺りを見回し続けている。声は聞こえているのに、そこには誰もいない。

「目の前にいるのに……どういうこと？」

深鷺は探しに来たのが女性だけだと見て安心して近づいてきたのだが、3人の誰とも視線が合わなかった。ついにはこうして目の前に立っていても皆きよるきよるするばかりで、誰も深鷺に気が付かない。

「マネキマネドリの仕業……じゃないのかい？」

「ううん、そんなはずは……」

女狩人の疑念をクイシエは否定する。違和感はほとんど目の前にあるのだ。

「見えてないの……？」

目の前にまで近づき、手を振る深鷺。すると目の前の視界が歪んだことに気が付いたクイシエが、手を伸ばしてきた。

伸ばされた手を深鷺が掴む。

「あっ」

クイシエは自分の手が見えなくなってしまったことに驚いた。残りの2人も突然消えた右手に驚き、女医の方はいつのまにか短刀を構えている。

「ここにいるの？」

「なに言ってるのかわかんないけどわたしだよーミサギだよー」

「なに言ってるのかわからないから、とりあえず……頭どこかな？」

クイシエが自分の頭の高さを探り始めたので、深鷲は抱きしめられやすいように膝立ちになり、クイシエの胸に頭を埋めた。

（あ、伝わった）

些細な以心伝心を喜びつつ、クイシエは【言語移植】を発動させた。

「どうかな？」

「クイシエちゃんありがとーっ！」

「きや」

抱きつかれたクイシエは今回はホールドアップせず、軽く抱きしめ返すことができた。

奇っ怪な歪み方をしているクイシエの姿を見て、狩人ジエネットは悲鳴じみた声を上げる。

「な、なんだいそれは！ 大丈夫なのかいクイシエ！？」

「なんだかわからないけど大丈夫ですっ！？」

驚愕するジエネットと、今にも短刀を閃かせてしまいそうなミラナを見たクイシエは、慌てて無事を主張した。

しかし、大丈夫と言われてもとてもそのようには見えない2人は身構えを解かずにいる。

クイシエの腰のあたりは、まるで達磨落としされたように短くな

っていた。腕の太さ分ほどの腹部が消えて無くなり、胸と腰の距離が近くなっているように見えるのだ。

消えているのは、ちょうど深鷺が腕を回している部分となる。

深鷺は3人の反応からほぼ確信していることを、一応念のためにと確認する。

「もしかして、わたし、見えてない？」

「うん、見えない」

「見えないねエ……なんだか景色が歪んでるといつか、変には見えるけど」

「……」

クイシエと女狩人が答えた。ネコ女医は無言だ。

「ミサギちゃん、自分では見えてるの？」

「うん、普通に……くちゅん」

抱き合つのをやめ、人肌の暖かさから離れたためかくしやみをしってしまった深鷺に、とりあえず服を一式渡すクイシエ。

受けとった深鷺はいそいそと服を着始める。なにもないところに浮かび、部分部分が時折視界から消え去る下着や服を見ていると、ジエネットは頭が痛くなってきた。きそうだった。

とりあえず身構えるのはやめた2人。ミラナはいつの間にか短刀を持っていない。

「なんだか気持ち悪いねエ……」

「ジエネさんっ！」

「いや、だつてさア……」

「やー、わたしもそう思います」

ジェネットに同意する深鷲は、黒い毛玉を拾った時のことを思い出している。

「えーと、ちなみにいまは見えてます？」

「服だけ見えてるよ」

「えー……これどうやってた見えるようになるの……？」

それはこっちが聞きたい、と言うジェネットの声に被さるように、男狩人の声が響いた。

「おーい！ 嬢ちゃんは見つけたかー？ そっち行くぞー！」

着替えも終わったので来ても良い旨を伝える。集まった狩人たちは宙に浮いている服を見て一様に気味悪がった。

「それが、ミサギちゃん？」

「なぜかそうなんです……」

深鷲は恐らく元凶であろう、今も頭の上に乗っている黒い毛玉を見えないままに紹介し、説明を求めるのだった。

#26話：魔従術デビュー（済）

「やっぱり、魔従術が成立しちゃってると思うの」

深鷺^{みさぎ}が山奥で見つけた黒い毛玉のことを説明し終えたところで、クイシエが言った。

「魔従術……って、お昼にもちらつと聞いた気がするけど、クイシエちゃんとキーちゃんの関係だよね？」

2人はクイシエの家の食卓で会話をしている。

深鷺が見えないという問題はとりあえず置いておき、深鷺と搜索隊は全員村に帰ってきていた。あの場に長居する理由もないし、クイシエが撒いた魔力^{えさ}に釣られた魔獣^{まじゅう}がやってくる危険があったためだ。

帰り道では1度他の魔獣に襲われそうになったものの、クイシエによって早い段階で的確にそれを知らされた狩人数名が待ち伏せして対処したため、深鷺はどんな魔獣が襲ってきたのかも見ていない。最初に目撃した六足狼猿の死体も深鷺は見えていないが、狩人たちが背負う背囊^{はいのう}などに狼猿の一部が入っている、というところまで聞いて、それ以上聞くのをやめていた。特に必要はなかったものの、せっかく狩ったので毛皮や肉などは無駄なく捌かれたらしい。

村に戻ると【獣払い】用の結界はまだ張り直されていなかった。深鷺の帰り待ちだったようで、深鷺が境界を越えたのが確認されてから張り直される。

深鷲は申し訳なさそうにしていたが、クイシエは全部お師匠様が悪い、と言い切った。

クイシエの家に戻り、すでに日が暮れる時刻だったので夕食を済ませての会話となっていたが、見えない相手との会話はどこを見て良いのか、どこを見られているのかもわからず、変な気分のクイシエだった。

（首がないみたいで怖いし……歪んで見えるし……）

口には出さないが、クイシエも視界が歪むことは気持ちが悪いと感じていた。

それが視界の端にあればまったく気にならない、というか気が付かないような歪みなのだが、その見えない部分に視点を合わせようとすると、見えない部分の端同士を無理矢理つなげたような、有り得ない見え方になるのだ。

深鷲の話によれば、いまも深鷲の頭の上にいるという黒い毛玉、毛太りしたリスのような生き物らしき魔獣は『見えている（はずの）部分が見えない』今の深鷲と同じような状態で、地面にくったりと転がっていたらしい。

そんなモノを深鷲はどうして見つけることができたのかも不思議だったが、少なくともこの村の住人にとって未知である魔獣を発見し、そのままそうとは知らずに使い魔にしてしまった深鷲も不思議だった。

「魔力を含めた血は、つながりを持たせる力があるんだよ」

魔従術は魔術を使う存在に自分の魔力を含んだ血を飲ませて魔術的な“つながり”を持ち、その存在に魔術を使わせたり、その存在

の特徴・特性を得たりする術である。

おもに“魔”獣を“従”える“術”であるため、魔従術と呼ばれている。

「多くの魔獣にとって、活性化している魔力は美味しいご馳走みたいなもののな」

「活性化って？」

「えーとね……魔力はどこにでもあるの。ここにも」

目の前の虚空を指すクイシェ。

「このテーブルの中にも、天井とか地面とかにもあって、でもそれは活性化されてない状態なんだ」

「ほうほう」

魔術の話に好奇心が刺激され始めた深鷲は、他人には見えていない顔を縦に振りながらクイシェの説明に聴き入る。

「魔導術を使うときなんかは、意識的に魔力を活性化させて魔導書に流したりするんだけど、魔獣は普通の魔力より活性化した魔力の方が美味しく感じるみたい。たまに、人間でも美味しいって感じる人もいるらしいんだけどね」

中には魔力だけを摂取して生きている魔獣もいると聞いた深鷲は、この説明もわかりやすくいろいろと端折ってくれている事に気が付いたが、話の腰を折りかねなかつたのでそのまま大人しく聞いていることにした。

「それで、美味しい魔力をくれる人に懐いた魔獣は、魔力の代わりに自分の力を貸してくれるようになるんだけど、それが魔従術って

ことなの」

夕食前、クイシエがキーちゃんの食事に指を向けてなにかをしていたのを思い出した深鷲は、あれは魔力を流していたのだと思い至った。同時に水晶色の髪のことでも得心が行く。

「なるほど……それで、その髪の色なんだ？」

クイシエは自分の水晶色の髪が注目されていると感じ、うつむきがちに答えた。

「うん……変かな？」

「すつごく綺麗だよ！」

深鷲のニヤニヤした表情は真っ赤なクイシエからは見えていない。

「キーちゃん的能力は【魔晶化】って呼ばれてて、とっても珍しいんだ」

「まじょうか……魔晶、魔晶化、か」

【言語移植】で得ている脳内辞書で魔晶の文字を調べた深鷲。クイシエはその様子を見て、すこし待ってから先を続ける。

「【魔晶化】で魔晶銀と同じ……あ、え、えーと、魔晶銀っていうのは、魔力をたくさん溜めておく事ができる金属なんだけど……」

説明事が不慣れらしいクイシエをたまに落ち着かせながら、深鷲は魔従術のことを理解しようと努めた。

魔獣を従え、その能力を借り受ける。それは魔術そのものであつ

たり魔術的な体質であつたりする。

クイシエの髪はキーの【魔晶化】による体質変化、体毛に魔晶銀と同じ特性を持たせることができる能力によるものだ。それによつて普通の人よりも遥かに多くの魔力を所有できる。

深鷲の姿が見えなくなっているのは、自分の姿を他者に見えないようにするという黒毛玉の魔術が働いているからだろうと、クイシエは推測した。

「でも、効果が現れている間はずっと魔力を使いつ放しになるか、そうでない場合は効果時間が決まってるの」

魔力を供給し続けることで効果時間が延びる術は、自分を対象とするものに多い。

効果時間が最初から決まっている術は、他者に掛けることが前提となっている術に多い。

「たぶんだけど、これはずっと魔力を消費してるんじゃないかな。使い魔と主人は、どっちも自分みたいなものだから、自分が対象の術をそれぞれに使うことが出来るんだよ。だけど、ミサギちゃんに掛かっている術は、その毛玉？　ちゃんが使ったものでも、魔力はミサギちゃんから引き出されてるはず。それで、魔力が切れたら自然に効果も切れるはずだよ。えーと……ちよつと待ってね？」

クイシエは目を閉じて集中する。深鷲から常に感じられる違和感が邪魔で他の人ほど簡単に読み取ることができないが、それでも問題なく深鷲の残魔力を計測した。

「あれ？　……うーん……１００点くらいあるなあ」

「１００点って……どれくらい？」

体内に残っている魔力を計ったと知らされた深鷲は、数字の基準がわからずに聞いてみたが、クイシェの答えは意外なものだった。

「100点は、人間の魔力の平均的な最大値だよ」

魔力量とは人間が人間の平均値を100点と決め、それを基準に計られるようになったものだ。

専用の計測器を用いずとも他人の残魔力を把握できるクイシェは、その正確さにもある程度自信がある。

獣人と人間の違いや、個人差によって10点程度の差はあるものだ。しかし深鷲にこの術が使われ始めてからすでに数時間が経過しているにもかかわらず、深鷲の体にはほぼ限界値の魔力が残っていることになる。

「個人差もあるけど……それでも人間の限界は140点くらいだっ
ていわれてるの。」

「えーと、それじゃ仮に、わたしの魔力が140だったとして、数時間で40点減ってるのって……どうなの？」

「……術の構造がかなり効率的、かな。強めの照明術くらいの消費量かも。しかも小動物サイズじゃなくて人間に適用してるんだから……」

魔力が切れるまでだいぶかかる。少なくとも今晚中に、というわけには行かないだろうとクイシェは判断した。

「えーと、じゃあ、このまま魔力切れを待ってれば……明日の朝くらいには戻る？」

「うん……」

クイシエとしてはそもそも深鷲の魔力が140点あった、というの仮説が腑に落ちないでいたので、いまいち箇切れの悪い返事しか返せなかった。

「……ていうか、この子が寝たら術の効果も切れる？」

「魔獣つて、寝ながら術を維持できるのも多いから、あんまり期待できないかな……」

深鷲は自分のステータス欄をイメージすると『ワープ体質』の下に『透明人間』を書き足した。次はなにが来るやら、と微妙な気分で見ると、姿が見えないにもかかわらずそれが伝わったのか、クイシエがまた慌て始める。

「ご、ごめんね？ できる限り早く、なんとかするから！」

「あ、うん。ありがとうっ？ ていうかそんなに気にしなくて良いよ！」

クイシエには氣を使われてばかりだ。助けられて、優しくされて、氣を使われて、出逢ってまだ2日目で、貰ってばかりである。

そうでなくても、こちらからも頼りっぱなしだというのに。

顔も手も見えていないだろうが、深鷲は感謝の意を伝えることにした。

「消えてたりなんなりで、なんかばたばたしてたけど、クイシエちゃんには感謝してもしきれないよ。本当にありがとう。今もいろいろと考えてくれて、本当に助かってるし、助けに来てくれたの、本当に嬉しかった……」

「えっ……！ う、うん……」

歪んだ視界に消える両手。深鷲の両手に掴まれている自分の、見

えなくなった手のあたりを見ながら、硬直したクイシエは言葉を探
す。

「え、えと……………とっ」

クイシエはつい言いかけた言葉を飲み込み、反芻する。

（…………と、友達なもの、当然でしょ……………って、い、言ってみようか
な…………だめかな……………どうしようかな……………）

「…………クイシエちゃんー？」

顔を真っ赤にして固まっているクイシエ。

クイシエに見えるように自分の服の袖を掴み、目の前で振つても
まったく反応がない。

発言内容を思い悩むクイシエが揺れる袖に気が付くのにには数秒を
要した。

「あ、ご、ごめん！ うん、気にしないでいいよぜんぜんっ！ ……
…明日にはちゃんと見えるように戻せると思うから、今日は我慢し
てね」

「うん、わかった」

今日の話はここまでということ、2人はそれぞれの部屋に入り
ベッドに潜り込んだ。

（…………いきなり友達だなんて言い切るなんて、やっぱり図々しいよ
ね。そう、研究とおんなじだよ。きつと、もつと、ゆっくり段階を
踏んで試行錯誤を……………）

クイシエは魔導術で読書用の淡い明かりを浮かばせながら、愛読書である絵物語を読み返しながら夜を過ごした。

一方、深鷲はとくに読めるものもないので普通に眠りにつこうとしていた。他人には見えていないらしい自分の手の平を見たりしながら、今日を振り返ってみる。

（この状態、見た目だいぶ気持ち悪いみたいだけど……まあ、助かったと言えば助かったかなー？）

山の中で合流したとき、恐らく泣き腫らしていたであろう自分の顔が見られずに済んだのは幸運だった、などと思っている深鷲だった。

#27話：つながりとはなんぞや

翌日。正午を知らせる村の鐘が鳴り、昼食を済ませた深鷺^{みんぎ}は相変わらず見た目が服だけの存在だった。

「これ、魔術じゃなくて、クイシエちゃんの髪みたいにこの子の体質で消えてる……ってわけじゃないんだよね？」

「うん、違うはず。その毛玉ちゃんに消えているときとそうでないときがあつたなら、それは体質じゃなくて魔術……だと思う」

体質の方であるならば、その体質を操作するための新たな感覚が芽生えるものらしい。その感覚に気が付かないということは無いそうで、むしろ慣れるまで違和感がつきまとうそうだ。

治療直後の歯みたいな違和感だろうかと思深鷺は想像してみたが、どのみちそのような感覚が増えていく気配はなかった。

深鷺は、自分が特別鈍感でその感覚に気が付いていないのではと考えたが、だとしても現状が良くなるわけでもないのだから、考えるのをやめた。専門家がそうだろうというのだから、これは体質ではなく魔術なのだろう。

そういうわけで、朝になっても深鷺は見えないままにいる。

しかも魔力量もまったく変化無し、100点のままだった。このことをクイシエはひどく気にしていたが、とりあえずは深鷺の姿を元に戻すことを優先する。

自然に解決しないのであれば、行動を起こさなければならぬ。深鷺はさっそく魔術を使いこなすための訓練を始めた。

そして数時間後。

「ごめん……まったくぜんぜんわからないよ……」

魔従術は最も簡単な魔術とされている。術者は従えた使い魔に魔術を使うよう望むだけで良いからだ。専門知識もほとんどいらず、全魔術系統中、もっとも短期間でなにも知らない素人から魔術を行使する段階にまで達することができるとされている。

魔術が盛んな土地では、人間に飼い慣らされた魔獣が家畜や愛玩動物の延長で取り引きされているため、従える魔獣を手に入れるのも難しいことではない。

それなりの金額を支払えば狩人に目当ての魔獣を捕獲してもらう事もできる。

野性の魔獣が術者に懐いてくれるかどうか、契約が成立するかどうかは、ある程度相性などの問題があり一筋縄ではいかないところがあるが、深鷲はすでに契約自体は成立している。

深鷲がわからないと言っているのは「魔術を使うように望むだけで良い」と説明された部分だった。

今回の場合は「魔術を解除するように望む」ということになるのだが……

「つながり、つながり、つながり……うーん」

それが呪文であるかのような、唸るように呟かれる深鷲の言葉。ただ、魔獣とのつながりを意識して願いを伝える、というだけのこととがうまく行かない。

クイシエにとって自然に、あたりまえに感じられているその『つ

ながり』とやらが、深鷲にはまったくどんな感覚なのかわからないのだ。

「……えーとき、例えばこの毛玉が機嫌が悪くて言うことを聞いてくれないからうまく行っていない、とか、そういう可能性はあるのかな？」

「全くない、とは言い切れないけど……」

「クイシエちゃんだけが、あの不思議な超感覚？ で感じられているもの、っていうわけでもないんだよね？」

「うん、村の外ではどうか知らないけど、わたしが知る限りみんな似たり寄つたりの感覚だって……わたしの場合は、やろうと思えば他人の繋がりも感じ取れるかもしれないけど」

誰もが使え、誰しも似たような感覚を得るものであるというのに自分だけがそれを感じることができない。彼らと自分との違いはなんだろうか？

（異世界人だから……っていうのは、安易すぎるかなあ……）

それを理由として認め、あっさり諦めてしまうのは教えてくれているクイシエに申し訳ない。

だが、気合いを入れてみたり瞑想してみたり、自分の額と毛玉の額（と思われる）部分をあわせてみたりといろいろやってみても、つながりとやはらは一向に把握できそうもない。

試しているうちに日が天辺近くにまで昇ってしまったところ。

「ごめん……まったくぜんぜんわからないよ……」

と、諦めてしまった。

完全に断念したわけではないのだが、なんの糸口も掴めない作業を数時間、根を詰めすぎて疲れてしまったのだ。

「と、とりあえず……お師匠様に相談してみるね……」

クイシエも自分ではうまく教えることができないと、2人だけでの解決を諦めた。そうして結局師匠頼りになってしまいう事に若干悔しさを憶えながらも、深鷲のためになるならと昨日の騒ぎの元凶に助けを請うことにする。

昼食を終えた2人が村の広場へ行くと、そこには狩猟縄によって腰から肩までを糸巻きのように縛られ、木の枝から宙吊りにされているギュランダムがいた。

「お師匠さん……なんでそんなことに？」

「わしもそれを考えておるところじゃよ」

「考えるまでもなくおしおきです」

ギュランダムは、昨晚深鷲たちが帰ってくるよりも前からずっとここに吊されている。

深鷲には伝わっていない話だが、クアラ村は結界の張り直しまでの間に2度、魔獣の襲撃を受けていた。

現れたのは“キメラタイプ”の魔獣だ。村の狩人達にとっては大した相手ではないが、戦闘能力のない村人にとっては充分な脅威である。

しかしギュランダムが吊されているのは、くだらないことで村に

危険を呼び込んだから、ではなく、浴場を覗いたからである。
実際には覗けていないのだが、皆は聞く耳を持たなかった。

「ん？ なんじゃ？ 服が……な、なななななんじゃそれはー
っ！？」

吊されていて振り向くこともできないギュランダムは、前方に回り込んできたクイシエと深鷲をようやく視界内に納め、そして深鷲の状態に目を見開いて驚愕した。

「ミサギちゃんです」

「深鷲でーす……」

長袖が手を振るようにフルフルと揺れているさまを見ても、ギュランダムは口を開けたまま、目を剥いたままだ。

（これは……なんと……！ こ、こんなところで夢の透明化の術を見ることができるとは……！？ いったいなにが起きておるんじゃ……？ 視界が歪んでおるが…… 厳密には透明化ではないのか……？ いや、いやいや、これはなんであれ、なんとしてもこの術は手に入れなければなるまい……！！）

邪なオーラを漂わせながら深鷲の顔があるあたりを凝視するギュランダム。

深鷲からは自分の頭の上を見られているような視線となる。どうやらこの術が有効な状態では相手と目を合わせることが不可能らしい。視界が歪んでいるためだろう。

そのままだと瞳が乾いてしまいそうなギュランダムに、深鷲は声を掛けた。

「あのー……そんなに変ですか？ いや、変なのはわかってるんですけど……驚きが」

過ぎるといふか、までは言えずに戸惑う深鷲。昨日の狩人たちの反応同様気味悪がるのならともかく、そこまで驚愕されるとは思わなかった。

お年寄りには刺激が強かっただろうかと、老体を労る心理で心配する。

「い、いや。いったいどうなつとるのかと考え込んでしまつてな。

それは……魔従術かのう？」

「らしいです……」

「この村の誰も知らない、見たことがない魔獣を、ミサギちゃんが見つけたみたいなんです。その様子だとお師匠様も知らないみたいですけど……その魔獣と深鷲ちゃん、すでに主従関係にあるみたいなんです。それで、その魔獣が姿を消す術を使い続けているみたいで、昨日からずっと……あと数時間でもう丸1日この状態なんですよ」

「……そりやまた凄まじい効率の良さじゃのう」

「魔力の効率の問題ではないかもしれないです……」

「どういう事じゃ？」

「うっ」

2人から疑問符を投げられるクイシエ。しかしその“問題”について、とりあえず深鷲が落ち着けるようになってから言った方が良いと思い直した。今は姿を元に戻すことに集中したい。

「……あ、いえ、それは今はいいです。とにかくそれで困ってるんです」

「困っているものにも、その魔獣に術を解くように言えば良からう」

「それが……わたしの教え方が下手で、ミサギちゃんが魔従術の主従関係……『つながっている感覚』を掴めないみたいなんです」

「や、クイシエちゃんが悪いわけじゃないと思うよ。わたしほら、他の世界の人だから……」

「ふーむ」

クイシエは自分が術を使い始めたときのことを思い出せば、つながりのことをうまく深鷲に伝えられるのではない、それを師匠に聞くことにした。

「お師匠様、そもそもわたし、どうやって魔術を使えるようになったんでしたっけ……？」

「……おぬしは、なんか、気が付いたら使えるようになっていたようじゃぞ？ 感覚的に、なんとなくやってみたらできたんじゃないんかの」

「……ええと」

「もともと魔力を感知する能力に長けておるんじゃないから、それをどうすれば操る事ができるかという点に置いて、ろくに苦労などしておらんかったじゃろう」

「……つまり」

「おぬしは人に魔術を教えるのは向いとらんかもしれんのう」

「はうう……」

そもそもクイシエは魔従術よりも先に他の術を行使していたらしかった。

現在の深鷲がクイシエに抱いているイメージは『天才魔女っ娘天使クイシエちゃん』である。

「というか、別に魔術を教えんでも術を解除する方法ならあるじゃろうが」

「え、そうなんですか？」

「まあミサギの場合は結界と相性が良く無さそうじゃからこの手は使えんかもしれんが……結界術で魔獣と術者を区切るという手もあるぞ」

魔従士と魔獣の間にあるつながりがどういう仕組みなのかは解明されていないが、そのつながりがどういった魔力で、その魔力をどうすれば阻害できるかは、判明している。結界につながりを阻む効果を持たせることで一時的に魔従術を強制的に解消することはできるのだった。

「じゃがクイシエがいるなら話はもっと簡単じゃ。直接術を解くように言えば良からう」

「や、ですからそれができなくて困ってるんです」

「……クイシエ、おぬしはなんのために【言語移植】を開発したんじゃない？」

「……………あ」

#28話：毛玉と仲良くなるう！

魔従術の修得は本来、魔獣と親交を深めるところから始まる。

餌と血を与え世話をして、散歩や狩りなどを通じて信頼関係が築かれていく中で、契約を結ぶのだ。

そうやって心を通わせていけば、たとえ術によるつながりがなくとも自然と意思の疎通が可能になっていくだろうし、契約すればその時点で互いの関係も良好だろう。

最も効率的なのは魔獣の赤子を手に入れることだ。幼獣は成獣より遥かに御しやすい。

卵から孵化するタイプの魔獣は特にその方法が取られることが多い。魔獣の巣を狙うことを専門とする狩人もいる。巣から卵を盗むのは魔獣を直に屈伏させるよりも容易く、孵化させるだけのスキルが必要となるものの、商品としても取り扱いやすい。

赤子でなければとても従えられないような強大凶悪な魔獣インプリンティングに対してもこの方法が取られるが、信頼関係の構築や刷り込みがうまく行かなかった場合、成体後に大惨事となる可能性もある。

魔従術の基本的な主従関係は、「主が魔力を供給するかわりに、従が魔術や体質を与える」というものだ。

体が小さく弱い魔獣であればあるほど、この関係性が強い。自力で魔力やエサを得るのが難しいからである。

魔力を賃金とした雇用関係と言ってしまっても間違いではないだろうとギュランダが言うと、クイシエは信頼関係が重要だと主張した。

「もつと単純に子育て　親子関係と言っても問題はないかの。まあ、そのあたりの関係性は、ある程度人それぞれじゃ」

大型の魔獣の場合、成体であれば人間が魔力を与える必要がない程度の力があるため、雇用関係以外でそれまでに築き上げたなんらかの関係が必要となるのは間違いない。

ギュランダムは解説を続ける。

「姿を消す能力は『身を守る』ためのものじゃろう。その能力でミサギごと消えるということは、ミサギを守ろうとしていると考えられる。じゃからその魔獣はミサギに対して好意的ではあるはずじゃ」

深鷲の場合、出逢ってすぐに契約が成立してしまったせいで意志の疎通がうまくできないのだらう、とギュランダムは言う。

「出会い頭に契約が成立する、なんてことは僕も聞いたことがないが、魔従術の仕組みからいって意思の疎通は可能じゃろう。あとはミサギの慣れや気の持ちようじゃろうなあ……………」とここで

そうしてひととおりの解説を終え、縄を解くように言い始めたギユランダムを無視して、2人は自宅へ戻ってきた。

「え、お師匠さんはあのままでいいの……？」

「うん、いいの」

いつものことだからと、クイシエとしてはあまり触れて欲しくない話題だったので、それでギユランダムについての話は終わった。

深鷲も、授業参観で親が教室にやってきたときの気恥ずかしさに似た気配をクイシエから感じていたので、追求はしなかった。

クイシエはギュランダムのことを決して敬っていないわけではないのだが、あれが師匠だというのが、ミサギに対しては恥ずかしいと感じている。

「じゃ、じゃあ、さっそくお願いしてみようかつ」

誤魔化すように張り切った声を出すクイシエ。

深鷲は毛玉を頭の上から掴んで降ろし、そのまま固まった。

「えーと……どこが頭……？」

フレンズチャット

【言語移植】を使用するためには頭部の位置を知る必要がある。

「びっ」

両手に掴まれた毛玉が一声鳴いた。

毛が伸びきった羊よりもモコモコしているかもしれないこの毛玉は、姿が見えている深鷲から見ても頭の位置がよくわからない。下が足で上が頭ではあるだろうと、もこもこした毛を指で探る。両手両足とどうやら尻尾らしきものを特定し、指に当たる鼻息を感じてようやく頭の位置を確信できた。

クイシエが指を当てると、くすぐったかったのか毛玉は小さく鳴いてはいたものの、それ以上嫌がるそぶりも見せずおとなしいものだった。

（協力的……？　ということとはわたしのこと、味方だっと思ってるよね）

ミサギを守るために術を用いているというギュランダムの推測で、クイシエは自分もミサギに対する危険と認識されていないかと不安

だったのだが、こうして触れてみて、噛みつくでもなく暴れもしないということは、【言語移植】の条件は満たしているのだろう。

深鷲に用いるときと同様、相手が受け入れていなければ術は発動しない。実は無理やり使うこともできないのではないのだが、それは最後の手段である。

「しっかりおさえててね 【言語移植】」

クイシエの全身から溢れた微光が指先に集まり、指先が触れているであろう小さな存在へと移っていく。

「……うまくいったかな？」

光が収まるとクイシエは指を離し、深鷲はさっそく毛玉に話しかけた。

「毛玉くん、言葉わかるー？」

「ワカル？ わかる！」

「おおー！ 喋った！ って、あれ？ なんか、クイシエちゃんそっくり？」

毛玉から発せられた声はクイシエにそっくりだ。本物より少し高めに聞こえる。

「えっとね、この子の喉じゃ人と同じ声を出す事ができないでしょう？ そういう場合は、声を出す仕組みもわたしのを貸しちゃうことになるんだよ」

「そうなんだ。じゃあ、もしかして木とかとも話せたりする？」

「ええ？ それは……どうなんだろう。試したことないけど……無理かな。うん、そもそも喉とかないし」

「そっかー。それにしても不思議。そっくり」
「うん……でも、そんなに似てるかなあ……？」

クイシエ自身は、キーや毛玉が発する声が自分の声にそれほど似ているとは思っていなかった。

「ん？ あー、自分の声って、人には違うように聞こえるものだよ
ね」

「そうなの？」
「うん。自分の声は、喉から直接耳に響いて聞こえてる分もあるから、とか。確かそんな理由で他人とは違うように聞こえるんだよ」

はじめて自分の声を録音して聞いたときの、なんとも言えない恥ずかしさを思い出しながら深鷲は説明した。

「そうなんだー……あ、そういえばマネマキドリが真似る声って本人は似てないって聞いたことあるよ」

「ごしゅじんー！」

手のひらの毛玉に呼ばれた深鷲は目的を思い出し、本題に取りかかる。

「さーで、毛玉くん。さっそくだけど、わたしにかけた術を……」

「ごしゅじんー！ おなががすきましたー！ ごはんをくださいー
！」

「ごはん？」

「おいしい血がほしいですー！」

毛玉は深鷲の言うことをまるで聞いていないようだった。

「ごしゅじん、ごはん（血）、を繰り返す小さな生き物に、深鷲は

落胆というか呆れたように、クイシエを見る。

「あはは……ほら、頭が良くなるわけじゃないから……ごめんね？」
「や、クイシエちゃんが悪いわけじゃないんだけどさっ！」

突如2本足で立ち上がり礼儀正しく振る舞うような、童話の登場動物の如き対応をイメージしていたわけではないが、ここまで本能直球でしか喋らないとも思っていなかった深鷲だった。

しかも声がクイシエそっくりなので、なんだか変な気分である。

「そういえば、クイシエちゃんがキーちゃんとお話ししてるところ、まだ見たことなかったけど……」

「うん、まあその子とおんなじ感じだよ？」

「あー」

呼ばれたと思ったのか、どこからともなく現れたキーがクイシエの肩へ駆け上ってきた。

「ミサギちゃんにはまだ感じられてないかもしれないけど、魔従術のつながりっているいろんなことがわかるんだよ。慣れてくると、なのかもしれないけど。それに、けっこう長い付き合いになるし、喋らなくても、なんとなくわかつちゃうの」

キーの頭を指でやさしく撫でるクイシエ。

「だから、【言語移植】が完成したとき、お喋りができて嬉しかったのは本当だけど、べつに言葉が通じてなくてもいいんだなーって思ってた……結局あんまり使ってないんだ」

撫でられているキーと眉尻を下げて笑うクイシエを見て、深鷲は

2 人の間にあるしっかりとした“つながり”を感じたような気がした。

#29話：ミサギの血と「ギューちゃん」

仲良しオーラを身にまとうクイシェとキーを見て、深鷺は決心する。

「わたしもこの子とちゃんと通じ合えるように頑張ろう！」

「じゅじんー！　じはんー！　じはんー！　じゅじんーはんー！」

喋って直接要求できるのがそんなに嬉しいのか、ピーピーと鳴く雛鳥並にエサを要求するようになってきた。

元の鳴き声は鳥に近い音なので、イメージもしつくりときてしまフレンズチャットう。【言語移植】が使われていなければまさにイメージどおりの音が聞こえていたのかも知れない。

（この食いしん坊、わたしに似たんじゃないだろうな……）

ペットは飼い主に似る、という言葉をつい思い出した深鷺。まさか昨日の今日でということもないだろうが　そのあたりの気が合うからこそ、契約が成立してしまったのでは、なんてことも考えられる。

そうであれば、食を通じて仲良くなることができるかもしれない。

しかし、よく考えたらこの毛玉は昨日森で出会ったときから1食もとっていないのだった。

寝ている間はわからないが、それ意外はずっと深鷺の肩や頭の上にいた。食事をとる暇はなかっただろう。空腹なのは当然だ。

ネズミなんかの小動物は1日の食事回数がかなり多かった気がする。そしてかなり短い時間でも餓死してしまうという話を、深鷲は思い出した。

見た目元気そうなので、大丈夫だとは思って……

「……とりあえず、これはあげなきゃ駄目そうだ」

「うん……おなか为空いたら、それで頭がいっぱいになっちゃうのかも……ね……」

クイシエも、自分の声で食いしん坊な態度を取られることがちょっと気になっているようだった。

「使い魔には魔力をあげればいいんだよね。クイシエちゃんみたいに、ごはんは魔力を混ぜるって、わたしにもできるかな？」

「うーん……今すぐは無理かな。そもそもなにを食べる魔獣なのかわからないから……」

昨晚、クイシエが用意したエサには手を付けなかったので、まだなにを主食にしているのかわかっていない。なににも食べていないこととで逆にある程度予想はできているのだが。

「まあ、聞いてみよっか。毛玉ちゃん、いつもはなにを食べてるの？」

「血！」

吸血動物だった。

クイシエによると、正確には血から魔力を得ているのだろう、とのことだ。

「……血からじゃないとだめってこと？」

「たぶん……」

「あー……」

諦めて血をあげることにした深鷺。

ようするに赤ん坊みたいなものなのだ、と子育て経験があるわけでもないがそう思うことにした。映像で見たことがある雛鳥は巢の中でひたすら親鳥にエサをねだるではないか。

（あげるのは血だけど）

内心で葛藤が起きたが、先ほどの決意を胸にねじ伏せる。

とはいっても噛まれるのは嫌なので、針を借りて火で炙り、指の先をちよつとだけ刺した。

ぷくりと膨らんだ血の滴を目の前に差し出すと、毛玉は美味しそうに舐めとった。

「……えっ？」

その瞬間クイシエは、毛玉の魔力が跳ね上がったのを感じた。

「クイシエちゃん、どうかした？」

「……ううん、なんでもない」

毛玉の姿が見えていないクイシエに、深鷺はその様子を語り、意見求めた。

「昨日もそうだったんだけど、なんだか1滴2滴舐めて終わりみたい。こんなのでお腹いっぱいになるのかな？ あんまり吸われるのも……ちよつとやだけどさ」

どうやら毛玉はその一口で満足したようだった。それはそうだ。毛玉の魔力は、体に溜めておける限界まで回復したのだろうから。

（やっぱりおかしい……血の１滴でこんなに魔力が得られるなんて……）

人間が持つ魔力は、全身あわせて１００点が平均値だ。血の１滴に含まれる魔力など、どれほど詰め込もうと意識したところで数点がいいところだろう。それに、血に魔力を込めるしても魔術的な技量は必要になる。

毛玉が保持できる魔力はどうか１０点ほどが限界らしい。

基本的に、魔力は体が大きいほうがたくさん溜めることが出来る。１０点というのは手乗りサイズにしては多い方で、このことも驚きではあるのだが、それが満杯まで溜まったということは深の血にはそれほどの魔力が含まれていたということだった。

血の１滴に含まれる魔力は本来微々たるものだ。魔力を集中させればある程度は増加するが、魔力を操作できない深鷲には不可能だろう。

考え込むクイシエには気が付かず、深鷲は毛玉との会話を始めていた。術はまだ解けていないので、相変わらずクイシエからは見えていないまま。声だけが聞こえている。

「さて、毛玉くん……くん？ おなかはいっぱいになった？」

「いっぱいー！」

「それはよかった。とりあえず、お名前は？」

「……ナマエ？ ないです！」

「よし、じゃあわたしが名前をつけてあげよう……で、キミは男の

子？ 女の子？」

「……おとこのこ？」

「なんで間が空いたの……まあいいや。じゃあ……」

深鷺は毛玉の名前を考え始めた。いつまでも毛玉と呼ぶわけにはいかない。仲良くなるにはまず呼び名からだ。名付け親になればそれだけで愛着も湧くというものである。

（黒いからクロ……じゃ安易すぎるよね。毛玉で……毛が黒くて……食いしん坊で……なんだかおなががすいてくるなあ）

昼食をとってからまだ1時間も過ぎていないというのに、やはりこの飼い主にしてこの毛玉なのだろうか、と自問自答する深鷺。

（なんだろう……黒い……毛で……食……血……肉……？）

「……あ、黒毛和牛？」

無意識に呟いていた。

「……不思議な名前だね？」

「え？」

クイシエに言われて気が付いた。いま、なんて言っただけ？

「ええと、くろげわ、ぎゅー？ どういう意味があるの？」

「クロゲワギュー？ おれクロゲワギュー！」

どことなく嬉しそうにクロゲワギューと連呼し始めた毛玉に、慌てる深鷺。

「え？ あ、うん？ いや……ちが」
「クロゲワギューっ！」

#30話：問題ない日々の問題

首なし手足なし、服だけが歩き回り そんな気味の悪い姿から解放された深鷲は、当初の予定通り村の手伝いを再開した。異世界初日、2日目と続いた波乱もとりあえず収まったのか、いきなりどこかへ瞬間移動してしまうこともなければ、体が消えてしまふような問題も起きず、この数日間はずっと平和に過ごしている。

黒毛和牛にはここには危険はないと言って、姿を消さないようにと言いつけてある。まだ【言語移植】無しでの意思疎通はできないが、一緒に暮らしているうちに少しずつ通じ合えるはずだ。

（わたしも、仲良くなれるはず……）

クイシエは自宅の研究室でそんなことをぼんやりと思った。

深鷲がお手伝いに勤しんでいる間、クイシエはクイシエで仕事がある。

この村の住人はほとんどが魔術関係の研究者であり、日夜思い思いの研究を進めているのだが、そんな中でクイシエは、他の研究を手伝う過程でまだ知らない術についてを教わったり、逆に他の研究者から教わった知識で別の研究の助けになったり、という日々を過ごしてきた。

クイシエは優れた術者であると同時に研究者でもあるのだ。

クイシエ自身は今のところ、これといって1つの研究に打ち込みたいという目標が無く、学べるものを村中の研究者から手広く吸収

し、知識と才能をさらに伸ばしていた。

フレンズチャット

唯一本格的に取り組んだ研究は魔導術【言語移植】の開発だったが、これは既に終わった研究だ。

そんなクイシェだったが、ここ数日は久しぶりに1日のほとんどの時間を、自分の研究室で過ごしていた。

フレンズチャット

一定時間ごとに帰ってくる深鷲に【言語移植】を掛けなおすとき以外はずっと机に向かい、積み上げた魔導書を紐解いては頁を差し替え、書き替えた魔導書を読み直すという事を繰り返している。

「――！」

深鷲が帰ってきた。

窓を見ると、日が暮れかけている。そういえば部屋が随分暗くなっていることに、今気が付いた。

（え、もうそんな時間かあ……）

思ったよりも捗^{はかど}ってないなあと、息を吐く。

席の左右に積み分けられた魔道書の上に魔導書を上乗せし、バラバラにした頁をひとまとめにくくると、深鷲を迎えに立ち上がる。

扉を開けば、一仕事終えた充足感ある表情で、深鷲が待っていた。

「ミサギちゃんおかえりー」

そう言って、膝立ちになった深鷲を抱きしめる。

魔光が灯り、言葉の壁と共に消えた。

「ただいまっ」

「おかえりなさい」

【言語移植】の成功確認も含め、改めてあいさつを交わした2人端から見ればすでに、ちょっと仲が良すぎるんじゃないか、というくらいの光景ではあった。

「明日お手伝いするところで、魔導術を覚えてくれるんだって」

テーブルの上で食事と一緒に並んでいる黒毛和牛に血を1滴舐めさせながら、深鷲が言った。

「魔導術……魔従術、じゃなくて？」

「ん、魔導術だって言ってたよー」

指先を口にくわえて答える深鷲。離すと、もう血は止まっている。つい先日、激動の2日間を経験した深鷲だが、少しずつ本来の調子を取り戻しつつあるように見えた。

もちろんクイシエは、まだ出会って間もない深鷲の本調子など知らないのだが、数日前よりも表情に緊張がないようだし、少なくとも自分と食事をしているこの時間は、しっかりとリラックスできているように思える。

少しでも不安を取り除けているのなら、とクイシエは自信を持っていた。

「あ、そっか。クジールさんだね」

魔導術を覚えてくれるという人物に思い当たったクイシエ。

疑問符を浮かべながらスプーンを咥える深鷺。

「クジールさんは、誰でも魔導術が簡単に扱える方法を研究してる人だよ」

「おおっ、そんな人がいたんだ!？」

自分で魔術が使ってみたと思っている深鷺は、この手の話題には特に食い付きが良かった。

「魔導術の入門は、魔従術の契約から始めて魔力を扱う感覚を掴んでいくのが近道なんだけど、そこからも躓く人は躓くし、場合によっては魔獣の世話も大変になっちゃうから、それ以外の方法もあった方が良いつて考えてるんだって」

「じゃあ、いまのわたしでも使えるかもしれない？」

深鷺はいまだに黒毛和牛との魔術的な意思疎通がうまくいっていない。まさに躓いている状態だ。

契約自体は異常なほどすんなりできているのだから、逆に順調すぎるという見方もできるのだが。

「それはわからないけど……でも、魔従術無しでも簡単に、が目標みたいだから」

「おおー……楽しみ」

魔法が存在しない世界から来たという深鷺が魔法に憧れを抱いているのをクイシエは知っている。期待に胸を膨らませている深鷺に、クイシエは恐る恐る聞いてみた。

「……説明、わかりやすかった？」

「うん、よくわかったよ?」

実は、クイシエは研究の合間に説明の勉強をしていた。深鷲にわかってもらえずに、説明役を師匠や他の誰かに取られてしまうのが嫌で、初心者にもよくわかるようにと、いろいろなことを再勉強しているのだ。

その関係から、クジールには昨日会ってきたばかりだったので、すらすらと喋ることができた。

再勉強と言っても、クイシエは天才と呼ばれる少女である。

知識自体は魔術関係に多少片寄りこそあれ、この年齢としては異常なほど豊富だ。

クジールから教わったのは、知らないことをわかりやすく伝えるコツや、相手がなにを知らず、自分の常識と相手の知識にどの程度の差があるのかを把握することなど、いくつかのアドバイスだけである。

ついでにクイシエは、その道の専門家たちに囲まれて育った自分が持つ「常識」は異世界人であるミサギとだけではなく、この世界の一般的な村人と比べてもかなりズレているということも、知ることになった。

「ふふ……」

ミサギは魔法が使えるかもしれないという期待から想像を膨らませているらしい。口元がゆるんでいることには気が付いているだろうか。

（でも……）

クイシエには気になることがあった。深鷲の魔力、謎の体質に関

する事だ。

血の1滴にはありえない魔力点。

100点ほどで増えもせず減りもしない魔力。

突如どこかへ瞬間移動してしまう現象。

瞬間移動については、解明するための方法をギョランダムたちが準備をしている。それに関してクイシェが今しなければならぬことはないので、とりあえず別のことに集中していた。

「あの……そういえば、なんだけど……」

「ん？」

「ミサギちゃんの魔力点のこと、どうして100点から変わらないかったのかなって」

「あー……どうしてなんだろうね？　そういうのもやっぱり異世界人だからかなー、なんて思ってたんだけど、それじゃなんにも説明になってないし……」

深鷲のほうは実のところ、実害の酷ひどかったワープ体質や服だけ人間状態に比べ、なにか問題があるというわけでもない魔力点についてはさほど考えていなかった。

どのみち魔力というものにまったく実感がないので、考えようがないこともある。

「そ、そうだよね。ごめんね、わかんないよね……」

クイシェにとっては自分の感覚で計りきれない魔力、というのはほとんど初めてのことだ。

おそらく深鷲から感じる違和感となにか関わりがあるものなのだろうとは思っただが、それ以上のことがまったくわからない。しかし本格的に調べるためにはちょっとした儀式とかなりの集中が必要となる。

そして、特に問題も起きていないのに自分の興味本位で深鷲を魔術的に調べ尽くそうとするのは躊躇ためらわれた。

それがもしワープ体質にも関係しているなら、深鷲のためにもなるだろうからと、積極的に調べてもいいとは思っていたが……

（変なこととして嫌われたくないし……）

魔術的な価値の高い特別な存在は、魔獣であれ獣人であれ人間であれ、研究対象となりうる。

場合によっては人の尊厳を無視して行われるような実験もあると聞いているクイシエとしては、深鷲が実験に対して悪印象を抱くかも、という不安があった。

深鷲の言うことが確かなら、深鷲は暗い儀式場に、異世界から裸で召喚されたのだ。魔術には憧れがあるかもしれないが、儀式のほうには良い顔をしないかもしれない。

クイシエには実感のない話だが、それできなくとも魔術に明るくない人たちは、専用の場を用意して集団で行われることの多い儀式というものを、不気味に感じるらしいのだ。

楽しみにしている深鷲に水を差すようなことはしたくないし、かといって不思議な魔力点の謎を放っておくのも良いとは思えない。

（どうしよう）

「どしたの？」

「あ、ううん、なんでもないよ」

手が止まっていたクイシェは残りの皿を綺麗にした。
つつがなく食事が終わり、1日も終わる。

結局その問題も、他の問題同様に翌日以降へ持ち越しとなった。

#31話：本クラッカーと命名権

「つまり、一指魔導書っていうのは指1本、魔力を流し込む箇所が1カ所でもいいものなんだ。表紙を見てもえればわかるけど、この丸い印に術者は指を合わせて魔力を流し込むわけ。印が3つなら三指、5つなら五指魔導書というわけだね。印ごとに流し込む魔力をそれぞれ調整しなければならない場合もあるから、二指魔導書以降はより難しくなっていく。そういうわけだから、一指魔導書はもつとも簡単だと言われているけど、僕が試作したこの魔導書は漠然と表紙に手のひらを合わせて魔力を流し込めば発動するようになってるんだ。指1本とはいえ指先へ魔力を集中させるのになんて訓練が必要になるからね。より簡単にするために、集中の工程も省略してしまおう、というわけさ。わかりやすく一掌魔導書ウツパチマウって名付けてみたよ。これなら、魔術未経験者でもなんとなく気合いを入れる程度のことと、術が発動してくれるんじゃないか」と期待しているんだけど、この村には純粋な素人がいないものだから実践ができなくてね。ちょうど全くの素人だというミサギちゃんが来てくれたのは大助かりだよ」

クジールはゆったりとした質素な服のところどころをインクで汚した、丸眼鏡の若い男だ。

背はすらりと高めで、優しいお兄さんというイメージがしっくりくる穏和な外見だが、ひとたび喋らせると止まらない性質たむであるらしい。

似たところがある兄を持つ深鷲は特に気にならなかったが、クイシエの方はすこし焦れているようだった。

お兄さん、といつても彼は獣人なので、実際の年齢は40前後だろうか。

体はほとんど隠れているし、見えている範囲にも獣要素が少なく、どんな動物がベースなのかわからないが、細長い尻尾が背後でふらふらとゆれているのが見える。

イメージ的に、草食獣がベースではないかと深鷲は思った。

彼の髪は獣人の目印として一般的な明るめの茶髪だったが、元の世界で茶色に染められた髪は見慣れていたのもあり、尻尾を隠してしまえば、深鷲には人間にしか見えない。

自己紹介から魔導書の解説、いくつかの閑話と今日のお手伝いについて、までをクジールが語り終わると、待つてましたという表情でさっそく前に出る深鷲。実験開始だ。

後ろではクイシェが不安げな顔で立ち会っていた。深鷲の不思議な体質によって、もしかしたら“なにか”が起こるかもしれないと考え、今日は一日付き添うことにしたのだ。

「気合いなら任せてくださいっ」

ガッツポーズをしてから、魔導書に手のひらを合わせる深鷲。憧れの魔法使いへの1歩として、期待に満ちた瞳がらんと輝いている。

すっかり深鷲の頭の上を定位置としている黒毛和牛（愛称はギュー）も、意気込みが伝わったのか「ピッ」と鳴いていた。

「いきまーす……………はーっ！」

体からオーラが吹き出るようなイメージで気合いを入れ、某宇宙戦闘民族の必殺技を放つイメージで、手のひらに力を込めた結果、

パン！

「きゃっ！？」

破裂音と共に、魔導書が細切れに吹き飛んだ。
研究室内に無数の紙片が舞い上がる。

「な、なんだっ！？」

驚愕したクジール。その視線が、紙吹雪で満たされた視界のなかから深鷲の姿を探して彷徨^{さまよ}う。

驚いて悲鳴をあげた深鷲が、着ていた服だけを床に落として、消えてしまったのだ。

「またっ！？」

目の前から再び消失した深鷲を見て、クイシエは慌てて自分の超感覚に集中し、すぐに安心した。

気配は家を外に出てすぐの所に感じられたからだ。

「よかつ……よくない！？」

足下に落ちている服やら下着やらをまるごと掴み、クイシエは外へ飛び出した。

「ごめんなさい！」

深鷲は魔導書を木っ端微塵にしまったことを謝罪していた。村の結界を壊したことといい、妙にモノを壊すようになってしまった自分の体質を嘆きつつ、どうやって弁償したらいいのかを考えたりする。

「いや、怪我がなくてなによりだよ。写本がいくつかあるし、値段としても大したことはないから、ね？　けど、いったいどういう事なんだい……と、聞いてわかることなのかい？」

クジールは深鷲に魔導書の価値を問われたが明言することは避け、逆に質問を返した。

「正直、さっぱりわかりません……」

外へ飛び出したクイシエは深鷲の姿を見ることができなかったが、すぐに黒毛和牛の術によるものと判断したクイシエは超感覚で位置を特定し、服を届けた。

幸い人気はなく、消える寸前に裸が見られたというような心配もないだろう。

今回は大事にならずに済んだので、2人ともほっとしていた。

「しかし、話には聞いていたけれどずいぶん面白い術を使うんだね、そのクロゲワギュー君は」

現在、深鷲はまたもや服だけ人間状態である。破裂音に驚いたせいか、黒毛和牛が術を解除してくれないままなのだ。

【言語移植】で会話可能な状態にしてからお願いしても、いうことを聞いてくれないどころか、ほとんど口を開いてもくれない。

「たぶん、びつくりしてるだけだよ。時間が経ったら言うことを聞いてくれるんじゃないかな？」

「でも、クイシエちゃんもクジールさんも気味悪いでしょ？」

深鷲としてはオバケじみた姿を見せながら話をするのが忍びないのだが、クイシエがいつものように大丈夫だよ、と言うより先にクジールが答えた。

「まあ言われてみればそうだね。じゃあ、目を瞑って話そうか」

言ってそのまま本当に目を閉じてしまった。

「見えなければ気にならないからね。さて、さっきのことについてなんだけれど」

あっさり問題が解決（？）されてしまい、ポカンとしている深鷲をほったらかしにして話し始めるクジール。クイシエはクイシエで「そんな手が……」と小声で呟いていたり。

「まず、部屋から消えてしまったのは例のわーぷ体質？ というのが原因なんだね」

「はい、それがどうしてなのかもさっぱりわからないんですけど」

3度目になる瞬間移動だったが、いまだによくわからず、そして誰にも説明できない現象だった。

ギョランダムたちが原因の解明に準備を始めていることは知っていたのでそのことを伝えると、

「ああ、そうなのか。じゃあそれは任せておけば安心だね。それで今消えているのがクロゲワギュー君の魔術というわけだ……名前はもう決めたのかい？」

「名前、ですか？」

「あ、そういえば……」

クイシエがうつかりしてた、と深鷲に説明する。

「新しい魔術を見つけたら、発見者が名前を付けることになってるんだよ。新しく作ってもだけど」

「そうなんだ」

実際は、ほんの少しでも改良が行われればそれに自分の名前を付けるような者もいる。それどころか改悪であつても名を付ける事もある。そんなことをしても多くの場合、名付けた本人が恥をかくだけなのだが。

「ちなみに魔獣のほうにも、種類としての名前を付けるんだけど……それもクロゲワギュー、でいいのかな？」

「いやーそれは……」

黒毛和牛は、おそらく世に知られていないはずの魔獣だ。そして黒毛和牛が使う魔術も知られていない魔術だった。

違う魔獣が同じ魔術を使っていることもあるので新魔獣Ⅱ新魔術というわけではないのだが　とにかく、新魔獣を見つけた者はその魔獣と魔術の名称を付けることができる。

大抵は水晶鼠や六足狼猿のようにわかりやすい名前をつけるのだが、自分の名を付けたり、妙に長い名前を考える者もいた。あまり

妙な名前を付けても浸透せずに別名で呼ばれてしまう事も多いので、凝った名前を付けることにさしたる意味はなかったりする。

「じゃあ最後、魔導書が爆発したことに心当たりはある？ わからないなりでもいいんだけど」

「えーと……」

深鷺が答えようとするのをクイシエが遮った。

「こ、心当たりはあります。でも、その前に約束してほしいことがあるんです」

#32話：約束事と召喚ちーと

「わかった、約束するよ」

あっさりと承諾するクジール。

クイシエが言う約束とは「ミサギを無理に利用しないこと」というものだ。

「まあ……改めて約束しなくても、この村に住む皆にとってはルー以前、暗黙の了解どころか常識だけれども」

クアラ村は、それぞれがなにかしらの事情や野望を抱えた魔術研究者の集まりだ。出身地はバラバラで、実は国外出身者が半数以上を占めている。

研究が進まずに出資者に見限られた者や、斬新すぎて見向きもされなかった者なども含め、方々から研究者をかき集めるように作られた村であり、恐らくこの世界でもっとも自由な研究集団だろう。

一応の名目上、国に貢献する研究が行われていることになっているが、住人達は自分の信念や趣味的欲求に忠実だ。

フリネラなどは、かなりわかりやすく自分の趣味を貫いている。その成果は文化、衛生、健康面に役立つだろうと思われるが、フリネラ本人はただお風呂好きでそのすばらしさを広めたいだけだ。

なお、研究成果についても組織や国に不当に奪われたり利用されたり、ということではなく、はぐれ研究者にとってはまさに楽園のような村である。

そんな自由なクアラ村だが、彼らがここに住み、研究を続けていくためには最低限守らなければならないルールが存在していた。特別難しいことが定められているわけではなく、ただ、ときに研究者という人種が破ってしまうことのある、常識というものについて定められているだけだ。手段は選べ、ということである。

そのなかには「個人の意思を尊重する」というものがあり、違反すれば即追放となるだろう。

拉致誘拐、人体実験、非人道的な研究を行う研究者や組織は少ない。この村にはそういった組織に嫌気が差して逃げ出した研究者もいる。

クイシエも、そういった組織の元で育っていれば今頃はもうなっていたかわからないような存在である。

「あ……や、それは……そうなんですけど……」

常識だ。と、冷静に考えてみるとまったく言われたとおりだったが、世の研究者が過去に引き起こしてきた悪行や人災の記録を知るクイシエとしては、深鷲を安心させるためにもしっかりと言葉にしておきたいという気持ちがあった。

このやりとり自体、深鷲を安心させるためだけのものに近い。

深鷲のことで頭がいっぱいになっていたものもあるが、当たり前のこと過ぎて逆に意識も実感もなかった、というのもある。だから改めて言葉にしたのだが、常識だと言われればそれも当然のことなので、いたたまれない。

そうして恥ずかしさで固まっているところに追い打ちがくる。

「ありがとね、クイシエちゃん」

「クイシエちゃんはやさしいねえ」

守ろうとしてくれている姿勢に、素直なお礼を言うクイシエと、微笑ましそうに褒めてくるクジール。

「はう」

うつむいて黙ってしまったクイシエは、しばらく両手で顔を隠していた。

クジールの研究室に3度破裂音が響く。

「うーん、なるほど。魔光は見えないけど、魔力は流れているんだね。それで、魔力を流したら魔導書の効果に関係なく破裂する、と……」

部屋にはたった今破裂させた魔導書の紙片が宙を舞っている。

中の頁が無惨に散らばり、表紙だけが残る手元を見て深鷲は恐る恐る聞いた。

「本当に良かったんですか？　こんなにしちゃって……」

「あんまり良いとはいえないけど、僕は君を魔導師にすると決めたからね」

クジールは万人に魔導術の素晴らしい恩恵を与えるために、と日夜研究が続けている。それは特殊な体質を持つらしい深鷲も例外で

はない。

「それに、不安にさせるかもしれないけど、君の魔力が原因で破裂しているのだとしたら君の力は危険かもしれない。コントロールできるようにしておいたほうが良いと思うよ」

「それってどんな危険があるんですか？」

「んー、とりあえず破裂するのは危ないよ。君に直接害が及ぶことはないと思うけど……なにぶん前例がないからね。だから、とりあえず内術は使わないようにね？ あ、内術って言うのは体内にイメージした魔導式に魔力を流して使う術のことだよ。魔従術も内術に当てはまるから、当面自分では使わないように。コントロールはクロゲワギュー君に任せておきなさい」

「……はい」

つまり深鷲の姿が消える消えないに関しては、今まで通り黒毛和牛に一任されると言うことだった。どのみち、コントロール以前に意思の疎通が出来ていないので問題はないだろう。

内術に関しては、自分の体が魔導書のかわりになるというようなものだと聞いている。

（……ということは、いま内術を使ったら、体が破裂する！？）

自分のステータス欄に「自爆ボタン」という不吉な項目が追加されたような気がした深鷲だったが、

（はっ！）

横にいたクイシエに心配される前に「大丈夫！ 問題ないよ！」と先手を打った。

「ミサギちゃん……」

台詞自体、強がりっぽかったようで、あまり効果はなかった。

「まあ、だから早いとこ破裂の原因を調べないかね　あ、これも推測でしかないけど、自分の魔力に害される生物というのは、それが特別な意味を持つ場合を除いて今のところ確認されていないから、ミサギちゃんが君自身の魔力で傷つけられるということはないと思うよ？　もちろん発動した術のほう、たとえば魔術で放った炎に自分が巻き込まれる。というような危険性はあるんだけどね」

クイシエはクジールに、自分の超感覚が深鷲から常に違和感を感じ取っていることと、魔術を使えばなしなのに何時間経っても、何度計ってみても魔力が100点から増えも減りもしないことを伝えた。魔導書を破裂させた後も、深鷲の魔力点は変化していない。

さらに深鷲は、それは自分が異世界からやってきた存在だからではないか、ということも話す。

「　異なる世界からきた、ね。ちょっと僕にはよくわからないけど、ミサギちゃんのいた世界ではよくある話なのかい？」

「物語としてはありますけど、事実としては………でもわたしが遭遇したんだから、あったのかなあ……」

以前ギュランダムにも、深鷲の世界に神隠しなどの伝承があると言ったことを思い出す。

「物語のほうも気になるなあ。どんな話があるんだい？」

「物語っていつても、わたしが知ってるのはほとんど………伝承とかじゃなくて、作り話ですよ？」

「ふうん？　たとえばどんな？」
「えーと……」

妙に食いつきの良いクジールに、ミサギは異世界系ストーリーをいくつか、かいつまんで説明した。

転生、召喚、二次創作、チート。

いくつもの要素の組み合わせで無数に描かれる物語。

ロボットものなど、説明が面倒そうなものは省く。

「なるほどねえ。いや、おもしろそうじゃない。よくわからないところもあつたけど、読んでみたいなあ」

「はあ」

読みたいと言われても丸暗記しているわけではないので、深鷲にはどうすることもできなかった。クジールも単にぼやいているだけで深鷲に要求しているわけではないのだろう。

「じゃあミサギちゃんはその、召喚ちーと、な分類に入るわけだね」
「チートですか？」

異世界不運系……というジャンルがあるのならそちらではないだろうか、と深鷲は反射的に思った。なにせ妙な体質ばかりが増えていくのだ。

ワープする度にすっぱんぽん（と考えて、兄が愛読していた男性向けのラブコメ作品などが頭をよぎったが忘れることにした）になり、視界の歪む透明人間もどきに变身し、まだ可能性でしかないにせよ「自爆能力」を持った主人公がいたいどこにいるというのか……。

深鷲の不満には気が付かず、クジールは続ける。

「魔力が100点から変わらないってこと。さっき自分で言っていたじゃないか。ばぐ、だっけ？」

計測した魔力が100点から微動だにしない、というのをクイシエから聞いて、深鷲が最初に連想したのはゲームの話だった。

裏技、バグ技、改造、チート。決して減らないMP。マジックポイント

だがそれはゲームの話で、現実には……質量保存則とか、なんかいろいろあるはずだ。

それともこの世界は自分が知らないだけで、なにかのゲームの世界なのだろうか？

目の前にいる2人がゲームの登場人物である、という思考はあまり愉快的結論に至りそうもないので、すぐに考えるのを止める深鷲。クジールは危険な話をする間も、ほとんど変わらぬ優しげな表情で話を続ける。

「もちろん減らないって言うだけじゃ破裂の説明にはなっていないけど、だから僕にはよくわからないんだけどね……ちょっと明日まで待っててもらえるかな？ 思いついたことがあるから、明日また実験をしよう」

#33話：ひと狩り行こうぜ！

クジール研究室における発破実験（それほど間違った表現ではないと深鷲は思った）は本来の目的が進められないため、昼前に中断となった。

クジールはこれから深鷲が魔導術を使えるようになるまで徹底的に深鷲をサポートすることにしたようで、村の他の手伝いを減らすか一時中断する、という話をフリネラと交渉するつもりだそうだ。深鷲が魔導術を憶えるというのもクジールの研究の立派な手伝いなので、実質深鷲を独占させてくれと頼みに行くようなものである。

研究に役立つ格好の人材であるのももちろんだが、さらに言えばデキの悪い生徒ほど燃えるタイプらしい。

「というわけだから、さっきの物語みたいに急に魔術の才能に目覚めたりしないでね？」

という冗談だか本気かわからない言葉をいただきつつ、深鷲とクイシエは散らばった紙片の掃除だけ済ませたのち、クジールの家をあとにする。

午後が空いてしまったので、深鷲はとりあえず今日の所は別のところへ手伝いにいこうと思ったのだが、その前に一旦クイシエの家に帰り、昼食をとることになった。

安心したのかそれともおながが空いたためか、黒毛和牛は魔術を解除し、深鷲の姿は元に戻っている。

「もうお昼かあ。あつという間だ」
「いろいろお話したもんね」

日差しが眩しくて暖かい。そういえばこの季節は春なのだろうか。元の世界ではもうすぐ夏になるうかという頃合いだったが、裸で山奥にいたときはだいぶ寒く感じた。

とはいえ全裸で野外にいた経験など他にはないし、知れてもせいぜい水着で真夏の浜辺にいたくらいだろう。山の平均気温も知らないで、あてにはならない。

そもそもこの地域には
この世界には、四季があるのだろうか？

深鷲がクイシエにそのあたりのことを聞こうと思ったところ、先に声を掛けてきた人物がいた。灰色の毛に犬耳、毛皮装束に弓を背負った獣人。

「よう、今から昼飯か？」
「あ……………カウスおじさん」

若干冷たい目のクイシエがカウスへ振り向いた。
フリネラの実験浴場で彼が吹き飛ばされてきたときのことは深鷲もまだ忘れておらず、若干きこちない対応を返す。

「カウスさん、コンニチハ」
「……………あからさまに距離がある……………」

がつくり落ち込んだカウスだったが、その姿勢は不屈の精神で立て直された。

深鷲としてもあれは不幸な事故と思っているので、立ち直ってく

れるならそれに越したことはない。なんだかんだと2度も裸を見られてることになるのだが……クイシエにおじさんと呼ばれているとおり、実年齢でいえば父親でも通るような歳のはずだ。だから（？）気にしないでおくことにしようと、深鷲はこの件については鍵を掛けてどこかへ放り投げることにした。

「クイシエ、このあと用事がないようならちょっと狩りに付き合ってくれよ」

「え、狩りですか？」

「もしかすると『嵌り岩』^{はま}ってのがいるかもしれないんだと」

「はまりいわ……聞いたことないですね」

買い物に誘う程度の気軽さで誘われるクイシエを見て、深鷲は思わず疑問を述べた。

「……クイシエちゃんが狩り？」

「あー、別におっかねえ魔獣をどうこうって話じゃあないぜ。むしろ今回の場合、クイシエがメインで俺は護衛役に過ぎないって感じだな」

「えっと、いいんですか？ そんな役で」

かつてカウスは魔獣探索勝負でクイシエに挑み、ボロ負けしたことがある。しかし、カウスも自信と誇りを持った狩人だというのに、狩獵者としては素人同然のクイシエの護衛役と評するのは、クイシエとしては引っかけかりを覚えるのだ。

クイシエのある意味挑発的ともとれる発言に苦笑いを返しながら、カウスは答えた。

「良いもなにも、見つけにくい魔獣が相手ならクイシエが1番だろう。相手が凶暴でないってんなおさらな。『山岩嵌まり』ってのは

かなりレアなミミック系の魔獣だそうだ」

ふん、と息を吐いて答えるカウス。

「かなり良い金になるって言うんで、さっきキルエイに頼まれたんだよ。ぜひクイシエを連れて行くように、ってな……」

カウスとしても、狩人のプライドにかけて自分1人でも狩猟を成功させてみせる、と言いたいところなのだが、クイシエに関しては、明確に敗北しているので強気には出られない。

そこに不満があるとすれば自分の実力に、である。

「それほど遠出はしないし、危険もそうないと思うぜ。なんならミサギも付いてくるか？」

「あー……わたし、専用の出入り口が完成するまでは出入り禁止なんです」

村に張られた【獣払い】の結界には、まだ深鷲用の出入口は用意されていない。村を覆うほどの大規模な結界の調整には時間がかかるらしい。いま外に出てしまうとまた結界が壊れ、サラリーマンで言うところの婚約指輪に相当する金額が失われてしまう。

「ああ、そういえばそんな体質だっけな……じゃあま、興味があったら出入口が完成した後にでも連れて行ってやるぜ。それでクイシエ、どうすんだ？」

「わかりました、行きます」

と、答えかけて。

「あ、でも、わたしがいないとミサギちゃんが困る……」

「んー……」

【言語移植】の効果時間は2時間ほどしかない。この世界の言葉はクイシエからすこしずつ習い、一応勉強はしているのだが、まだまだもなコミュニケーションが可能とはいえない。

「まーなんとかしてみよ。単純作業とか、1度やったことあるおしごとなら問題ないでしょ。わたし1人のためにこれ以上迷惑は掛けられないよ」

「じゃ決まりだな」

「うー……」

イエスノーだけでもわかればある程度のコミュニケーションは取れるだろう。身振り手振りに図解も組み合わせれば、簡単な手伝い程度はできるはずだ。

狩猟が長引く場合、クジールの研究に付き合うのは（というか深鷲の爆破体質の解明が）少し後回しになってしまいかもれないが、クイシエに仕事があるなら仕方がない。

爆破体質は、要するに術を使わなければ危険もないのだから緊急性もないのだ、と考える。

クイシエは不満かつ不安そうではあったが、自分が必要とされている以上は無下に断るわけにも行かず、カウスに付いていくことにした。

「じゃあ、お昼を食べたら行きますね」

「おう、広場で待ってるぜ」

準備のため、カウスも自宅に戻っていった。

「クイシエちゃんも狩りに出たりするんだね」

「ふ、普段はそんなことないよ？ ほら、わたしには不思議な感覚があるから、すぐく見つけにくい相手のときに、ちょっと役に立つくらいだから」

「はまりいわ、だっけ？」

「うん、知らない魔獣なんだけど……手がかりがあれば、問題ないと思う」

クイシエからは、仕事の成否についての不安は感じられなかった。ほぼ同じ年だというのにしっかりしてるなあ、などと思う深鷺。

「手がかりって、足跡とか？」

「うん。魔力の足跡みたいなものがあれば、それを辿っていくの。他にもたとえば、匂い、みたいなものとかか。凄く鼻が利く動物っているよね。わたしの感覚はそれとおんなじで、魔力の匂いを辿っていける感じで……」

クイシエが持つ感覚は魔力を感じる、という漠然とした1つの感覚ではなく、いくつもの感知方法を持ち、それらを組み合わせることでできるものだった。

使用する感覚を増やせば増やすほど負担が増えていくので長時間の使用には不向きとなっていくが、負担のないレベルの使用でもこれらの魔獣の嗅覚を凌駕するほど鋭敏だ。

魔力との距離、魔力の性質、魔光、大きさ、匂い、形、色、雰囲気……感知方法は無数にあり、クイシエ自身もまだ自覚できていない感覚があるかもしれないと考えている。

そして、その自覚できていない感覚の正体の1つが深鷺から感じる違和感なのではないかと、クイシエは考えていた。

（この違和感の正体がわかれば、ミサギちゃんの体質の謎も解けるかもしれないんだけどなあ……）

実際のところ、すでに把握している感覚も「それに近いイメージ」ということしかわかっていないようなものはある。

匂いのように思える物、色があるように感じるもの、それらが「いったいどんな意味を持つものなのか」という事までは判明していない。色が赤ければ魔獣の魔力で青ければ人間の魔力である、といったわかりやすい基準がないのだ。自分にしか無い感覚であるため調べるにも限度があるし、優先順位としても魔術の研究が上だ。

ハッキリとしているのは、「魔力の大きさ」や「活性度合い」その魔力との「距離」や「方角」などである。

ただ、感覚の正体がわからずとも、複数の感覚を組み合わせることによって種族や個体の特定が可能であるということに変わりはなく、非常に役立っていた。

狩猟などでは、まさにその力を最大限有効利用することになる。

「ということは……魔力1万だと……！　とか、仲間の魔力が消えた……！　とかできるんだね」

「1万はありえないんじゃないかな……あ、でも竜族とかだと、それくらいあるのかなあ？」

「竜族っ！？　やつぱりドラゴンとかいるんだ！？」

雑談に興じながら自宅へ向かう2人。

太陽はちょうどつぺんあたり。お昼どきである。

#34話：年の差押しかけと第4のステータス

「わたしが知ってるミミックって、宝箱に擬態した人食いおぼけ、みたいなものんだけど……」

某ロールプレイングゲームに登場するモンスターを思い出しながら、深鷲はかぼちゃのような煮物を口に入れる。

「えーと擬態っていうのは合ってるよ？ ミサギちゃんの世界にはおぼけが……いるんだ？」

クイシエは木製のスプーンを持つ手を止め、深鷲を見る。
煮物を飲み込んでから、深鷲は答える。

「いやいや、それは空想のお話で……」

ミミックとはそのまま擬態という意味の言葉なのだが、深鷲の知識では中から舌が飛び出る顔入り宝箱でしかなかった。

魔獣と呼ばれる生物たちを、その在り方で大きく4つに分類した内の1つが「ミミック」と呼ばれている。

ミミックタイプに分類される魔獣の特徴は、その名の通り“擬態”することだ。擬態に適した体質、あるいは魔術を持ち、その姿は4タイプの中でもっとも奇妙であることが多い。

攻撃性は低い傾向にあり、ミミックタイプの魔獣に襲われたという事例は世界中を見渡してもごく僅かだ。そういった意味では安全に狩ることが出来る相手だろう。

発見すること自体が難しく、自ら人を襲うこともほとんど無い

め、ミミックタイプは知られている数も少なく、逆に言えば未知の種が多い可能性が高い。

「ギューちゃんも、たぶんミミック……かな？」
「なるほど？」

まさに黒毛和牛はミミックタイプと言えるだろう。突然使い魔契約をしてしまったこともそうだが、視認できない小魔獣を見つけることが出来たというのはかなりの幸運だ。

疑問系であるのは、黒毛和牛の姿が、クイシェが知っているミミックタイプに比べればかなり普通の動物に近いせいだ。だが、ここもこした毛のせいで体のシルエットがまったくわからないというのも、奇妙といえそうだろう。

黒毛和牛の能力は環境に体色を合わせるようなものではなく「相手に自分が見えないようにする」というものだ。詳しい仕組みはわからないが、深鷲は盲点のようなものだと考えている。

自分の体が常に相手にとって盲点になる。服は見えるが頭は見えないし、透明であれば頭の先に見えるはずであろう物も見えない。だから景色が歪んで見えるし、それを気持ち悪いと評されてしまう。例えばフォークを握っている場合、手そのものと、手に隠れて見えない部分がすべて盲点になるので、不自然に短いフォークが袖にぴったりくっついてるように見えたりする。

（自分からは普通に見えるからわからないけど、確かにギューを最初に見たときは妙な感じだったな……）

そのことから、深鷲はこの魔術を【盲点迷彩】と名付けることにした。

最初に連想したのは【光学迷彩】だったのだが、光を曲げたり背面を映したりして透明になっているわけではなさそうだったので、そのまま言葉を差し替えたのだ。

黒毛和牛が頭からテーブルに降りてきたので、深鷲は熱した針を指に刺して出した血を与える。相変わらず深鷲に魔力の変化はなく、黒毛和牛の方は1滴で満タンだ。

エサやりがおわるといつものように自分の指をくわえる。すぐに血は止まった。

「……そういえば、傷を治す魔法とかつてある？」

「……え！？」

驚いた表情のクイシエをみて、深鷲も驚く。

「え、わたしなにか変なこと言った……？」

「あ、ううん。ごめん、そうだよ、知らないよね。でもどうして？」

「ほら、わたしがクイシエちゃんに助けてもらったとき、朝起きたらわたし、怪我の1つもしてなかったでしょ？」

クイシエとの初対面のあと、ベッドから降りる際に気が付いたこと。

捻った足首はまったく痛まず、素足で山奥を彷徨ったこと（オキシエ）による擦り傷切り傷なども全くなかった。もちろん脚だけではなく、全身に細かい傷や炎症なんかもあっただろう。虫さされだってあったはずだ。それらが一切まったく存在しなかった。そのせいで昨日のことは全て夢だったんじゃないかとすら思ったものだ。

直後に魔法の實在する世界である事を知り、それらの傷は魔術で

治療してくれたのかも、とも思っていたりもしたが……

「あ、ミサギちゃん気にしてたね、怪我がなかったって……そういえば、ミラナさんも気にしてたなあ」

「ミラナさん？」

「あ、ミサギちゃんを診察してくれたた先生だよ……ってそういえばあのときはわたしが交替したから会ってないよね。ええと……」

クイシエはミラナと深鷲の接点を思い出そうと記憶を探った。

「あ、そうだ。山に迎えに行ったときに一緒にいた人、憶えてる？ミサギちゃんが消えてたときの」

「えーと……狩人のおばさんと……もうひとり、いたね、うん」

あのときはクイシエのことばかり見ていたが、そういえば見えな
い深鷲を気味悪がっていた狩人のおばさんがいたのを思い出す。

クイシエは人間のほうが女狩人のジエネット、猫系獣人のほうが
ミラナだと説明した。

「ミラナさんはお医者さんなの」

研究者が集まるこの村は、医療知識に関しても並の山村では有り
得ないほど充実している。村人にその道の専門家が混じっていたり
するからなのだが、この村で特に医術を専門とする2人のうちの1
人が、女医のミラナ・コールなのだという。

「あれ？ コールって……」

「あ、うん。お師匠様の苗字だよ」

「親子……とか？」

「うっん、血のつながりもないよ？」

「え……じゃあ、夫婦!？」

ミラナの外見年齢は20代前半が良いところだろう。獣人だから倍だとしても40〜50歳といったところで、フリネラなどと比べてその年が離れているとは思えない。

対して見た目が白髪白髭で仙人風のギュランダムは、少なくとも70歳以上だろう。その彼も獣人であるらしいので、実際は140を越えていることになる。

(あれ、お師匠さん140越えであの若々しさなのか……)

と、いろんな意味で感心しそうになる深鷺。

「すっごい年の差だね!」

「あ、うーんと……結婚してるわけでもないんだけど……なんて言えはいいのかな。勝手に名乗ってる……のかな」

「ん? えーと……それは」

同じ苗字を勝手に名乗り、血縁ではなく、未婚である。そこから導き出される答え。

「……押しかけ女房?」

「……なのかな? ごめんね、込み入った話になるからちょっと話しにくいの」

「あつ、そうなんだ。ごめんっ」

興味は尽きなかったが、話題を元に戻すことにした深鷺。

クイシエは治癒の魔術について語り始める。

「治癒魔術のことなんだけど、いまのところそういう魔術は……発

見されてないんだ」

「え、そうなの？」

意外なことに驚いてしまう深鷺。魔法ファンタジーといえばまず火球を投げる攻撃魔法と瞬間治療が可能な回復魔法の2つだろうと、真っ先にイメージしていたのだ。

「自分の自然治癒力を上昇させる術とか……そのために必要になる魔力を分け与える方法とかはあるんだけど、他人の傷を直接癒すような術は……確認されてないの」

ミラナの話題からの話しづらさが抜けていないのか、クイシェの口調は歯切れが悪い。

「だから、ミサギちゃんは自分の魔術で治癒力を強化して、寝ている間に治ったんじゃないかって話もあったんだけど……そういえばあのときは魔従術すら使えなかったんだよね」

「今も使えてるとは言えないけどねー……」

満腹になって寝ているのか、テーブルの隅で置物になっている黒毛和牛をつつく深鷺。

「……てことは、これも不思議体質の1つ、なのかなー」

薄々そうなのではないかと思っていたが、これでまた1つ確定してしまっただけだった。

（ようやくまともな効果を持つ体質が見つかったと喜ぶべきか、妙な体質が多くてこの先も不安だと思っべきか……）

自分でもいまいちどう感じて良いかわからない深鷺だったが、とりあえずは直接的なデメリットも思いつかないので良しとした。

「ま、怪我が治りやすいって言うのは純粹に便利で、嬉しいもんだよね」

「……うん」

（ちょっと回復が早すぎる気もするんだけど……言わない方が良いかなあ……）

自分なりに納得しているらしい深鷺に水を差すのも悪い気がして、クイシエは感想を胸にしまい込んだ。

現在、深鷺のイメージするステータス欄には「ワープ体質」「自爆ボタン」「【盲点迷彩】」「自然治癒力向上」と書かれている。

（これ以上増えなくて良いよー？）

と、疲れ気味に思う深鷺だった。

#35話：ふたりの待ち時間

「るえ、せあり、おーふあ、ろー、あす、もあ……むおあ？……
むお、あ………むおあ？」

クイシエの家の自分の部屋で、深鷺は自分で書いた文字とこの世界の文字を見比べながらひたすら発声練習を繰り返していた。机に広げているのは子供向けの物語が描かれた絵本である。

まず、クイシエが出掛けるまえに【言語移植】フランスチャットをかけてもらった。最初の2時間ほどで物語を読みながら日本語に翻訳し、同時に読み方をメモしてゆく。

【言語移植】の効果が切れたあとは、それを元に物語を音読する。あとはそれをひたすら続けていき、この世界の文字と言葉を覚えようとしているのだった。

「うーん……それにしても不思議な感じ」

直前までは内容を完璧に理解していたのに、術の効果が切れた途端まったくわからなくなってしまうという喪失感は、少し怖い物があった。部分的記憶喪失のようでもある。もちろん喪失したのではなく、増えていたものが元に戻っているだけなのだが。

自分で翻訳した文章を自分の語学の教科書代わりにする、なんて体験はそうそうできる物ではないだろう。

珍しい体験ができているのだから、と得をしたような気分であることにした深鷺は、発音を繰り返し繰り返し、憶えられるように念

じながら発している。

クイシェ不在の間、深鷺は村の手伝いをするのではなく言葉を覚える事に専念することとなった。クイシェがいまいと言葉が通じない、という状態を早めに克服した方が良好とのフリネラの判断だ。お手伝い自体はなくても村の研究は回っていたんだから気にしないで良い、とのことだった。

深鷺としては自分の勉強だけでは働いているとは言えないし、なるべくなら1人にはなりたくなかったので、可能ならお手伝いを優先させたかったのだが、早く憶えた方が深鷺のためになるとフリネラに断られてしまった。

（まあ、つまり勉強に集中していればいいんだよ）

とはいえ、じっと集中して机に向かうタイプの勉強は苦手である。そというのが得意なのは双子の妹の方なのだ。

（トキちゃんどうしてるかな……）

と、さっそくホームシックになりかけて頭を振る深鷺だった。

（ミサギちゃんどうしてるかな……）

同時刻、似たようなことを考えているクイシェは山中を2人の狩人、カウスとジェネットに守られながら歩いていた。

ジェネットは年齢で言えばカウスと同世代だろうか、この村では少数派である人間の狩人だ。短髪と瞳は銅色で、身長はカウスよりもあたま1つ低い、人間の女性としては高い方だろう。

狩人らしく鍛えられた体が生み出す動きは、外見上は息子ほどの年齢であるカウスにひけをとらない若々しさがある。

目立つた装備は背負った弓と矢筒だけで、あとは腰にポーチを2つつけていた。

カウスのほうはいつもの複合毛皮の上着姿だ。腰に短刀を差し、反対側の腰と背中には狩猟縄を装備している。

「おいクイシエ、ぼーっとするなよ。転ぶぞ？」

「あつ、ごめんなさい」

進路を遮るように出されたカウスの腕に反応して、歩みを止めたクイシエ。

目の前の地面にはまるで足を引っ掛けるために生えているのではないかと思えるほど見事な根っこが地面から浮き上がっている。実際そういう植物もあるという話だからこれもその一種なのかも、とクイシエは思ったが、カウスの反応を伺うとどうやら違うらしい。

「あんまり油断しすぎるなよ？ 向こうから襲いかかってくることはないだろうが、他の魔獣がいらないとも限らないぞ……ってまあクイシエがそれを見逃すわけではないか」

3人は山奥を歩いている。クイシエの超感覚を頼りに獲物を追っているのだ。

事の発端は、深鷲は隠れていた斜面に空いていた横穴にある。

深鷲の話伝え聞いた村の財務担当者であるキルエイがその穴のくぐりを聞いた時、とある金になりそうな魔獣の存在を思いだしたらしい。

嵌^{はま}り岩。

詳細は不明。

恐らくこういった生態であろう、というものが予測されてはいるが、目撃例が少なく、情報を集めてみても信憑性の低い、噂程度のものしか集まらない、そんな魔獣だ。ミミックタイプとしては珍しいことでもない。

岩や壁面に擬態するタイプのミミック系魔獣で、まさに名前の通り岩山などに嵌^{はま}っているらしい。

「しかし思っただが、魔獣の第1発見者どもはどうしてこうセンスのない名前ばかり付けるかね」

「そりゃ、みょうちくりんな名前を付けても憶えにくいからじゃないかねエ」

ジェネットがすかさず答えたが、カウスは続ける。

「にしたところで見たまま過ぎるだろうがよ。六足狼猿にしたってそりゃ6本足で狼顔の猿だって、わかりやすいっちゃ分かりやすいけどよ」

「そののなにが不満なんだい」

「ゴリリゴンとかじゃ駄目なのかと」

「……それがアンタのセンスあるネーミングなのかい」

「あ？ 駄目かゴリリゴン」

「……ま、良いんじゃないかね。ようは、アンタが自分で未発見の魔獣を見つけて好きに名付けりゃいいのさ」

ジエネットはさして興味もない雑談に終止符を打った。カウスの方も特に気にせず、足を進めてゆく。雑談中であっても2人は一切気を抜いてはいない。

「あ、ありました。追跡する魔力は間違えてなかったみたいです」
「さすがクイシエだね」

ジエネットの褒め言葉に照れ笑いを返すと、クイシエは目を閉じた。意識を集中させ、どの程度この場にいたのか、ここからどこへ向かったのかを感じ取るうとする。

クイシエが見つけたのは、斜面に空いた穴だ。印象的だったので憶えている。その穴は深鷲を初めて見つけた場所にあったものとそっくりだったからだ。

3人はまず最初の手がかりを得るため、先日最初に深鷲を見つけた地点へと足を運んだ。そして穴に残る僅かな魔力の残滓ざんしから魔獣のものらしき痕跡を特定し、辿ってきた先にこの穴に辿り着いた。この穴は嵌り岩はまが岩に擬態する際に掘った穴なのだろう。

クイシエが目を開いたのを見て、カウスが訪ねる。

「なにかわかったか？」

「はい。えーと……たぶん、1つの穴にいる期間は10日前後だと思います。この場にいたのはおそらく8日前ほど前までなので、次の穴で追いつけそうですね」

わかりすぎだろう、と狩人2人は思ったが、口には出さない。

「思ったより早く終わりそうだな」

「なにいつてんだい。ミミック相手に油断するんじゃないよ」

クイシエのおかげで簡単に見つけられるとしても、捕まえるのに失敗するようでは意味がない。

3人は深鷲を発見した場所から先ほどの穴までとほぼ同じくらいの時間を掛け、嵌り岩が視認できるであろう位置にまでやってきた。今回は急斜面ではなく岩壁が広がっており、そのどこかに嵌り岩がいることになる。

「このあたり……ここから見て、あっちのほうにいるはず……あ、あの岩ですね」

「……どの岩だ？」

相手に気が付かれないようかなりの距離を空けているため、指を指すだけでは特定できなかった。この距離からではおよそ深鷲がすっぽり入る程度の穴に嵌る岩のサイズだと、指の先でも隠せてしま

う。

「……岩があるようにしか見えないねエ」

狩人2人も、ただなんの工夫もなく見ているだけではない。知識と経験を総動員し、周囲にあるどんな僅かな痕跡でも見落とさぬようにと注視しているのだ。嵌るために掘られたであろう土の痕跡や、移動の際に残るであろう足跡、周囲の岩との相違点……

だが、なんら感覚に訴えてくる異常は見当たらず、感じ取れず、

そして指し示された岩がどれなのかもわからない。

岩に化けていたであろう8日間で痕跡が消えてしまったのか。

クイシエには見つけることができて、自分たちには見分けが付かないということが、狩人としてのプライドを少なからず傷つけようとしていた。

「……………」

「……………」

「……えーと……………」

穴が空きそうなほど前方を注視する2人にどう声を掛けて良いモノか迷ったクイシエは、とりあえずミミックに動きもないようなので、2人が満足するまで見守ることにした。

黒毛和牛が窓際で気持ちよさそうにのびている。

「りえーあー……………りえーあー……………ふう、口がまわんなくなってきた……………クイシエちゃんまだかなー」

深鷺は自室でひたすら発声練習を続けていた。

#36話：嵌り岩ちよつとだけ狩猟戦

とある廃坑寸前の鉾山で、高価な宝石の原石が見つかった。

鉾山夫たちはお宝を掘り当てたと喜び勇んで原石を掘り出している。

そうして集められた原石をいざ職人が加工し始めた瞬間、その“ミミックたち”は蜘蛛の子を散らすように逃げ出してしまったという。

「偽物……っていうか、魔獣だって気が付かなかったの？」

「うん、それがね。いくつか捕まえた原石を調べてみたら、やっぱりその宝石しか思えない、というかほとんどそのものだったんだよ。擬態というより、宝石と同化して生まれた魔獣、みたいな」

クイシエはお昼に深鷲と交わした会話を思い出していた。2人の狩人がにらむ先にいるミミックも、同じタイプなのだろうか。少なくとも表面から見る限りは本物の岩そのものだ。単純な視力では、どう見たところで岩なのである。

クイシエの超感覚では、そこから感じる魔力で魔獣がいることは一目瞭然なのだが、そうでなければわからないのが当然だろう。

もちろんクイシエには狩人たちの経験や知識を侮っているわけではない。足跡の追跡くらいならまだ見た目にも理解できるが、足跡ではないものまで追跡する狩人たちを見ると、それこそ魔術でも使っているのではないかと思ってしまうくなる。

目の前の2人が優秀な狩人だということは知っているので、これは魔獣の擬態能力の高さを褒めるべきなのだろう。

ただ、少なくともカウスは出発前、護衛役に甘んじるという事について『良いものにも、見つけにくい魔獣が相手ならクイシエが1番だろう』などと言っていたではないか。にもかかわらず、これはいったいどういうことなのか。

2人の狩人はかなり長い間、日の傾きがわかる程度の時間、じっと岩山を凝視し続けていた。

いかげん待つものにも疲れてしまったクイシエは、2人に声を掛ける。

「……あのー、もうそろそろいいですか……？」

「ま、まってくれ。もう少しだけ……」

往生際悪く、カウスが粘ろうとする。その両眼は見開きすぎて血走っているほどだ。途中からは魔術で視力を強化もしていたから、それなりに負荷がかかっているだろう。

あまり長時間の強化は体にも良くないとクイシエは諭^{さと}そうとするが、先にジェネットが折れた。

「……いや、いいよ。悪かったね待たせて」

「いえ……」

クイシエは待てと言われていたわけではない。ただ2人が、どうしても嵌り岩の位置を自力で見極めたそうにしていたので、その意思を尊重していただけである。

「ほら、アンタも諦めな。今回は修行不足だったってことさ」

「くっ……わかったよ」

ジェネットはカウスの肩を叩き、気持ちを入れ替えるとクイシエに向き直る。

「ところで、結局どの岩が嵌り岩なんだい？ このまま適当に近寄って適当に捕まえられるならそれで良いけど、ミミック種は予想外の事をするやつが少なくないからね。できれば先に位置は知っておきたい」

「えーと……」

光を飛ばして位置を示す、などの方法もあるが、それに反応して逃げられてしまう可能性もある。

そこでクイシエは絵を描くことにした。

「【誘魔浮青虫】」

わずかに魔光を発したクイシエの手のひらから、青く透き通る無数の粒子が浮かび上がった。青粒には実体はなく、青く色付けされた空気の玉が浮いているようなものだ。量は、ちょうど砂粒を両手ですくいあげたほどだろうか。

「なんだいそれは？」

「えーとですね……こうやって使います」

クイシエは指先に魔光を灯した。魔術を使う為ではなく、単に指先の魔力を活性化させたただけだ。

そのまま宙に浮いている粒に指先を近づけると、周囲の粒が吸い付くように集まってくる。

クイシエが自分から見える景色をなぞるように大きく腕を動かす

と、指先の動きに対して追いつけなかった青粒が軌跡として残り、線となった。この、青粒が集まる速度と範囲の調整が、この術のポイントだ。

集まる速度を上げすぎるとどこまでも付いてきてしまい、指の軌跡が線として残らない。範囲が広すぎると、せっかく描いた線が歪んでしまうのだ。

この場に深鷲がいれば、砂鉄と磁石で絵を描いているようなものだとして理解しただろう。

「基本は【浮灯虫】なんですけど、光の代わりに、結界の色付けに使う術式を使ってみました。浮き虫の数を増やして、活性魔力に吸い寄せられる術式をつけたら、できあがりです。宙に絵が描けるんですよ」

「またアンタは……さも簡単そうに術を作るねエ」

欠点としては、絵を描くために指先に集中した魔力を活性化するスキルが必要どころだ。

クイシエはサクサクと線を引いてゆき、青粒が足りなくなると術を使い足した。そうして数分後にはシンプルな線が木々と岩山を縁取る示すかなり大きな絵が完成した。ベッドほどの大きさがある。

「……おまたせしました。えーと……木のとっぺんとか峰の位置が、絵と風景で一致するように覗いてみてください。下の方の点が……ええと、色つけますね」

クイシエは青い粒の1つに【赤っぱい】を使用し、色を変えた。

「この赤い点が、嵌り岩です」

促された2人は、青い半透明色で宙に描かれた絵を、クイシエと同じ位置から覗き込む。下部に赤でマーキングされたところには、何の変哲もない岩があった。

「あたしやあの上のかと思ってたんだがね……」

「俺はこの左側のやつだ……ほら、この尖り方は不自然じゃねえか？」

「……行きますよ？」

未練タラタラな2人を置いて先に進もうとするクイシエ。素人に先行させるわけにはいかないと、慌てて2人も歩き出した。

「クイシエはあたしの後ろをついてきな。カウス、岩壁の上を頼んだよ」

「まかしとけ」

ジェネットは相手の生態がいまいちよくわかっていない現状、岩壁を垂直に駆け上がる可能性も考慮し、カウスを上配置することにした。縄縛戦闘術に長けたカウスなら縄を利用して壁を駆け下りることも可能だ。

今回は討伐ではなく生け捕りが目的であるため、ジェネットは矢尻用の麻酔薬、投網、【閃光爆書】などの装備も持ってきているが、岩相手に矢が有効とは思えず、とりあえずは投網を放ることにする。単純にそれで引っかかってくれれば良し、逃げ出すようであれば多少痛めつけたところを縛り上げる、ということになるだろう。

「クイシエには一応、いざというときの支援を頼むかね」

「わかりました」

カウスが配置に付いたのを確認して、ジェネットは移動を始める。じりじりと近づいていき、残り10メートルを切ったあたり。急加速して近寄り、動きを見せた岩に向けて投網を勢いよく放った。

「避けた！」

投網の外側へ飛び出した岩を見て、ジェネットが舌打ちする。岩からまるで虫のような足が生えていた。穴から飛び出したそれは壁面にへばり付き、カサカサと這い登る。

とても人1人がすっぽり入ってしまうほどの大岩とは思えない動きだ。自重を支えているとは信じがたい足の細さと、その速度

「カウス！」

ジェネットが叫んだ。すでにカウスは岩壁を飛び降りており、木に結んであるロープを掴み、振り子のように壁面を駆けると、両足を壁から離し、嵌り岩へと突っ込んだ。

「落ちやがれ！」

気合いと共にカウスの両足が岩を蹴り飛ばす。

同時に空いた手から放たれていたロープが嵌り岩に打ち付けられ、先端のフックが嵌り岩を軸に回り込み、カウスの巧みな手さばきによって嵌り岩を縛り付けた。

しかし、壁から剥がされた嵌り岩は、予想外の動きに出る。

「……なんだあ!？」

嵌り岩はバラバラに砕けてしまった。が、それだけではない。バラバラに砕けた岩がそれぞれ跳ね飛ぶように移動を始めたのだ。深鷲がその動きを見ていれば、スーパースポーツみたいだと評しただろう。

手応えのないロープを引き戻し、そのまま宙に弧を描くカウス。

「ジエネット！ 弓！」

「ええいわかつてるよ！」

10数匹に分かれた嵌り岩は、割れた位置から岩の内側をさらけ出していた。そこは岩ではなく生き物としての柔らかさを備えているようだと思われた2人は、麻酔の矢が効くだろうと判断したのだ。

素早く弓を構え、矢をつがえる。狙いを定め、跳ね回る岩嵌りのうち1匹を射る。

「
！」

悲鳴を發したかどうか、射られた嵌り岩は地に墜ちてそのまま鈍い動きを見せた。

しかし、その1匹を射貫いている間にも他の個体は逃げてゆく。遅れてカウスが地面に着地する。

バラバラになったどれを追うべきか迷う、そしてその動きが意外と素早い。クイシエを連れては全てに追いつくことはできないと判断した。

クイシエを置いて追跡するわけにもいかない。

「ちくしょう、逃げられた……」

#37話：前向き、跳ね飛び、影の中

「シーぜいむ、ぐウエすトラ、あー、口あむ……ろアむ……」

深鷲の部屋では、相変わらずつたない言葉が発し続けられていた。大陸東部で多く使われている言語、トーリア語の発音だ。

絵本の内容を書き写し、発音を平仮名に当てはめたリストとにらめっこをしながら唸る深鷲。

リストを伏せると、本を開いて読み進めていく。同じ事を半日も続けているので、数ページ分はそろそろ内容を暗記できそうなのだが、発音の方はどうにも覚えが悪い。【言語移植】の効果中はあるなりに簡単に口が回るのに、効果が切れた途端舌の使い方まで忘れてしまうのだ。

そして、気が付いてしまった。

この言葉を覚えたとしても、もし元の世界に戻るための手がかりが他の言語圏にまで行かなければ手に入らない場合、その言葉も覚える必要があるだろう、ということに。

しかし、深鷲は奮起して勉強に取り組んでいた。

（こんなに人に恵まれてて、最初から躓いてるわけにはいかないしね！）

まだ1週間ほどしか滞在していないが、このクアラ村の住人たちはクイシエを始め、皆優しい人ばかりである。

見ず知らずの人間が見知らぬ土地になんの知識もなく放り出された、という前提から想像できるその人物の顛末として、現在の自分とはとても恵まれてるだろう。なにせ、衣、食、住、職、人、全てがそろっているのだから。

時代が時代で場合が場合なら、人によってはこのままここで暮らしていきたいと思う者もいるのではないだろうか。そう考えてしまいうくらいの好待遇である。

しかしその上でなお、深鷲は元の世界に還りたいのだ。

謎の召喚儀式場を突き止め、元の世界へ戻る方法を探したい。

そして、そんなわがままにも協力してくれている人たちがいるのだから、言葉の壁の1つや2つで立ち止まっているわけにはいかないのである。

村人たちの好意に後押しされる形で前向きに、精力的に物事を考えている深鷲だった。

「ピッ？」

「……ん？」

机の端で丸まっていた（のか普段通りなのかあまり区別が付かないほど毛むくじゃらな）黒毛和牛が、急に首（らしき部分）を（おそらく）上に向けて一声鳴いた。

今の今まで一鳴きもせず、微動だにもしなかった黒毛和牛のちょっとした動きに、深鷲は興味を抱く。

「どつかしたの？」

黒毛和牛が向いたと思われる方向を見てても、天井しかない。

「……」

黒毛和牛は首の向きを変えずにいたが、しばらくすると元の姿勢に戻り、再び微動だにしなくなった。

「……なんだったの？」

寝ぼけていたのだろうか。

「まあいつか」

気にはなったが、気にしても仕方がない。気分転換になったと思つて、勉強を再開する深鷲。

ふと窓の外を見ると、だいぶ日が傾いているようだった。

「つて、もうこんな時間かあ……クイシェちゃんの狩りは終わったかな？」

「……」

「……」

「……さ、帰ろうかね」

「くっ……」

諦めるよう促す^{うなが}ジェネットに、悔しそうな表情で応じるカウス。

あのあと、クイシェの超感覚により追跡を繰り返し、逃げた嵌り岩を2度見つけるに至ったが、最終的に捕まえられたのは6匹だけ

だった。

そう、6匹だけだ。

6匹捕まえたのだから充分だろう、と考えることはできなかった。

「クイシエ、どういうことなんだあれ。嵌り岩は群生の魔獣だったのか？」

最初、バラバラになって逃げ出した嵌り岩を見たカウスはクイシエにそう疑問を投げかけた。

クイシエは申し訳なさそうにしつつ、答えを返す。

「いえ、あの……魔獣の反応は1つだけでした。だから、たぶん……あれ全部まとめて、1匹だったんだと思います」

「つてことはあれか。逃げた全部を捕まえないと駄目だつて事か？」

「……そりゃ面倒だねえ」

身を隠すため岩に擬態し、壁面を移動可能な足を持ち、衝撃を与えれば分裂して飛び跳ねるように逃げ回る。

（捕まえられる気がしないよね……？）

クイシエはまだ闘志を燃やす2人（というかおもに1人）とは対照的に諦めムードだった。

なにかの冗談のようにはね回り、一瞬で視界の外へ逃げ去ってしまふ嵌り岩。カウスは苛立ちをその名前へとぶつけている。

「誰だよ嵌り岩なんて名付けたやつは……はじけ岩だとか跳ね岩ってつけておけよ……」

「ゴリリゴンじゃなかったのかい？」

「うるせっ」

茶々をいれるジェネットは、捕まえた1匹を片手で持ち、重さを計るように振った。

大きさは片手に乗る程度だ。バラバラになったそれぞれの大きさは一定ではない。

分離した嵌り岩は、魔獣というよりも魔虫 昆虫的な要素

が多いように思える存在だった。岩に見える固い殻の内側には、無数の細かい脚と数本の細長い脚が生えている。長い方が跳躍用だ。本数は個体ごとにバラバラだ。

岩部分はまさしく岩そのもので、岩を刳り貫いて被ったのだと考えた方が自然なくらいだ。ただし、岩とは思えないほどに軽い。

対して、肉部分はかなりの弾力性があり、そこらの木に投げつければそのまま跳ね返ってくるだろう。

「見た目に反してかなり軽いねエ。まあそうでもなきや、こんな細足であんな跳ね回るような動きは不可能だろうけどさ」

ミミック系の魔獣は人に素手で掴まれただけでも逃げる術がほとんどなくなってしまう。脚部を覆うように掴むとあの跳ね回る脚で手が弾かれてしまう可能性もあるが、頭の岩部分を掴んで吊してしまえば、足をどれだけ動かしたところ宙を蹴るばかりである。

「事前に準備さえしてくればこんなやつら……」

カウスはいつまでも悔しそうにしている。

今回自分の役目は護衛役に過ぎない カウスがそう言うていたのは、ミミックタイプは一般に見つけ出すことこそがもっとも大変な作業であり、捕まえるのは発見に比べれば遥かに容易いことであるとされているからだ。

しかし、クイシェはいともたやすく発見しているのに対して、自

分たちは容易い方であるはずの仕事もこなせていないということに、自分への憤りを隠せないでいる。

初見の相手を狩り損ねるといふのは、言ってしまうえば当たり前のことではあるのだが。

「ま、今日の所はここまでさね」

「ちくしょう負けた！ 明日は確実に捕らえてやる……！」

「え、明日もやるんですか……」

「明日もミサギが居残りだと思つと少し憂鬱になるクイシエだった。

「負けっ放しでいられるか！ あれは、やれば勝てる相手だ！」

唯一の救いか、あるいは難点か、判断しがたいところではあるが
どうやらバラバラになった嵌り岩たちは短時間で再集結することが確認できた。

それがなぜ難点かというと、元が1匹の生物であるため、もしかすると長時間分かれていることで死んでしまうかもしれないと予想できたからだ。バラバラになると、生存に必要な部位が別々の場所にあることになる。確実なことではないが、それは魔獣に関する過去の事例から思い起こされたことだった。

つまり、バラバラになった嵌り岩を1匹1匹探し回ることとはしなくてもいいが、1度に全部捕まえないければ……すくなくとも半数以上を捕まえないければ、重要な器官が足りない方、あるいは全体が死んでしまう可能性があるということだ。

いまのところ、半数以上を捕らえることができればそこが部品たちの集結地点となるだろうと3人は考えている。あるいは核のような個体（部品？）が存在していて、それを捕らえる必要があるのかもしれないが、どちらにせよ半数を捉えれば二分の一の確率で核も

確保できるだろう。

（分かれた岩の数と大きさからして、岩部分を身につけていない個体は何匹かいる感じなんだよね……それらが核かもしれない、かな？でも魔力量は均等だったし……）

クイシエはジェネットが最初に捕まえた1匹を若干気味悪そうに掴んでいたが、それを地面に降ろす。

せっかく捕らえた6匹だが、今日の所はこのまま逃がしてしまうことにした。

魔力の特徴はクイシエが念入りに記憶しておいたので、次回も探すこと自体は楽に済むだろう。

こうして今日の捕獲は不可能と判断し、一旦村に引き返すことにした3人だった。

夕暮れの空の下。

「あの使い魔、なかなか鋭い」

小屋が落とす影に潜み、クイシエの家を遠くから見つめる瞳があった。

瞳の視線は遠方へと移り、村の外へ。

そこには山奥から現れた3つの人影がある。

「今日の所はここまで」

視線の持ち主は、夕闇のなかへ溶け込むように消えた。

#38話：寂しい寂しくないのフィーリング

村に着く頃にはすっかり日も暮れていた。

山育ちとはいえ、プロの狩人たちと共に行動していたクイシエはヘトヘトになっている。明日も狩りが待っていると思うと、クイシエの体は休息や睡眠を求め始めた。

しかし、このあと深鷲と話したいし、夕食も作らなければならなし、深鷲と話……それらの楽しみを放ってまで睡眠を得たいなどとは思えず、気分を切り替えて自宅へ向かう。

扉を開けると、来るのがわかっていたのか、深鷲が待ちかまえていた。

「クイシエちゃん、たダメマッ！」

「お、おかえり？ ミサギちゃん……逆だけど」

微妙な顔をしているクイシエを見て、深鷲はなにか間違えたかと思気になったものの、とりあえずいつもの抱き合いタイムへ。

フレンスチャット

「【言語移植】」

「おかえりクイシエちゃん……ってそうか、逆だった！」

「あはは、ただいま」

クイシエは立ち上がった深鷲をじーっと見つめている。

「……ん？ なんか変なところある？」

「あ、ううん。気にしないで」

クイシエは深鷲の様子を見てすこし落胆したことに、自分でも驚いていた。

今日の午後、深鷺は1人きりでずっと部屋にこもっていたはずである。そのわりにはあまり寂しさの気配が感じられなかったことを、残念に思ってしまったのだ。

（そんなこと考えたら駄目だよ……！）

急に目を逸らしたクイシエをすこし訝^{いぶか}しみながらも、深鷺はクイシエを食堂へと促す。

「おなか空いたでしょ？ 夕飯、勝手に用意しちゃった」
「ええっ？」

食卓にはすでに料理が並んでいた。クイシエは一瞬自分が用意できなかつた悔しさと深鷺が用意してくれていたことへの感謝がごちや混ぜになり混乱したが、すぐに立ち直って礼を言った。

「あ、ありがとうミサギちゃん。おいしそうだね？」
「あはは……材料がなにがなにやらわからなかつたから、レシピ不明という恐ろしいメニューだけどね……でも味見はしたから大丈夫だよ！」

深鷺はいつも外から帰ってくる側だったのもあるが、クイシエがいるときは食事を作らせてもらえなかつた。

それで鬱憤^{つつぶん}がたまつてクイシエがいない隙に……など考えたわけではなく、単にクイシエが出掛けていて自分が家にいるんだから作ろう、と考えただけではあるのだが 結局は今まで作らせてもらえなかつた分の、開放感のようなものを感じながらの調理となっていた。

作ったのは、肉じゃが、らしきもの、である。

どうやらジャガイモのように見える食材と、その他色的に未知の野菜類、なんの肉だかわからない肉、あとは調理用の酒があることは、最近クイシェの料理を見て知っていたので、おそらく肉じゃがが作れるだろうと判断したのだ。

包丁などの器具は深鷲が知るものと大差なく、調理は順調に進むかに思えたが、途中で“醤油”がないことに気が付く。他の味付け方法を知らない深鷲は焦った。

結局、目につくところにあつた調味料類をいろいろ試し、なんとかまでもそんな味付けに落ち着いたという代物だ。辛さで誤魔化せないかと試した経緯があるので、味付けは少し辛めになった。

（料理はフィーリングだよね……！）

結果的に美味しければいいのだと、一応は美味しく出来たからこそ言える危険な結果論を胸に刻みつつ、クイシェに椅子を引いて席に着くことを勧める。

「さあどうぞっ」

自分も席に着き、祈りの言葉を述べる。

「今日の巡りに感謝します、いただきます」っ！

深鷲は自分で作った料理をぱくぱくと食べ始めたが、クイシェの方は一口目を口に運ぶ途中でピタリと動きを止めた。

目の前には湯気立つおいしそうな料理がある。

クイシェは、魔術が使えない深鷲がどうやって火を通した料理を

用意したのか、その可能性に思い至ったのだ。

深鷺がこの家の台所で料理をする上でもっとも大きな問題だったのが、コンロと鍋が魔導術版の電磁調理器であることだった。これが動かせないとどうしようもないのだが、深鷺は魔導術が使えない。深鷺が見た限りでは他に火を使えるような設備はなかったが、そのかわり、幸運にも深鷺の部屋に置かれた照明と同じような、スイッチ代わりの石らしきものが置かれているのをみつけた。

恐る恐る深鷺が石を図形に合わせて置くと、術が発動し鍋が加熱されたので、深鷺は調理を行うことが出来たわけなのだが、それを聞いたクイシエは少し焦った顔になる。

「あの……ね？ ええと……うう……」

「どしたの？ ……あ、あれって触っちゃダメだった！？」

「……あの……」、ごめんね！ ミサギちゃんがわるいわけじゃないし、料理を作ってくれたのも嬉しいし！」

まだなにを言われたわけでもないのに、いきなり謝り始めてしまった。

クイシエを宥めつつ、どういふことなのかを聞くと、それは、深鷺がスイッチの石に触れた場合、石が壊れてしまつかもしれない、という懸念だった。

コンロのスイッチ代わりとして使われた石は、深鷺の部屋の照明に使われている石とは比べものにならない、『魔涸石』という“超希少鉱物だ。”

自然には魔力が蓄積しないという珍しい物質で、そのかわり人が魔力を流し込めば並の物質よりも遥かに大量の魔力を溜めておくことができる。

魔導書同様、魔力を流し込んで使うものなので、もしかすると今朝のように粉々に吹き飛んでしまいかもしれないから、とクイシエは言う。

「グリモア紙と違って、割れたら危ないし……」

午前中に行ったクジールとの実験で吹き飛んだ魔導書の紙は、かなりの勢いで飛び散った。あれが石で行われれば、小さな爆弾並の威力になりかねない。

そうでなくとも魔涸石は、この特殊な環境の村においても10個も無い貴重品だ。壊れてしまう可能性は除いておきたい。

クイシエも正確な金額は知らなかったが、村の結界の設置費用よりは高いはずだと、深鷲に教えた。

「さ、触らないでよね!!」

普通のそのあたりに落ちている石と見分けが付かないような石が、まさかそんな価値あるものだとは思っていなかった深鷲は青ざめつつ、二度と触れないでこつと心に誓うのだった。

「じゃあ明日も狩りに行くの？」

「うん、ごめんね……明日には決着つくと思うから」

「そっかー」

カウス、ジエネット。2人とも優秀な狩人だ。クイシエは2人を信頼しているし、今日はむしろ自分が足を引っ張った部分もあった。

クイシエを残して魔獣を追うことができるなら、半数以上を捕らえることはできたかもしれない。それによって残りの嵌り岩が、多数が囚われている方に集まると決まったわけではないのだが、それを確認することはできただろう。

明日は万全を期して、人員も増やして挑む事になるし、クイシエも一応使えそうな術を持って行くつもりだ。恐らく使う機会は無いだろうが、万が一の失敗を考えると術の選択は吟味しなければならぬ。

失敗が続けば、それだけ深鷲と一緒にいられる時間が減るのだから。

（だいふ軽い相手だし、【狭風檻】とかがいいかな。気絶するようなタイプには見えないから衝撃っぽい術はあんまり意味が無さそう。【蓄土】で捕まえるのは、わたしの脚じゃ無理だし……あーあ、こんなことがあるなら、なにか便利な術でも作っておけばよかった。それとも、今から作ってみようかな……明日までなら間に合う……でも、徹夜になっちゃうなあ……）

「クイシエちゃん？」

考え込んでいたクイシエの向かいの席では両手をブンブン振りながら気が付かれるのを待っている深鷲がいた。

「……あつ！ ごめん！ なに！？ 聞いてなかった！ ごめんね！？」

どうやら小さな動きでは気が付かなかったのだったのだんだん大きな動きへシフトしていったらしい。深鷲は、それはそれで楽しそうにしていたが。

「両手で気が付いちゃったか……かくなる上は踊ろうかと思ったのに」

「踊るの……？」

「ふふふ、次回をお楽しみに！」

ちなみにクイシエが考え事をしている時に振った話題は、狩猟に關してのあれこれだったのだが、明日も狩りに出るようだから明日聞けばいいか、と思いなおした。

（明日も1人かあ……）

考え事をしているクイシエの気を引こうとしてみたり、狩猟に關しての話を聞いてみようとしてみたりしつつ　クイシエの自己嫌悪など知らず、しっかりと寂しがっている深鷺だった。

#39話：スパイと筆談

月が雲に隠れた夜。

カウスが狩人小屋の明かりを灯し装備の点検をしていると、突如背後から声がかけられた。

「狩りはどうだった」

「うおっ？ おまえか……気配消して後ろに立つなよ」

驚いて振り向くと、そこには影があり辛うじて人のシルエットが見えた。誰だかはわかっている。こんなことをするのは彼女だけだ。

「狩りはどうだった」

気にせず問いを繰り返す相手に、正直答えたくはないものの、正直に答えるカウス。

「あー……………負けた」

「明日も行くの」

「明日は勝って帰ってくるけどな」

さほど興味があるとは思えない口ぶりに、

（こいつなんでこんな事聞いてきてるんだ？）

と逆に興味が湧くカウスだったが、聞いても答える相手とは思えず、湧いた興味をそのまま散らす。

そのままいつものように返事もなく去っていくのかと思ったが、意外にも質問が続いた。

「クイシエも？」

クイシエのことが気になるのだろうか。

「ああ、クイシエには悪いが、あいつ無しじゃちょっと……面倒だな」

「そう」

もしかクイシエを山中連れ回していることに関しての苦言か？
どうせ答えないだろうが、一応聞いてみるか……

「なあおまえ、なにが気になってるんだ？」

振り向くカウス。

「って、もういねえし……」

翌日、山奥にて。

「それでも喰らいやがれっ！」
「昨日の借りは返すよっ！」

バラバラになって逃走を図る嵌り岩を、カウスはものすごい勢いで追い駆け回り、投網でその大半を捕まえ、残りを粘着玉で足止め、ロープで縛り付け、素手で叩き伏せていた。カウスの討ちもらしはジエネットが矢で打ち落とす。魔導術による身体強化も自分たちで記憶しているものではなく、動体視力や走力に重きを置いた術を魔導書を使って掛けている。2人は昨日の鬱憤を完全に晴らすつもりで狩りをしていた。

「……おい、あの2人なんであんなにテンション高いんだ？」
「昨日“負けた”からでしょう。2人とも、負けず嫌いだから」

クイシエの護衛役として新たに連れられてきた狩人の男女2人は、狩猟開始前に決して手を出すなと念を押されていたので、クイシエと共に暴れ回る2人の光景を眺めていた。というか2人の姿は既に見えておらず、木々の奥から聞こえてくる恨みのこもった嬉しそうな声を2人分聞いているだけだ。

虎模様の男が、兎耳の女に問う。

「カウスはともかく、ジエネットってわりと大人ぶる方だろ？」

「大人ぶるって事は子供ってことでしょ。よーは似たもの同士なんだわね」

「いい年してまったく……獣人は精神年齢が子供なやつらが多いって俗説の代表みたいなやつらだな」

「ジエネットは人間でしょ」

好き放題言われる2人だったが、綿密に準備を行い、クイシエという枷かせから外された2人の狩人は人間業とは思えない活躍で次々に嵌り岩を行動不能にしてゆく。

「で、クイシエはクイシエでなんか気が別の方向してる？」
「まあそれも仕方ないわよ。初めて同世代の友達ができたんだからね」

騒がしく狩猟中の2人がいる方向を向いているようでいて、実際はその上方、流れる雲をなんとなく視界に収めながら、クイシエは上の空で岩肌に座っていた。

（よかった……これで仕事は終わりだし、今日は早く帰れそう……
あ、でもあんまり早いと寂しく思ってくれないかな……じゃない！
だからそういうことは思っちゃ駄目だって……）

時はさかのぼり、場所は深鷺の部屋。

「……こうして2人はまた、いつものように手をつないで旅を続けるのでした、と」

深鷺は自分の勉強用に、日本語訳とその発音をメモしたノートを作っていた。紙やインクは魔導術用ではなく普通の品を使っている。

教科書代わりの本には、クイシエの部屋にあった絵物語をいくつかわせてもらっている。クイシエからはどれでも好きな本を使っていると言われていたので、内容が簡単そうな絵本から選んだ。

内容は女の子向け男の子向け両方があった。2人の仲の良い女の子が不思議な出来事に関わる可愛い冒険もの、男の子が仲間を作りながら竜を倒して英雄になる話、1人の女性が竜に認められて

王様になる話……

「クイシェちゃんフレンズチャットが小さい頃に読んでたのかなー……おっと、のんびりしてる暇はないんだった。【言語移植】が効いてるうちに写せるだけ写さないと」

つぎは英雄ものにしようか、と一番上に詰んでいたからという理由で次の本を開き、翻訳と発音を描き始める。

机の隅で転がっていた黒毛和牛が、ぴくり、と反応した。

「ん？ どーかした？」

黒毛和牛の向いた方向、背後を見ても閉じたドアがあるだけだ。

「……なにか、わたしには見えないものを見ている？」

と、いきなり口を塞がれた。

「　　違う。見えるモノを見ていただけ」

「んんっ!？」

危険を感じた黒毛和牛が瞬時に【盲点迷彩】を発動させた。深鷲の姿は見えなくなつたが、何者かはすでに深鷲の口を塞ぎ、喉に短剣を突きつけている。

聞こえたのは聞いたことのない女性の声だ。

「動かないで。抵抗したら殺す。いまから質問をする。質問には筆談で答えて」

（なに！？　ころす！？　このひとだれ！？）

聞こえてきたのは女の声だ。視界の下端に見えている、深鷺の口を押さえている手も、女性のもののように思える。後頭部に当たる感触は胸だろうか。

深鷺は体を緊張で強ばらせながらも、震える手で返事を書いた。

『はい』

その文字に満足したのか、女性は宣言どおり質問を始めた。

「あなたはどこの生まれ」

『ニホン』『異世界』『チキユウ』

「あなたの目的は」

『家に帰ること』

「どこの組織に所属している」

『学校?』

「なぜここに来たの」

『わからない』

質問に少し間が空く。

「あなたにとってクイシエはなに」

『恩人』『友達』『テンシ?』

「あなたにとってギョランダムはなに」

『クイシエちゃんのお師匠さん』『センニンっぽい』『ちょっと変な人』

「黙って、さもなくば殺す」

「んーっ!?(喋ってないよ!?)」

また少し間が空いた。言ってることがおかしいと自分で気が付いたのだろうか? と深鷲は思った。

「……質問を続ける」

このひとは、2人の知り合いだろうか。

現実味のない展開に頭が追いつく前に、そんな疑問が湧き出てきた。というよりも、非現実に慣れてきたのだろうか?

深鷲は恐怖を感じ困惑しながらも、考える余裕を持ち合わせていた。

知り合いだとしたら、どうしてこんなことをするんだろう?

しかし深鷲の疑問に答えがあるはずもなく、あまり感情の感じられない淡々とした声による質問が続いてゆく。

「あなたにとって、魔術とはなに」

『たのしそっ』『使ってみたい』

「あなたにとって、攻撃魔術とはなに」

『かつこよさげ？』

「あなたにとって、治癒魔術とはなに」

『あつたら便利そう』

「……………」

しばらく沈黙が続き、深鷲としては緊張に満ちた時間が過ぎてゆく。

「あなたはどこかのスパイ」

『ちが』

「いいえ、あなたはスパイ。答えて。どこから送り込まれたのか。なにが目的か。正直に答えれば命だけは助け」

「た、わ、けもんがああ！！」

ばたん！ と勢いよく扉が開く音と共に突如響いたギュランダムの声で、深鷲は手と刃物による拘束から解放された。

（タワ・ケモンガー？）

聞き慣れない口調から、深鷲は一瞬妙な動物を空想しかけたが、とりあえず落ち着くことにする。

背後にはギュランダムがいた。そして視線をそのまま移動させると

「ええっ？」

まるで漫画やアニメで見た忍者かなにかのように、猫系獣人の女性部屋の隅、壁と天井によって作られる角に、両手両足で張り付いていた。

その人物には見覚えがある。確か……

「えーと……………ミラナさん？」

#40話：暗殺者と変な人

「えーと……………ミラナさん？」

深鷲が山で拾われた日には容態を見てくれたという猫系獣人が、そこにいた。

まるで忍者のように、壁に張り付いた姿で。

先日、実験浴場から山奥にワープしたときにクイシェと共に助けに来てくれた、狩人ではない方の女性だ。

深鷲は意識がある状態でミラナと会うのは二度目になるが、ほとんど初対面のような印象を受けていた。

ミラナの乳白色の髪は肩まで伸びていて その髪の色を見た時点で、深鷲は不思議に思った。前に見たとき、どうしてこんなに変わった色の髪をしているのに、印象に残っていなかったのか、と。

山奥で会ったとき、そこに誰かがいたのは憶えている。しかしどんな人だったのかをほとんど憶えていない。ジエネットの方は憶えていたのに。

髪の色について人のことは言えないが、この村の人は、ほとんどが深鷲から見れば変わった髪の色をしているので、憶えやすいのだ。色だけでなく模様まであるのだから、とても個性的で印象に残りやすい。とはいえ、そのほとんどは銅色、茶系、灰色系などが占めているので、白というのは際立って印象的だ。

白髪のギュランダムもいるが、ミラナは老人ではないし、色も白

髪というよりは柔らかめの、乳白色だ。クイシェの水晶髪に比べれば、印象は薄くなるだろうが……

彼女はプロポーションを見る限り20代に見えるが、よく見れば顔は幼い作りをしている。背は獣人としてはどうなのかわからないが、深鷲が知る人間の基準であれば平均ほどだろう。

体の方に獣要素があるかは長袖長ズボン姿なのでわからないが、フリネラと同じように頭にはネコっぽい耳が生えている。瞳もネコのような虹彩と瞳孔を備えていて、色は薄い青色だ。

深鷲はギュランダムの後ろからミラナを見ている。

ギュランダムは深鷲をかばうような位置取りで、天井スレスレにあるミラナの顔を見上げている。ギュランダムは背が高いので首の角度はそれほどきつくない。

「嫌な予感がしてきてみれば……」

ギュランダムは溜息をついた。

「ギュランダム。どうかした？」

「どうかした、じゃないわ馬鹿者が！　　いったいなにをしとるんじゃない！」

「尋問」

「尋問する必要がどこにあるんじゃない！」

「彼女はスパイだから」

「どこからそんな根拠もないことを……！」

ミラナはナイフを持つ手を壁から離し、深鷲の顔に向ける。

「彼女の髪は黒い。髪を黒く染めるのは暗殺者」

（え、そうなんだ）

ちよつとシヨックを受ける深鷲。それは一般的な常識ではなく、一部の裏の世界に少なからず関わる人間のみの知識なのだが、深鷲がそんなことを知るはずもないし、そもそもそれほどメジャーなものではない。

「それは異世界人だからじゃ！　そもそも黒髪の暗殺者が昼間から堂々と姿を見せるはずなかるうが！」

「彼女の使い魔は暗殺向きの生来術を持っている」

【盲点迷彩】のことだろう。深鷲はなるほどと思ってしまった。

確かに姿を隠せるのは泥棒とか暗殺に向いていそうだ。

「その使い魔は先日契約したばかりじゃ！」

「彼女は最初から怪しい。山で見つけた遭難者なのに救助されたと怪我の1つもなかった」

「それはそついう体質なんじゃ！」

いわれてみれば怪しいと思われるでも仕方がない要素だった。一応クイシエとカウス、ギュランダムが穴に隠れていたということは証言出来るが、それ以前にどこにいてなにをしていたのかは深鷲の言うことを信じるか否か、でしか判断できない。

（そつか、信じてもらえない場合はこうなる……………の？　え、その場合暗殺者扱いなの…………？）

少し飛躍しすぎじゃないだろうかと思っっている間も、2人

の口論は続く。

「彼女には、情報を手にさえすれば逃げる手段がある」

「その手段をわざわざこちらに教えるメリットは何じゃ！　そもそもコントロールができませんようではないか！」

今度はワープ体質のことを言っているのだろう。確かに言われてみれば、逃げるのには役立ちそうだ。自分の意思で場所とタイミングが決められて、あとは服ごと移動できるとしたら、便利そう……と、深鷲はガツカリした。

ミラナは自分が考える尋問の必要性、深鷲をスパイだとする根拠は述べるが、ギュランダムの反論に対してさらに反論する気はないらしかった。

ギュランダムの方はといえば、声は荒々しいものの、1つ1つ答えを返し、論しているようにも見える。

（ていうか）

ここまでの理由のほとんどが妙な体質のせいだった。つくづく変な体になってしまったと気落ちする深鷲の耳に、今度は体質が関係ない理由が聞こえてきた。

「彼女は　　治癒魔術に興味を持っている」

（治癒魔術……？）

クイシェが言っていた。治癒魔術は存在が確認されていない、と。

「そりや仕方なかう！ 知らんもんに興味が湧くのは若者なら当然じゃ！ 別にわしのことを知っているわけじゃなかう！」

（わしのこと？）

深鷺は気になったが、今聞くのは無理だろうと断念する。

「まったく、まさかこんな小さな子にまで疑惑の目を向けるとは……」

そう言うギュランダムを見て、こういうことは今までにも何度かあったのかもしれないと、深鷺は感じた。
ミラナはまだ続ける。

「彼女は、ギュランダムを変な人呼ばわりした」

「そりや事実じゃ！」

「え、自覚ありますか」

ついツッコミを入れてしまった深鷺。その言葉に反応してミラナがこちらに、ギツとさび付いた人形の如く首を回した。壁に張り付く女性の、ホラーっぽい動きに深鷺の足が竦む。

「ゆるせない……！」

彼女の声に、はじめて感情らしきものが混じった。情感の薄そうな顔がほんの少しだけ歪み、劇的に変化するよりも恐ろしさを感じさせる。それは氷が音をたてて軋むような表情だった。ミラナの、猫のものである瞳孔が細くなってゆき

すかさず「ごめんなさい！？」と怯え気味に謝る深鷺。

「えーいやめんか！ とりあえずそこから降りて、ミサギに謝れ！」
言われたミラナは表情を元に戻し、しかし壁に貼り付いたまま言ってきた。

「わかった。形だけは謝る。ごめんなさい」
「え、ええと……はい」

深鷲はとりあえず形だけと明言されてしまった謝罪を受け入れる。
ギユランダムは先ほどよりも深く、深く溜息をつき、ミラナに二度と深鷲に手を出さないように念を押した。

「そもそもじゃな……仮に、ミサギが暗殺者だったとして、わしが後れを取るとでも思つとるのか、ミラナよ」

「ギユランダムは、女相手だと油断する」

「おぬしは油断させた上でも失敗したじやろうが」

「それは、わたしの魅力が足りなかったから……」

「あーあーおぬしは充分魅力的じゃよ」

「ならどうして結婚しない」

「またそれか……」

「あの、お師匠さん？」

「ん？ なんじゃ？」

会話からすっかり取り残されていた深鷲だったが、聞き捨てならない言葉を聞いてしまったので質問を挟んだ。

「ミラナさんが失敗したことって……」
「あー……」

目を逸らすギュランダムだったが、答えない意味もないと思ったのか、すぐに答えを返した。

「……こやつは昔、わしを殺しに来た暗殺者だったんじゃよ」

深鷲はスツキリ納得した。

「今はギュランダムの良き妻」

元暗殺者の押しかけ女房は、とにかく自分の意見を淡々と述べるばかりだ。

「そんなことは認めとらん……まあ、話せば長くなるだろ」。

……………？

、ミサギ？」

「うあー、このタイミングで……………」

自分の名前だけは聞き取れたが、他はもう何を言っているのかまったく判らなくなる。【言語移植】フレンスチャットの効果時間が切れてしまったようだ。

言葉の勉強はまだ、会話が聞き取れるまでには至っていない。

深鷲はジェスチャーでそのことを伝えようとするが、ギュランダムと視線が合わないことに気が付く。

（あ、もしかしてまた【盲点迷彩】？）

いまだ術の発動などの感覚がよくわからない深鷲は、ミラナに口を塞がれた時に黒毛和牛が【盲点迷彩】を使っていたことに気が付いていなかった。

深鷲は見えているはずの服の袖などを使いジェスチャーを試みよ

うとして、やめた。

(日本語で喋ればいいんじゃない)

魔導術【言語移植^{フレンズチャット}】の効果が切れたことさえ伝わればいいのだからと、深鷲は適当に日本語で喋った。

「12時の鐘が鳴りました！」

だいぶ訝^{いぶか}しげな顔をされたが、ギュランダムは深鷲が伝えたいことを理解したようだった。振り返り、ギュランダムはミラナの腕を掴み壁から降ろそうとする。

深鷲は(あ、抱きとめるのかな?)と少し期待したが、ミラナはそのまま垂直に落ちて、“物音を立てることなく”着地した。

(おや?)

しかし深鷲はミラナの身体能力の高さに驚くよりも、抱きとめるついでにお尻くらいは触りそうなエロエロ老人であるギュランダムが何もしなかったことの方に興味が湧いた。

(……圏外?)

そういえばクイシエちゃん以外にセクハラをしているところは見ていない。もしや年齢が圏外なのでは……

「

」

深鷲が自分でもちよつと失礼かな、と思うようなことを考えていると、ミラナが何か言ってきた。当然意味は分からないが。

単純に、そういうことをする空気ではなかったのだろうと、至極当然のことに思い当たり、深鷲はエロ老人の評価（？）を保留した。

ギュランダムはミラナを前に押しやるように退室していった。

去り際に自分の口元を手のひらで覆ったりしながら、深鷲に何かを伝えようとしていたが、恐らくクイシエには秘密にしておくように、といったところだろう。

人差し指を口元に当てるジェスチャーはこの世界には無いのかも知れない。

過ぎ去っていった嵐のようなやりとりを思い出しながらも深鷲は再び机に向うが……筆が進まない。

（あー……ちょっと、なんか、ドキドキしたなー……）

そんなレベルの出来事ではなかったのだが、いろいろ考えることがあり、最初に受けた衝撃はうやむやになってしまった。

疲れを感じた深鷲は、腕を枕にして机に顔を伏せる。

「はあ……」

疑いの目を向けられてしまった。異世界の常識というか、この村の事情についてはどれほど知っているか自信はないし、どこまで知っていいことなのかわからないが、いきなり暗殺者呼ばわりというのは、さすがに荒唐無稽なのだろうと、ギュランダムの反応を見る限りは判断できる。

しかし実際に暗殺者であつたらしいミラナという存在もあり……

（疑われても仕方ない立場なんだよね。みんな優しい人ばかりだから、忘れてたけど）

自分は、自分の身を証明するものをなにひとつ持っていないのだと、この身ひとつで異世界に飛ばされた不運を改めて嘆く。たとえなにかを持っていたとして何かの役に立つわけではないが、深鷲はカバンに入れて持ち歩いていた生徒手帳を恋しく思った。

再び溜息をつく。さっきからなんかこの部屋、溜息だらけじゃん、などと気付きながら。

（はー……クイシェちゃん、早く帰ってこないかなー……）

心の中でも溜息をついて、寂しがる深鷲だった。

#41話：コハラミトキと寂しい気持ち

ぼんやりとした思考。
ぼんやりとした視界。
ぼんやりと思い出す。

お姉ちゃん。

声が聞こえる。

お姉ちゃん？

産まれた時から知っている、この声は？

「ねえ、お姉ちゃん。どうしたの？」

「え？ あ、トキちゃんだ………あれ？」

深鷺の目の前には双子の妹美鶉^{みとぎ}がいた。

瓜二つというほどには似ていない。双子だといえば「あんまり似てないね」と人は言い、双子だと知らない人からは「そっくりだ」と言われる程度だ。

「いや、なんか……なんだろう？ ……トキちゃんはかわいいよね！」
「なんだかわからなくなっただからって、急に褒めないでよ……」

深鷺としては、瓜二つではなくて良かったと思っている。

なぜなら、生まれた時から見続けているこのかわいい妹の顔が自分と同じ顔だったら、自分がまるでナルシストみたいだからだ。ある程度似ていないことで、思う存分、気兼ねなく褒めることができる。

「だってトキちゃん、褒めたら伸びるタイプでしょ？」

「あ、じゃあ身長を褒めてほしいな」

「程良く小さいよね！」

「双子なのにどうして大きいのお姉ちゃんはっ！」

「あははー、お姉ちゃんだからかな！」

何が誇らしいのか胸を張る深鷺も、背が高いと言えるほどの身長ではない。美鶉が小さいのだ。目線の高さが明らかに違う程度には差がある。

美鶉は拗ねたようなそぶりを見せたが、すぐに心配そうな表情になった。

「で、本当にどうしたの？ 調子悪い？」

「んー……ぼーっとしてた？」

「魂抜けたような顔してたよ」

うーん、と腕を組み首をかしげる深鷺。思い出そうとするが、思考にもやが掛かっているように、なにも思い出せない。

なにか、色々なことがあったような気がしているのだけでも。

(……“ あった ”？ …… 考えてた、じゃなくて？ …… だよな？)

夢でも見ていたのだろうか 歩きながら？ それもないだろう。考え事をしていたんだと、思う。

「たぶん何か考えてた。でもなにを考えてたのか忘れちゃった」
「ボケボケして……車に轢かれちゃうよ？」

ここは通学路だ。毎日2人で下校しているわけではないが、今日は仲良く歩道の上を並んで歩いている。

あきれ顔で姉を見る妹はさりげなく車道側を歩いていた。

深鷲はそのことには気が付かずに、忘れたらしきなにかを思い出そうとしている。

「なんだろう……忘れたってことは忘れてもいいことかなあ」

「忘れたってことは、思い出さないと駄目なことだと思うよ」

「そう？」

「たぶん、忘れてもいいことだったら、忘れたこと自体忘れちゃうもんだよ。テキトーな意見だけど」

「むう」

てきとうなことであっても、それっぽく言われてしまうとそのような気がしてくる深鷲だった。

しかし深鷲は言われたことに感心しているうちに、何を思い出そうとしていたのかもよくわからなくなっていた。いや、もともとわかっていなかっただろうか？

それこそ夢の内容を思い出そうとしているかのようだ。思い出せるような気はするのに、まったく思い出せない。内容は憶えていないけど、そのとき感じた気持ちだけが残っている、ような。

では、その気持ちとは？

そんな深鷲の様子を見ていた美鶴は、足を止めると両手を腰に当てた。信号待ちだ。深鷲もつられて足を止める。

美鴫は深鷺の顔を横から覗き込むように見上げながら言った。

「まったく、そんなにぼんやりしてて大丈夫かな？」

「なにが？」

「来週のテスト」

「ひう」

しゃっくりに近いような声を出した深鷺は一瞬固まり、しかし大丈夫と返す。

「わたしにはとつても頭の良い妹がいるから！」

「ふーん？ 勉強を教えてもらえると？」

「ほ、ほら！ 背とか伸ばしてあげるよ！」

撫でやすい位

置にある頭が超プリティ！」

「バカにしてるとしかおもえないっ！」

「愛でてるのに……！」

実際に頭を撫でる深鷺と、文句をいいつつもされるがままの美鴫。信号が青に変わったので、2人は歩みを再開する。

「ふう、しかたないなあ。いつものことだし、いいけど、でもお姉ちゃん、別にそんなに成績悪いわけじゃないし、今回も別に赤点だし、ピンチー、とかじゃないのでしょ？ そんなに成績とか気にしなくてもいいと思うんだけどな」

ウチってそんなに厳しくないじゃない？

そう続ける美鴫に、深鷺は同意する。別に無言のプレッシャーを受けている気分になってるわけでもないし、誰かと競っているわけでもない。

じゃあどうしてよ、と問う妹に、姉は姉らしく答えてみる。

「……………姉の威厳とか？」

「教えてもらう時点でどうなの」

まったく姉らしくなかった。

しかたなく本当のことを話し始める深鷺。

「あー……………とね、ほら、高校受験があるじゃない？」

「あるけど……………随分気が早いよね？……………そうでもないかな？」

「そこでトキちゃんは頭が良いわけだ」

「はあ」

実のところ姉より頭がいい、などととは微塵も思っていないので、そこは頷きかねる美鶯。そこは得意科目の差だろうと思うのだ。得意分野、というべきか。確かに五教科の成績はお姉ちゃんよりいいけども、と。

「するとレベルが高いところに行っちゃうでしょ」

「うん、まあ、そうだろうけど」

それはつまりどういうことか、と聞いてみれば。

「一緒に高校に行きたいと思って」

一緒に高校に行きたいと思って。

台詞を脳内で反芻する。

一緒に高校に行きたいと思うって……………、

「恋人か！！」

チヨップでツッコミを入れる美鴫。

「あははは」

「……まあいいけどね。妹離れできてない姉だなあ」

「一生離れたくないかも」

そう言つて実際に妹に抱きつく深鷺。

美鴫は抵抗せずに言う。

「……暑いから離れて欲しいなあ」

やんわりとした拒絶の言葉に対して更にぎゅっと腕を締める深鷺は、まったく悪びれることもなく言い返す。

「今のうちからそんなこと言つてたら、この夏を乗り切れないよ？」

「いや、離れれば」

「妹離れできないんだもの」

「姉離れさせてもらえない……？」

美鴫は歩きにくさを気にしながらもそのまま家まで帰り（はずかしい）、階段を上り（あぶない）、自室に戻るまでの間ずっと抱きつかれたままだった（さすがにあつくるしい）。

いいかげん鬱陶しくなった美鴫が怒ると、深鷺は

「ミサギちゃんー、ただいまーっ」

早めに帰宅できたクイシエは、深鷺の声が返ってこないのも、深鷺の部屋に向かう。

「……ミサギちゃん？」

ノックしても反応のない扉を開くと、机に伏せて静かに寝息を立てている深鷺がいた。

頬にインクが付いているかもしれないと、自分も経験があることからすぐに思い至る。付いていたら後で拭いてあげようと思いながら、机の上を見た。

（勉強進んでるかなー……ん？）

ふと、一枚の紙が目に残る。1行ごとに発音や翻訳が書かれている他の紙と違い、この紙だけは短い言葉や単語が、トーリア語だけで羅列されていた。

（変な人？ クイシエちゃんのお師匠さん……ああ）

とりあえず最初に目に入った単語の組み合わせには納得した。そして。

（友達……）

目が釘付けになるクイシエ。

（『恩人』……『友達』……『テンシ』……て、テンシって、わたしのこと……？　だ、だよな……？？）

目を見開いて単語同士を言ったり来たり、深鷺の方を見たりしながら、挙動不審になるクイシエ。

（とととと、友達がテンシなの？ 友達なの؟؟）

急に悪いことをしているような気分になり、今深鷺が起きたらどうしよう、などと心配しはじめ。かといって残りの単語を読まずに去ることも出来ない。なにが書かれているのか、友達という1つの単語のせいで俄然興味が湧いてしまった。

（ややややそんなきつと関係ない文字列だよ。ただ単語の練習をしてただけのっ）

文脈が続いていない以上、単語の練習であるに違いないとクイシエは判断した。しかし湧いた興味は静まらず、次の単語も黙読する。

（『わからない』……なにが？）

上の方は別の紙に隠されて読むことが出来ないが、引つ張り出せば読めるだろう。

深鷺が目醒ましてしまわないように、紙をゆっくりと、慎重に引き出す。

（『学校』……が、わからない？）

直前に関係ないと否定したばかりだったが、それでもつい文字列に意味を求めて読んでしまうクイシエだった。

紙の擦れる音は続く。

次の単語を見て、クイシエは

#42話：「トキちゃんおこらないで」

いつもの食卓に、どことなく気まずい空気が流れている、ような気がする。

「あ、それで、狩りってどんなだったの？ 嵌り岩ってやっぱり嵌ってた？」

「うん。あ、あのね、ミサギちゃんが隠れてた穴があつたでしょ？ あれが実は、嵌り岩の巣というか隠れた跡だったんだよ」

「え、そうなんだっ？ なにかの巣かなあとは思ってたんだけど……じゃあ、あれかな。見た目はアルマジロみたいだった？」

「アルマジロ？ ……はよくわからないけど、……ええとー……まあ、見た目は岩そのものだよ？」

「そっか、ミミックだもんね」

「うん、そう、そうなの」

「あの穴には助けられたような気もするし、じゃあ嵌り岩にはちょっと感謝しなくちゃ。ちなみに、どんな風に歩くの？」

「え、あの……えーとね。跳ねるの」

「跳ねるんだ！？ 岩なのに！」

「うん、カウスおじさんは名前詐欺だつて言ってたかなあ」

「岩が変形して歩く感じ？」

「ううん……あの、分裂するんだけど……」

「分裂！？」

「うん、みんな予想外だったんだけどね、昨日はカウスおじさんが蹴飛ばしたらバラバラになって、跳ねて逃げちゃって」

「それで昨日は失敗だったんだ？」

「うーん、というか昨日は、わたしが足手まといだったから……」

クイシエが思い出している姿と深鷲が思い浮かべている嵌り岩にはかなりのズレがある。クイシエは正直ちよつと気味の悪い姿を説明することを避けていたし、深鷲はデフォルメ的なフィルターがかかっているため、2人の脳裏には生々しい肉のミミックと、コミカルに弾け飛ぶ嵌り岩がそれぞれ映し出されていた

会話自体はいつも通りだ。

深鷲が質問責めにしてしまいがちなのもいつものことなのだが………どうもクイシエはなにかを気にしているような、そんな気がする。

ちよつとした違いなのだが、深鷲はそれを敏感に感じ取っていた。

（寝ぼけていきなり抱きついたせい………かなあ………？）

術の為に頭を抱きしめるのとは違い、いきなり抱きつかれれば驚きもするだろう。むしろ意識がはつきりしてきたときは自分が驚いたくらいだ。

フレンズチャット

クイシエはそのまま【言語移植】を使ってくれたが、そのときの様子はどうも変だった。というか自分の様子も変だったろう。流石に素面とは違い、寝ぼけた状態で抱きついてしまったのははずかしい。しかも妹と間違えて、だ（クイシエのサイズはいろいろと美^み鶉^{とぎ}と似ているので、間違えたのはしかたないかもしれないとも思っている）。

まあ、単に連日の狩りで疲れているのだとも考えられる。きっとそのせいかな　あるいは両方だろう。

あまり考えても仕方ないと深鷺は、あとでクイシエの足でも揉んでげようかな、などと考える。

ふと、妹のことを思い出した。

（あ　　そういえば、トキちゃんの顔を見たのはひさしぶりになるんだなあ）

同じ学校の同じ学年に通う以上、イベントごとなどもほとんど同じタイミングであり、お互いに顔を合わせない日が続くことなど、ケン力をしていてさえそうそうあることではない。

どこに行くにも一緒、とまでは行かないが、どんな日であっても一緒にいる時間があつた。どちらかが旅行に行った時でさえ、顔を合わせないのはせいぜい2日ほどだ。携帯のメール機能などでコミュニケーション自体はとることもできた。

完全に妹と離れることになったのは初めてといってもいいかもしれない。

（でもまあ、夢でも顔が見れたから良しとしようっ！）

深鷺は実際には会えない妹を夢に見ても、思ったよりホームシックに陥らない自分のことを不思議に思っていた。

自分の寂しがりなところはよくわかっているつもりだったが、もしかして思っていたよりも自立できていた、のだろうか？

それとも、美鴎に怒られて、活を入れられたということだろうか

夢だったけど、妹から元気を貰った気がする。そんな深鷺だった。

『家に帰ること』

紙に書かれたその文字が目に入ると同時、深鷺に抱きつかれていたクイシエは、寝ぼけた深鷺の声を聞いた。

異世界の言語を理解することは出来なかったが『トキ』という言葉葉には聞き覚えがある。

この数日間の間に、2人は少しだけそれぞれの家族についての話をする機会があったのだ。

とはいえ、クイシエには両親も兄妹もいないため、あまり弾む話とはならなかった。

質問したことを謝る深鷺だったが、クイシエは世間一般で言う家族というものではないものの“この村のみんなが家族”という感覚でいる。気にすることはないとフォローし、深鷺もこの村の温かさを身をもって知っていたので、それ以上なにかを言うことはなかった。

深鷺の方は、こちらはこちらであまり家族のことを考えているとホームシックになりかねないと思ったため、紹介程度で終わる。そのときに知ったのが、

（ミサギちゃんの、双子の妹。ミトキで、トキちゃん……だったよね）

きつと深鷺は、元いた世界の、家族の夢を見ていたのだろう。

寝ぼけていたらしい深鷺が美鴉の名を、どういった言葉に繋げたのかはわからない。

聞けば教えてくれるかもしれないが、クイシエは聞かなかった。その声から、悲しげなニュアンスを感じ取っていたからだ。

深鷺がやってきた日のことを思い出す。

言葉も通じないほど遠いところで1人きりだなんて、きつと心細い。村から出たことすらほとんどない自分には想像も付かないが、自分なら寂しさだけで死んでしまうのではないだろうか。そう思ったのは自分だ。

実際は、帰る方法が定かではないほどの遠さだった。

異なる世界に行くというのは、たとえば絵本の中に入るようなものだという。ともすれば、二度と会うことが出来ないような距離なのだ。

本当は辛く深刻な事態なのに、深鷺が明るいうから、そんなことも忘れていた。

(……違うよね。わたしが浮かれてるんだ)

クイシエは自戒する。

同い年くらい女の子が急に現れて、嬉しかった。

友達になってくれるかはまだわからないけど、こうして仲良くしてくれるだけでも自分にとっては充分なほど幸せだ。深鷺は明るく元気だし、異世界の話も面白い。

（わたしの話も興味深そうに聞いてくれるし、料理を美味しそうに食べてくれるのも嬉しいし……）

クイシエは深鷺が来てからというものの、深鷺のことばかりを考えている。

しかし、本当にそうだろうか？

（ミサギちゃんのことを考えてるけど、自分のことしか考えてない……）

クイシエは浮かれている自分と、辛い立場の深鷺を比較して、急速に落ち込んでいった。

4 3 話：再実験と入浴剤

「ん、今日はクイシエちゃんと一緒にじゃないのかい？ まあ今日の実験は先日のおさほど変わりないし、危険もないだろうから大丈夫かな。さて、今日も同じように魔導書に魔力を流し込んで貰うよ。今回ののは僕の予想が当たっていれば、少なくとも破裂はしないはずだ。無茶をしなければね。でも、そうだな、ちよつと前回より加減してくれるといいかもしれない。いきなりだとまたビックリしてどこかに消えてしまいかもしれないから先に言っておくけど、今日の魔導書の効果は『光の球を生み出す』だけのものだから、上手くいけば眩しくなるよ。クロゲワギウくんも眩しいからって驚かないように。ところで【浮灯虫】関連の術は知っているかな？」

クイシエが嵌り岩の狩りを終えた翌日。【言語移植】フレンズチャットの恩恵が受

けられない為に先送りにされていたクジールの実験が再開された。

深鷲のハイやイエ、あるいは頷きなどの短い反応を挟む以外は、分単位で喋り続けることもあるクジールだが、深鷲はそんな相手に慣れた対応をしている。

クジールの喋り方は早口というわけではない。しっかりと滑舌よく喋っているのだから聞き取りもしやすいのだが、その分余計に言葉の量が多くも感じられる。

同様に台詞量の多い身内がいなければ、深鷲も先日のクイシエのように焦れた反応をとったかもしれない。

「じゃあさつそく魔力を流してみてくれるかな。もしまた破裂しても、一応予備を2つ用意しておいたから、2回までなら失敗しても大丈夫だよ」

「はいっ」

クジールが用意した魔導書は最初の深鷲の搜索にも用いられた【浮灯虫】だが、かなり手が加えられていた。

ギュランダムが深鷲に見せた手帳サイズの魔導書ではなく、手の平を開いて載せることができる。深鷲の知識で言えばハードカバーの単行本によくあるようなサイズだ。

ただし厚みは手帳サイズの魔導書と大差なく、薄い。

このサイズが一般的な魔導書の規格であるらしいが、地域によってはまだ多少ばらつきがあるらしい。ギュランダムが持っていた手帳サイズの魔導書は、携帯性を高める為に半分に切ったグリモア紙を使っているものだそうだ。

今日も破裂するかも、という不安が無いわけではなかったが、専門家であるクジールのことを信じる気持ちもあり、今日こそ魔法が使えるかもしれないという期待もあいまって、深鷲の気分は上々だった。

クジールが静かになると、深鷲は先日と同じように魔導書の前に立つ。ゆつくりと手を置いて、息を吸う。

クジールによれば、深鷲の気合いの入れすぎが破裂に繋がっている可能性が高いという。自分の気合いにそんな力があるとはあまり思いたくないが、そうなのだとわれれば加減してみるしかない。

深鷲は気合いを、ほんのりと注入した。

「てい」

ぽん。

と、音が出たわけではないが、そんな勢いで飛び出したのは光の球。

「わ、出た!？」

と、その驚きに反応するように、更にぽんぽんと飛び出す光球。

「おおー!」

ぽぽぽん。

「おもしろーい!」

ぽぽぽぽん。

部屋はあっという間に光球だらけになった。まるで蛍光灯ほどの明るさを持つ蛍の群れだ。

幻想的であるとも言えるが、密度が高いせいで少々眩しすぎるというか、どうにも喧しいイメージが先立つ光景となっている。

ぽぽぽぽぽん。

これにより破裂の原因をほぼ特定するに至ったクジールは、実験が成功したにもかかわらず複雑そうな表情で、楽しそうな深鷲を見ているが

ぽぽぽぽぽぽぽぽぽぽぽ……

「あはははは」

調子に乗った深鷲によって生み出される光球の群れに飲み込まれ、すぐになにも見えなくなってしまった。

「……あれ？」

クイシエは気が付いたらすっぱんぼんにされていた。正確にはのこり下着一枚だけの姿だが。

本当なら今日も朝から深鷲の実験に付いていくべきだった。実験中になにが起きるかもわからないし、なにも起きなくとも、深鷲が術を使うときは注意深く観察して、なにか手がかりになるようなものを探すべきだ。

と、頭では思っているのに、クイシエはそう思った上で、自分がどうしていいか、わからなくなっていた。

ついでに言えば、どうして今こんな所にいるのかもよくわかっていない。

「あらー、今日はミーちゃんに付いていかなかったのー？」

と、声を掛けられたのは憶えている。そのあと、なにかを話したような気はするのだが、考え事が空回りしていて、よく憶えていない。

我に返ると自分は下着一枚の姿で、衣類はカゴの中。

つまり、引つ張られてやってきたのがフリネラの実験浴場で、クイシエは着せ替え人形よろしく身ぐるみ剥がされて、浴場に向かつて背中を押されているところだった。

「あ、気が付いたー？ クーちゃんはほんと、集中すると周りが見えてないわねー」

フリネラはちょうど服を脱ぎ終えたところだった。クイシエを先に脱がせたらしい。

「さー、悩んだ時はお風呂に限るわよー？ あったかい湯船はいろいろなものを蕩^{とろ}けさせてくれるんだからー」

「えーと……」

「村のみんなもねー、研究に煮詰まったときとかはもっとお風呂を使えばいいと思うんだけどー」

ここまで来ていまさら抵抗するというのも変かと思い、促されるままに下着も脱いで、入浴するクイシエ。フリネラも続けて湯に浸かる。

「今日のはねー、ミーちゃんから聞いた入浴剤が入ってるのよー？」

「ニューヨクザイ、ですか」

「そう、入浴剤。わたしなりにいろいろ作ってみてるんだけど、今日はミーちゃんが教えてくれたシンプルなやつね。いい香りがするでしょー？」

「あ、そういえば……なんだろう？ 果物ですか？」

「正解ー。正確にはブイミンの皮ねー」

そう言いながらフリネラは湯の中から大きな布袋を持ち上げる。

中には真っ黒な色をした柑橘類の皮がどっさり入っていた。

ブイミンは魔力を多めに含む魔力補給に適した果物だ。この村ではよく食べられているもので、皮は簡単に集めることが出来た。

「ミーちゃんによると、柑橘類の皮には体をしっかりと温める効果があるらしいんだって。風邪もひかないし、お肌も綺麗になるし、お鍋の消臭とか汚れ取りにも使えるらしいわー。さすがお風呂の国の人は物知りねー」

そう言っただけで感心しながら、フリネラは袋を湯の中に沈める。

「これは煮たやつだけど、カラカラに乾燥させたのもいいらしいの。というわけで、今日は効果の実証も含めてブイミン風呂なのよー」

説明され、なるほど確かに体は温まっているかも、と納得したクイシェ。それがブイミンの効果かどうかはさておき、体の芯が温まってくる感覚にクイシェは溶けるような溜息をついた。

その溜息は緊張が解けてゆくもののようにも、心配事から生じたもののようにも思える。

「あとでミーちゃんにも感想を聞かなきゃねー。今日は入りに来てもらわなきゃー」

「……………」

体育座りの格好で俯いているクイシェはフリネラの言葉には応えず、目の前の波紋を瞳に映していた。

「…………そろそろ温まったかなー？」

フリネラはクイシェの横に並び、首に手を回す。そのまま肩に腕

をのせるのではなく、頭を抱え込むようにした。腕と胸に頭を挟まれて、抵抗しないクイシエは首をされるがままに傾ける。

「さてクーちゃん、悩みごとを、お姉さんにいつてごらんー？」

#44話：しかし第2第3の……

「これもミーちゃんから聞いたんだけど、かの国には“裸の付き合い”っていう言葉があるんだってー」

風呂場ではみな裸である。身分の上下、立場の差違を衣服によって示すことの無い場において、その人そのままの姿で全てをさらけ出し、本音でつきあえる関係……というような意味らしい。

「つまりお風呂場では素直にならなきゃ駄目ってことよねー」

そんなことを言われたからというわけではないが、クイシエはフリネラに自分の悩みを打ち明けた。
しかし、悩みというよりは懺悔さんげに近い。

クイシエは、友達になってくれるかもしれない女の子が現れて、嬉しくて舞い上がっていた。

しかし深鷲の方は本当ならそれどころじゃない、深刻な立場にある。

自分は深鷲の気持ちを考えもせずに、楽しくて、浮かっていた。情けない、悔しい、ひどい。

クイシエはそんな自分を、どうしていいかわからないでいる。

「それで、クーちゃんはどうしたいの？」

「わたしは……ミサギちゃんの力になりたい」

「どうして？」

「それは……友達になりたいから……ううん、なれなくても！」

「なれなくても？」

「わからないけど、わたしがそうしたいから、そうしたいの」
「なら、ミーちゃんの力になるうか」

フリネラの目を見て、クイシエは言った。しかし、すぐにまた視線が下がってしまう。

「でも。わたし……」

罪悪感に戸惑うクイシエの心は、自分にその資格があるのかどうかを迷っている。

そのことをハッキリと自覚しているわけではないが、今のクイシエは深鷲と友達になりたいと思うことが不純な動機であるかのように思いこんでしまっていた。

「クーちゃん、いきなり知らない土地にやってきて、一番辛いことってなんだと思う？」

フリネラの突然の質問。

クイシエはその質問を受け、自然と自分が今の深鷲の立場だったらと考える。

夢に見るほどの、家族に会えない寂しさ？

言葉が通じないことの不安や不便さ？

いろいろなことが浮かんだが、どれもこれも辛いことのように思える。

少し待って、フリネラは自分の考えを述べた。

「誰とも繋がりがいいことだと、あたしは思うな」

フリネラは元冒険者

というか、現在でも一応冒険者のよ

うなものではある。

お風呂研究に傾倒してからはこの村を本拠地としつつも、温泉にまつわる情報や研究に必要な魔術の情報を得る度に村を飛び出し、近隣諸国を駆け回っているのだ。

その旅人としての経験から言う。

「繋がり。親兄弟とか友達とか恋人とか、近所付き合いとかなんでもいいけど……できれば、そこが“自分の居場所”だって思えるくらい繋がりね」

「自分の居場所、ですか？」

頷いて、フリネラは続ける。

「旅先で同郷の人に会ったりすると懐かしい気持ちになるし、とても話が弾んだりするの。それは故郷との繋がりを少なからず感じられるからだと思うのよ。ほとんどの人にとって、故郷には自分の居場所があるはずだから、それは特別な繋がりにゃないかな、ってね」

新しい繋がりを作っていくのも旅の醍醐味ではある。しかし根無し草な旅の途中で自分の居場所と言えるほどの繋がりは、そう簡単には得られない。

深鷺が故郷を目指すというなら、その旅は性急とまではいかずとも、のんびりとした道程にはならないだろう。恐らく、旅の準備期間となるであろうこの村が最も長く“立ち寄った”村となるはずだ。その予想を元にフリネラは、クイシエが 自分たちが、深鷺に与えられるものを考える。

「でも、故郷の繋がりにゃないからって価値が下がるワケじゃないわ。あたしなんかは生まれ故郷を捨てちゃった身だけど、すばらしい第2第3の故郷があるし」

「第2、第3……？」

「そ。2つめはカルジヒラ温泉郷で、3つめがクアラ村ね」

それはフリネラから何度も聞かされている街の名前と、クイシエの故郷でもあるこの村の名前だった。

「わ、わたしも生まれ故郷はわかりませんが、クアラ村は第2の故郷です」

「そっか……クーちゃんはそうだったわね」

フリネラはクイシエを抱き寄せながら、深鷺の話続ける。

「ミーちゃんが故郷に帰りたと思うのは当然だし、それを応援するのももちろん良いことだけど、だからといってそれ以外がどうでもいいってワケじゃないと思うの」

辛い現実には立ち向かい、目的に突き進み、故郷を寂しく思うばかりでは、心が折れてしまいかもしれない。

「わからないことだらけだけど……きつとミーちゃんはすぐに故郷に帰ることはできない。あまり言葉にしたくはないけど、もしかしたら二度と戻れないかもしれない。それはクーちゃんもわかってるでしょ？」

「いえ………はい………」

「ミーちゃんはそのあたりをどう思っているかわからないけど………」

そう言いつつもフリネラは、深鷺はそういったことを正しく理解しているように思っていた。深鷺からは不安や寂しさを感じることはある、焦りのようなものは感じられない。今すぐにどうにかなるような問題ではないことも、帰ることが出来ない可能性もちや

んとかつているのだろう。

「ミーちゃんは、故郷に帰るまではこの世界で生きていかなきゃいけないわ。そして、故郷に帰る方法を探すため、きつと旅をすることになる。そのためには、魔術を憶えて損はないし、言葉は覚えなきゃいけない。あの子の場合は不思議な体質についても調べておかないと、色々と危険ね」

フリネラはクイシエに笑顔を向ける。

「でも、それと同じくらい、毎日を楽しむことだって大切だわ。だから、クーちゃんがミーちゃんと楽しくおしゃべりすることだってミーちゃんの助けになると思う」

クイシエにできることは、なにも深鷲の不思議体質を調べることだけではない。魔術や言葉を教えることだけでもない。いっしょに楽しい時間を過ごすこともできるのだと、フリネラは言う。

「ミーちゃんに、この村で得た繋がりを第2の故郷だと感じてもらえるくらい、一緒に楽しむのも、ミーちゃんにしてあげられる大切なことだと、あたしは思うなー？」

深鷲の心を支える。

フリネラの話聞いて、クイシエもそれをとて大事なことだと感じた。

自分が目指す“友達”にとって、それは欠かせないもののはずだと。

「ミサギちゃんを……」

「支えてあげるといいよー」

ところで、とフリネラが話を変えた。

「さしあたってやらなければいけないこととしてー……そろそろ【
フレンズチャット
言語移植】の効果がきれるんじゃないー？」

「あつ、いけない！」

ここに来ていることは深鷲は知らないし、深鷲にはあとで行くと言ったことを思い出した。

「あははー、引きずり込んで言うことじゃないかもだねー。
ごめんねー？」

「い、いえつ。ありがとうございます、フリネラさんっ」

そういつてクイシエは、湯気を纏ったままの勢いで浴場を飛び出ていった。

「ちゃんと体拭くんだよー？ 風邪ひかないようにねー」

#45話：場違いな子供、気違いな子供

クイシエが異変を感じ取ったのは、実験浴場から出てすぐのことだった。

どうも村の方が騒がしい。

気になって意識を向けると、クイシエの超感覚は大量の魔術が使われているのを感じた。どうやらクジールの家の方角である。

（何かあったのかな……！？）

深鷲のことが心配になり、駆け足で向かった先には人だかりがあった。そしてそれ以上に目に留まったのは、昼間だというのにその存在をハッキリと主張する大量の光球だった。

クジールの家があるはずの場所はその光球に覆われていて、眩しくて直視できない状態になっている。

人だかりはどうやら、実験でトラブルを起こしたらしいクジールの家を眺めている野次馬のようだ。

「クジールなにやってんだ？」

「眩しいわぁ」

「これはこれで綺麗、というか迫力があるな……ふむ……」

「お騒がせしてすみませんーっ」

最後の台詞は深鷲のものだった。

クイシエは声のした方に深鷲の違和感もあることを確認する。家

をぐるりと回り込む形で移動すると、眩い光のちょうど反対で深鷲が謝罪しながら歩き回っているところだった。

光球まみれの家から少し離れた位置の屋外で、クイシエと深鷲、そしてクジールの三人が立ち話をしている。

「調子に乗っちゃってすみません」

「いやいや、初めて魔術を使ったときの嬉しい気持ちはよくわかってるから。ただ、今回のは無害な術だからいいけど、以後は気を付けるようにね」

実験中は上機嫌だったろう深鷲は、今は反省してしょんぼりしていた。

深鷲の生み出した光球は効果時間やサイズを定められた魔力量に比例して拡大する形式だったため、光球のサイズは少しずつしぼんでゆくことになる。

しかし、眩しくて視認は出来ないうちかなり巨大なものも生み出されているらしく、しばらくは研究所の中では眼も開けられない状態になってしまっていた。

クイシエが感知した限りでは、最も大きいもので一部屋が埋まるほどのサイズがあるようだ。

おそらく夜までには消えるので、クジールが寢床に困ることはないだろうと説明されたが、それを聞いて安心していいものなのかと悩みつつ、クジールにもう一度謝る深鷲。

幸いというべきか、今日はあの光が生み出せばそれで充分のことだったので、お手伝い自体は完遂ということになった。

続きは明日ということで、深鷲はヒマになる。

「他にお手伝いあるかな？」

「あ、フリネラさんから伝言があるの。『今日は時間が余ったら自由にしていー。でも夕方にお風呂に入りに来てくれると嬉しいかもー』だって」

「あ、そうなんだ。どうしよう……言葉の勉強するかなあ……」

「……あ、あの、ミサギちゃん、よかったら、わたしと遊ばない？」

「あそび……って、遊び？ いいの？」

クイシエはクイシエで色々と仕事というか、研究することがあることを知っている深鷲としては、フレンズチャット【言語移植】であれ言葉の勉強であれ、自分に付き合わせるのは悪いと思っているのだ。

クイシエが付き添ってくれたり、こうして誘ってくれたりするのは嬉しいが、深鷲は申し訳ない気分になってしまう。

こうして深鷲が遊びの誘いに躊躇してしまうのは、自分が村やクイシエに助けて貰っている身であるということのほか、この村の雰囲気^{雰囲気}に吞まれているというのもあった。

住人達は研究者だらけで、大なり小なり研究漬けの暮らしを送っている。コミュニケーションが全くないというわけではないが、一日のほとんどは自分の研究所で過ごしているだろう。

そんな中で深鷲は、場違いな子供が1人でオフィスビルにでも紛れ込んでいるような気分になるのだ。

手伝いをしているときはまだいいのだが、手伝いをしていないと自分だけが浮いているような気になってくる。なにせ、この村には子供がクイシエと自分しかないのだ。

大人ばかりに囲まれ、見た目に限ってみても5つは離れているようなお兄さんお姉さんしかない。しかも彼らの実年齢は見た目の倍である。

そしてクイシエも大人と変わらない働きを、あるいはその才能からそれ以上の働きを見せているように思える。

回りには同世代ばかりという学校で過ごしていた深鷲には、そういった意味では居心地の悪さを感じる環境だ。

仮にここが普通の村だったとしても、たとえば農村などであれば、やはり子供も労働力として活躍するのだろうか、その感覚はこの村に限ったことではないのかもしれないが、子供の数が多い分落ち着くものもあつただろう。

実際は住人達にも飲食や遊戯などの娯楽が存在しているのだが、深鷲はあまりそれらを見る機会がなかった。

深鷲はこの村と村人達に深い安心感を憶えているが、それと村の雰囲気になじめるかどうかはまた別の問題であるらしい。

「うん。よかつたら、で、いいんだけど……」

だが、せっかくクイシエが誘ってくれているのだ。深鷲はそれを断れるほどの理由は持ち合わせていなかった。

「うん、いいよ！ 誘ってくれてありがと！」

クイシエはほつと息を吐いた。

先ほどフリネラと話していて気が付いたのだが、深鷲はこの世界に来てからというもの、トラブルに遭うかお手伝いをするばかりで息抜きの事を何もしようとしていないように思えたのだ。

お手伝いがない日も言葉の勉強をしていた。

たまには遊んだりゆっくりしないと、気疲れしてしまうだろう。

（ミサギちゃんはきつと頑張りすぎ……だよな）

どうも深鷲は、助けられているということを気にしすぎている気がする。

働かざるもの食うべからず、とも言っていたが、実のところ深鷲の手伝いで研究者達が得ている利益を考えれば、少しくらいゆつくりするのは当然だとクイシエは思うのだ。

深鷲が来てまだ一週間ほどしか過ぎていないが、深鷲のアドバイスや異世界の話のおかげで進んだ研究やその副産物は、この短い時間にしてはかなりの量になっているはずだった。

クイシエ自身は自分の仕事に集中気味で詳しく聞いているわけではないが、先日聞いた話では今年の“竜臨祭”に出店する遊具のアイディアも深鷲が出したのだそうだ。

くじ運が無く出店担当になってしまった研究者は、本来自分の研究に使う時間を削ってなにかしらアイディアをひねり出さなければならぬのだが、今回はそれを深鷲があっさり解決してくれたことになるわけだ。

そのことだけでも深鷺は活躍していると言えるし、実際はそれくらいでは済まないだろう。

金銭的な事に限ったとしても、ついさっき浸かってきたお風呂の入浴剤などは今後商売になるんじゃないかと考える。

クイシエは商売の事はよくわからないし、フリネラは恐らくお風呂の普及以外に興味がないだろうが、あれはそれなりの利益をこの村や国に与えることになるんじゃないだろうか。

それに、こじつけるように言ってしまうえば、昨日狩猟してきた嵌り岩だつて深鷺がきっかけで捕まえることになったのだと、キルエイから聞いていた事を思い出した。

村の財務担当者のことを思い浮かべたところで、別の記憶が引にかかる。

（そうだ……ミサギちゃん、結界を壊したことも気にしてたよね）

もし深鷺の貢献がお金に換算できるなら、それを教えてあげたら少しは気が軽くなるかもしれない。

（あとでキルエイさんに、どれくらいお金になりそうか聞いてみよう）

深鷺のためにできることを、もう少し広い視野で頑張ってみようと決めたクイシエだった。

#46話：クアラ村会議中

深鷲とクイシェがそれぞれの世界の遊びを紹介し合いながら一喜一憂しているころ、ギュランダムを初めとするこの村で一応の重役ということになっている面々が一堂に会していた。

村の広場横にある円形の建造物、集会や宴会にも使われる広い部屋に10名ほどの村人が集まっている。

見た目には若い者もいれば年寄りもいて、人間もいれば獣人もいる。まったく統一性は感じられない。

重役といっても上司であつたり古参メンバーだつたりというわけではなく、単に面倒事を引き受けているメンバー、という感じた。

円座して語らう彼らの中心にはミラナが座っている。両手両足を縛られた状態で、彼女は淡々と喋っていた。

「ギュランダムはこういうプレイがお好み」

「嫌いとは言わんが、違うわ！ お主は縛り付けておかんと逃げるじゃろうが！」

「縛り付けてでも離したくない。これはもうプロポーズ」

暖簾に腕押しするかのような会話だが、ミラナはお約束としてこうつたやり取りで満足させてからでないとまともに取り合ってくれないので、ギュランダムは仕方なく付き合っていた。

回りの重役たちも慣れたもので、その光景を生暖かい目で眺めていたり、全然違う雑談で待ち時間を潰していたりする。

今日の会議の議題は「ミサギについて」だ。深鷲の“なに”につ

いてなのかは、特に限定されていない。

しかし、今は会議というより、尋問の時間というべきか。
話し合いは一時中断され、縛られたミラナが昨日の暴挙について問われていた。

「さあ、そろそろキリキリはいてもらおうかの……」

若干疲れた声を出すギュランダム。対して、変わらぬ無表情にどこことなく満足げな雰囲気を漂わせているミラナは、ようやくギュランダムの言葉に従い、洗いざらい話し始めた。

「初日、あの黒髪が起きたらすぐに尋問しようと思ってた」

内容は、深鷲に対してしたこと、しようと思っていたことの全てだ。

「クイシエが部屋に残ると言うから次の機会に回すことにした。以後も監視が続けている。いざというときのために毛髪を確保した。似顔絵も用意してある」

逃亡時の追跡用に、とのことだ。似顔絵は上手く描けている。

「足運びなどは素人に見えるけど、少なくともなにか運動の経験があるはず」

「その時点で違うとは思わなかったのか」

「あえて訓練をしないことで偽装する手もある。殺すだけなら限定的な訓練でも充分可能。情報を集めるだけならそれも不要。それに、走る能力だけでもあれば逃亡に有利」

ミラナの告白は続く。

「何らかの行動に出ると、どうしてもクイシエには気が付かれると判断した」

クイシエの超感覚から逃れる術は、さすがの元暗殺者でも持ち合わせていないらしい。

「彼女に邪魔されないためには村を離れてもらうのが一番」

ミラナは深鷲の救出騒ぎのときに耳にした、深鷲が隠れていたという穴の話聞いて、以前にキルエイから聞いたことがある擬態魔^{ミミック}獣の話思い出したという。

それは魔獣【嵌り岩】は金になるという話だ。財務担当のキルエイにその話を思い出させれば、当然狩猟するという流れになると予想した。

「ミミック相手ならクイシエを推すのは当然だから……」

不機嫌そうに答えたのは、キルエイと呼ばれた男だ。

彼は常に不機嫌そうな顔をした狐系の獣人である。歳は青年から中年への移行期といったところ。獣人なので、実年齢は60前後だろうか。

くすんだ狐色の毛をオールバックにしている。瞳は青色。頭部に耳は生えていないが、腰からは狐のモノである尻尾が生えており、口の回りが髭のように獣毛が生えている。それとは別に狐の髭も生えていた。

全体的に獣度合いの高い容姿である。

まんまと茶番の片棒を担いだ形になってしまったキルエイは、仏頂面でミラナの視線を受け止めるが、ミラナはとんでもないことを言い放った。

「つまり悪いのはキルエイで、わたしじゃない」
「なんでそうなる!？」

キルエイは当然の反応を返したが、言われたミラナはなぜか肩を落とす。

「……やっぱりわたしには魅力がない」
「いや、いきなり何の話じゃ」

ギュランダムは、昨日も似たようなことを言っておったな、と思いつつ理由を問う。ミラナはギュランダムに向き直り、

「魅力的な女ならこんな無理でも通すことができるはず」
「なんだその悪女の発想」

キルエイの問いには、湯上がりでしっとりしているフリネラが答えた。

「あ、あたしが教えたかもー」
「お前かよ!？」
「いやー、まさか本気にするとはー」

余計なことを、いいじゃんべつにー、静かにしろ、などとにわか騒がしくなった集会部屋だが、議長を務めるギュランダムが本題にもどす。

「あー、さて。ミラナの暴走についてはこれくらいで良いかの……。まあとにかく、今後ミサギにスパイだの暗殺者だのとちよつかいをかけるのはやめるんじゃ。わかったなミラナ」

「キスしたらやめる」

「さて、それでミサギに関することじゃが、なにかあるかの？」

目を閉じて口づけを待つミラナを完全に放置して話を続けるギュランダム。フリネラがなぜかブーイングするが、それも無視する。

「はい」

ブーイングをやめたフリネラが手をあげた。

「なにかつていうか、ギュランダムがいちゃつてゐるあいだに結論は出たわー。ミーちゃんの良い子よー？ それに研究のお手伝いもしっかりやってくれるし、働き者でとっても助かってるわー」

クアラ村は隠れ里のようなものだ。ワケありなはぐれ者が多く住んでいて、その中には犯罪者ではないにせよ、追われる身である者も少なからずいるため、ここが研究村であることは外部に知られてはならない。

そのため一般的な研究施設とは違い、なかなか人員を増やすことができずにいる。人の流れが多ければ、秘密を守めることは難しくなるからだ。

村の存在自体を隠蔽しているわけではないが、普通の山村のフリをする程度の偽装は行われている。

人員を増やすと村の人口が不自然になり、人が多ければそれだけでも食糧などの物資にも問題が出る。

そこで不足するのは助手的な存在だ。ほとんどの研究者が個人でそれぞれの専門分野を研究しているこの村には、各個の研究をサポートする要員がほぼ存在していない。

今までそのポジションにはクイシェだけがいて、どうしてもそれ以上の人手が必要な場合は、他の研究者にヘルプを頼む形になっていた。

あとは誰でもできる単純作業などであっても、全て研究者たち自身でこなさなければならず、その意味では効率が悪い環境なのだ。

それでも様々な分野の研究者がひとつの村に集まっているため技術や知識が豊富で、研究内容にも口を出されず好きな事に打ち込めるという大きなメリットを持つこの村から出て行こうと考えるような村人はいない。

そもそもが、好き勝手出来るからやってきました、というような集まりではないのだが

なんにせよ、人手不足はどうにかしたい問題だと皆が常に思っていることだ。

そこへ突然やってきた深鷲は、完全な素人とはいえ要領が悪いわけでもなく熱心に働いた。

村に現時点で2人しかいない子供である、という点を差し引いても、村人達は深鷲のことをかなり好意的に見ている。

深鷲は興味を持っていろいろと話を聞いてくるので、研究者としても語り甲斐のある相手なのだ。

さらに、深鷲の持つ知識は彼らの研究に多くの影響を与えていた。数百年は先のレベルの文化を片鱗だけでも伝えられる深鷲のアドバイスは、クイシェの能力に勝るとも劣らない成果を上げるだろう。

深鷲がこの村にやってきてそれほど時間は過ぎていない。助手と

して研究に関わったものも10件に満たないが、それだけでもすでに先を期待できるほどの実績を築いているのだ。

“ そういった意味でも ” 深鷲の力になりたいと思う村人は多いだろう。

「うむ。今後この村がミサギに力を貸してゆく、というのは皆の共通意見で良いかの…… グリースターはどうじゃ」

「ふん…… ワシとしちゃあ研究中の結界をことごとくくぶっ壊しやがったヤツのことなんざ放っておきたいね。だが、アンタがそう言うなら別に文句はないさ」

不機嫌そうに答えたのは、老人とは思えない筋肉質な男だ。ギュランダムとは違い、肉厚な印象の肉体を持っている。白髭白髪頭なのはギュランダムと揃いだ。背は平均よりも小さい。木こりでもやっていそうな腕の太さだが、木こりでも狩人でもなく、れっきとした術師だ。

獸的要素は全くなく、人間である。

「べつに悪気があったわけじゃないんだから、そんなにつんけんしなくてもいいじゃないー」

「ワシは帰ってきたばかりだ。顔も見てねえってのに判断なんざできねえよ。今後の態度次第だな。それで、そのミサギってのは故郷に帰りたいんだったか？」

グリースターの質問に、ギュランダムが答えた。

「そうじゃ。しかもその故郷はこの世界ではない、別の世界にある国だという話じゃ」

「なんだそりゃ？」

「お風呂の国らしいのよ。わたしも一緒についていきたいわー」

フリネラの暢気な声とは反対に、キルエイは真剣な面持ちで宣言する。

「異なる世界か　道があるかも定かでない土地を目指すだろうミサギにどれほど手助けができるかはわからんが、我らはこの国に救われ、守られた者の集まりだ。役割を果たすためなら金にも糸目は付けないと誓おう」

ギュランダムはその言葉を受けて、今後の予定のひとつを答える。

「うまくいけば明日にはミサギがどう“特別”なのかわかるじやろう」

「ふん。特別といわれてもな。最近じゃあそうそう驚くこともなくなってきたぜ？」

「わからんぞ？　グリースター。あるいはクイシエをも越える驚きがまっているやもしれん」

#47話：お風呂上がりの1杯から

午後をクイシェと遊んで過ごしていた深鷺だが、夕方にはフリネラの実験浴場へ来ていた。

遊び終えたあと、クイシェが夕食を作る間に自分だけお風呂へ入りに行くということに抵抗を感じた深鷺だったが、フリネラのお手伝いだと言われてしまい、1人で来たのだった。

フリネラは試作した入浴剤を深鷺に披露し、深鷺はお風呂に関して思い出した新たな事柄を話す。しかし、風呂に来るたび話しているのお風呂の話はそれほど長い時間は続かない。

2人はお風呂の話が終わっても関係ない話で盛り上がったたり、真面目な話をしたり、なにも話さずにゆっくりと夕暮れを楽しんだりした。

軽く1時間以上、露天風呂を堪能した2人は、体ホカホカのほくほく顔で脱衣所へ戻ってきた。

腰に布を巻いて、あらかじめ水で冷やしておいた真っ黒い果汁の入ったコップを掴むと、片手を腰に当て、ゴクゴクと飲み干す。

ポーズとタイミングをぴったりと合わせ、

「「ぷはーっ」」

台詞まで合わせたところで、満足げに笑う2人。

「公衆浴場といえは風呂上がりに飲み物で、だいたいこんな感じらしいです。できればフルーツ牛乳が欲しいところですけど……」

銭湯の風呂上がりをイメージして一連の流れを思い出した深鷺が、それをそのままフリネラに伝えてみたところ、さっそく実戦してみようという話になっていたのだった。

「なんだか美味しそうねー。ミルクに果物混ぜればいいのー？」
「たぶん……」

やるだけやってみたはいいものの、深鷺は銭湯には行ったことが無く、フルーツ牛乳も記憶にある限り飲んだことがないのでいまいち断言しづらい。

温泉旅館の脱衣所とさほど変わらないとは思うのだが、実のところドラマやアニメなどでしか見たことがないのだ。

「それは料理得意な人に相談してみるよー。あとは脱衣所にあるものって、なにか思い出したー？」

「うーん……」

記憶の引き出しから、脱衣所の風景を呼び起こしてみる。

ロッカー、衣類を入れるかご、鏡、ドライヤー……は作れるだろうか？

あとは、扇風機と体重計に……まだ言っていないものあったかなあ？

「あ」

「ん？」

「レイゾウコ……のことを忘れてました」

「レイゾウコー？」

存在しない言葉らしかったので、別の言い方を探す深鷺。

「えーと……なんていうんだろう。入れたものを冷やす箱です」
「……箱ー？」

「えー……うー……あつ、雪を夏まで閉まっておける小屋？」

「氷室ひむろのことを言ってるのかしらー」

「あ、たぶんそうです」

氷室。

雪や氷をわらで包み収納しておく穴倉や小屋のことだ。

（冬にしまった雪が夏になっても溶けずに残る小屋……なんで残るんだっけ？ 雪で部屋が冷えて、冷えてるから雪が溶けない？ ……なんかおかしくない？）

まあクーラーボックスみたいなものだろうと深鷲は判断した。

冷蔵庫はその進化形であり、中に入れたものを氷ではなく電気ので冷やすものだと言明する深鷲。

「ミーちゃんの国はほんとにすごいわねー。それがあればいつでもつめたい飲み物が飲めるし、食料も日持ちが良くなるわけだー。行商してる人たちも、喉から手が出るほど欲しいんじゃないかしらー」
「冷凍庫っていうのもあつて、中に入れたものを凍らせるんですけど、その冷凍庫ごと載つけて走るトラック……えーと馬車のすごいやつがありました」

深鷲はどんなものがあつたのかは話せるのだが、どうして冷えるのかを知らず、仕組みを説明する事が出来ない。

フリネラは興味津々なのだが、深鷲にできることと言ったら外観と使い方を教えるくらいだった。

「なんだかわからないけど便利で不思議なモノがたくさんあるのねー」

先日、同じように深鷲の国の色々な道具や機械の話を聞いたフリネラが言った言葉だ。

言われたときは、魔導術なんて不思議パワーが使える人に言われた！ と内心ツツコミを入れていたのだが、よく考えてみれば自分は、自分の世界のものなのに科学をよくわかっていない。これでは魔法で冷えてます、を科学で冷えてます、と言い換えているだけである。

魔導術のことがちゃんとわかっているフリネラやクイシエに比べ、自分はかなり駄目な子だ……。

深鷲はそんなことを思い、若干情けない気分になっている。

一方フリネラは、午後に参加していた会議のことを思い出していた。

「氷室かー……ちょうどいいかもしれないわー」

「オイ、なんでこんなヤツ連れてきた！」

「きのう自分で言ってたじゃない。顔も見てないのにわかるかーってー」

翌朝、深鷲はフリネラに連れられてグリースターという老人の家にやってきていた。クジールの実験の続きは午後かららしく、午前

はここでお手伝いということになる。

他の研究所として使われている家よりもかなり大きな、というか正確には横にながーい家だ。

といっても他の家より生活スペースは狭いくらいで、残りは全て研究スペースとなる。

長く続く建物のお大半が、中にはなにもないただの壁と天井だ。一面だけ壁が無く、外からは丸見えとなる。

研究室というよりは、倉庫といったほうがしっくりくるだろう。中でバーベキューでも楽しめそうな広さの同じ建物が、全部で八つ並んでいる外観は、シャッターこそ無いが車庫や格納庫を連想させる。

地面は土そのまま、床板などは一切無い。

そこには白髪白髭で背は低めの筋肉質な老人がいた。グリースターだ。

忌々しそうに深鷲のことを見て、不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「ふん……オメーがミサギか。妙なアイディアを出すとは聞いているぜ」

「はじめまして！ コハラミサギです！ そしてごめんなさい！」

深鷲は挨拶と同時に謝罪の意味で頭を下げた。というのは、最初に【獣払い】の結果が破壊されたとき、この老人が設置していた実験中の結界が全て壊れてしまっていたらしいのだ。

「頑張つて働きますっ」

「大丈夫よミーちゃん。あれくらいすぐに返せると思うわー」

フリネラの計らいで、今日の午前はグリースターへのお詫びと手

伝いということになったのだが、脱衣所で話を聞いた深鷲は気が気ではなかった。

被害額は教えてもらえなかったが、きっと高いのだろう。そして、実験中だったことを考えれば、きつと色々な苦勞が水の泡になってしまったに違いないと、深鷲は風呂上がりだというのに真っ青になりながら話を聞いていたのだ。

夕食に帰ってきた深鷲を見たクイシェにも、一体何事かと思われってしまった。

「そう言うことならさっそく手伝って貰おうか……と言いたいところだが、オメー、結界に触ったら壊しちゃうだろうが。そんな危ないヤツいらねえよ。こちらから昨日から徹夜で復旧してんだぞ。また壊す気か？」

「グリースター、氷室の結界ってどうなってるー？」

拒絶の言葉は無視して、フリネラが質問する。

「アア？ 氷室？ どうって……壊れたぜ。いや、さっき設置し直したな。そこにあるが……氷室がどうかしたか」

「ミーちゃんのいたところには冷蔵庫っていう、氷が無くても飲み物をキンキンに冷やせる便利な箱があるんですってー」

フリネラによる説明が始まる中、深鷲は緊張しながら事前に聞いていた話を思い出す。

冷蔵庫の話をしたことである程度予想はしていたのだが、今日のお手伝いは冷蔵庫を作ってみないか、ということだった。

#48話：氷室結界と常識の違い

グリースターは結界術を専門とする結界職人で、これまで村の魔導師達と共に様々な結界を開発してきた。【獣払い】の結界もギュランダムや村人たちとの共作だ。

彼は術に見合った要石かなめいしを選出し、結界を効率化する役割を担っている。彼の工夫ひとつで術に供給できる魔力量や設置費用が決まるのだ。

彼自身は魔導術をそれほど詳しく修めてはおらず、あくまで術に適した結界の張り方を研究している。逆に彼以外の村人は結界についてさほど詳しくない。

彼が作っているもののなかに、結界術と魔導術による氷室があった。それは氷室結界と呼ばれている。ただし現時点では役に立ちそうもないものだ。

結界に冷却効果を持つ魔導術を組み合わせで作ったものだが、結界から供給できる魔力が、術に求められる量に対して少なすぎた。供給される魔力に合わせた術を作ると、なにかを冷やせるようなレベルに到底届かないのだ。

「結界で得られる魔力は、結界の大きさと要石の質によって決まるのねー。小型の結界じゃ地脈から得られる魔力が少ないから、あんまり強い術は使えないのー」

「かといって大きい結界を作れば内部を冷やすのにそれだけ多くの冷気が必要になる。魔導書のほうもかなり効率よくなっている…結界から供給できる魔力も現時点じゃ最高のものなんだが、とてもじゃないが氷室って感じじゃねーなこれは」

結界の中に手をつ込み、その温度を手で確かめるグリースター。深鷲は触ると壊れるので確かめられない。

そこでフリネラが替わりに片手を入れた。少し経ってから手を抜くと、両手で深鷲のほつぺたを挟む。しかし、左右にほとんど温度差は無いように思える。

グリースターは、説明はこれで終わりだと言わんばかりに、結界の復旧作業に戻ってしまった。深鷲の相手をする気はないらしい。フリネラはこうなることが予想できていたので、特に気にせず話を続けた。

「ちなみにこの結界、もうかれこれ五年くらいずっと改良してるらしいんだけど、それでもこの程度なのよー。レイゾウコの足元にも及びそうもないわねー」

「中に氷を入れたら……意味がないですよね」

「うん、魔力だけでっていうのがポイントねー。もちろん氷室と併用すれば少しは冷たくなりそうだけど、それにしただって、弱すぎるかなー」

「んー……」

深鷲が唸っていると、フリネラが条件をまとめてくれた。

まず、結界が供給できる魔力には限界があり、これ以上は望めない。これはこの村における結界術の第一人者、というか唯一の専業結界職人であるグリースターがそう言うのだから間違いない。彼以外で結界をまともに研究できる人物がこの村にはほとんどおらず、辛うじてギュランダムとクイシェが可能、といったところなので、これは覆くつがえしようがないだろう。

冷気を生み出す魔導術をこれ以上効率化するのは、今知られてい

る魔導式の組み合わせでは不可能と思われる。これはクイシェやギユランダムを含む村の魔導師たちが考え抜いて作った術だからだ。これだけ大勢が考えて無理だったのだから、こちらもそう簡単には変えようが無いだろう。

しかし結果的には、かろうじて機能はしているが効果はほとんど無いという魔導書【微冷却】なんてものが出来あがってしまったていて、しかもそれ以外に使える魔導書が存在しないというのは寂しい話だとフリネラは言う。

この村ではまだ知られていない魔導式が見つければまだ改良の余地はあるかもしれないが、たとえ改良しても目に見えた成果は現れないのではないだろうか、皆は予想しているらしい。

「結界を重ねたりするとどうなるんでしょう？ 小さい結界を一回り大きい結界で覆って、繰り返していけば……効果が重なって、真ん中のひとつはすぐく冷えたりとか」

「それがねー、あんまり密集させると、うまく作れなくなっちゃうらしいのよねー」

村が【獣払い】の結界に覆われていて、その内側でも結界が張れている、というところに目を付けた深鷲だったが、要石同士の距離はある程度離さなければならぬらしい。

しかし、先日、村の結界に深鷲用の出入口を作るための実験に呼ばれたときは、ギユランダムが結界を同じ場所に複数設置していたはずだ。そのことを思い出しフリネラに告げるが、急にグリースターが割り込んできた。

「そりゃ無理だな。あれは厳密に言えばひとつの結界を切り分けるようなもんだ。仮にあのやり方で結界を多重に張ったとしても、ひとつ張ったのと同じ効果しか出ねえよ」

実は話を聞いていたらしい老人は、しかしそれだけ言うとまた黙々と作業を続けていく。

「うー……」

深鷲はさらに考え込む。

そもそも、専門家がずっと考えてどうしようもないことを素人のわたしが考えたところでどうにかなるものだろうか？

弱気な考えが頭を過ぎったが、しかし簡単に諦めてしまうわけにもいかない。

迷惑を掛けた分はしっかり返さなければ。

「あ、そういえば」

「なにか思いついた？」

「あの、フリネラさん。前にお風呂を沸かすときに、えーと……導線？ の話をしましたよね」

「うん、したわねー」

「そのときに、確か……」

フリネラの実験浴場には魔力を流す“導線”が刻まれた風呂釜があった。風呂は【加熱】が生み出す熱で沸く仕組みだったが、その時彼女がいった言葉を思い出す。

「えーと、その場にあるものを利用するほうが、使う魔力が少なくて済むんですよね？」

「そうだけどー……？」

「この結界につかつてる術は、冷気を“生み出す”術なんですよ？」

「ええ……でも、冷気を他から持ってくるんじゃ、氷室の中に氷室

を作るのと変わらないわよー？」

「えーと……冷気を持つてくるんじゃないで、熱の方を持つて行っちゃえばいいかなって」

「……熱気をー？」

フリネラから聞いた話が記憶違いでなければ、ゼロから熱を生み出す術よりも他から熱を持つてくる術の方が、使う魔力が少なくなるだけでなく術としても扱いやすい物であるという。

確か、一指魔導書と二指魔導書の差になるほどのことだとか。

深鷲はまだ超初心者用に試作された掌魔導書しか扱えないため、それがどれほどの差であるのかわからないが、これは一石二鳥でとても良いアイディアのように思える。

これなら少なくとも今の冷気を生み出すものよりは冷えるはずだ。術が簡単になれば扱える人も増える。クジールさんも喜ぶだろうと、深鷲は自分の発想に満足しかけた。

しかし、2人は疑問の言葉を返してくる。

「なにいつてんだコイツ？」

「……熱を運んでどうするのー？」

「……え？」

内容が伝わっていないのかと繰り返し説明するも、フリネラは困惑顔で、グリースターはあきれ顔だ。深鷲が逆に「冷やさなきゃダメなのよ？」と諭される始末である。

「えーと、だから……熱を奪ったら冷えますよね？」

「??？」

そこで深鷲は、ここが中世ファンタジー風の異世界だということを思い出した。

（あれ、もしかして熱の仕組みが……わかってない？）

深鷲も自信を持って言えるほど詳しいわけではないが、一応フリネラにそのあたりのことを聞いてみる。

案の定、熱に関する認識のズレが発覚した。

フリネラたちは熱を、冷たい状態と暖かい状態、そしてそのどちらでもない状態、という考え方をしているらしい。そして、熱気を与えれば暖かくなり、冷気を与えれば冷たくなる。どちらも与えなければどちらでもない状態になる。

冷気を足すか熱気を足すかするだけで、熱を奪うという発想が無いらしかった。

「というわけで、すくなくともわたしの世界では、熱を奪えばそれだけ冷たくなるんですよ」

文明の違いか、あるいは彼女たちは魔導術に慣れているせいで余計にそういった考えになるのかもしれない。

彼らは魔術の研究者ではあるが科学の研究者ではないのだなあと、深鷲はなんとなく思った。

汗が蒸発して体温が下がる。アルコールなんかはすぐに揮発するのでとても冷える。たしか冷蔵庫もそういった気化熱を利用して冷やしているのではなかったか。

電気をつかってどうやって気化熱を扱えばいいのか深鷲はよく知らない。しかしこの世界では直接魔導術で熱を奪うことができる。

もし魔導術に科学を当てはめることが可能なのだとしたら、彼らが効果を誤解、あるいは十分に理解していない術もあるかもしれない。気が付いたことがあったら教えてあげようと思いつつ、ふと不安になる。

はたして同じ物理法則で、この世界は動いているだろうか？

「なるほどねー。わかったわ。じゃあ、この件はわたしに任せてー」

「フリネラさんが作るんですか？」

「結果はそのグリースターが作るけど、熱を移動する術ならわたしで作れるわ。というか、熱に関する術ならわたしに任せなさいって感じねー」

先ほどは首をかしげていたフリネラだったが、深鷲の話を理解すると俄然やる気が出てきたようだった。

「もしかしたら、世界が違うから上手く行かないかもしれませんが……」

「試してみる価値は充分あると思うわー。大丈夫、きっと上手く行くわよー」

フリネラは深鷲のアイデアを試してくれるようだった。とりあえずやることが決まったので、今日のここでのお手伝いは終了となる。アイデアを提示した以上、結界を触れば壊してしまうような助手は邪魔だろう。

常識の違いにかなり驚いてしまったが、これはつまり彼らから見れば自分が常識知らずであると考えられる。

知識の正否はともかく、この世界流の常識は早めに学んだ方がいいのではないかと、深鷲は思ったのだった。

#48話：氷室結界と常識の違い（後書き）

次回は4日予定です。

#49話：【クイシェの精査室】

昼食を挟み、本日の後半戦。

深鷲が呼ばれたのは、ギュランダムの家の横にある開けた場所だった。

先日、ギュランダムが用意した結界を深鷲が次々と破壊する、という実験を行った場所である。

集まったのはギュランダムとフリネラ、クジールとグリースター、そしてクイシェと深鷲だ。

クジールの手伝いの続きをすることになっていたが、今日のこの実験は実質、深鷲のために行われている。
深鷲の特殊性を調べるためだ。

突然ワープしてしまう現象、怪我が治りやすい体質、使用しても減らない魔力。

これらのうち、主に魔力量についてをクイシェに全力で調べて貰うことになる。

ワープは条件が不明だし、怪我が治りやすさはわざと怪我をしてまで調べるといふほどのことではないように思える。しかし魔力の方は魔術がまともに使えるか否かという、今後深鷲が生きていく上で重要な要素となるし、掌魔導書が使えるようになったので、クイシェによる精査が可能なのではないかという判断だ。

「いいの？ ミサギちゃん……」

「え？ いいよ？ というか、おねがいします、かな？」

どうやら深鷲は“儀式”に対する拒絶感など無いらしく、クイシ

エは安心した。

用意された場には深鷲を中心として囲むように要石が並べられつつある。かなめいし

グリースターたちが抱えている要石は、深鷲では持ち上げるのが不可能だと確信できるような大きなものだ。要“岩”と言えるほど大きくはないが、米袋ほどの大きさはある。

結界術は地脈から魔力を汲み上げ球状の膜を編み出す技術だが、その膜を維持する働きを持つのが、要石だ。石と名が付いているが、植物や魔獣の爪などの場合もある。

紫色をしたこの石は、この村に用意されている要石のなかでも最も大きく、強力なものだ。

本来は都市全体を囲うような超広域の結界の設置に耐えうる代物で、地脈から引き出せる魔力もかなり多い。

ゆえに設置する際はそれぞれの間隔を数百メートル以上空けなければ結界の構築に失敗してしまうほどの品なのだが、今はそれを並の結界と同程度の間隔で並べている。

「まさかこれを使うことになるとはのう……」

「念のため用意しておいて良かったですね」

「これで失敗したら、もうどうしようもないんだがな」

ギュランダムとグリースターは軽々と、クジールは少々気合いを入れて紫色の要石を持ち上げては定位置へと運ぶ。フリネラは砕け散った要石を拾い集めている。

既に実験は何度となく行われているが、どちらもクイシエが調べる間もなく結界が壊れてしまっていた。

深鷲が結界に触れたわけではなく、結界や要石が深鷲の魔力に耐えきれなかったのだ。

そうして失敗に失敗を重ね、最後の手段とばかりにいくつかの検証を行った後、例外的な方法で結界を張ることになり、大型の要石を引っ張り出してきているのだった。

これ以上の環境は現時点では用意できないため、次に行われる実験が最後のチャンスとなる。

この結界が無ければ、クイシエは本気を出すことが出来ないのだ。

クイシエの超感覚には“一定以上効果範囲を狭めることが出来ない”という弱点がある。

これほどの能力に弱点というのもおかしい話なのだが、際限なく感覚を開いてしまうと、クイシエが情報を処理しきれなくなるのだ。

彼女の超感覚は、魔力を対象とした無数の感覚で成り立っている。その感覚が感じ取れる範囲は1つ1つがとてつもなく広域に及ぶ。まるで数キロ先まで見通せる視覚を数十種類保有しているようなものだ。透視、暗視、赤外線視覚、エックス線視覚、遠隔視といったものを一度に処理していると考えれば、その処理の大変さが伝わるだろうか。

そして超感覚には視覚だけでなく嗅覚や聴覚、第六感的なもので存在する。

そんな感覚を大量に解放してしまえば、いくら天才と呼ばれていようともクイシエの頭はパンクしてしまう。

あまりに酷使した場合は頭痛に襲われ、意識を失うこともあった。

クイシエはこの能力の精度に限界を感じたことはほとんど無いが、クイシエ自身の処理能力には限界があるのだ。

クイシエはたとえ寝ている状態であっても、この村の全域程度の範囲であれば常に魔力を感じ取っている。逆に、それ以上は範囲を狭めることができない。

それだけでもかなりの情報量だが、解放する感覚を増やせば増やすほど情報は増えていく。しかし、感覚の有効範囲は減らない。

感覚を掛け合わせれば掛け合わせるほどに、読み取れる情報は増してゆくが、クイシエに掛かる負担も大きくなってしまふ。

クイシエはその超感覚を全力で用いることができずにいた。

そこで考えられたのが、魔力を隠蔽する結界を利用する方法だった。

その結界は”境界の内外で魔力を完全に遮断する”とされていたもので、組み合わせられていた魔導術はそのまま【魔力隠し】と呼ばれていた。

元々はとあるミミック種が、おそらく魔力の匂いに敏感な天敵の魔獣から隠れるために使っていたもので、魔導師達もそれと同じ理由から結界や個人用として魔導術に組み込み、用いていた。

一時期は【獣払い】にも魔獣対策として術式が組み込まれていたものだが、この村ではクイシエの感覚の邪魔になるので現在は使われていない。

この術を組み合わせた結界の内側でなら、クイシエの感覚の有効

範囲を区切ることが出来るのではないかと、ギュランダムを初めとする村人が総出で調整、改良を施したのが結界専用魔導術【クイシエの精査室】である。

【クイシエの精査室】は、実際に【魔力隠し】の結界で実験したところ、超感覚の一部が結界を素通りして外側の情報を拾ってしまったことから開発が始まったものだ。

クイシエ自身も研究に加わり、同タイプの術を世界中から取り寄せては組み込み、改良に改良を重ねた結果、クイシエが自覚している感覚の全てを完全に遮断、とはいかないまでも、大半を遮断することに成功した。皆の努力の結晶である。

そこまでしてこの【クイシエの精査室】を開発したのはもちろん、クイシエの超感覚が持つ精査能力から得られるモノに、莫大な価値があるからだ。

そしてクイシエにとっても自身の能力をより深く知る経験となった。

ちなみに術名はギュランダムが魔道書の表紙に勝手に書いてしまったもので、クイシエ自身はまったく気に入っていない。

名前は要りません！ という文句はスルーされてしまったのだった。

「それじゃミサギちゃん、全力で手加減してね」

「はいっ。全力で手加減をしつつ、気合いをいれますっ？」

自分でもなにかおかしなことを言っているような気がして思わず疑問符を付けてしまった深鷲だが、クジールがあまりにも真顔で言うものだから普通に返答していた。

重そうな要石の配置が終わり、クイシエは要石の中心に改めて立つ。

足下には導線が深鷲を中心として放射状に引かれ、目の前には腰ほどの高さの小さな机。その上には掌魔導書【虫】が置かれている。前回クジールが用意した術だと光が眩しく邪魔になるため、今回は無色透明な魔力の塊を発生させる「虫」と呼ばれる術式だけで作られた魔導書を使うことになった。

クイシエ以外にはまったく認識すら出来ないのを見た目には何も起こっていないようにしか見えないが、今回はクイシエがいるので問題ない。

「さて、準備は整った。三度目の正直、というやつかのう？」

「大丈夫よー、きつとうまくいくわー」

深鷲はフリネラの声援に後押しされ、深呼吸をした。そして自分に向けられた術を全て受け入れる心構えで、魔導書に右手を載せた。

要石で囲われた円の内側、向かって正面にはクイシエがいる。

真剣な面持ちで瞳を閉じ、成功の祈りが集中のためか、両手が首元で組まれていた。

クイシエが祈る姿はとても様になっている。やっぱり天使だなあ、といきなり雑念に囚われた深鷲だったが、特に問題は生じず、結界の構築が始まった。

#50話：無尽蔵の正体

深鷲から魔力が引き出される。

魔力は地面に深鷲を中心として放射状に描かれた導線を通り、円周上の要石へと流れる。

導線を目にすると嫌でもあの暗闇を思い出してしまふ深鷲だが、皆を信頼している今は特に不安や不快さを感じない。

ここは野外だし、少し日は傾いてきているが、明るい。なにより、怪しい人達に囲まれているわけではないのだ。

グリースターとギュランダムは導線を辿り要石を通過した深鷲の魔力を誘導し、球状に均してゆく。

本来であればこの規模の結界は人の補助無しでも自然と球形になるのだが、万が一を考えての作業だ。

深鷲から流れ出した魔力は順調に結界の膜となっていた。

今回構築する結界は、本来であれば地脈から引き出す魔力を、深鷲から引き出している。

通常の結界の内側で深鷲が術を使った結果、その結界が壊れてしまったからだ。

原因はハッキリしていないが、これまでの実験では、結界内部で魔導書【虫】を起動し始めると、それほど時間を置かずして結界が消滅してしまっている。

つまり、深鷲が直接触れずとも、内部で魔力を使うだけでも結界が壊れてしまうことが判明したのだ。村の【獣払い】は壊れていないので、魔力を使うことによって壊れるか否かは、その結界の規模によるのかもしれない。

そこで出された打開策が、深鷲自身から魔力を引いて結界を張る、というモノだった。

結界が壊れてしまうのは、深鷲が結界の魔力に何らかの影響を与えるためだと推測される。それならば、深鷲自身の魔力を用いて結界を張れば、それは最初から深鷲の魔力なのだから大丈夫なのでは、という発想から実行されるに至った。

結界術は通常、植物の根が水分を吸収するように地脈から魔力を吸い上げて構築されるものだが、魔力の流出を受け入れる存在であれば生物からでも魔力を供給できる。

それは本来“魔装術”と呼ばれている術に近いのだが、深鷲は自力で魔力を操ることができないので、魔装術と結界術の中間的な術を用いることになった。

その結果足下の導線から要石へと魔力を流し、結界を構築するのは専門家たちに任せる形となっている。

しかし、この方法も既に数回の失敗を経ていた。

今度は深鷲から受けとる魔力が大きすぎて、要石が砕けてしまったのだ。

そこで最後の手段として、この最も強力な要石を持ち出すことになった。

十数秒を掛けて結界を安定させた後、【クイシエの精査室】が起動する。ようやく最後の実験が始められる。

「おう、始めていいぜ」

グリースターが結界の状態からゴーサインを出すと、深鷲は目を閉じて深呼吸をひとつ。

結界には自分の体にある魔力が使われているらしいが、相変わらずそれを感じ取ることはできない深鷲。

しかし、感じられずとも、その流れを否定してはならない。クイシエの【言語移植】フレンスチャットと同じように受け入れる。

そのまま、掌に気合いを入れる。

入れすぎてはいけない。ほんのすこし、眠いのに勢いよく起き上がるほどの気合いではなく、瞼を持ち上げるだけ、薄めを明けるだけ程度の、気合いと呼べるのかも判らない程度の気合いを入れて、ゆつくりとテンションを上げていく。

「魔導書の起動を確認したよ！ もうちょっと流しても大丈夫そう！」

自身の魔力すらまだ自覚できない深鷲は、無色透明の魔導術【虫】が成功しているか否かすらわからないので、クイシエが教えるしかない。

深鷲はクイシエの助言に従い、ほんの少しだけ気合いを増した。

「うん、いいかんじ。そのまま、お願いねっ」

そう言つてクイシエは、自分の超感覚をチェックし始めた。

超感覚が拾い上げる情報は普段とは違い狭い範囲内に収まっている。視認できるギュランダムやフリネラたちからも、魔力は感じ取れない。

これなら存分に深鷲の魔力の流れを追うことが出来るだろう。

「始めますっ！」

クイシエは自分の中に無数に存在する感覚を、思いつく端から開

いてゆく。

五感に似たもの、どう説明していいかわからない第六感的なもの。それらがそれぞれ10から20種ほども存在し、そして組み合わせによつては更なる情報をクイシエにもたらず。

全ての組み合わせはとてつもない量になるが、クイシエは深鷲の魔力の正体が明らかになるまで、あらゆる組み合わせを試すつもりでいた。

深鷲は魔導書の起動に集中している。

そそがれる魔力量にブレが生じる度にクイシエが加減を調整するようにアドバイスを飛ばし、繰り返ししていく内にブレは減り、安定した。

クイシエは、魔力の流れが自覚できていないのにそれを安定させる事ができるというのは、逆に才能があるのではないかと思つたが、今は調査に集中するべきだと横に置いておく。

超感覚の組み合わせを試し始めてどれくらいたっただろうか。集中し過ぎて呼吸を忘れていたクイシエは、一度深く息を吐いた。

いまのところ、わかつたことはひとつだけ。

それは、深鷲からいつも感じられている違和感が“邪魔”である、ということだった。

どうやら深鷲から感じていた違和感は、その奥にある深鷲の魔力の流れや性質を、“隠している”らしいのだ。

恐らく、違和感が深鷲の妙な性質なのではなく、深鷲が持つ妙な性質が、違和感によつて隠されているせいで、クイシエにも実体が掴めずにいるのだろう。

（これじゃ結局なにもわかんないのと同じ……）

その違和感には、この【クイシエの精査室】や【魔力隠し】のよ
うに、魔力を遮断するような効果もあるのだろ。何を隠蔽してい
るのかはわからないが、もしかすると遮断ではなく偽装、といった
方が良いのかもしれない。魔力自体は100点を感じ取ることが出
来ているのだから。

深鷲は集中力が途切れてきたのか、少々流す魔力にブレが生じ始
めている。深鷲が必死に気合いを維持しようとしている中で、クイ
シエは焦りを感じ始めた。

大人たちが口を開くことなく見守っているが、クイシエの目には
入らない。

自覚できている無数の超感覚から有力な組み合わせを試し尽くし
たころ、ふと、諦めに抗うように思い出したことが、クイシエの意
識に広がった。

もつと視野を広く

クイシエは個々の魔力やその詳細を感知する感覚を全て閉じると、
もつと漠然とした魔力、大きな単位の魔力を感じ取る感覚を開いて
みた。

途端、クイシエは自分がとてつもなく大きな流れの中にいること
を知らされる。。

千や万では効かない、莫大な単位での魔力の動き。
恐らくこれが地脈の流れなのだろうと、クイシエは思っていた。

世界を充たし包む、巨大な流れだ。

大きすぎるが故に、凄まじい勢いとも、緩やかな流れとも感じられる魔力に包まれ、身を委ねていると、クイシエは自分ががちっぽけな存在だとすら思ってしまう。

かつてこの感覚で得られるもののあまりの大きさに畏怖と畏敬の念を抱いて以来、数えるほどしか開いたことのない感覚だ。

（これは……魔力が、ミサギちゃんに流れ込んでる？）

深鷲は真剣な表情で【虫】の術を使い続けている。コツを掴んだのか偶然か、かなりぎりぎりのラインで魔力を流し続けているようだ。

そこら中を漂う無色透明の魔力塊は噴水の如く飛び出しており、この勢いであればいくら消費の少ない魔導術とはいえ、かなりの消耗となるはずだ。

しかもあの掌魔導書は、意図的に消費量を増しているはずである。先ほどまで開いていた感覚から測定するに、深鷲が消費する魔力は秒間30点を超えていた。

深鷲の魔力が数値通りであれば、3秒たらずで空になるはずの勢いだ。

しかし、深鷲の魔力は常に100点。変動することはない。

そして、その正体の一端が、クイシエには見えていた。

違和感に遮られ、深鷲から得られる情報はやはり掴むことが出来ない。

そのかわり、深鷲の周囲にある地脈の流れを感じ取ることとで理解する。

地脈の魔力が、深鷲に流れ込んでいるのだと。

51 話：抱える危険と抱いた決心

湖ほどもある水桶の底に、針先程度の穴を空けたようなもの。

全体から見ればほんの小さな流れだが、確かにその動きは存在した。

細部を認識する感覚ではわからなかったが、この巨大な視点からでは逆にハッキリと知ることができる。

もつと強力な、信じられないほど消費量の多い魔術を使えば、よりこの流れは明確になるだろう。

深鷲が魔導書に流し込んでいる魔力と同じだけの魔力が、地脈から深鷲へと流れ込んでいた。

地脈という世界中を流れる膨大な魔力の流れから見れば、ここでクイシエが感じていられる魔力すらごく僅かなものだろう。

しかし人が、生命が扱える魔力としては、無限とも思えるほどの魔力の、その一端を流し込まれながらも、深鷲は平然と気合いのコントロールに集中している。

この広大な視野で地脈を感じ取る感覚は、【クイシエの精査室】では遮ることができないもののひとつだ。深鷲と地脈の動きは準備をせずともこの感覚でいつでも確認することは出来るということになる。

現状では、これ以外の感覚を用いても深鷲の違和感が邪魔となり、深鷲の事を調べるのには役に立たなかったたので、【クイシエの精査室】もあまり役には立たなかった事になるが……

ともあれ、深鷲の特殊性の一端は知ることが出来た。

このことを伝えるべきか否か、クイシエは一瞬だけ迷う。

しかし、すぐに答えは出た。

才能に伴うリスクは、それを知ろうが知るまいが、その者が抱えることに変わりはないのだ。

クイシエは深鷲が、自分やギュランダムと同様に特殊な才能、能力の持ち主であることを、喜びや同情の混じった、複雑な気持ちで飲み込んだ。

「ミサギちゃん、終わったよ」

「……あ、もういいの？」

一定の気合いを入れる 一定量の魔力をずっと流し続けるのはことのほか、疲れるものだ。流れている魔力を認識できていない深鷲では、神経もかなりすり減ったことだろう。センスは良い方なのかもしれない。

おつかれさま、とクイシエが言えば、深鷲も同じ台詞を返す。立ちっぱなしで集中を続けていた深鷲がどこかに腰を下ろそうと一歩踏み出すと、魔力の供給源を失った結界はたちまち薄まり、消え去った。

それほど長い時間ではなかったはずだが、2人ともかなり疲れた顔をしている。

「終わったか？ 2人ともご苦労じゃったの」

「おつかれー、ジューズあるよー？」

フリネラから真っ黒い果汁を受け取り、二人してごくごくと喉を鳴らす。

落ち着いた2人は結界の撤去を手伝い、判明した事実に関する話は場所を移してからとなった。

深鷲は使用した魔力を地脈から補充する力があるらしい。あるいは直に地脈から魔力を使っているのかもしれない。その2つの違いが深鷲はよくわからなかったが、説明している方もわかっていない。結界が壊れてしまう理由は、そのように深鷲が地脈に影響を与えているからだろう、と推測された。

結界は地脈から一定量の魔力を引き出すことで保たれている。地脈の流れが歪んでしまえば、シャボン玉を膨らますようなバランスで構築されている結界は、弾けて消えてしまうというわけだ。

自分の超感覚もかなり異常で特別な部類だが、深鷲の力もよつぱどのモノだと、クイシエは思った。

あれほど無尽蔵の魔力があれば、設計次第でどんな術でも扱えるだろう。ありとあらゆる魔導術を、その消費量を考慮せずに作ることができるのだ。

クイシエはざっと思いつくだけでも、屋根より分厚くなるような魔導書のアイディアがいくつか浮かんできた。クイシエですら扱えないような術であっても、深鷲が魔導術に慣れれば易々と使えるようになるかもしれない。

恐るべき能力であり、それは色々な危険も孕^{はら}んでいる。

そして深鷲の抱える問題はそれひとつではない。

もしワープ体質のことが知れ渡り、それが魔導術によるものだと判断されれば、その術式を盗もうと動き出す者たちが出てくるだろう。体質だと判断されればその術式を解明しようと、深鷲を捕らえて人体実験をしようとする者たちが現れかねない。

あるいはもっと手っ取り早く、深鷲を“使い魔”にしようとする者も出てくるかもしれない。

深鷲はその危険性を理解できているだろうか？

深鷲は無事に旅を送ることが出来るだろうか？

クイシエは改めて、深鷲のことばかりを考えている。

楽しいことばかりでなく、心配なことや、彼女の願いのことを。

クイシエは、決意を固めてギュランダムの家扉を叩いた。

実験が終わったあと、クイシエを感じ取った魔力の出所から考えられる色々な話は夕食前には終わり、今後についてはまた明日以降となっている。

現在は空に星が見える時刻。深鷲は自室で寝ているはずだ。

「……あの、お師匠様。真面目な話をしにきたので、変なところに隠れるのはやめて出てきてください」

超感覚が示すギュランダムの姿は不自然なサイズに収まったもの

で、どうやら室内のなにかにしゃがんで隠れているような印象をクイシエに与えていた。

クイシエの勧告から数秒後、なにかを諦めたのか、渋々といった態度でギュランダムは立ち上がり、扉を開く。

「その感覚はちと卑怯じゃと思うのう」

「天才が卑怯呼ばわりされるのは仕方ないって昔お師匠様が仰ってましたよ？」

深鷲がやってきてからというもの、以前よりも警戒心が育ってしまったらしいクイシエの対応に、ギュランダムは寂しさを憶えた。無視しつつ、クイシエは自分の決心を伝える。

「わたしは、ミサギちゃんに付いていこうと思います」

「ふむ。ミサギが旅立つときはそれに付いていくと？」

「はい」

「つまり、魔術学院には行かない、ということか？」

クイシエが弟子を卒業したとき、ギュランダムはこの先の希望を聞いた。そのときクイシエは、異国の魔術学院に通うことを願ったのだ。

この国を出て、魔導師達が集まり、魔導師を育てる都市へ行く。

そこでクイシエは、友達が得られるのではと考えていた。

クイシエはもはや自分の仕事を魔導術関連以外では考えられないし、そして同じ技術を学ぶという共通点は友人を得るのに役立っていると思っていた。

外の世界に出るということは、自分の特異性を隠さなければならぬし、露見すれば危険にさらされる可能性も高い。

それでも友達というものを得てみたいと考えていたクイシエは、ギュランダムから忠告を受けても、生まれ育ったこの村から遠く離れてでもなお、学院へと行きたがっていたのだ。

クアラ村が存在するこの国には、若者を集めて魔術を教えるような教育機関はまだ存在していない。ゆえに、遠い異国の地まで行くしかないのである。

しかし、クイシエはその道を選ぶことをやめた。

「いろいろと準備もして貰っていたのに、ごめんなさい。でも、ミサギちゃんの力になりたいんです」

「お主ら、出会ってからさほどたつとらんのに、随分仲良くなったようじゃのう。学院への手続きは既に済ませてしまっていたんじやが……」

片手で髭をなでつけながら、ギュランダムはそれほど時間を掛けずに答えを出す。

「まあ、構わんじやろ。好きにするといい。お主は弟子を卒業した身じゃし、そのときに、今後は好きに生きると、儂は言った。儂らも可能な限り手を貸すが、お主が遣りたいことをするが良い」

「……ありがとうございます、お師匠様」

「じゃがのう……ミサギが元の世界に戻るための手伝いをする、それがどういふ事かわかっておるか？」

クイシエはしっかりと頷いた。

ならばこれ以上言うことはない、ギュランダムは愛弟子の決意を認めるのだった。

5 2 話：言語移植の活用法と熱交換結界（前書き）

おひさしぶりです。

5 1 話の最後少し削りました。

#52話：言語移植の活用法と熱交換結界

極楽な溜息が漏れる。

（このお風呂とも、今日でお別れかあ……）

深鷺は湯気の中で、この1ヶ月間の出来事を思い出していた。

異世界。

獣人たちの姿。

魔獣。

自分にできた妙な体質。

魔術。

この世界のこの国の言葉。

それぞれ、それなりに慣れたと言えるだろう。比較対象は無いが、順調だと思える。

とくに、最も苦戦を予感していた言葉の問題が好調なことは大きな安心材料の1つだった。それもこれもクイシェと【言語移植】フレンズチャットのおかげである。

【言語移植】は効果が消えると同時に得ていた知識を全て忘れてしまうが、その知識を用いて会話していたときの記憶までもが消えてしまうわけではない。

そのことに気が付いた深鷺は、術の効果時間中に自分が使った言葉を思い浮かべ、交わした会話の内容と照らし合わせることで、効率的に意味を理解できるようになっていった。

すぐに気がつけなかったのは、術の効果で得て失われる知識量が半端ではないための反動などもあったのだろう。クイシエもそんな活用法があるとは思っていなかったようだ。

知識量の落差感に慣れてくるにつれ、深鷺の学習速度はみるみる上昇していった。なにせ“答を知っている状態”を体験できるのだ。これ以上の学習方法は無いんじゃないだろうか、深鷺は密かに戦慄していた。

仮に言語以外の、例えば魔術の知識を移植できるとしたら、それこそ簡単に魔導師が量産できてしまうのではないだろうか。問題はこの術自体がクイシエにしか使えそうにない点と、時間制限があることで

（ まあ、つまり無理だよな ）

そんなおいしい話はないだろう。

（脳に直接情報を刷り込む……こんなSFな技術、地球だったら後何年で実現するんだろ？）

クイシエによると、厳密に言えばこの術は相手の頭に知識を刷り込んでいるのではなく、相手の意識を術者の知識に繋げているものらしいが。

発音のほうはまだ心許ないが、あと一月もあれば問題ないレベルでの会話が可能になるだろうと、深鷺は樂觀視している。

実のところ【言語移植】という反則的な安心感があるせいで深鷺の学習速度が落ちているという見方もできた。

不真面目なわけではないが、右も左もわからなかった最初のころほどの必死さは無い。

その分、心に余裕があるおかげで村の研究に多大な貢献をしているので、結果的には、まったく悪い話ではなかったりもする。

「はぁぁー……よし」

いつまでも浸かっているのはキリがない。と、すでにもうちよつとだけ、を何度も繰り返した挙げ句のこと、何度目かのキリの良さを感じながら、湯気の中を歩き脱衣所へと移る深鷺。

「ミーちゃん、はい」

名残惜しそうに湯を振り返ったりしつつ戸を開けると、そこには先ほどまで一緒に入っていたフリネラがいた。【冷蔵結界】から取り出したブイミンジュースを渡してくれる。深鷺は触れれば結界を壊してしまうので、自分で取り出すことができないのだ。

甘酸っぱい味が口内を満たす。しっかり冷えていて、茹で上がった体に気持ちいい。

グリースターとフリネラの共作となった結界は順調に改良を重ねられ、試作品はさっそく実験浴場で使われている。

命名権を与えられた深鷺は自分の馴染みの言葉からそのまま【冷蔵結界】と名付けていた。

現在は脱衣所に用意された【冷蔵結界】と、外の浴場にある【保熱結界】を導線で繋げ、結界の効果で常に熱を移動させている。

当初の、冷めた空間からさらに熱を奪う、という発想はうまくいったのだが、必要な冷却成果は得られなかった。

そこで深鷺は、さらにもう一つの結界を用意して結界同士を導線で繋ぐことを提案してみた。鍋に熱を這わせる事ができる導線なら、結界同士を繋ぐこともできるのではと考えたのだ。

【冷蔵結界】から【保熱結界】へ熱を送り、【保熱結界】は【冷蔵結界】から熱を引っ張ることで、効果倍増を狙ったのである。こうすれば、実質結界2つ分の魔力で冷却が可能となる。

そこからは、グリースターの苦勞の連続だった。

【クイシェの精査室】を設置した際も、自分から要石へ魔力を流す導線が放射状に設置されていたのだから、問題ないだろうと深鷲は思っていたのだが、実際はそう簡単にはいかなかったのだ。

導線というのは魔力の通り道であり、つまり小さな人工の地脈とも言える性質を持っている。地脈の状態に敏感な結界術と組み合わせるには、かなりの試行錯誤と失敗を重ねたらしい。

地脈か導線、どちらかのみを魔力の供給源とするなら問題はないらしいのだが。

しかしそこは職人の意地か、一週間も過ぎた頃には、現在用いられている結界と遜色のないものが完成していた。

こうして、【冷蔵結界】【保熱結界】合わせて【熱交換】と呼ばれる結界術が誕生し、現在も改良が続けられている。

また、導線を用いたアイデアが成功したことで気をよくした深鷲が祝いの席でいろいろと妄想を語った結果、村の研究者たちは結界と導線を組み合わせた「魔導書」を作る、という大きな計画に着手し始めたらしい。

まさか自分の適当に言った妄言が実行に移されるとは思わず、そのあたりは深鷲は関わってもいなかったのだが、知らないうちに大事になっており、知ったときには慌てたものだった。

どうやら土地を魔導書化するという壮大な計画らしい。

こうした実績を積み上げていく中で、深鷲の“お手伝い”は早い段階から助手的なものではなく「意見役」に変わっていった。

異世界の常識から持ち込まれる深鷲の意見は、的外れなものも少なくは無かったものの、村の研究者達に良い刺激を与え、あるいはそのまま発明に至るものも多かったのだ。

中には魔導術がまったく関係ない、祭で使う遊具や出店の商品案まで持ち込まれていたりする。

当の本人も、村人たちが喜んでくれるので満足気だ。

助けられ、交流を深め、助け合い、共に祝い、家族のように過ごした。

そんな村人たちとも、今日でお別れとなる。

#53話：クアラ村の外へ

「しつこいようだけどクイシエちゃん、ほんとにいいの?」

深鷲が何度目になるかわからない確認をする。クイシエは何度でも答えてきたが、いよいよこれが最後だろう。

もともとは今日この日、クイシエが魔術学院に向かって旅立つ日だったそうだ。

クイシエが自分に付いてきてくれる、というのは嬉しく心強い反面、学校に通うはずだったのに、と申し訳ない気分になってしまう深鷲だったが、クイシエは「学院に通っても旅をしても見聞は広められるから」と言う。

「……ミサギちゃんだって、1人だと寂しいでしょ?」

窺うように聞かれれば、深鷲としては頷くほか無い。

最後の入浴を堪能した深鷲は最後の旅支度を調べ、クイシエと共に村の中心広場へ来ていた。

まだ、体の芯が暖かい。突然やってきた異世界で、今までは幸運にもお風呂のある生活が送れていたが、これからはそうもいかないだろう。

「はー……わたしお風呂のない生活に耐えられるかなー……」

そもそも、自分はそんなに特別お風呂好きだったのだろうか。無い、と言われると欲しくなる感覚なのか、それとも当たり前す

ぎて意識していなかったのか。好き嫌い以前に習慣だったということだろう。無ければ無いで、なんとかやっていくしかないし、そのように慣れるものだ。

溜息混じりの台詞の裏で生活が変わる事への気持ちの整理を進めていた深鷲だが、そのぼやきに合わせたのだろうか。荷物を取りに行く際に一旦別れたフリネラが、後ろ手になにかを隠してやっていた。

「ふふ、そんなミーちゃんにはこれをプレゼントー」

「え、これは？」

「ミーちゃん専用の湯沸かし魔導書よー」

手渡されたのは2冊セットの魔導書で、表紙にはそれぞれ【浴槽】【給湯】と書かれている。

「クジールと、クーちゃんとわたしからのプレゼントねー。これで旅先でも野営でもお風呂に入り放題よー？」

なにせミーちゃん、魔力はいくらでも使えるからねー。

と、フリネラは説明する。

「書いてあるとおりだけど、浴槽で穴を空けて、給湯で好きなだけ熱湯を注げば完成ねー……自分で作っておいてなんだけど、夢のような魔導書ねえー」

常人が用いれば【浴槽】の時点で魔力が枯渴しかねないほどのものだそう。地面に穴を掘るだけならまだしも、湯が土で濁っては興醒めであると材質変化にも拘った結果、とんでもない魔力を消費する術になってしまっていた。

深鷲用ということで魔力消費量という制限をまるごと考えなくて

良い分、設計上も無茶が可能なので作るのはそう難しくなかったらしい。

本来なら複数名の魔導師が協力して小さなお風呂が1つ作れるかどうか、というレベルのものだが、深鷲の無尽蔵な魔力があれば何も問題はないのだ。

「まさに夢のような魔導書ですね……！」

「ただし、構造上の都合で二指魔導書になっちゃったから……がんばって練習してねー？」

「……！」

お風呂のためならと、魔導術の訓練モチベーションがさらに高まる深鷲だった。

フリネラに続き、集まった村人達も深鷲とクイシエに色々なものをプレゼントしていく。旅立つ2人への饞別だ。嵩張らない程度のものがほとんどだが、中には魔導書が混じっていたりもする。

魔導書は専用のホルダーにまとめて持ち歩くものらしく、深鷲も自分用のものを貰っているの、それに足し入れた。

集まった人達を見てふと、この広場で村人達に紹介されたときのことを思い出す。

クイシエが旅立つということもあり、あの時とは違い村人はほとんど全員が出揃っていた。深鷲の顔馴染も多い。村の皆で育ててきたクイシエの旅立ちに、涙を流している者もいる。

あのときに感じた優しい空気になったく間違いはなく、その優しさを守られていた1ヶ月だったと、深鷲はあらためて思う。

獣の姿をした人達もすっかり見慣れたもので、今では手触りも知っているほどだ（お願いして触らせて貰った）。

（1ヶ月……あっというまだったなあ……）

最初の頃感じていた不安は、恐らくどこかへ消え去ってしまった。新たな旅立しへの不安は、未知の世界を旅する期待にすり替える。戻れないかもしれないという不安には、慣れる気はない。

耐えて、乗り越えて、いつか必ず戻るといふ決意だけを胸に……。

「えーと……王都へ行くんですね？」

クイシエは深鷲の旅に同行することになったが、途中までは当初の予定通りの経路を辿ることになる。

「うむ。この時期に旅立ちを決めさせて貰ったのは王都に用があるからじゃ。深鷲にとつては寄り道になるかもしれないがのう」

深鷲としては旅の手助けをして貰っている以上、なんの不満もない話だった。

同行者が多いのは単純に心強いし、別れが一つでも遠のくならそれも嬉しい。

「この国に来た以上、竜臨祭は見ておくべきだぜ」
「……」

ギュランダム、そしてカウスとミラナも王都まで同行することになっている。

カウスは竜を見に行くため。

ミラナは、ギュランダムが行くならどこにでも付いていくそうだ。

ミラナはあの一件以来、特に深鷲に妙な因縁を付けたりするようなことはしていない。

「……」

暗殺者でないことは理解したのか、現在は単に興味がないといった感じである。深鷲は怪我をしても特異体質であつというまに治ってしまうので、あまり接点がない。たまにギョランダムの後ろにいるのを見かけたりする程度の関係だつた。

深鷲としては、せつかなので親しくなりたいと思っているのだが。

挨拶を済ませ、餞別を貰い、準備も整つた。

「「それじゃあ、いってきます」」

つい重なつた声に微笑しつつ、見送つてくれている人達に精一杯の感謝をする。

色々なことがあつたが、この村の人達のことは忘れないだろう。無事に帰り着くことができるならば、これが今生の別れとなるかもしれない。異世界間が自由に行き来できるような気軽なものだとは思えなかつた。そもそもそれが可能かどうかもわからないのだから。

なら、いふべき言葉は「さようなら」だろうか？

矛盾した願いだが、叶うことならまたここに戻りたいとも感じている。

故郷に帰りたいという気持ちが揺らぐことはありえない。ただ、ある時こんな事を言われた。

「もし、故郷に帰れなかつたら、ここに帰つてくるといい」

その言葉は忘れられない。

故郷を目指す気持ちからその言葉に反発したい衝動が湧き出る一方で、1つの、意識していなかったような大きな不安が消えたような、そんな気もした。

気が付いたら繋いでいたクイシエの手を、すこし強く握る。

ふと、深鷺は振り返り、複雑な思いは無視してもう一度、素直な気持ちを込めて、伝える。

「またねー!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8127t/>

異世界迷子の道草記

2011年10月6日23時02分発行